
臆病者達のボクシング奮闘記

トム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臆病者達のボクシング奮闘記

【Zコード】

Z2446U

【作者名】 トム

【あらすじ】

未熟な高校生達が、四角いリングの戦いで、悩み、泣き、喜び、そして強くなつていく物語です！

人物まで（前書き）

登場人物

高田康平（一年）

片桐健太（一年）

梅田先生

入部まで

4月、県立永山高校では、入学式が終わった一週間後、妙なイベントが催されている。

新一年生が全員体育館に集められ、その前で、それぞれの部活動が紹介をしていた。

サッカー部は、金髪のカツラをかぶった人が、リフティングのパフォーマンスをし、野球部は古臭い青春ドラマを演じて一年生に笑いをとつていた。

それぞれの部活も、部員を増やそうと、面白可笑しくパフォーマンスを演じていた。

最後にボクシング部の順番に回ったが、12人の部員が全員並び、その左端でキャプテンが簡単に説明するだけだった。

だが、それは変な人員構成だった。

男6人に女6人、男は全員もイケメンとは言い難いものの、女の子は全員メチャクチャ可愛い。

「このバランスは、おかしいだろ？」

高田康平（1年）は不思議に思った。

キャプテンの説明を聞いても、そんなにキックはないようだ。

全部活の紹介が終わり、康平は、親友の片桐健太（1年）と一緒に帰った。

康平と健太は、幼稚園以来からの縁で、趣味も好みも同じような奴だ。

不幸な事に、女の子の好みも同じで、中学の時は同時に同じ女の子、鳴海那奈を好きになってしまった。

その時二人共、お互いに気を遣つて、何もしないでいたが、そのうち鳴海は、坂田裕也というクラスメートの彼女になってしまったといふ苦い経験がある。

健太
『康平、お前部活どうする?』

康平
『まだ決めていないし、部活しないかもしんねーし……。』

お前こそどうなんだよ、健太』

健太
『俺もワカンネ。ただボクシング部の紹介はツマンナかつたな』

康平
『ああ』

二人は古本屋で、立ち読みをしたあと、それぞれ家に帰つていった。

布団の中で、康平はボクシング部の部紹介を思い出していた。

あの女の子達は、マネージャーのようだけど、選手一人に可愛い付

き人一人つていいいなあ。

よし、明日入部しよう。

次の日の夕方、康平は学校のボクシング場に行つた。入り口の扉で、健太ばつたり会つた。

しばらく一人共黙つていたが、先に健太が口を開いた。

『なんだ、お前もやるの』

康平

『ああ、あまり厳しくなさそうだし、体も少し鍛えたいからな。』

二人共、中学まで卓球をやつていたが、実績もなく、一日サボッても、バレない位の存在だった。

健太

『怖そくな先輩もいなかつたしな。』

康平

『ああ。』

康平は、返事をしながら健太も自分と同じ考え方で入部するのだと思った。

どちらともなく、頷きあつて扉を開いた。

『入つたら、挨拶せんか～？』

いきなり怒鳴り声が飛んできた！

一人は驚いて下を向いた。そつと上を向いたら、顧問の梅田という先生が仁王立ちしていた。

体はゴツくないが、オールバックにサングラス、金のネックレスまで付けていて、とても教師とは思えないような風貌だ。

二人は顔を見合つたが、声を合わせて

『お願いします』

と震える声で張り上げた。

梅田先生は、声を和らげ

『挨拶だけは、大きい声でせんとな。

入部申し込みに来たんだろ。今日は何もしなくていいから、そこの椅子に座つて見学してろ。』

椅子には、先客が二人座つていて、一人は悪そうな奴で、有馬猛と言つた。もう一人は、白鳥翔たけるという名前で見るからに暗い感じがする奴だ。

しばらくすると、部紹介にいたメンバーがポツポツ入つて來た。

『練習、お願いします』

それぞれ練習場に響く大声で、挨拶しながら入つてくる。

部紹介に出でていた男の方は、次々入つて來たが、女の方はまだ誰も入つて來ない。

男の6人目が入ったところで、梅田が言った。

『全員揃つたな。

今年は1年生が4人入った。まづまづだな。
2、3年は分かつていると思うが、うちには学校の中で一番厳しい部活だ。

練習を始めるぞ。』

康平と健太は顔を見合せた。

「あの部紹介の女の子達は一体？」

健太が恐る恐る梅田先生に質問した。

『先生、部紹介の時は12人いましたけど…』

梅田先生は、何事もなかったように、

『あれは、ボクシング部は人数が少なくて寂しいから、他から借りてきただけだ。何か問題でもあるのか？』

健太

『いいえ、ないです。』

梅田先生

『せつかく入部したんだから、しばらく続けてみるんだな。』

人部初日（前書き）

登場人物

梅田先生	高田 康平（1年）
	片桐 健太（1年）
有馬 猛（1年）	
白鳥 翔（1年）	

入部初日

翌日の夕方、康平と健太は一緒にボクシング部の練習場へ向かった。クラスが違う2人だが、どちらも1人で練習に行くのが嫌で、お互いの教室に行く途中でばったり会ったのだ。

健太

『クラスの奴から聞いたけど、ボクシング部の部紹介は、毎年あのやり方で勧誘するらしいぞ。』

康平

『とすると、あの勧誘で釣れたのは、俺達含めて4人か！？』

健太

『他はともかく、最低俺達2人は釣れた訳だ。』

康平

『ところでお前、ずっとボクシング続ける気か？』

健太

『俺もお前もそんなに根性あるわけねえから、勝手にリタイアするかもよ。』

そのうちボクシング場に着いてしまった。

2人は大きく息を吸つて扉を開き、

『練習、お願いします！』

と、叫びながら深々と頭を下げた。

奥には、竹刀を持った梅田先生が立っていた。

『よ～し、お前らも早く着替えて準備運動しろ。』

有馬と白鳥は、すでに準備運動を始めている。

この部は、他の部活と違つて、全員で声を出しながらの体操は全くしない。

2、3年生も各自で準備運動をしている。

康平と健太も、準備できた事を先生に伝えると、

梅田先生
『よ～し、1年全員鏡の前に並べ。』

そして先生に利き腕を聞かれて、それぞれ構えのポーズが出来ていつた。

康平は右利きと先生にいいたら、右半身が後ろの構えになつた。有馬と白鳥も右利きだったので同じ構えになつた。

反対向きの構えになつた健太は、左利きだつた。

細かい所は、先生が直接修正した。

全員の修正が終わつた後、先生が、

『次のブザーが鳴つたら2分間ずっと構えてろ。

そしてブザーが鳴つたら休む。

またブザーが鳴つたら2分間構える。

それを10回繰り返す。

わかつたか?』

『.....』

先生が怒鳴る!

『返事はどうした?』

『はい!...』

ブザーが鳴り、4人にとって退屈な練習が始まった。
ところが、いざ始めてみると退屈どころではない。

前の足は少し曲げなければならぬし、後ろ足の踵は上げないといけない。

ラウンドが進むにつれて、4人から汗が滴り落ちてくる。

近々2、3年生の試合があるため、先生は、ほとんど上級生達を見ているが、時折1年生にもチェックが入る。

首の角度や手の位置も、崩れると、竹刀で軽く修正する。

最後のラウンドが終わつた時、1年生全員の膝が笑つてゐるような状態だった。

梅田先生

『1年生は、柔軟体操をしたら帰つていいぞ。』

』

4人は、最後の力を振り絞つて返事をした。

『はい！』

帰り道（前書き）

登場人物
高田 康平（1年）
片桐 健太（1年）
有馬 猛（1年）
白鳥 翔（1年）

帰り道

初日の練習が終わり、先に帰る事を許された4人の1年生は、それぞれ帰路についた。

といつても、全員電車通学なので、駅まで一緒に歩くことになった。はじめは、皆、黙つて歩いていたが、耐えきれなくなつたように有馬が口を開いた。

『片桐と高田は友達のよひだけど、どこの中学だよ?』

今日の練習で、全員、先生から名前を呼ばれていたので、皆、お互いの名前だけは知っていた。

健太
『俺達、北山中から来たよ。』

有馬

『北山だつたら、ここから3駅位か!?
近くで羨ましいな。』

康平

『有馬君は、何中?』

有馬

『おいおい、同じ1年なんだから、君なんてつけんなよ。
俺は西添中だから、駅7つだよ。』

健太

『遠いね。』

有馬

『通学だけで一時間位かかるな。』

有馬は、ツンツン頭で目付きが少し悪い為、ヤンチャなイメージだが、結構気さくな性格らしい。

白鳥は、顔が少し赤く、ボサボサ頭で体がズングリしている。どことなく、暗いイメージだ。

3人の会話も、どこか聞いていない感じで、少し後ろの方で歩いている。

たまらず健太が声をかけた。

健太は意外にも博愛的な性格で、そこだけは、親友の康平が健太を尊敬している。

『白鳥は、どこの中学校からきたの？』

白鳥

『…………岩下中…………。』

康平

『聞いたことないけど。』

白鳥

『隣の県から来た。今は親戚ンチに住んでる。』

健太

『隣の県から来た。今は親戚ンチに住んでる。』

『へえ……』

何かありそつだが、訊ける空氣でもないので健太は話題を変えた。

健太

『俺と康平は、部紹介の女達に騙された感じで入部したけど、有馬と白鳥もやうなの?』

有馬

『ハハハ。うちの部のペテン部紹介は、有名なんだけどな。俺は、高校入つたらボクシングやるうと思つていたから、部紹介の時はいなかつたよ。』

白鳥

『俺もボクシングやりたくて、ここに来た…。』

康平

『…凄いね。』

そのうち、駅に着いた。ちょうど下りの電車が来たので、康平と健太は乗る事にした。

有馬と白鳥は上りの電車なので、ここで別れる事になつた。

『じゃあな。』

康平と健太は、急いで電車に駆け込んだ。

有馬と白鳥は、下りの電車を待つのですが、ウマが合わないらしく、お互に離れた所に立つていた。

一人の先生（前書き）

今回は、顧問の梅田先生と副顧問の飯島先生のお話です。

一人の先生

練習4日目、今まで部活に来るのは、顧問の梅田先生だけだったが、今日から副顧問の飯島先生も部活に来はじめた。

飯島先生は、最近身内に不幸があつたらしく、昨日まで学校を休んでいたらしい。

『片桐と高田、チョット来い。』

飯島先生に呼ばれた康平達は、不思議な面持ちで先生の所へ行つた。

『お前ら部紹介に騙されたらしいな！？』

健太

『……はい……。』

先生はニヤリと笑い、

『男は下心で頑張れる時も多いんだから、気にすんな。』

飯島先生は体育の教師で、梅田先生と違い、とても明るい性格だ。そして、見るからに爽やかスポーツマンといった感じだ。

2、3年生の練習しかみていながら、冗談まじりにミットを持ったリアドバイスをしたりしている。

梅田先生は、柄の悪い風貌から、体育教師のように見えるが、なんと数学教師だった。

部活以外での先生は、オールバッくの髪を下ろし、眼鏡はクロブチで、金のネックレスも外している。

昨日、康平と梅田先生が廊下で擦れ違った時、康平は全く気付いていなかつた。

『挨拶せんか？』

怒鳴り声で、康平は、すぐに誰だか気付いて、慌てて挨拶した。

この種のエピソードは、毎年あるようだ。

健太が、先輩にその事を話したら、

『あれは、梅田先生の部活用の正装なんだよ。』

と、笑つて答えてくれた。

オールバッく、薄茶色のサングラス、金のネックレス、とても良く似合う竹刀は、ボクシングに集中する為の必須アイテムなようで、練習の時には必ず変身するそうだ。

梅田先生と飯島先生は、現役時代に対戦したことがあつたらしいが、1勝1敗のイーブンかどうかは定かではない。
ただ、共に選手としての栄光は掴めなかつたようだ。

全くタイプが違う2人の先生は、何故かウマが合ひうらしく、家族ぐるみの付き合いらしい。

康平と健太は、先輩達から、先生の事を教えてもらつたが、肝心の

ボクシングの方は、構えしか教わっていない為、今日も退屈だがシンディー10ラウンドを迎える運命だった。

地味な練習（前書き）

県立永山高校ボクシング部に入部した4人の1年生は、1週間構えだけの練習しかやらせてもらっていない。
今からは、更にジミーな練習が待ち受けていた。

地味な練習

入部後1週間経っているが、1年生はまだパンチを教えて貰っていない。

相変わらず構えだけだが、今日から前後左右に動く練習も加わった。飯島先生は、先輩達しか見てない感じで、1年生には何も言つてこない。

梅田先生も、ほとんど先輩達を見ているが、時折1年生にも目がいく。

『有馬、右脇を絞れ！』

『高田、右の踵を上げろ！』

『白鳥、左膝をもつと曲げろ！』

『片桐、右の腰骨はもう少し前だ！』

誰にでも、平等に細かいチェックが入る。

このボクシング部には独自のルールがあり、ラウンド中は特別な事がない限り、返事をしなくて良い事になっていた。

先生に言われた本人達は、無言のままフォームを修正する。本人が直したつもりでも直っていない場合には、先生が竹刀で優しく（？）形を直す。

拳の位置や、膝の向きなど色々細かい。

その中でも強調しているのが、顔の向きと重心だ。

『顔は正面を向け。顎を横から殴られるとキクぞ!』

『重心は、前6後ろ4だ。これで右も左も強く打てるようになるんだー!』

自分達の後ろで、いい音を立ててサンドバッグを打つている先輩達を鏡ごしに見て、お調子者の健太などはパンチを打ちたい衝動にかられた。

しかし、去年この時期に2年の相沢さんが、勝手にパンチを打つたら、悲惨な程怒られた話を聞いていたので、さすがの健太も、パンチを打つことを簡単に断念した。

先生に言われたラウンドが終わり、柔軟体操をしようとしていた矢先、

梅田先生

『お前ら、これから補強を始める。言わば筋トレだ。今から教えるから用意しろー!』

『はーー!』

先生が教えるメニューは、腹筋背筋、腕立て、懸垂などオーソドックスなものがほとんどだったが、特殊なものとして、ランジがあつ

た。

それは、下半身の補強で片方の足を大きく前に出してから体を沈ませる。出した足を元に戻しながら、沈んだ体も元に戻す。それを左右交互に繰り返す。

このトレーニングは、回数ではなく、2ラウンド続けてする事になつていた。

最後は、4人全員膝が笑つていた。

補強の全部が終わつて、梅田先生が一言。

『お前ら、今日教えたメニューを毎日やるんだ。いいな!』

『.....』

梅田先生

『返事はどうした?』

4人の1年生は、つりそつた腹筋に力を入れて

『はい!』

ボクシング場に響きわたる大きな声で、返事をした。

再会（前書き）

部活が休みの日、気分転換の為遊びに出かけた康平と健太は、思わず2人で再会する。

再会

永山高校ボクシング部は、日曜日が完全に練習が休みだ。

その休日、康平と健太は気分転換するため、遊びに出かける事にした。

まずゲーセンに行つたが、所詮高校生の財力ではあまり遊べず、他の奴らのプレーを見る時間がが多くなった。

さすがに、2人は飽きて馴染みの古本屋へ行く事にした。

もつすぐ目的地という所で、男女2人が走つてきた。

『やつぱり健太と康平だ。向こうのコンビニから、お前らみたいのが見えたんで、走ってきたんだよ。』

声を掛けてきたのは、坂田裕也だ。

『あんたら、兄弟みたいにいつも一緒だね（笑）』

人懐っこい感じで話すのは鳴海那奈である。

2人は、青葉台高校に通っている。永山高校とは電車で反対の方向なので、あまり会うときはなかった。

裕也は、

『お前らと、同じ学校だつたらもつと楽しかったけどな。』
と、心から残念そうだ。

健太

『会うのは、卒業式以来かもな。』

康平

『裕也は、高校でも野球やつてるの?』

裕也

『いや、高校からはボクシングやるつて、前から決めていたんだ。』

健太

『…へえ…凄いネ。』

那奈

『あたしは、気が進まないけど……』

裕也

『けど、那奈もボクシング部のマネージャーになつてくれたんだぜ。』
ところで、お前らは卓球部で、サボリに磨きをかけるつもり?』

康平

『ひでえな(笑)……俺達はまだビリの部にも入つてないよ。』

裕也

『そつか。いつも部活で忙しいから、中々会えないかも知れない
けど、今度一緒に遊びたいな。』

『じやあなー』

迷い（前書き）

突然、裕也と那奈に会った康平と健太。地味な練習だけが続く、ボクシング部の練習。2人の心に迷いが生じる。

迷い

裕也と那奈と別れた康平と健太は、複雑な気持ちになっていた。

康平と健太が同時に好きだった鳴海那奈、彼女と付き合っている坂田裕也。

しかも、裕也と康平達とは結構仲がいい。

裕也は、男から見てもカッ「良く見える容姿だが、性格はもつとい。なぜか康平達とウマが合う。

那奈も凄く可愛いが、可愛いだけじゃなく、からかってくる割にどこか控え目で、話しても疲れないタイプだ。

あの2人は、康平達が那奈を好きだった事を知らない。

あの2人が憎い訳ではないが、なぜか切ない気持ちになった。

健太が突然口を開いた。

『なんでお前、自分もボクシングやってるって言わなかつたんだ。』

健太の口調がハツ当たりっぽく感じたので、康平もすかさず言い返した。

『お前だつてはぐらかしてたじやないか？』

健太

『空氣読めよ。あそこで俺達もボクシングやってるって言える訳ねえだろ？』

不毛な口ゲンカが少し続いた後、健太が一言

『まだ、構えと筋トレしかやってねえし、部活辞めようかな……』

康平も、何て答えていいかわからず、黙つていた。

れっきまでの口ゲンカは一時休戦し、健太が別れ際に

『そういえば、うちの部の一年に森谷さんていう同じ中学の人があり
るから、相談してみようぜ。』

『昼休みでも行こうか。』

と、康平がこたえて健太と別れた。2人は、古本屋へ行く予定を忘
れたまま、真っ直ぐ家に帰つて行つた。

相談（前書き）

好きでもないのに始めたボクシング。
辛い地味な練習。
悶々とする康平と健太。
2人は、先輩へ相談しに行く。

相談

月曜日の学校の昼休み、康平と健太は、ボクシング部2年の森谷先輩へ相談しに行つた。

森谷先輩は、康平達の中学の1つ上で、たまにゲーセンで話すよつな間柄だつた。

何をされる訳でもないのに、ちょっと緊張しながら先輩がいる教室へ向かうと、丁度森谷先輩が相沢先輩と歩いてきた。

森谷先輩

『なんだお前ら、こんな所でどうしたんだ?』

相沢先輩がいることは予想外だったが、彼は、自身が先生から怒られた事を康平達に教えてくれた人で、好感の持てる先輩だった。

康平と健太は、二人に相談する事にした。

地味な練習ばかり続いている事、他人と争うのは好きではない事、そんなに運動神経がいい方では無いので、続けていく自信がない事を話した。

森谷先輩と相沢先輩は顔を見合せたが、2人共、意外に明るい感じで答えた。

森谷先輩

『大丈夫だよ!俺達も最初は同じ気持ちだから心配すんな!』

相沢先輩

『そりそり、今週の土曜日になれば、辞める気持ちなんてなくなるから!』

森谷先輩

『そりだよ。騙されたと思って、土曜日まで続けてみるんだな!』

康平達は、意味不明のままだつたが、先輩達の明るい雰囲気に妙に納得させられ、もう少し続けてみる事にした。

金曜日まで、拷問に感じられたジミーな練習が続いたが、最後の柔軟体操に差し掛かった時、梅田先生から一言。

『1年にはまだ言ってなかつたが、明日、練習試合があるから9時学校集合だ。いいな。』

練習試合（合同練習）（前書き）

練習試合があると前日にしてわれ、期待と緊張で少し眠れなかつた1年生達だが、何とか全員集合時間前に、学校に到着した。

練習試合（合同練習）

土曜日の朝、永山高校ボクシング部全員は、練習試合の為、学校に集合した。

目的地は隣の県の早瀬工業高校。

部員はそれぞれ、梅田、飯島先生の車に乗つて目的地へ向かつた。

毎年、この時期になると、永山、早瀬の2校は、合同練習という形で試合をやつしている。

お互ひ、インターハイの県予選で当たる事はないので、対外試合をするにはつづつつけの相手なのだ。

2時間程で早瀬工業に着いた。

そこには古い建物だが、かなり広い練習場があつた。そして、そこには30人以上の部員がいた。

すぐに全員で挨拶をし、すぐにウォーミングアップの準備に入った。

毎年2～3回合同練習をする間柄なので、顧問の先生同士は勿論、3年生同士でも最近の事など親しく話している。

合同練習の内容は、シャドウボクシング5ラウンド、そのあと、試合形式のスパーリングをし、最後にシャドウボクシングを3ラウンドする。

ウォーミングアップが終わって、合同練習が始まった。

まずは5ラウンドのシャドウボクシング。

シャドウボクシングといつても、永山高校の4人の1年生は、構えしか習っていないので、恥ずかしい気持ちで構えのポーズを始めた。それとなく、早瀬工業の1年生達を見ると、スタイルはチョット違うが、構えしか習っていないようだ。

知らない者同士なので、微かな敵愾心を感じたりしながらも、2校の1年生達は、ほっとしながら、構えだけのシャドウに集中した。

5ラウンドのシャドウが終わり、試合形式のスパーリングが始まつた。

先輩達（前書き）

隣の県の早瀬工業高校での練習試合（合戦同練習）に参加した、康平達1年生は、これから先輩達の戦いぶりを初めて目にする事になる。

スパートリングは、軽いクラスから始まった。

まずライトフライ級では、2年の大崎先輩が出た。
相手も2年生らしい。

軽量級なので、あまり迫力は感じられないが、とにかく速い。そして、パンチの数が多い。

かなり打ち合いがあつたが、その後に大崎先輩がパンチを当てるシーンが目立ち、1年生の目にも、先輩が優勢なのが判つた。

こうして、フライ級、バンタム級と階級が上がつていったのだが、全体的には永山高校が優勢な試合が多くつた。

中でも目立つたのは、主将の石山先輩（フライ級）と、ライトウェルター級の兵藤先輩（3年）だ。

石山先輩は、小柄でオーソドックス（右構え）だが、左のパンチが恐ろしく強い。特に左フック、左ボディブローは、ブロックの上から当たつても、フライ級とは思えない凄い音がする。

2ラウンドに左アッパーが顔面にヒットし、相手が千鳥足のようになった所で、ストップになつた。

ライトウェルター級の兵藤先輩は、右利きなのに、構えはサウスポーだ。中学までずっと剣道をしていたそうで、本人の希望でサウス

ポーになつたらしい。

長身で細身だが、利き腕の右フックが強く、そして当てるのがうまい。

相手が強引に前へ出た所に右フックが綺麗に当たり、相手は前のめりに倒れてしまった。

相沢先輩と森谷先輩も、相手が3年生だと苦戦していたが、2年生相手だと有利に試合を進めていた。

こうして、全員のスパーリングが終わって、3ラウンドのシャドウボクシングを始めたが、永山高校の4人の1年生は、どこか誇らしげに構えのポーズに集中していた。

先輩達（後書き）

今回のスパーゲーリングの様子を、もつと詳しく表現しようか迷いましたが、康平達1年生が、技を身に付けた時の感動が弱くなってしまいそuddtたので、あえて簡単な表現にさせて頂きました。

次へのステップ（前書き）

合同練習でのスパーゲーリングで、先輩達の強さを見た康平と健太は、彼らなりに興奮していた。

次のステップ

合同練習から帰った康平と健太は、日曜日に行き忘れた古本屋にいた。

健太

『今日は、楽しかったな。』

康平

『ああ、そうだな。』

健太

『飯島先生が言つてたけど、うちの高校つて、かなり強いらしいぜ。』

』

康平

『俺も思つたよ。2年もみんな強いもんな。』

健太

『俺、兵藤先輩カッコ良かつたな。相手前のめりたぜー!』

持つて いる本そっちのけで、話のテンションが上がり始めた途端、古本屋の店主に怒られた。

いつも立ち読みを許してくれるのだが、今日は煩くて迷惑だつたらしい。

さんざん謝った後、2人は外に出た。

健太

『俺、部活続けてみるナビ、お前はまだつくるへ。』

康平

『構えだけやらされてるのは、うひの高校だけじゃないみたいだし、俺も続けるつもりだよ。』

そして2人は、帰つていった。

月曜日部活に行くと、梅田先生から一言、

『お前、1年は、今日から構えの練習は、5ラウンドでいいぞ。その後、パンチを教えてやる。今日は左ジャブだ。いいなー?』

1年生全員は、一際大きな声で返事をした。

ジャブ！

梅田先生の突然の一言に、康平と健太のやる気が一段と湧いた。

有馬は、顔に出やすく本当に嬉しそうだ。

白鳥は判りにくいが、急いで着替えてるので、やる気になつているらしい。

長く感じられた構えのラウンドが終わり、ジャブの練習に移つた。

梅田先生

『いいか？

構えた所から真っ直ぐ前の拳を突きだす。

やってみる。』

思い思いに4人が、ジャブを打つ。

健太だけはサウスローなので右ジャブだが、他の3人は左手が前なので、左でジャブを打つ。

構え同様に、梅田先生の細かいチェックが入る。

『ちゃんと構えた所から打て！』

『反対の手を、顔から離すな。』

『打つ時、目をつぶらない！』

梅田先生は、一ヶ月後のインターハイ予選の為、先輩達を見なればならないので、特に意識させたい部分を言った。

『ジャブは、前6後ろ4のバランスのまで打つ。

打つ時は、顎を引いたまま、肩の回転を使って打つ。いいか、無理しても肩を回して打て！

6ラウンドしたら、筋トレだ。いいな！』

『はい！』

筋トレが終わって、柔軟体操をしていた1年生達に、梅田先生は言った。

『ジャブは、体のひねりを大きく使えないから、難しいパンチだ。実戦に使えるまでに、1年位かかるつもりで、根気強く身に付ける！』

更に、

『明日は、後ろの方の拳で打つストレートを教えるから、そのつもりでいる。』

『はい！』

構えと同様に、しばらくジャブだけの練習をすると思っていた4人は、意外な一言に戸惑いながらも、大きく返事をした。

更衣室で

練習が終わり、1年生達はゆっくりと着替えていた。

有馬

『なあ、おととい先輩達強かつたな!』

康平

『ああ、カッコいいよな。』

有馬

『俺は、石山先輩みたいになりたいんだけどな。』

健太

『有馬は細身だから、タイプが違うかもよ。』

有馬

『まあ、そうかもしんねえけど、憧れるのは自由だろ。』

そのうち、最近ハマッているゲームや学年の女の子達の事に話が脱線すると、完全に着替えの手が止まってしまった。

しばらくすると、練習を終えた石山先輩が更衣室に入つて來た。

石山先輩

『お前ら、まだいたの?』

『ス、スマセン。すぐに帰ります。』

石山先輩

『ハハ、そんなに慌てなくていいよ（笑）』

石山先輩は、獰猛な戦い方をする割には、温厚な性格のようだ。

更衣室を出る時、健太は疑問に思つた事を言った。

『先輩！

うちの部は、じっくり教える方針のようなんですけど、ジャブだけは違つんですか？』

石山先輩

『それは、ジャブをマスターするまで、ジャブだけずっと打つてたら、ジャブだけ打つバランスになつてしまつからなー。』

有馬

『そういうモンなんですか？』

石山先輩

『バランスって、意外とテリケートだからなあ、お前らサッサと帰んねーと怒られるぞ。』

健太、有馬

『はい、失礼します！』

永山高校ボクシング部は、幸運な事に、タチの悪い先輩はいないようだ。

1年生達は、一瞬梅田先生に睨まれながら、そそくさと帰つていつ

た。

ストレート

翌日、1年生達は、後ろの手で打つストレートを習つ事になった。

梅田先生

『いいか、これからストレートを教えるぞ。

最初に後ろ足を回す。次に肩を回す。最後に腕が伸びる感じだ。それを流れるようにやってみる。』

康平達4人は、それぞれストレートを打つ。

昨日のように、先生は上級生の指導が忙しいらしく、ポイントをだけを付け加えた。

『前足は、少し内側に曲げたまま、動かさないで打て。パンチは打つたらすぐに戻す。重心は6、4から7、3へ移る。ストレートだけを4ラウンドやる。いいな!』

言われた4ラウンドが終わり、1年生達は、筋トレに移った。それも終わりに近づいた頃、梅田先生が1年に言った。

『お前ら筋トレが終わったら、すぐにシャドウをゆっくりやれ。』

『はい!』

1年生達は、理解出来ないまま、習つた左右のストレートをゆっくりと打つていた。

梅田先生

『いいか。パンチを打つ時の使う筋肉を意識しろ。
筋トレで鍛えた筋肉を、パンチ用に切り替える為のトレーニングだ。
わかったな。』

康平達は、少し納得できた表情で、パンチをゆっくり打ち始めた。

新たな練習メニュー

左右のパンチを畳つた1年生達に、しばらく続けていくメニューが組まれた。

柔軟体操

縄跳び

2R

シャドウボクシング

構え

2R

ジャブ

2R

ストレート

2R

左右パンチ

3R

サンドバッグ

3R

シャドウ（左右）

1R

筋トレ

ゆっくりシャドウ

2R

柔軟体操

という内容だ。

新たにサンドバッグ打ちがあるが、その時は不思議と梅田先生のフォームのチェックは無い。よほどサンドバッグに体を預けて打つたり、顎が極端に上がっている場合でなければ何も言われない。

フォームが悪くても、サンドバッグをガンガン打たせて筋肉を付けさせる方針のようだ。

筋肉が付かなければ、正しいフォームで打つことも出来ない、というのが、梅田先生の持論らしい。

新たなメニューでの、練習が終わった後、

梅田先生

『これから、パンチを打つ軸が固まるまで、この練習メニューが続くからな！
いいな！』

トーナメント表

新しいメニューでの練習をする1年生達。徐々に体力がついて、こなせるようになってきた。

ただ、フォームはまだぎこちない。

『有馬、左ジャブが裏拳になってるぞ。構えた時は、もっと左拳は外側だぞ!』

『高田、右ストレートを打つても左足の親指を浮かすんじゃねえ!』

梅田先生のチェックは、相変わらず、まんべんなく全員に施されていた。

だが、パンチというアイテムを貰つた1年生達は、精神的に充実して練習していた。

この日の練習が終わり帰ろうとしていた康平と健太を、梅田先生と飯島先生が呼び止めた。

梅田先生が、

『お前ら、こいつを知つてるか?』

と言い、インターハイ県予選のトーナメント表を見せた。

『…………』

ライトウェルター級の青葉台高校の所に、坂田裕也の名前が出ている。

健太

『はい、知っている奴です。』

飯島先生

『中学の時から、ボクシングをやつてたのか？』

康平

『中学の時は、野球をしていたんですが、ボクシングをしていたかは知らないです。』

梅田先生

『…わかつた。もう帰つていいで。』

飯島先生

『あ、それと言い忘れた事があった。
もつすぐ中間テストだが、ボクシング部だけは、テスト休みがない
から、今から勉強しておけよ。』

康平と健太は、最後に強烈なダメージを食らつて帰つていった。

テスト休みがない！（前書き）

ボクシングを少しでも多く出来る歡びとして受け取るか、部活から解放される楽しみを奪われたと悲しむか？

トム
私なら、間違いなく後者をとりますね！

テスト休みがない！

裕也が試合に出る事にも驚いた康平と健太だったが、テスト休みがない事は、1年全員にとって、我が身に降りかかる大事件だった。

本来なら、全部の部活にもテスト休みがあり、その期間、部活動をしてはいけない規則だつたが、梅田先生の、選手達に対する思いやり（？）から、熱心に校長を説得して、特別に許されたという話だ。

学校側でも、毎年インターハイに出ているボクシング部は、特に優遇しているようだ。

『梅田先生、なんて事をしてくれたんだ？』

『学校は学業が本分だよな。』

『ボクシング部を優遇するんだつたら、俺達の問題だけ簡単にすればいいんじやねえか！』

白鳥を除く1年生達は、梅田先生がいないのを確認してから、口々に言いたい事を言った。

しかし、ボクシング部員にとって、国家権力よりも恐い梅田先生には、いかんとも逆らい難く、今から勉強を始めることになる。

康平と健太も、勉強かどうかは本人達しか知らないが、テスト休み

に予定していた計画が全部潰れてしまった。

仕方なく、今週の土日からテスト勉強を始めることにした。

初めてのミット打ち

土曜日。

学校は休みだが、部活はいつも午前9時から始まる事になっていた。

1年生達は、8時50頃には全員ボクシング場にいたが、先輩達は誰も来ない。

9時になった時、飯島先生が来た。

『梅田先生と上級生は、練習試合に行ってるから、今日はこれで全員だ。さあ、始めるぞ!』

いつもメニュー通りに練習を始めたが、フロウンド田を過ぎてから、飯島先生が、

『有馬、ちょっとリングに来い!』

そして、ミットを持って

『殴ったパンチを打つてみる。』

左ジャブから始まり、右ストレート。ワンツーストレートと殴ったパンチを順々に打つていった。

有馬は、ミットとはいえ、対人相手に打つので最初は戸惑っていた

が、ミット特有の乾いた音が大きく鳴ると、じんじん調子が上がりしていくようだつた。

だがパンチを打つ時、反対側のガードが顔から離れたり、パンチの戻りが悪いと、先生がミットで軽く顔を触つてくれる。

そして、踏み込みを良くさせる為に、少し遠田から打たせてくるようだ。

有馬から始まり、全員3ラウンドずつの中を終えたが、重いサンドバッグと違い、1年生達は、パンチを戻さなければならぬ感覚を味わつた。

この日は、ミットを打った分、サンドバッグのラウンドを省略して練習を進めていった。

最後の柔軟体操の時、健太は、飯島先生に質問した。

『先生、ボクシング部は女子マネジャーを募集しないんですか?』

飯島先生

『うちの部は、自分の事は自分でやらせる方針だから、女子選手はともかく、マネジャーはどうないな。』

健太は、心の底から残念そうな顔をした。

飯島先生

『お前らに、強くなる秘訣を教えてやろ!』

康平

『それは何ですか?』

飯島先生

『それは、モテない事さ。モテないから、やることが無くてボクシングに没頭でき…………』

さすがの飯島先生も、ハズシタ空氣を感じじとり、

『お前ら、今日は学校休みなんだから、終わつたらさつと帰れよー。』

と言い、無理矢理場の空氣を変えた。

テスト勉強（前書き）

今回の康平と健太の話は、^{トム}私だけでなく、沢山の方々も体験し、共感できるもんだと勝手に信じております m(_ _) m

テスト勉強

練習が終わり、康平と健太は、2週間後にある中間テストに向けて、康平の家で勉強する事にした。

まずは、数学から勉強を始める事にした。
どちらも、梅田先生から教わっている訳ではないのだが、2人は、体が勝手に数学の教科書を出してしまったのだ。

30分過ぎ、健太が口を開く。

『家で勉強するのは、受験の時以来だな。』

康平

『そうだな。なかなか頭が働かね~よ。』

健太

『部活終わった後だしな。』

康平

『ちょっと息抜きしようか?』

健太

『そうそう、あれやうひ~ぜ。』

健太は、クラスの奴から借りてきた、流行りのゲームをバッグから取り出した。最初からやるつもりだったようだ。

康平も、そのゲームはやりたくてしうがなかつたらしく、

『運動直後の勉強は、体に悪いかも知れないからな。』

と、勝手に理由を付けて、数学の教科書をしまい始めた。

ゲームを始めて3時間位たつ頃、康平が言った。

『息抜きしようぜ。』

と、最近古本屋で買った単行本20冊を押し入れから出してきた。

こうして、勉強の息抜きの為だったゲームの息抜きの為に、マンガ本を読み始めた。

そして、指と頭がリフレッシュした頃、すぐそばにある勉強道具達に後ろめたさを感じながらも、またゲームを再開した。

人並み以上の勉強嫌いと、意思の弱さという資質を併せ持つ2人は、夜9時過ぎまで、息抜きをしていった。

そして、健太が帰り際に、

『明日、図書館で勉強しようぜ。』

と、勉強道具が沢山入っているバッグを重そうに持ち上げて言った。

図書館にて

翌日、昨日30分しか勉強できなかつた分を取り戻そつと、朝から近くの図書館へ行つた。

図書館には、ゲームやマンガ本などの誘惑がないので、2人は意外と集中して勉強していた。

昼過ぎから、坂田裕也と鳴海那奈が図書館に來た。

康平と健太も驚いたが、裕也と那奈の方は、一瞬固まる程驚いていた。

裕也

『お前ら、ここに何しに来たんだ?』

康平

『勉強に決まつてんだろ!』

那奈

『信じらんない!絶対似合わないよ!』

健太

『ウッセーな。家で勉強やつてもはかどんねえんだよ。』

那奈

『あんた達は、家で勉強しても、マンガとゲームに逃避しちゃうタ
イプだもんね(笑)』

康平と健太は、少し無言になつた。

裕也が、話題を変える。

『今から勉強するつて事は、永山の中間テストが近いの？
もしそうだとしたら、早すぎないか？』

康平

『まだ2週間以上あるよ。』

那奈は、

『信じらんない！何かあつたの？』
と、心から心配そうな顔をして聴いてくる。

康平と健太は、勉強している事を心配されている不自然さに気づかず、自分達がボクシング部へ入部した事。そして、ボクシング部にはテスト休みが無い事を話した。

裕也と那奈は、とても驚いていたが、裕やは複雑な表情をした。

裕也

『お前らもボクシングやつてるつて事は、嬉しいんだけど、3人も体重が近そうだから、どっちかと試合する羽目になるのは、嫌だな。』

4人とも沈黙。

康平

『やつこいえば、裕也は試合出るんだって？』

裕也

『ああ、俺、中3の春からアマチュアのボクシングジムに通つて選手登録してたから、試合に出られるんだけどね。』

康平達のように、高校からボクシングを始めた場合は、1年間試合が出来ないルールになつている。

健太

『スゲーな。じゃあ夏の初めまで部活（野球）やりながらジムに行つてたんかよ。』

裕也

『高校入つて1年間試合に出られないのは、考えたくなかつたからね。野球部のみんなには、最後の大会前に掛け持ちしてたから今まで悪いと思つてるよ……。』

康平

『試合は、ライトウェルター級で出るんだよね。』

裕也

『今、体重が61キロちょっとだから、ライト級（60キロ以下）でもいいんだけど、ライト級には、先輩がいるしね。』

健太

『ライトウェルター級つていつたら、うちの兵藤先輩か。』

裕也

『兵藤さんの事は、話さなくていいよ。お前らにスパイみたいな事

はさせたくないしな。』

裕也は、あくまでイイ奴だ。

那奈

『はい、ここで雑談終了。あたし達もテスト休みが無いんだから、勉強しないとね！』

青葉台高校ボクシング部も、テスト休みは無いらしい。

4人は、雑談という誘惑を断ち切る為に、それぞれ離れて勉強を始めた。

重心（前書き）

今日も永山高校ボクシング部は、少ない部員ながらも熱氣で溢れている。

1年生達もそれに呑み込まれるように、練習に励んでいる。

重心

月曜日、ボクシング場ではいつものように、パンチが当たる音、梅田先生の怒鳴り声、半分以上ハズす飯島先生の冗談が心地良くななり響いている。

サンドバッグを打ち始めた1年生達。パンチを打った時、いい音をたてたい、サンドバッグを揺らしたいというのは、初心者がハマり易い欲望の一つだ。

ストレート系しか習っていない4人は、無意識に後ろ足に重心を置いて構え、体重の乗ったストレートを打とうしてしまつ。

特にその傾向が強いのは、康平だった。

梅田先生

『お前ら、前6、後ろ4の重心を忘れるな。』

康平以外の3人は、先生から言われた通りの重心に戻つたが、康平だけは直らない。

本人は直そうしているのだが、2、3発パンチを打つと、重心が後ろ足になってしまつ。

康平には、強いパンチを打ちたいという気持ちが無意識にあるようだ。

その様子を見ていた梅田先生が、康平に言った。

『高田、お前しばらくサンドバッグを打つな。』

不思議にも、怒った様子ではない。かといって見捨てた感じでもなかつた。

そして、

『お前は今日から、サンドバッグ打ちの代わりに、グローブを付けてシャドウカラウンドやれ。

だが、関節を痛めるかも知れないから、思い切りは打つな!』

こうして、重心が直らない康平には別メニューが与えられた。

梅田先生は、よく怒鳴るのだが、それは挨拶と返事、そして技術的な事だけのようだ。

それ以外の事はあまり怒鳴らないらしい。

練習が終わって、1年生全員に梅田先生が言った。

『最初の頃に言つたと思つが、6、4の重心は、今後習つていくパンチの為の重心だ。

今は、判らないかも知れんが、何が何でも意識しろ。』

『はいー。』

1年生達は、梅田先生なりの優しさを感じたようだった。

食堂にて

永山高校には、食堂があり、そこは結構広い。

そこには売店があり、パン等や文房具等を売っている。

昼休み、売店は大忙しだ。昼前に弁当をとっくに消化している育ち盛りの高校生達が多く、足りない分は、パンを買って飢えを充たしている。

また、食堂は、運動部の部室に近く、パンを買って各自の部室で食べている人も多い。

健太は、学校へ遅刻しそうになり、朝メシを抜いた日があった。

弁当は、2時間目を過ぎたあたりで食べてしまい、放課後の部活に備える為、昼にパンを買った時、柄の悪そうな先輩達とすれ違った。

そそくさと、下を向いて脇を横切る rift とした時、いきなり腕を掴まれた。

『アホ！挨拶なしに通り過ぎる事はネエだろ。』

ボクシング部3年の清水先輩だった。

健太は慌てて

『あ、失礼しました。オス！』

『清水！

オメエがオツカねえから、避けられたんじゃねえの？』

と、他のもつと怖そうな先輩達からカラカラワれていた清水先輩だが、結構ユニークな先輩だ。

部活以外の先輩は、いつもしかめつ面で、肩で風を切るような歩き方をしている。オマケにガニ股だ。

ところが、部活になると普通の歩き方になる。

梅田先生が怖いからではなく、先輩が1年のインターハイ予選の時、同じように歩いている他の学校の奴が、1ラウンドで秒殺されたのを見て、それがトラウマになつたと本人が言つっていた。

そして、何故かボクシング教本に出てきそうな、スタイルで戦う。

色々な意味で、アンバランスなものを持っている先輩だ。
その清水先輩が言った。

『片桐！

今日から昼休みは部室に行くなよ。』

健太は、不思議そうな顔をした。

食堂にて（後書き）

県立永山高校ボクシング部は、今回の話でやつと全員の名前が出ました。

私自身も整理する意味で、このアトガキで、登場人物全員の名前を表示します。

永山高校ボクシング部

梅田先生（顧問）
飯島先生（副顧問）

高田 康平（1年）
片桐 健太（1年）
有馬 猛>タケル<（1年）
白鳥 翔（1年）

相沢先輩（2年）
大崎先輩（2年）
森谷先輩（2年）
石山先輩（3年）主将
清水先輩（3年）
兵藤先輩（3年）

青葉台高校ボクシング部

坂田 裕也（1年）

鳴海 那奈（1年）マネージャー

ボクシングが好きだけで、何の文学的知識もないまま執筆しているこの小説ですが、表現力や構成の稚拙さには、多少目をつむって頂けたらと思います。

m () m

階級制の宿命

『えつ、どうしてですか?』

健太は、すぐに清水先輩に質問した。

清水先輩

『今は説明している時間はネエから、他の1年にも言つておけ。』

意味不明のままだったが、怖そうな他の先輩達と離れる」ともできるので、

『はい!わかりました。』

と、納得したフリをして、1年の教室へ向かつて行った。

健太は、康平と白鳥に伝え終わり、有馬に伝えた時に、逆に有馬が理由を話し始めた。

有馬

『昼休みの部室は、大崎先輩と相沢先輩の専用部屋になつてるよ。』

健太

『えつ、なんで?』

有馬

『今、試合が近いから、2人は減量に入つてるんだ。だから、2人はメシを皿そこに食つてる奴等を見なくていいよ』っていつ配慮だな。』

健太

『へえ、梅ツチが言い出したの?』

有馬

『梅ツチは、知らないみたいだ。』

生徒間で梅田先生の事は、梅ツチと言っている。

有馬が続けて

『森谷先輩から聞いたんだけど、言い出したのは、石山先輩と清水先輩だよ。』

健太も、妙に納得した。

石山先輩と大崎先輩（フライ級）、清水先輩と相沢先輩（ライト級）は、階級が力ブツていた。

うちの高校は、特別な事情でもない限り、後輩の方が階級を変える。少ない部員なのに、同じ階級で戦うのは、馬鹿げているし、第一選手達がそれを望んではない。

健太は、康平と白鳥へ理由を話す為、もう一度2人の所へ向かつた。

放課後の部活、相沢・大崎の両先輩は、苦しそうな表情をする瞬間もあるが、3年生達の心配りを思つてか、すぐに表情を元に戻して練習に励んでいた。

飯島先生

土曜日、先輩達と梅ツチ（梅田先生）は、また他県の高校へ練習試合に行っている。

1年生達は、この日も飯島先生と練習する事になった。

飯島先生と梅田先生は、6、4の重心をはじめとして、膝や角度や腕の位置など、指摘する事はほとんど同じだ。

異なるのは、正反対と言つてもいい程違うキャラクターだ。

梅田先生は、いつも余計は事は言わず恐い雰囲気だが、飯島先生はとても明るく、いつも冗談が多い。

有馬は、先生をナメていた訳ではなかったが、普段怒らない飯島先生しかないので、少し気楽な気分で練習していた。

シャドウボクシングの最中に、頭を動かし、パンチを避ける動作を勝手に加え出した。

数日前のプロの世界戦を見て、チャンピオンの真似をしていながらしがつた。

飯島先生は、急に表情をかえた。

そして、ゆづくと有馬に歩みより、小声で話しかける。

『…誰がそんな事をしていろいこと言つた…』

有馬

『…』

飯島先生は、もう一度話す。

『誰がそんな事をしていろいこと言つたんだ…』

静かな口調だが、腹の底から出すような言葉は、有馬だけではなく、他の一年生にもビシビシ伝わっていく。

『……いいえ。誰も言つしません。』

有馬は、少し震えるような声で、答えた。

飯島先生

『じゃあ、何でそんな動きをしたんだ?』

有馬

『3日前の世界戦をテレビで見て、つい……』

飯島先生

『では聞くが、梅田先生の前でも同じ事が出来たか?』

有馬

『いいえ、出来ないと思いました……』

飯島先生

『俺の前なら出来ると思ったのか?』

『…………すいませんでした!』

言葉に窮した有馬は、飯島先生の顔をまともに見れず、深々と頭を下げて謝った。

飯島先生

『分かつたなら、一度とこんな事をするな!』

『お前らも、練習を続けていろ!』

飯島先生は、全員に練習を再開させたが、少し険しい表情になつていた。

話し合い

1年生達は、いつもより増して、緊張した空氣で練習を続けていた。

飯島先生は、少し考えていたようだが、1年全員に呼び掛けた。

『お前ら、一日整理運動して着替えろー!』

1年生達は、飯島先生の機嫌が悪くなつて帰されると思つていたので、着替えた後帰ろうとしていた。

『待て、まだ練習が終わりだとは言つてねえぞ!』

飯島先生は、慌てて全員を呼び止めた。

『全員、その長椅子に座れ!』

1年生達は、言われた長椅子に並んで座った。

飯島先生も、自身が座る椅子を4人の正面に持ってきて腰掛けた。

その直後、また怒られると思った有馬が急に椅子から立ち上がり、

『先生、さつまは申し訳ありませんでした！』
と、再度頭を下げる。

有馬先生はキョトンとしながら、言った。

『アホ！これから話すのはその事じゃねえよ。

有馬はわざと、充分反省しただろ？』

有馬は安心した表情になつて、大きく返事をした。

飯島先生

『だつたらいい。やつきの事は、これで終わりだ。』

更に付け加える。

『お前達の思つてゐる事を聞いておきたいし、俺もお前達に伝えて
おきたい事があるから、雑談に近づくな話し合いを今からするつ
もりだ。お前ら、思う事があつたら何か言つてみろ。』

『…………』

1年生達は、お互に遠慮してか、一向に話さうとはしない。

先生が堪らず話し掛ける。

『俺の[冗談がツマンねえ]といふ話以外だったら、何でも許すか
ひ言つてみり。じゃあ白鳥、お前から話せ。』

白鳥

『…………防御も習いたいと思つのですが……』

康平

『他のパンチも打ちたいです。』

健太

『体重とかは、気にしなくていいんですか?』

有馬

『他校のボクシング部の1年は、もうスパーリング（実戦練習）を始めているのですが、うちの高校はまだやらないんですか?』

飯島先生

『他にないか?』

1年生達は、浅い経験で質問するのが難しいらしく、他にないようだつた。

飯島先生

『今の段階で、他のパンチやディフェンス、スパーリングをする事はない。』

梅田先生も話したと思うが、前6・後ろ4の重心と、パンチを打つ軸が安定するまでは、他の技術は一切教えなつもりだ。
例えば、重心と軸を崩して防御しても反撃しにくいからな?』

白鳥、康平、そして有馬に対する答えのようだ。

『お前ら、今は体重の事なんて気にするな!
特に練習後の食事はちゃんと食べろよ。』

今の時期は、ボクシングに必要な筋肉をドンドン付ける時だ。分かつたな！』

と、健太にも答えた飯島先生は、最後に一言付け加えた。

『お前ら、これから練習で、疑問があつたら俺か梅田先生に質問しろ。

但し、間が悪い時に質問するなよ（笑）』

早速健太が質問した。

『梅田先生に質問しても、怒られないんですか？』

飯島先生は、苦笑いしながら、

『その点は、大丈夫だ。

俺も梅田先生も、頭で理解しないで練習するより、理解したうえで練習した方が、数段早く上達する事を知っているから、喜んで教えてくれるはずだ。』

4人は意外そうな顔をしていたが、飯島先生は時計を見て、

『もう昼になつたし、今日はまづ帰るぞ。』

時間を言われて、急に空腹を感じた1年生達も、急いで帰つていった。

中間テスト（前書き）

どの学校にも必ずあるテスト。
県立永山高校の学生達にも、様々な教科が、
群れをなして襲いかか
つてきた。

中間テスト

中間テストが始まった。

康平と健太も、土日の詰め込み勉強のおかげか、それなりの感触だつたようだ。

有馬は、高校へ入ったらボクシングに集中するらしく、はなから諦めて望んでいた。

白鳥は、未だによく判らない男だ。相変わらず暗い感じで、口数も少ない。

2ヶ月近くたつて、ようやく判ったことは、白鳥が笑いたい時は、口許が微かに弛む位なのだ。

白鳥に興味を持つ奴は、ほとんどいないので、同じクラスの奴らも、それすら判らない者も多い。

しばらくして、中間テストの結果が出たが、永山高校では順位の公表はない。

だが康平のクラスでは、ちょっとしたウワサがたつていた。

1時間目の授業が終わった直後、康平の前の席に座っている女の子が振り向いて話し掛けてきた。

山口亜樹といふ名前で、康平と同じ位背が高い。

肩まで伸ばしたセミロングで色は浅黒く、鼻筋がスースと通つてゐる美人だが、可愛いといつより、カッコイイ感じだ。

勝ち気な性格で、入学早々言い寄つてくるしつこい男にビンタを喰らわしたエピソードは、一時伝説になつた程だ。

彼女にとつて、比較的話が受け身勝ちの康平は、結構話し易いらしく、最近はよく話しあけてくる。

亜樹

『ねえ、あなたの部にいる白鳥つて奴、今回のテストは満点に近かつたらしいよ。』

康平

『えー・マジで?..』

亜樹

『なんだ、知らないの?』

結構なウワサだよ。さつきいつの教室行つて見たんだけど、暗そうだよね。実際はどうなの?』

康平

『あいつは部活でも無口だからな。俺もよく判つてねえんだ。』

亜樹

『ユニークーションとれてないなあ。ところで君は何番だったのかな?』

亜樹は、机の上に無用心に置いてあつた成績表を素早くとつて、康平の届かない所で見ていた。

亜樹

『君は、もう少し頑張つた方がいいんじゃない。』

康平

『ひでえなーーうちの部はテスト休みが無いんだぜ。』

亜樹

『学生は、学業が本分でしょー? 言い訳しない。』

康平

『自分の方こそ何番だつたんだよ?』

亜樹

『さあーでも、君にもっと頑張れって言える位の成績だよ(笑)』

そのうち先生が來たので、2人は話をやめて、次の授業の準備に入つた。

試合前の練習にて（前書き）

インターハイ県予選を間近に控えた先輩達。

一方1年生達には、試合と関係なく、いつものように梅田先生の怒号が飛ぶ。

試合前の練習にて

放課後の練習。

インターハイ県予選を間近に控え、先輩達は最後の段階である。

試合に出す技を確認する者。

試合の前に、もう少し食べられるよつと、カツバを着て縄跳びのラウンドを増やしている者。

各自試合に向けて、最後の調整に入っている。

1年生達は、誰も試合に出ないので、いつもと同じ練習をしていた。

4人はそれ修正する所を指摘されるが、最近は、指摘される内容が安定してきた。

康平は、もっと前足に重心をかけて6・4のバランスにする事。

健太は、もっと左肘を絞り、左ストレートを打った時に、右足が開かない事。

有馬は、もっと肩の回転を使って左ジャブを打つ事。

白鳥にも梅田先生からの罵声に近い指摘がある。

『白鳥、何度も言つたら判るんだ。お前は左足をもっと曲げる。』

白鳥は、少し伸び気味な左足をもつと曲げる事だ。

運動神経が良いとは言えない白鳥だったので、口で指示されてもなかなか直らない。

『お前、俺の声が聞こえてんのか?』

梅田先生は、白鳥の所へ行つて体全体を上から押し付ける。

左足が充分に曲がったのを確認すると、

『もひ、2度と同じ事をさせんなよ?』

と言いながら、鋭い視線で練習を見ていた。

梅田先生の凄いところは、勉強で学年トップ（噂ではあるが）の白鳥にも、ひどい仕打ち……ではなく、厳しい指導をする事だ。

練習が終わってから、康平と健太は少し残つて先生達に疑問をぶつけていた。

先々週の土曜日、飯島先生に言われて始めた質問だ。

最初の頃は、1年全員話し易い飯島先生にばかり質問していた。

だが、梅田先生の淋しそうな表情を察した健太が、恐る恐る質問したところ、先生は口許を歪めながら、熱心に説明してくれた。

それからは、どちらの先生にも質問が飛ぶようになった。

今回、梅田先生に疑問をぶつける。

健太

『ジャブを打つ時、なぜ肩の回転を強調するんですか?』

梅田先生

『ジャブをグローブ付けて腕だけで打つたらどうなる?』

健太

『腕が疲れます…あつ!』

梅田先生

『判つたか。腕以外の部分の大きな筋肉を使えば、疲れ難い。
それに、肩を回して打つと、他に利点が2つある。』

康平

『それは、どんな事ですか?』

梅田先生

『まず、肩が回った分射程が伸びる事だ。
もう一つは、回した肩で自分の顎をガード出来る事だ。』

康平と健太は、実際にジャブを打つて確認したところ、納得したようだ。

健太は、思い切ってもう一つの質問をした。

『先生、クラスで噂になっているんですが、中間テストで白鳥が満点に近い点数を取つたって本当ですか?』

康平

『うちのクラスでも噂になつてます。』

梅田先生は、少し考えていたが、

『その噂は本当だ。学生は、勉強が本分だからな。少しは奴を見做え。

但し、勉強出来ても、練習で手抜きはさせんぞ。』

今日の練習で、先生の言葉に嘘がない事を知つてゐる康平と健太は、そそくさと帰つて行つた。

木曜日、今日からインターハイ県予選が始まる。

ボクシングについて、

『観るのはいいけど、やるのはチョット……』

とは、よく聞く話だ。

高校ボクシングも例外ではなく、選手層は少ない。

多くて4回程勝てば優勝で、インターハイ全国大会の切符を手にする事が出来る。

今年の開催地は、裕也がいる青葉台高校だ。

そして、木曜日から日曜日の4日間かけてトーナメントを行い、優勝者を決める。

比較的近い場所なので、先生や先輩達は宿泊をしない予定だ。

ボクシング部の1年生達は、木・金曜日は試合に行かず、学校で授業を受けていた。

『ねえ、康平は試合に行かなくていいの?』

康平に話し掛けてきたのは、前の席の山口亜樹だ。

康平

『ああ、俺達1年は試合しないから、応援に行くのは土曜日ばかりだ。』

『

亜樹

『せうなんだ。』

康平

『山口の方いい、応援には行かなこのか?』

亜樹

『あたしは、キ・タ・ク・部。
中学の時は部活やつてたけど、先輩後輩の関係で疲れたりしあ。
今は気ままで感じだよ。
あーーそれと山口つて、なにでこいつのまやめてくんない。照れるか
いわ。』

亜樹は、ハッキリものを言つ性格だ。

名前で呼ぶのも、結構恥ずかしいゾ
と、口には出さず、康平が言つた。

『亜、亜樹…は、前は向やつてたんだよ?』

亜樹

『アハハ、ドモッてる。
あたしは、バスケやつてた。
ほら、あたしって、背が高いでしょ。
それで期待されていたんだけど、先輩とのレギュラー争いで色々あ
つてね。』

2年で辞めたんだ。』

確かに亜樹は、172センチの康平と同じ位背が高い。
亜樹が心なしか寂しそうに話すので、

『…それは大変そうだな…。』
と、康平は同情した。

亜樹

『ふつ、嘘だよ（笑）。

2年で辞めたのはホントだけど、意地悪していく先輩に、正面から文句言つて、正々堂々と辞めてやつたんだ。

意外に思われるかも知れないけど、あたしつて、気が強いしー。』

康平

『ひつでえなあ。同情して損したよ。
それに、誰も意外に思つてねえよ！』

亜樹

『ひつどいわねえ〜（笑）

でも君つて、将来詐欺に騙されるタイプかもね（笑）』

康平が何か言い返そうとした時に、先生が来たので、話は中断した。

放課後、今日は部活が休みなので、帰り支度をしていると、再び亜樹が話し掛けてきた。

『今日は部活が休みなんだ！？』

康平は、

『そう。日曜日以外で休めるのは久しぶりだよ。』
と、嬉しそうに答える。

亞樹

『前から不思議に思つてたんだけど、康平は、何でボクシング部に入つたの？』

昔はヤンチャだったとか……』

康平

『そんなんじやねえよ…』

亞樹

『だよね！

いくら君がイカツイ格好しても、全然怖くないしね。』

康平

『余計なお世話だよ…』

亞樹

『例えば、一番あり得ない仮説だけど、康平に彼女がいて、その口に勧められたとか？

まあ、これは無いわね。』

康平

『ひでえなあ。何でそんなに入部した理由を聞きたいんだ？』

亞樹

『ひでえなあ。何でそんなに入部した理由を聞きたいんだ？』

『ほら、君はボクサーってタイプじゃないから。精悍でもないし、根性無さそうだし、あとそれから……』

康平は、これ以上悪口を言われるのは「メンとばかりに、本当の事（部紹介で騙された事）を言った。

亜樹

『アハハ！やつぱりそうなんだ。

君は期待を裏切らないね。将来詐欺に気を付けた方がいいよ（笑）』

康平

『もうボロクソだな。』

亜樹は、少し黙っていたが

『ところで康平は、もう帰るの？』

と言った瞬間、健太と有馬が教室に入ってきた。

健太

『康平、今日試合した先輩達、みんな勝つたそうだぜ。』

有馬

『清水先輩と相沢先輩は、相手を倒して勝つたみたいだ。見たかったよな！』

健太

『清水先輩と相沢先輩は、相手を倒して勝つたみたいだ。見たかったよな！』

『石山先輩と兵藤先輩はシードだし、土曜日まで全員残つてゐるといなあ。』

その後、亜樹が何か言いかけたのに気付いた康平だったが、亜樹は何もなかつたように一人で帰つて行つた。

亜樹を見ている康平に気付いた健太が訊く。
『ん、どうした康平、何があつたのか?』

有馬
『あいつ山口亜樹だろ。』

健太
『え、あの入学早々男をビンタしたつていう。お前もビンタされそうになつたのか?』

康平
『そんなんじやねえよ。』

有馬

『あいつ、どこかシンケンしてるし、女同士でもあんま評判は良くないらしいぜ。』

康平

『.....』

健太

『折角部活が休みなんだし、こんな所で油を売つていないで帰らう

ぜ。
』

2人とも、この健太の意見には大いに賛同し、急いで帰り支度を始めた。

県予選準決勝ー（前書き）

土曜日、学校が休みなので、応援に行く事を許された1年生達は、初めて公式戦を田にする事となる。

県予選準決勝！

土曜日、インターハイ県予選は、準決勝まで進んでいた。

前日の試合でも、永山高校の先輩達は、ほとんど勝ち残っていたが、ライトフライ級（48kg以下）の大崎先輩は負けていた。

先輩は、普段の体重が54kg位あるのを減量していたので、疲れがあつたかも知れないが、相手は1年生だつたらしい。

どんな奴だろうと、健太と有馬は探そつしたが、

『お前らそんな暇ないぞ。
と、大崎先輩に止められた。

高校生の試合は、2分3ラウンドの短い試合だ。

そして、安全を考慮してか、試合を止めるのが比較的早い。

次から次へと入れ替わっていくような感じだ。

そして、次の試合は、フライ級（52kg以下）の石山先輩だった。

昨日、負けてしまった大崎先輩は、応援に専念するらしい。

その大崎先輩が1年生に応援のアドバイスをした。

『野次は絶対禁止だ。

とにかく自分の選手のパンチが当たつたら、大きい声で歓声をあげ

る。

そしたら選手がノつてくるからな。』

そのうち、石山先輩の番になつた。

試合前のお辞儀は順番があり、チョット面倒そうだ。

『ボックス！』

レフリーの一言で試合が始まった。

やや長身の相手は、派手な動きで大きく動く。

小柄な石山先輩は、リラックスした感じで頭をゆっくり振りながら前へ出していく。

軽いパンチの応酬があつた後、ロープを背にした相手がパンチを出した瞬間、先輩が左フックで飛び込んでいった。

凄い音を立てて、相手のプロックに当たつたが、先輩はお構い無しに連打を浴びせた。

最後は何が当たつたか判らなかつたが、相手は体をくの字に曲げてゆっくりマットに沈んでいった。

左のボディーブローが当たつたようだ。

1ラウンド1分過ぎ、石山先輩はレフリー・ストップ・コンテストRSCで勝利した。

あまりの速攻に、大崎先輩でさえも、応援するタイミングを失つた

が、先輩は、

『3試合後は、相沢だ！
気合い入れつぞ。』

と、自分に言い聞かせるように後輩達へ言った。

バンタム級（56kg以下）で出場している相沢先輩の相手は、青葉台高校の奴で、今年、春の選抜で全国2位になっている強敵だ。

試合が終わった石山先輩も加わって、懸命に応援したが、奮闘虚しく、3ラウンド目に打ち込まれ、RSCで負けてしまった。

その後、清水・兵藤の2人の先輩は勝ち残って、決勝戦に駒を進めていた。

康平と健太は、坂田裕也の事が気になっていて、ライトウェルター級（64kg以下）のトーナメント表を見た時、準決勝に残っていた。

2人は、こつそり裕也の試合を見たが、裕也の人柄を知ってる2人にとっては、信じられない程荒々しい戦い振りだった。

ガンガン前に出ながら、とにかく打ち合ひ。

そして、思い切った右パンチ打っていた。

2ラウンド目、今までずっと空振りしていた右の強振が、相手の顔面を捉えた。

すると、今まで元気だった相手の足許がふらつき、そこで裕也のストップ勝ちとなつた。

康平と健太は、あっけにとられていたが、森谷先輩の試合が次にがあるので急いで戻つていった。

その森谷先輩も、苦戦はしていただが、かろうじて判定で勝ち、明日の決勝を迎える事になつた。

この日の試合が全て終わつた後、康平達は、裕也と那奈を見付けたが、お互いに話している時間はないようだったので、先輩達と一緒に帰つていった。

決勝戦（前書き）

インターハイ県予選も、とうとう決勝戦！

謎のライトフライ級の1年生。

裕也と兵藤先輩の戦い。

他3人の先輩達！

永山高校の1年生達は、複雑な気持ちで試合を見ていた。

決勝戦

決勝戦の当日！

会場は緊張した空気になっていた。

今日戦う4人の先輩達も、目を閉じて音楽を聞いていたり、やけに後輩に「冗談を言つてたり、各自違つた行動をしているが、それなりに緊張しているようだ。

そして先輩達は、試合1時間になると、アップ（ウォーミングアップ）を始めました。

緊張を振り払うかのように、派手に肩を動かしながらシャドウをしたり、相手にパンチを打たせて田舎らしをしたりして戦闘モードに入つていった。

今日も、軽量級から試合をする予定なので、石山先輩は3試合目だ。

1年生達は、2試合目のライトフライ級にも興味があつた。

大崎先輩に勝つた同じ1年の奴が、決勝に残つていたからだ。

黒木琢磨という協和高校の1年だ。

奴は、親父さんの影響で、小さい頃からボクシングをやつていたらしい。

そいつの試合が始まった。

構えはオーソドックスだが、極端に低いガードから速いパンチを打つしていく。

かなりリラックスしているようで、パンチは鞭のようにしなやかだ。

そして、相手のパンチは上体の動きと、最小限の足裁きでかわす。

2ラウンド早々、一方的に黒木が打っているところで試合が終わつた。

皆、感心するように見ていたが、同じ体重になりそうな有馬と白鳥は、しばらく呆然としていた。

次の試合は、石山先輩なので、ボオーッとしている訳にはいかず、全員応援の準備に移つた。

石山先輩の相手も、研究していたようで、見ている方が疲れる位、足を使って戦つてきた。

先輩も少々戸惑つたが、前半はボディー中心にパンチを集めた。2ラウンド後半に左アップバーが顔面にヒットし、相手の足が大きくよろめいた瞬間にレフリーが割つて入り、先輩の優勝が確定した。

清水先輩の相手は、青葉台高校の同じ3年生で、去年の新人戦でも、

決勝で戦つた宿敵らしい。

去年の雪辱を果たそつと、早いテンポで先手先手と仕掛けていった。このままいけば勝てると思つたが、なぜか3ラウンド終盤からペースが落ちてしまった。

息はキレイでないが、右のパンチが一向に出ない。

3ラウンド目は、相手が打ちまくる展開になり、判定で負けてしまった。

試合後、清水先輩はドクターに右拳を見てもうつたが、なんと骨折していた。

すぐに病院へ向かうが、会場を出る前に、赤い目をしたまま、

『兵藤、森谷、絶対勝てよ!』

と、言つて車へ向かつていった。

次の試合は、兵藤先輩と裕也だ。

裕也は昨日のよひこ、ドンドン前にでる。

先輩はそれを迎えつつ展開になつた。

裕也の打つパンチは空を切るが、先輩のサウスローからの右フック・左ストレートがよく当たる。

裕也は打たれながらも懸命にパンチを打っていたが、3ラウンド開始早々からパンチは出なくなつた。

試合を終わらせようと、仕留めにかかつた先輩だったが、その時裕也の渾身の右ストレートが兵藤先輩の顔に直撃した。

たたらを踏んだ先輩だったが、すぐに打ち返して反撃に移つた。

裕也は、もう打ち合う力は残っていないようで、そこで RSC 負けとなつた。

森谷先輩も、兵藤先輩に続こうと奮戦したが、力及ばず僅差の判定で敗れた。

その後、全階級の決勝が終わつた。

閉会式も終わり、裕也が康平達の方へ歩いて來た。

まず、兵藤先輩の所へ行き、
『試合、勉強になりました。
インターハイ頑張つて下さい。』

深々と頭を下げる。

兵藤先輩

『お前、ハート強いよ。』

それに、最後のパンチは効いたぜ！
また頑張れよ。』

その後、康平と健太に来て、
『やっぱ、兵藤さんは強いね。手も足も出なかつた感じだよ。』
と、感想を漏らしていた。

康平と健太は、何て答えていいか分からなかつた。

かろうじて健太が、
『いや、お前も凄いと思うけどね。』
と、答えるだけだった。

2人は、裕也を、別世界の人間のように感じていた。

大会の翌日

大会が終わった翌日、学校は代休で部活も休みだ。

康平は、不安な気持ちになつていた。

裕也のようじに、勇気をもつて戦える自信はない。

そして、黒木琢磨のようじに上手くなる自信はもつとない。

気分転換でもしようとしたが、暗い気持ちだったせいか、何も思い付かず、仕方なく、期末テストに向けて勉強する事にした。

家の近所の図書館が休みだったので、永山高校の近くの図書館へ行つた。

まず、前回のテストで悪かつた数学に取り掛かった。

氣分が乗らない時に、苦手教科に取り組むのは、自殺行為である。

勉強を始めて20分、頭の回路が停止してきた。

図書館の中を散歩する。

歴史のマンガ本が置いてある棚を見つけた。

自然に手が伸び、そこで立ち読みする。

大して面白くないマンガだが、お堅い本達が多い図書館では、貴重な存在らしく、結構使い込まれている。

一冊読み終えた後、テスト勉強に来た目的を思い出して、机に戻った。

戻つて勉強を再開した途端に、再び脳が緊急停止した。

机に戻つた義理を果たすかのように、問題を2問解き（正解かどうかは不明）、またマンガを読みに行く。

別の一冊を完全に読み終え、

（何やつてるんだ俺！）

と、自分に呆れながら机に戻ろうとした時、康平の席に誰か座つていた。

『な～にやつてんのかな君は～！』

一瞬ギクリとしたが、康平は、声を聞いてすぐに誰か気付いた。

山口亜樹だった。

今日は、学校の制服ではなく、ジーンズに紺のTシャツだった。

地味な服装だが、鼻筋がスーっと通つた少し派手な顔立ちと、長身でスラッとした体格のせいか、地味な印象はない。

康平

『亞樹こじ何しに来たんだんだよ?』

亞樹

『勉強に決まつているでょう。』

それにはたしなンチ、この近くなんだ。』

康平

『へえ、そつなんだ!』

亞樹

『たしか君は電車通学だよね。』

わざわざこじまで、何しに來たのかな?』

康平

『べ、勉強に決まつてんじやん。』

亞樹

『またまた、こじ冗談を。こじへマンガを読みに來たんでしょう?』

康平

『い、一応数学もせつてるぜ。』

亞樹

『またドモツてる(笑)』

確かに、2問は頑張ったようだけど、解答は残念な結果みたい。』

康平

『.....』

亞樹

『……康平は、少しブルーっぽいから、今勉強してもはかどらないよー』

康平

『……そんな事ないぜ。』

亞樹

『残念ながら、亞樹お姉様は、康平君の事を全てお見通しなの！ そのお姉様に相談する機会なんて、めったにないんだから、話してみなよ。』

康平は、

『高く付きそうだな。』

と、苦笑いしながら言った。

亞樹

『大丈夫、いつもイジッて楽しませてもらってるから（笑）』

曇りのち晴れ

2人は、会話ができそうなロビーへ向かつた。

そこには、ジュースの自販機があり、康平は、相談料でも払うかの
ように、1本亜樹にオゴつた。

大人っぽい亜樹も、月の小遣いをやりくりする高校生である。
素直に喜んだ。

飲みながら、康平は亜樹にブルーになつた訳を話す。

将来、同じ階級で戦うかも知れない、勇敢で強い友達がいる事。

同じ学年なのに、桁違いに強い奴がいる事。

来年の今頃は試合に出るのだが、自分は戦えるか不安な事。

彼女が笑いもせず、真面目な態度で聴いてくれるせいか、康平は、
ジュースを飲むのを忘れて話していた。

自分の事ばかりを話している康平は、妙な罪悪感を感じ、

『ワリイな。亜樹には関係ない事ばかりなのにな。』

苦笑しながら言った。

亜樹

『気付いてくれた?
ウソだよ（笑）！』

続けて亜樹が話す。

『ゴメンね！

相談にのるつて言つたけど、何も出来ないみたい。』

康平

『いや、亜樹に話しているうちに、まだボクシング始めたばかりなのに、悩んでいるのがアホらしくなつてきたよ。』

亜樹

『じゃあ、ジュース1本分の貢献はした訳だ（笑）。
でも、友達と試合したら殴れるの？』

康平

『わかんねえ。なるべく試合はしたくないな。』

亜樹

『君は、ひどが良さそだから心配だね（笑）』

康平

『俺より亜樹の方が、ボクシングに向いているよ。
言葉の暴力の攻撃的センスは、大したものだぜ（笑）』

亜樹

『ひつどいわね！

でもあたしは、攻撃して欲しそうな人にしか攻撃しないわよ（笑）』

康平

『かなわねーよ（笑）』

ところで亜樹は、期末テストまで、1ヶ月近くあるのに勉強してんの？』

亜樹

『あたし、家に近いって理由だけで高校選んだの。』

入学したら、急にいい大学に行きたくなっちゃったのよね。』

康平

『大学行って、何すんのさ？』

亜樹

『まだ漠然としてるけどね。話は変わるけど、康平はいつもどおりの図書館にいるの？』

康平

『下田駅から近くの図書館だよ！』

あそこは家の近所だし、健太っていうダチと勉強してるよ。』

亜樹

『この間、クラスに来た口でしょ。2人いたけど。』

康平

『田ツキが悪くない方の奴だよ（笑）』

亜樹

『テンション高そうね。』

康平

—

『あれはあれで、いいとこあつからなー。』

亞樹

『そろそろ勉強再開しようか。

くれぐれも、マンガで歴史の勉強しないよ!』(笑)

2人は、ジュースを飲み干して、戻っていった。

前後左右の動き

大会が終わって2日後から、1年生達は練習を始めた。

試合をした先輩達は、もう3日休む予定だ。

梅田は、梅田先生だけが練習に来ている。

いつものメニューをしていたが、サンドバッグ打ちへ移ろうとした時、いつもと違う事が起きた。

突然梅田先生が、竹刀を壁際に置き、サングラスを外したのだ。

そして、

『有馬、リングに上がれ。

他の奴は、サンドバッグを打たないで、シャドウを続けていろ。』

と、ミットをはめながらリングに上がった。

有馬もリングに上がったが、少し緊張しているようだ。

開始のブザーが鳴つても、先生はミットを構えない。

梅田先生

『いいか、まず俺との距離を一定に保て。
俺が動いたら、お前も動くんだ。』

そう言いながら、先生が下がる。

有馬が前に出る。

梅田先生

『ダメだダメだ。』

いいかお前ら！

前に行く時は、前足はつま先から着地しろ。そしてベタ足になる。例外もあるが、今は基本の段階だ。

つま先からの着地を徹底しろ。』

他の奴らも真似をする。

終了ブザーまで繰り返させる。

次のラウンド、今度は先生が前に出る。

有馬が下がったが、ここでまた一言！

『下がる時は、一步で大きく下がれ。

その後は、すぐにパンチ打てる体勢を作る。

他の奴もやってみろ。』

全員このラウンドは、前に出たり、後ろに下がったりを繰り返す。

3ラウンド目は、先生に合わせて、左右に動く。

これは、最初の頃に習っていたので、右へ動きたい時は右足から、左へいく時は左足から踏み出していた為、先生は何も言つてこない。

4ラウンド目は、前後左右をミックスして行った。

その後、他の3人も交代でリングに上がり、先生に合わせて動く練習を2ラウンドずつやった。

こうして、ミットをはめた先生が、パンチを一発も打たせない奇妙な状態が、10ラウンド続いた。

梅田先生

『お前ら、今までのメニューの構えだけのラウンドを、今やった動きをする事に変える。ただし、6・4のバランスは徹底しろ。いいな?』

『はい。』

実戦的なパンチ

梅田先生の話は、ここで終わらない。

『お前ら今からミット打ちだ。

もう一度有馬からリングに上がれ。』

問答無用とばかりに、有馬を呼ぶ。

そして先生は、ミットのルールを説明した。

『片手で構えたら、ジャブだ。それは、右手も左手も関係ない。

両手で構えたら、ワンツーだ。

両手を重ねて構えたら、後ろの手のストレートだ。

やつてみる。』

先生が、ゆっくり右手で構える。

有馬は、オーソドックス（右構え）なので、左ジャブを打った。

今度は先生が、両手で構える。

パパーン！

と、ワンツーの当たる音がする。

そして、両手を重ねて構えた先生に、有馬の右ストレートが飛ぶ。

ミシトの構えに反応して打つので、先生は言葉は何もない。

無言のミシトが一ラウンド続いた。

次のラウンドの開始前、先生が口を開く。

『次も、ルールは同じだが、空振りさせる。だが、たまに当たるかも知れんぞ。』

開始のブザーが鳴り、パンチの音も出ない、更に静かなミシト打ちが始まった。

有馬は、構えた所に打つのだが、先生が当たる瞬間にミシトの位置をずらすので、パンチは虚しく空を切る。

有馬は、パンチをほとんど外され、軽く打ちはじめた。

先生がパンチをミシトで受けける。軽いパンチなので、湿氣た音がある。

『気の抜けたパンチを打つんじゃねえ（怒）』

有馬は、先生にミシトで頭を叩かれた。

スパーク！

このラウンド、一番いい音が出た。

ブザーが鳴り、空振りするのに、強く打たなければならぬといつゝ、
拷問のようなラウンドが終わった。

梅田先生

『有馬、もう一ラウンドだ!』

有馬は疲れた様子だが、また頭を叩かれたくないので、空振りする
為に強いパンチを打つ。

3ラウンド目、3分の1以上パンチは当たったが、終了のブザーが
鳴つて時、有馬は肩で息をしていた。

他の3人も、同じよつこ3ラウンドずつドリフト打ちをやつた。

そして、白鳥と康平が一発ずつ、健太は一発、先生からドリフトで頭
を叩かれ、快音を響かせていた。

全員、身体よりも、精神的な疲労で参つてゐるようだつた。

合計12ラウンド、休憩なしに全員の相手をしていた梅田先生は、
平然として言つた。

『相手と戦う時は、空振りも多い。

空振りしてもいいよつて、強く打つのが、実戦的なパンチだ。
わかつたか?』

『ハイー!』

その後の練習は、筋トレと並んでシャドウ、柔軟体操となり、
最後まで部活が終わった。

ブロックキング

先輩達が練習を再開するまで、次の日も康平達は、梅田先生から集中的にパンチを受けていた。

この日は、初めてティフェンスを習つた。

それは、ブロックキングだ。

文字通り、相手のパンチをブロックして防ぐ防御である。

一見地味なティフェンスで簡単なようだが、梅田先生からの注文は多い。

『ただガードを上げるのはブロックじゃない?』

『手首を少し曲げて、拳を額につける。そうすれば、顔に衝撃が来ないぞ!』

『ブロックする時は、もつと首を引っ込めろ。打たれる面を小さくするんだ。』

その後、昨日のように空振りミットが始まつた。

少し違うのは、先生がミットでパンチを打つてくる事だ。

しかし、パンチと呼べる程のスピードはなく、1年生達が簡単にブロック出来るように、ゆっくり打つ。

ただ先生は、少し押すように打つてくるので、いい加減なガードだ

と、壊されてしまつ。

その時は、目にも止まらね早さで、選手の頭をミットで叩く。痛くはないが、ミット特有のいい音がする。

スパーーン！

『腕だけでブロックするんじゃねえ（怒）

パンチを受ける瞬間、腰を下に押し付けながら、体全体でブロックする意識を持て！』

この日は、康平から始まつたミット打ちだったが、5ラウンドで終わつた。

その後、康平は、両手をリングのロープに掛けて、肩で息をしながらグッタリしていた。

『疲れた態度を出すんじゃないねえ（怒）』

梅田先生の罵声が飛ぶ。
続けて、全員に怒鳴る。

『お前らも練習中は、疲れた態度をするんじゃないぞ。
ボクシングは、誰も助けてくれる奴はいねえスポーツだ。

練習中は、全てヤセ我慢しろ！』

康平以外の3人も、急に背筋が伸び、大きく開いた口は、真一文字に綴じた。

その後、3人の1年生は各5ラウンドずつ、梅田先生は、計15ラウンドのヤセ我慢をする事になる。

全ての練習が終わり、帰る前に、白鳥が先生に質問した。

練習では鬼のような先生も、そうでない時は、普通の怖い先生になるので、少し勇気を出せば、1年全員質問出来るようになっていた。

白鳥

『先生、前進する時は、何故つま先から着地するんですか?』

梅田先生

『それは、踵から着地した場合は、前足の位置が不安定になるからだ。』

すると、ストレート系のパンチが打ちにくい。今のお前らのバランスは安定していないから、解らんかも知れんが、今は俺達を信じて言われた通りにしろ。』

白鳥

『はい、わかりました。』

普段自分からは、ほとんど話さない白鳥が、質問とはいえ、自分から話すのは珍しい。

この前の大会で、黒木を見て、危機感を持ったのであるうか?

梅田先生は、最後に1年全員に話す。

『お前ら、強くなりたければ、朝走つてみろ。
まだ全員下半身が弱い。
ゆっくりでもいいし、短い距離でもいいから、毎朝走り続けたら、
必ず強くなる。』

但し、自分が走っている事は誰にも言つくな!』

健太
『誰にも……ですか?』

梅田先生

『そうだ!……まあ、1人位ならいいだろ?。
今まで、自分がやつた事をベラベラ喋る奴で、強くなつたのはいなかつたからな。』

有馬

『俺達、黒木や坂田みたいな奴に勝てますか?』

梅田先生

『それは、解らん!』

奴らも、練習してゐからな。

頑張つても、必ず勝てるとは限らないのが勝負の世界だ。

但し、今までは、勝てん。

走るかどうかは、お前らが決める事だ。』

1年全員は、

『……練習有難うございました。』
と挨拶をし、それぞれ帰つていった。

ジョギング

家に帰った康平は、すぐに部屋に戻り、目覚まし時計のアラームを、朝5時にセットした。

ただ、走るかどうかは自分でも決めかねていた。

そして夕食の時、母親に頼んで日覚まし時計を1個借りて、そのアラームは6時にセットした。

23時頃、康平はなかなか眠れず、明日の朝の事は、どうでもよくなっていた。

(朝、5時に起きていたら走ろう。)

朝5時、康平は、比較的大きな日覚ましのアラームで目が覚めてしまった。

梅田先生が、走るのは、ゆっくりでも短くてもいいような話をしていたので、康平は軽いジョギングを始める事にした。

家から東は、健太の家の方角で、北は裕也の家の方角だった。

康平は、ゆっくり走っているのを、誰にも見られたくないの、南西の方角に向かって走り始めた。

6月上旬の今は、朝5時でも明るい。

新聞配達でバイクに乗っている人。

朝の散歩をするお年寄り。

見るからに、健康の目的で走つていそうなオジサン。

擦れ違う人は少なく、通学時の、せわしい感じはない。街全体がノドかなオーラを発している。

3キロ程度のジョギングだつたが、朝走るなど、初めての事だった
ので、康平は、意外な程疲労を感じていた。

家に戻った後、急いでシャワーを浴び、朝食・歯磨き・今日使う教科書の入れ替え等、いつもの通学前のノルマをこなしていく。

家から駅に向かう途中、健太と出くわした。

お互ひ、《走る》という単語は避けながら、話をする。

2人とも、今まで隠し事なしでの付き合いだった為、微妙に何処か
ぎこちない。

健太

『俺さあ、……今気になつてゐ「がいてさあ……』

康平

『えつー!』

健太

『内海綾香つてコなんだけどな。

同じクラスの奴で、那奈に似て、結構可愛いんだ。』

康平

『那奈の事は、もういいんか?』

健太

『那奈には、裕也がお似合いだよ。…2人とも、性格いいしな。』

健太も、那奈の事は諦めているらしい。

康平

『お前は、俺より面白いし明るいムードを作れるから、お前次第で、うまくいくんじやねえの?』

と、無責任に言つたが、康平は、健太の欠点を知つていた。

どうでもいいことは、器用に上手くこなせるが、肝心な事は消極的になつてしまふのだ。

その事は、誰よりも、健太自身が知つている。

康平も、健太の援護にまわりたいが、女子のネットワークには浅しく、康平自身も女子に勇猛果敢なタイプではないので、見守つてやるしか出来ない分野だ。

健太は、康平の表情を見て、故意に話題を変えた。

『康平の1時間目は、何するんだ?』

康平

『体育だよ。……!』

康平は、今日の朝から走った事を、完璧に後悔した。

この日の体育は、タイムを計る長距離走だったからだ。

恥ずかしい練習

夕方の部活。

先輩達は、右手を骨折した清水先輩を除いて、予定より1日早く練習に戻ってきた。

清水先輩以外は、誰も大したダメージはないらしい。

先輩達は、次のインターハイ地方大会や、国体県予選に向けて練習をしたいらしかった。

どこの部活でもそつだが、試合に出る選手の練習が最優先される。

ボクシング部も例外ではなく、先輩達が休みの間、前後左右の動きを習つた1年生達は、リングを使えず、他の1年の足を踏まないよう、気を使って練習していた。

康平達は、仕方がないと思いながらも、練習場を狭く感じていた。

この練習場は、梅田先生がこの学校に赴任してから、無理やり増設してもらつたもので、既存の建物の間に、プレハブ状の小さな建物が、割り込んでいる感じだ。

今日は、梅田先生の他に飯島先生も練習に来ていた。2人の先生は何やら相談していたが、1年生全員が呼ばれた。

梅田先生

『お前らは、今日から違う所で練習をする。俺に着いて来い。』

先生は竹刀を置いて、歩いて行く。

着いた先は、第二体育館だった。

この学校には、2つの体育館があり、第一体育館は普段体育に使われ、ほとんどの部活もそこで行われている。

第二体育館は、第一体育館の半分位の大きさで、授業ではほとんど使われず、放課後だけ女子バスケ部専用の練習場所になっていた。その中は、バスケをするには狭く、ボクシングをするには広すぎるという、中途半端な空きスペースがあった。

場所も、ボクシング練習場から20メートル位しか離れていない。

梅田先生

『お前らは、ここで交代で練習に来る。』

続けて

『まず、有馬と白鳥はここに残れ。』

片桐と高田は、練習場で練習している。

有馬はミットが終わったら、片桐を呼びに行け。
判つたな!』

『ハイ!』

康平と健太は、練習場に戻つていった。

戻つた2人は練習を再開したが、4人の時より、場所に余裕ができる、動き易くなつた。

4ラウンドを過ぎたら、有馬が戻ってきた。

有馬

『健太、次はお前だ。頑張れよ!』

意味深な一言を発して、有馬は健太と交代した。

健太は、ミット打ちがある為、一組のグローブを抱えて走つて行った。

更に4ラウンドが経つと、白鳥が康平と交代しに來た。

白鳥は何も言わぬが、元々赤い顔が、更に赤くなつて息を切らしている為、大変そうなのが康平にも判つた。

逃げる訳にもいかず、腹を括つてグローブを手にし、第一体育館へ向かつた。

そこに着くと、すぐにストップウォッチを渡される。

体育館には、ボクシング用のブザーが無いので、康平が、シャドウをしながらタイムキーパーも兼用するとなつ事だつた。

休憩時間の一分が過ぎたので、康平はブザーの変わりに声を出す。

『はじめー!』

康平は、シャドウをしながら健太の様子を見る。

昨日と同じようなミットだが、パンチを打つテンポが早い。
昨日の倍位、パンチの数を出している

そして、ブロックさせる為に打つ先生のパンチが速くなっている。

昨日と全く同じ所もあつた。

それは、雑なブロックだつたり、先生が構えても、反応が鈍い時は、
先生のミット攻撃が、容赦なく頭に襲つてくる事だ。

スパーーン!

『教わった通りにブロックしろ?』

『ほーっとしてんじゃねえ(怒)』

ミットの快音と先生の罵声が体育館中に響き渡る。

健太のミット打ちが終わり、康平の番になつたが、彼もまた、先生
のミット攻撃と罵声にまみれた4ラウンドになつた。

今日、ボクシング部の一年生達は、女子と同じ空間で、練習出来る

悦びを味わうどころか、ミットで散々頭を叩かれ、罵声を浴び続ける恥ずかしい練習となつた。

居眠り

ジョギングを始めた康平だったが、まだ毎日やるとは決心していない。

但し、ルールは2つ決めていた。

目覚ましも2つセッターし、1回目のアラーム（5時）で起きれば走る。

雨の日は、走らない。

他人より、これといって秀でたものがない康平だったが、体だけは丈夫で、5時には目を覚ました。

昔から康平は、天気運が悪かった。願う方の逆の天気になってしまふ。

残念ながら、連日晴れが続いていた。

仕方なく康平は、連日走ることになる。

梅雨全線も、今年は横着しているのか、なかなかやつて来ない。

10日程ジョギングが続いたが、さすがに康平も疲れを感じてきた。金曜日の6時間目、担当の先生が休みの為、代わりに梅田先生が教室に入ってきた。

いつも以上に、真剣に授業を聴いていた康平だったが

先生が普通の格好で部活の時より優しく教える事。

苦手な数学である事。

ジョギングの疲れが溜まっている事。

など、色々な要素が絡み合って、ついウトウト睡ってしまった。

康平は、ふと、頬にザラザラした感触に目が覚めた。

梅田先生が、康平の頬に数学の教科書を当てていたのだ。

ハツと我に返った康平は、体を硬直させて下を向く。

梅田先生

『俺の授業で寝るたあ、いい度胸だなあ……おい』

そして、ミットで叩かれるように、教科書で頭を叩かれる。

バーン！

凄い音が、教室中に鳴り響く。

しかしその後、何事もなかつたように、授業は進められた。

放課後、亜樹が康平に話しかける。

『悲惨だよねえ！部活でも叩かれて、授業でも叩かれて（笑）』

康平

『え、何で知つてんの？』

亜樹

『あたしの友達、部活でバスケやつてるから、たまにバスケの練習を見に行つてるんだ。』

康平

『ゲツ！亜樹には恥ずかしいことばつか見せてんジヤン。』

亜樹

『そんな事はないよ（笑）』

亜樹は話を続ける。

『私、中学2年でバスケ辞めたけど、部活自体は楽しかったのよねえ。』

今は、自分で決めた事だけじ、勉強漬けでしょ！
気が滅入った時は、バスケ部の練習を見て、頭の中で青春を謳歌させてるつて訳。』

更に亜樹は話す。

『それでも、少し寂しい気持ちにはなるよね。』

そんな時、君達が梅田先生にシゴかれている所を見たんだ。』

康平

『俺達、情けなかつたろ。』

亜樹

『そんな事ないよ。逆に凄い勇気を貰つたんだ!』

康平

『ウッソでえ。』

亜樹

『ホントだよ!』

テスト休みも貰えず、毎日あんなに怒られながら、頭を叩かれて、私より灰色な青春をおくつている人もいるんだな……て思つたらまた、勉強を頑張る気になつたのみね(笑)』

康平

『それは、よおじやんしたねえ(苦笑)』

亜樹

『テスト休みが無いっていえば、君、今回の期末ヤバくない? この1週間、授業中眠つててる時多しよ』

『それはまずいかも……』

さすがに康平も、その点は素直に認めた。

亜樹

『だつたら土日は、じつちの図書館へ来なよ。』

康平が寝てた時ノートも貸してあげるからさあ。』

康平

『何か悪いなあ。亜樹には助けて貰つてばかりで…』

亜樹

『いやいや、そんな事は無いですわよ（笑）

君達のお陰で、勉強がハカラドつてますからね。』

康平

『俺達の、身を削ったパフォーマンスですか？』

亜樹

『……明日、友達も図書館に来るんだけど……いいかな？』

康平

『別にいいよ。じつちが世話になる方だしさ（笑）

俺の方も、友達呼びたいんだけど……いい？』

亜樹

『多分、この前いた健太君ね。

あたし、テンション高い口つて得意じゃないんだけど……ま、いつかあ。

彼にも勇気を貰つている事になるんだろう。』

康平

『ワリイな。明日、灰色の青春をおへつてこる者ビツヒで来るから、
ヨロシク頼むよ。』

亞樹

『ちよつとーー！あたしの言った事を根に持つてない』（笑）』

土曜日の練習

土曜日、今日も早朝に康平は、ジョギングをする。

ボクサーが朝走る事を、ロードワークと呼んでいるが、康平の場合には、まだジョギングのレベルだった。

それでも、康平には辛いトレーニングだ。

しかし、今日は学校が休みで、部活は9時からだ。

時間的に余裕があるので、片道の距離をもう1キロ増やしてみた。

往復5キロになり、かなり疲れたが、自分は頑張っているという満足感が少し沸いた。

部活へ向かう為、駅に着いた康平は、健太を待っていた。

昨日電話で、部活の帰りに、永山高校の近くの図書館で勉強しようと約束した。

電話越しでは、乗り気でなかつたようだったので、康平は心配になりました、もう一度朝に電話して、駅で待ち合わせる事にしたのだ。

健太が少し遅れてやつて來た。

部活用のバッグがヤケに膨らんでるので、勉強する道具は持ってきたようだ。

電車の中で2人は話す。

健太

『あまり、気が乗らねえんだけど……』

康平

『まあそういうなつて!』

健太

『一緒に勉強するのは、あの山口亜樹つて奴だろ。美人だけど、高飛車そうで苦手なんだよな。』

健太と亜樹は、テレパシーの能力があるのかは解らないが、お互いを苦手としているようだ。

康平

『大丈夫だつて!あいつ見た目よりいい奴だよ。それに、もう一人来るつて言つてたしさ。』

健太

『そもそもお前が何で、山口…つて奴と仲いいんだ?あの入学早々ビンタした奴だろう。もしかして、お前ら付き合つてる?』

康平

『あんまり亜樹の悪口は言わないでくれ。結構あいつに助けられてんだ。』

あんな美人と付き合つてみたい気持ちもあるが、正直自分でも解らない。

けど、大事な友達の1人だよ。』

自分では、亜樹に言いたい事を言つている康平だが、他人に対しては庇つようだ。

健太

『まあ、お前の友達は俺の友達みたいなもんだからな。』

幼稚園から親友の2人は、恥ずかしい事も、歯が浮くような本音も共に言える貴重な間柄だった。

部活が始まった。

康平は、体に違和感を覚えた。

体に力感がない。いつもより、パンチが遅い。そして何より体がダルい。

1年のシャドウを見ていた梅田先生は、わざとらしい独り言をいつた。

『俺が選手だつたら、午前中に練習がある土曜日の朝に、走ることはないなあ。

毎日走れと言われても、週に1日は休むなあ。』

走っている事を、誰にも言ひうなと言つた手前、先生なりの助け船を出しているようだ。

この日、1年生全員は、ゆっくりシャドウをメインに軽めの練習をする事になった。

こうして、いつになく平和な練習が終わり、康平と健太は、永山高校の近くの図書館へ向かった。

切ない想い

図書館に着いた2人は、4人で勉強出来そうな席を探していた。

すると、背の高い女がこっちに向かつて歩いて来た。

『康平、こっちだよ。安心して、いい場所とつてるから。』

山口亜樹である。

今日は、この前と違つて学校の制服である。

案内された場所へ行くと、ずっと日陰になりそうな場所で、勉強が進みそうだ。

健太

『こんちは。初めまして…かな?』

亜樹

『確かに、うちの教室に2人で来てたよね。』

健太

『じゃあ、あの時康平の前の席にいた人だ。』

亜樹

『そうそう、あたしは山口亜樹。これからは亜樹って呼んでいいよ。』

『

健太

『俺は片桐健太。俺の事も健太でいいよ。

そつ言えば、康平が世話になつているつて聞いたけど?』

亜樹

『そう本人から聞いてるんだつたら、康平も自覚があるつてことね（笑）』

2人は、それぞれが苦手と、康平には言つておきながら、最初の会話はうまくいったようだ。

康平には不本意だったが……

康平

『オイオイお前ら、俺をダシにして場を和ますんじゃねえよ！あと、もう一人の口は？』

亜樹

『ゴメンね！』

まだ彼女は部活で来れないみたいだから、3人で始めようか！』

長方形の机に4つの椅子があり、康平と健太が並んで座り、康平の正面に亜樹が座った。

康平が苦手な数学から始めようとした時、亜樹が口をだす。

『君、今数学やるのは、やめた方がいいよ。』

康平

『何でだよ?』

亜樹

『最初から苦手な数学に手を出すると、またマンガに逃避するよ……たぶん。』

亜樹が、からかっている様子でもなく、神妙な顔で話すので、康平は、不思議と納得した。

そして、素直に別の科目から始めた。

40分程、勉強したであろうか。

健太

『ゴメン。ちょっとトイレ行ってくる。』

健太は、大して尿意もないのに席を外し、トイレに向かつた。

そして、ズボンも脱がずに洋式トイレに座り、想いに耽つていた。

康平と幼稚園から友達だった健太から見て、亜樹は、康平にできた初めての本当の女友達である。

健太は、頭では祝福しているが、気持ちは切なくなっていた。

しばらく葛藤していたが、自分が部外者にならないように、気を遣つてくれる2人にむくいる為、今日は最後まで勉強しようと腹を決めた健太だった。

そして、涙が出た訳でもないが、よく顔を洗つてトイレを出た。

なにくわぬ表情をしながら席に戻つた健太だったが、そこに、知つた顔の女の子がいた。

健太の欠点

健太が戻った席の向かい側には、内海綾香が座っていた。

健太

『…よつ…』

綾香

『部活、長引いちやつてね。』

亜樹

『知りあい?』

綾香

『同じクラスなんだ。』

健太

『……』

綾香

『あれ、私の人違いだっけ(笑)』

健太

『い、いや…そんな事ないよ。同じクラスだよ。』

康平

『そなんだ。』

康平は、健太がトイレに行っている間、亜樹から綾香を紹介されたいた。

名前を聞いた時、健太が気になつてゐる「だとすぐに気付いたが、康平は素知らぬ顔を演じていた。

綾香は、茶色が目立つ瞳で、ワインシャツと変わらない位肌の色が白い。

ハーフだと言われれば、納得してしまった。そんな感じだ。

亜樹

『綾香には悪いけど、私達、1時間近く勉強したからロビーで休憩したいけど、いい?』

綾香

『私も賛成だよ!部活終わって御飯食べたから、少し休みたい気分なんだ(笑)』

康平

『俺達も、勉強の休憩だつたら大賛成だよ。
なあ健太!』

健太

『……ああ、そうだな。』

亜樹

『健太君はともかく、君は頑張つてもいいよ(笑)』

康平

『あいかわらず、口が悪いな。まあ、言つと思つてたから、ショックはねえけどな。』

ロビーへ向かいながら、康平は、健太の欠点が出ている事に気付いていた。

健太は、大事な話をする時や、好きな口が近くにいる時は、テンパつてしまい、極端に口数が減る。

根っからの明るさと、周りを和ませる健太の良さが、すべて封印されてしまう。

今も、その泥沼に墮ちそうな感じだ。

健太自身も、自分を歯痒く感じているのは、康平にはよく解った。

ロビーに着いて、4人は、ちょっと柔らか過ぎるソファーに腰掛けた。

綾香

『健太君と康平君は、部活休みだったの?』

康平

『え、何で?』

綾香

『だつて、今日体育館に来なかつたよね。』

健太と康平

『…………！』

亞樹

『綾香はバスケ部なの。』

綾香

『気が付かなかつた？』

亞樹

『先生が恐くて、そんな余裕なんてないよね（笑）』

康平

『アノ～、勝手にフォローしないでくれる？
否定はしないけど（苦笑）』

綾香

『こんな事言っちゃつていいのかな？
うちの部に、4人の内、誰が一番頭を叩かれたか、数える人がい
るのよ。』

康平

『え？ まじで。』

綾香

『趣味悪いでしょ（笑）。』

で、1番叩かれているのは、ほら誰だけ、テスト1番だった口…

……』

健太

『白鳥だよ。』

綾香

『そう、その白鳥君ね。』

彼、あまり器用じやなさそうで、気の毒な位、叩かれてたのよね。』

健太

『でも、あいつなりに頑張つてるからな。』

康平

『そうそいづ。』

綾香

『2人共、庇つている余裕あんのかなあ（笑）
この中に、惜しくも2位の人がいるんだけど……』

康平

『多分、俺だな。』

器用な方じやないからな』

綾香

『残念でした。健太君なのよね。
でも、白鳥君とは、叩かれる場面が違うみたい。』

康平

『指摘される欠点が違うって事?』

綾香

『そうじやなくて。そのへ何て言うのかなあ、質問するタイミング

が悪くて叩かれてんのよねえ（笑）。

でも、本人が納得できなくて、叩かれながらも質問すると、その内容でまた叩かれてる感じだったよ。』

康平

『てめえ、今そんな事聞いてる場合じゃねえだら……って感じで怒られてんのかな？』

綾香

『そんな感じ（笑）』

康平

『お前、納得できないと、前に進めない所があつからね。』

健太

『自分じゃワカンねえけどな。』

綾香

『でも、健太君をとつても氣に入つてる先輩がいるのよね。いくら叩かれても、腐らないで、真面目な顔で質問してる所が面白いって。』

『マジで！ 健太やるジャン。』

康平は、健太は複雑な気持ちだつと思いながらも、そう言った。

綾香

『残念でした。その先輩は彼氏がいるって言つてた。あと、白鳥君は、部を辞めるんじゃないかなって。』

私から見ても、暗い感じだしね。』

健太

『でもあいつ、前よりヤル氣出てるよな。』

康平

『そりそり、それに健太の冗談で、微妙に笑うんだぜ。』

綾香

『それって、見てみたいかも。』

『私抜きで盛り上がりでいる所を邪魔して悪いんだけど、そもそも戻らないと、怒られるよ。』

亞樹が不機嫌なフリをして言った。

綾香

『ゴメンー。亞樹さんには、ホント感謝してるから。』

亞樹は中学の時も、トップクラスの成績だったのよね。』

亞樹

『おだてても無駄よ。こここの図書館のオバサン、怒ると怖いんだから。さ、戻るー。』

他の3人は、柔らか過ぎるソファーから重い腰をあげ、亞樹の後ろ

にひいてこう
た。

亜樹のやせこじれ

図書館での勉強は、思いの外進んでいた。

健太には気を遣いながら、綾香にはフレンドリーに、そして、康平には上から目線で教える亜樹の存在が大きいようだ。

これは、結果論かも知れないが、健太がテンパっているので、いつも高いテンションがブランドされているお陰かも知れない。

そのブランドも、時間が経つにつれて、少し消えているようだ。

夕方になり、図書館の閉館間際、4人はロビーで話し込んでいた。

綾香

『どう、亜樹つて教え方上手くない？

あたし、テスト前にはいつも助けられてんのよね。』

康平

『確かに上手いかも知れないけど、俺はその度に屈折しそうだよ（苦笑）』

亜樹

『なんか聞こえるわね。』

健太

『2人とも、俺達みたいな幼なじみ？』

綾香

『あたしと亜樹は、中学の時からね。
でも、亜樹が男子と一緒に勉強なんて、初めてなんじやない?』

亜樹

『あれ、健太君が最初だつけ?』

綾香

『あたしは、康平君も含めて言つてるんだけどね(笑)
あ、もう閉館ね。』

今日は、楽しかったよ。』

健太

『先生のおかげで、勉強も進んだしな(笑)』

帰りの電車で、康平が口を開く。

『まさか、お前の気になつてる口が来るなんてな。』

健太

『それもビックリしたけど、亜樹つて外見と違つて結構いい奴なんだな。』

康平

『そつか?俺にはキツイけどな(苦笑)』

健太

『それは、お前に心を開いてる……
だったら、それはそれで大変そうだな(笑)』

康平が故意に話題を変える。

『それはそうと、明日10時での図書館に行くけど、お前も来るんだろう?』

健太

『明日は辞めとくよ。

またお前らに、気を遣わせそうだしな。』

康平

『あの内海も来るかもしんねーぜ。』

健太

『また、テンパるだらうから、いいよ。
でも、お前がフォローしてくれるのは嬉しかったけど、康平に続けて借りを作りたくねえしな。』

康平

『何の事だかワカンねえけど、まあ明日、図書館に着いたら、健太
は用事で来れないって伝えとくよ。』

健太

『亞樹も、俺が部外者にならないように気を遣つてたからな。
あつ、この事は言つなよ。』

康平

『言わねえよ。

誰と誰の部外者か!

つて、俺が攻撃されそだしな(笑)』

誰と誰の部外者か!

つて、俺が攻撃されそだしな(笑)』

次の日、図書館へ行つた康平だったが、いたのは亜樹だけだった。

亜樹

『そつか、健太君も来れなかつたのね。
綾香も、今日は用事があるつて。
午後1時までは、ハイペースでいくわよ。』

康平は、こここの図書館へ着た当初の目的である、眠つてしまつた授業のノートの書き写し作業を始めた。

前日は、健太達がいるので、亜樹もノートを貸しにくかつたようだ。

亜樹のノートは、字が綺麗で読みやすく、覚えたい所を簡潔に書いている為、早いペースで書き写しが進む。
10時間分の空白になつていたノートは、午後1時頃には、全て埋まつていた。

ロビーで、遅めの昼食をとり、2人は休憩していた。

康平

『ワリイな。ホント助かつたよ。』

亜樹

『いいよ、私が言い出した事だし。』

康平

『でも、俺がノートを書いていない所に付箋が付いていたけど、俺の前の席なのに、何でわかつてんんだ?』

亜樹

『後ろに田があるなんて、お決まりの文句は言わないけど、君が眠るパターンは、分かっちゃうのよね(笑)』

亜樹は続けて、

『後で君が慌てるのを見たい気持ちもあつたけど、田頃イジらせて貰つてるから、せっぱり助けてあげようつって付箋を貼つてたんだ(笑)』

康平

『いや、ホント助かったよ。ありがとな。』

亜樹

『…何言つてんの、今田の勉強はまだ続くんだから、これから君の大好きな数学をやるからね。』

亜樹は照れを隠すよつこ、急いで学習机に戻つていった。

ついに実戦練習？

期末テスト、康平は、亞樹のおかげで中間テストよりも成績が上がったようだ。

今回も、白鳥が断トツの成績だったが、元々存在感の薄い彼は、前より騒がれなかつたらしい。

その少し後に、今年の国体県予選があつた。

清水先輩は、前の大会で右拳を骨折したので出場できず、今回は、5人の先輩が出場する。

清水先輩が抜けた分、相沢先輩がライト級へ、そして、大崎先輩は何と2階級上のバンタム級に出場した。

この2人は、本来がこの階級らしく、決勝戦まで勝ち残つたが、共に青葉台高校の3年生に敗れていた。

森谷先輩は準決勝で終わつたが、石山、兵藤の2人の先輩は、圧倒的な強さで優勝していた。

ライトフライ級の黒木琢磨も、優勝だった。

裕也は、今の大には何故か出でていない。

大会当日、裕也と話す機会があつた。

詳しい事は、聞けなかつたが、フォーム改造の為らしい。

大会前の梅田先生は、上級生の指導に忙しく、あまり見て貰えなかつた康平達は、ある意味平和な日々を送っていた。

国体予選が終わって5日後、平和な日々に、暗雲が立ちこめる。

梅田先生

『お前ら1年全員、12オンスのグローブ持つて第一体育館に来い。それと、練習用ヘッドギアとマッピ（マウスピースの事）も忘れるな！』

ヘッドギアとは、頭部を保護する為の道具である。また、こここの部は、練習用として薄い試合用ではなく、少し厚いヘッドギアを使っていた。

そしてマウスピースは、10日前から各自用意するよう、先生から言っていた。

1年生達に、緊張が走る。

先輩達が、スパーゲーリング（実戦練習）で使っていたアイテムを、自分達も使うとなると、やはり……

ただ、1つ足りない物があった。

ノーファウルカップである。局部を守る道具だが、スパーキングには欠かせない道具の1つだ。

有馬が質問する。

『先生、カップはいらなんですか?』

梅田先生

『今日は、使わんから不要だ。』

全員、ノーファウルカップを、カップと略して言っている。

先生は、竹刀を持つて第一体育館へ向かう。

康平達は、それぞれ道具を持つて、第一体育館へ着いた。

梅田先生

『全員、ヘッドギアとマッピとグローブを付けろ。』

4人は、慣れない手つきで用意する。

康平と有馬は、緊張していたのか、グローブから先に付けてしまっていた。

梅田先生は、苦笑しながら『アホ！

それじゃあ、ヘッドギア付けらんねえだろ。』
と、言いつつ2人にヘッドギアを付けていた。

こうして、全員用意が出来ていった。

形式練習

梅田先生が、口を開く。

『これから、形式練習を始める。
それは、打つパンチを決めて防御する練習だ。
細かい事は面倒だから、やりながら教える!』

有馬と白鳥、康平と健太がコンビを組まされた。

梅田先生

『高田、ジャブを1発片桐に打つてみろ。

顔だつたらどこでもいいぞ。

それを片桐が防御する。今はブロックして守れ。』

康平と健太の長い付き合いの中で、口ゲンカこそ3ケタを超えるキヤリアだが、殴りあつたケンカは一度もない。

記念すべき（？）初の暴力行為が健太の顔面に飛んでいく。

健太は、力みながらだが、康平の左ジャブをブロックした。

梅田先生

『今度は、片桐が打て。』

2人は、戸惑いながら、お互い前と逆の行為をする。

梅田先生

『それを交互に繰り返す。但し、相手が打つたら、3秒以上間を空けてから打て。わかったな?』

『ハイ!』

4人は、それぞれジャブを打ち、それをブロックする動作を、ぎこちない感じではあるが、それぞれ始めていった。

梅田先生からの、指導の声が飛ぶ。

『白鳥、もう少し離れた場所から打て!』

そして、竹刀を使って白鳥を後ろに下げる。

『片桐、ブロックする時も6・4のバランスを崩すんじゃねえ。』

また竹刀を使って、引き気味だった健太の腰を前に出させる。

『高田、ジャブを打つたらすぐに構えに戻せ!』

パンチを打った後、その拳が下に落ちていた康平は、梅田先生から、胸の高さに竹刀を出され、それにぶつからないように、左ジャブを打たされる。

今まで、ただ似合つてはいるだけで、あまり使われなかつた梅田先生の竹刀は、今回、部員の技術向上の為に、機能的な働きをしていた。たまに別の分野で活躍する時もあるが……

『有馬、てめえ、要領よくすんじゃねえ（怒）』

有馬は、自分が防御の番の時、白鳥が打つ前からブロックの形になつていたようだ。

梅田先生は、それを見逃さず有馬の頭を竹刀で軽く叩く。

この日、1年生達はジャブだけの形式練習をずっと続けていた。

リラックス

第一体育館での形式練習は次の日も続けて行われた。

形式練習の初日こそ、ジャブだけだったが、次の日からは、後ろの手で打つストレートが加わった。

ストレートは、後ろの手で打つ分、体の捻りを使い易く、しかもその手は、利き手だ。

当然、ジャブより威力がある。

顔にもらつたら……。

4人の顔に緊張の色が増していく。

だが、いざ始めてみると、最初から相手が打つてを知っているので、クリーンヒットの場面はなかつた。

しかし、プロックした時の衝撃が大きい為、腰が引け易い。

『おめえら、6・4の重心を崩すな。』

梅田先生は、全員の腰を竹刀で軽く叩く。

1年生達は、相手のパンチ以上に先生が恐いのである。

全身を力ませながら、無理矢理腰を前に出してプロックする。

梅田先生

『そんなに力んだら、パンチが打てねえ。
もつと力を抜け！』

恐怖の中でリラックスするのは、本能に反逆するようなもので、な
かなか出来る事ではない。

何度言つても治らない康平達に、先生は顔を真っ赤にし、ぶちギレ
モードに入ろうとした時、女子バスケ部の方から、ボールが転がつ
てきた。

先生は怒りに集中していて気が付いていない。

バスケ部の1年生達は、梅田先生が恐くて、誰もボールを取りに来
ようとしないようだ。

見かねた、バスケ部顧問の女の先生が、

『梅田先生！ボールを取りに行つていいいですか～』

と、やんわりと声をかける。

梅田先生は、

『あ、どうぞいいですよ』

と、真っ赤な顔のまま笑顔で答えていた。

さすがに梅田先生も、先生同士だと氣を遣つてつだ。

1年生のバスケ部員は、必要以上にオジギをして、ボールを持って行つた。

4人のボクシング部員は、怒りの赤い顔のまま、愛想良く話す梅田先生を、吹き出しそうになる程可笑しかったが、笑える状態ではなかつた。

但し、ほんの少しだがリラックス出来たようだ。

その後、康平達は、ワンツーも含めた形式練習を続けていった。

この日の練習後、梅田先生が1年生達に話す。

『恐怖の中でのコラックスは、難しく、慣れるまで根気強くやるしかないな。』

まるで、自分に言い聞かせて いるようだつた。

保健室で

第一体育館での出張練習。

これは、康平達1年生にとって、精神的な重圧のある場だ。異性への興味が急上昇中の康平達が、多くの女子（バスケ部）の前で、名指しで怒られ、そして叩かれるのだ。

その恥ずかしさは、当人達にとって、どの位であろうか？

梅田先生が、計画的に仕組んだかは分からぬが、1年生達は、

（自分だけは怒られないようにしよう）

と、必死に取り組んだ結果、目に見えて上達しているようだ。

最初の形式練習の時は、魔法のステッキのように、縦横無尽に活躍した先生の竹刀も、夏休み間近になると、先生の体を支える位しか役に立っていない。

梅田先生が、ウザイ程言っていた6・4のバランスも安定し、4人の1年生にも余裕が生まれ始めていた。

余裕が生まれると、油断してしまつのは、人間の救われ難い性である。

休憩中、康平がバスケ部の方に目をやると、内海綾香が目に入った。

健太からは、あの図書館以来何も聞いていないが、気になりだした。

そのうちに、

『はじめ!』

と、梅田先生のゴング代わりの号令が出ていた。

健太のパンチを、作業でもするかのように、ブロックした康平は、顔面に衝撃が走った。

鼻がツーンとして、なみだ目になる。

健太の左ストレートを鼻にもらったようだ。打った健太も驚いていたが

『バカヤロー! 形式練習でボーッとしてる高田がワリイんだ(怒)』

何日か振りに、先生の罵声を浴びた康平だったが、鼻血が止まらない。

健太

『康平、大丈夫か?』

梅田先生

『構うな! 高田、オメエ、保健室寄つてもう帰れ。』

康平は、上を向きながら鼻を摘まむという情けない格好で保健室へ

向かった。

保健室に着いたが、先生はいないようで、鍵がかかっている。

『あれ、康平……君?』

声の方に、視線を向けると、内海綾香が立っていた。

綾香

『あたしも突き指しちゃったのよね。』

あつ、ちょっと待つて、今鍵開けるから。』

綾香は保健委員らしい。

彼女は、自分の突き指の処置を簡単に済ませると、急いで引出しから綿棒をだして持ってきた。

『ワリイな。後は自分でやるからいいよ。』

綾香が、献身的な雰囲気を持つていた為か、康平は、先手を打つて遠慮した。

『ホントに大丈夫?』

私、鼻の掃除やってもいいけど……』

康平の予感は的中していた。彼女は、鼻の掃除までするつもりだったのだ。

綾香の透き通るよつたな白い肌を、自分の鼻血で汚す事は躊躇われるし、何より親友の想い人である。

康平は丁重に、断つた。

康平は鼻血が完全に止まるまで、ベッドに仰向けになつたが、綾香は椅子に座つていた。

康平が尋ねる。

『部活に戻らなくていいの?』

綾香

『あたしの部活は、これでおしまい。
突き指したから、もう帰りなさいって(笑)

康平君は?』

康平

『俺の方も、もう帰れってわ。
言い方は乱暴だけど(笑)』

綾香

『梅ツチ、部活になると鬼だもんね(笑)
あ、そうだ。康平君、駅まで歩くんだよね!
あたしソチ、駅の向こう側だから、途中まで一緒に歩かない?』

『え…あ…うん。いいよ』

思わず返事をしてしまった康平だった。

綾香と亜樹

康平は、困惑していた。

図書館で一度会っただけの綾香と、駅までとはいえ、一緒に帰る事になろうとは……

待ち合わせの校門へ、ほぼ同時に着いた2人は、ゆっくりと駅へ向かう。

綾香

『ショックよね。

今までずっとバスケやってて、突き指なんてなかつたのに…初心者みたい（笑）』

康平

『どの位やつてんの？』

綾香

『そうね、小学校3年から始めているから、今年で8年目ね。』

康平

『へえ、随分続てるね』

綾香

『そんなに熱血でも無いけど（笑）。

あたし、こここの高校選んだのも、亜樹が入るからなのよね。進路を決める理由としては、結構いい加減かも（笑）』

康平

『亜樹は、バスケを途中で辞めたらしいけど、何でそんなに仲いいんだ?』

綾香

『何処まで話していいのかなあ……』

康平君は、亜樹がバスケ部を辞めた理由つて、知ってるの?』

康平

『レギュラー争いしてた先輩の嫌がらせだろ?』

綾香

『そこまでは聞いてたんだ……』

康平君を信用して話すけどそれだけじゃないのよね。実は、亜樹とレギュラー争いしてた先輩とは、そんなに仲が悪くなかったの。』

康平

『え!』

綾香

『その先輩と付き合ってた彼がいて、その人が私にしつこく電話してきたりしてたんだ。』

康平

『マジで』

綾香

『私、どうしたらいいか分かなくて、思い切って先輩に相談した

のよ。』

康平

『どうなったの?』

綾香

『逆に私が先輩の嫌がらせを受けるようになってしまったのよ。』

康平

『…………』

綾香

『でも、亜樹がどんな経緯で知ったかしらないけど、私の味方をしてくれて、先輩には正面から文句言つて、その彼氏をビンタまでしちゃつたのよね。』

康平

『…………』

綾香

『亜樹は、その時退部届けを出したんだが、同じ学年では一番上手かつたんだけどね。』

康平

『へえ~』

綾香

『私と亜樹は、それ以来親友になっちゃつたのよ。亜樹がバスケ部にいた時はそれでもなかつたのに(笑)』

綾香が続けて話す。

『亜樹って、外見がお高い雰囲気だから、結構誤解され易いのよね。中学の時も、独りでいる時多かったの。』

康平

『…………』

綾香

『でも、高校に入つて亜樹は康平君と楽しそうに話してるから、私もホッとしているんだ。』

康平

『楽しそうかは分からぬけど、言葉の暴力は振るわれてるよ（苦笑）』

綾香

『それは亜樹が心を開いてるからよ。
あんなに、男の人話し掛ける彼女は、見たことないもの。
そういうえば、期末テストはどうだった？』

康平

『亜樹のノートのおかげで少し成績が上がったよ。』

綾香

『早く亜樹に言つた方がいいよ。
亜樹なりに心配してたよ。表現は屈折してたけど（笑）』

翌日康平は、亜樹に期末テストのお礼を言おうとするが、何かキッカケがないと、面と向かってお礼が言えそうにない。

中間テストの時のように、亜樹が勝手に見るのを期待して、机の上に成績表を置いていた。

亜樹

『何わざとらしく成績表を置いてんの?』

康平

『ん!……あ……亜樹が見たいかと思つてさ。』

亜樹

『結局、どうだつたの?
成績は上がったの?』

康平

『……中間テストの時よつと上がったよ。』

亜樹

『私のノートまで見せてあげたんだから、当たり前でしょー。』

ずっと康平が、成績を教えないで、亜樹は「機嫌斜めのようだ。

本当に亜樹が心を開いているか、疑いたくなる康平だった。

絶望的な夏休み

終業式が終わり、高校生になつて初の夏休みを迎えた1年生達。康平のクラスでも、半分は開放的な顔をしている。

残りの半分は、運動部の奴等だ。
部活がある為、いつも学校に来なければならないので、中途半端な表情だ。

その中に、絶望的な顔をしている人間がいた。
康平である。

前日、梅田先生から夏休みの練習予定を聞かされた。

『朝、ロードワークをする者もいると思つから、うちの部は、毎日午後1時に練習開始だ。』

但し1年生は、上級生と時間をズラしたいから、午後3時に来い。

念のため言つておぐが、休みは日曜日だ。』

そして、残りの半日で青春を謳歌する。

ほとんどの運動部は、夏休みの期間、午前中に練習する。

ボクシング部だけが、午後からの練習のようだ。

しかも、1年生は中途半端な15時からだ。

その時間までは、体力温存の為に、羽目を外せそうにない。

何とも規則正しい夏休みになりそうだった。

ボクシング部の午後からの練習時間は、クラスメートだけでなく、担任も知っているようで、

『お決まりのセリフだが、夏休みは羽目を外し過ぎるなよ。まあ、高田は別だがな（笑）』

珍しく、クラスの奴等から笑いをとっていた。

康平は、……勝手にしろ……とでも言いたげな顔で、頬杖をついていた。

ホームルームが終わり、解散になつた。普通なら、これから部活なのだが、何故か休みだつた。

梅田先生達に仏心が芽生えたのであるつか？

康平は一瞬思つたが、すぐに否定した。

否定する理由が有り過ぎるので、ここでは書かない。

事実、梅田先生は、期末テストで赤点取つた奴等の補修の準備に忙しいらしく、飯島先生は、午後からある友人の結婚式に出る為、急いで帰つたようだ。

永山高校のボクシング部は、先生がいなければ、部活が休みのルールになっていた。

明日から始まる規則正しい生活に、希望を見出だせない康平は、健太や他の友達と遊んで気分転換でもしようと思つていた。

健太の教室へ行こうとしていた康平に、

『康平、ちょっと待つて』

亜樹が呼び止めた。

『どうせ、今から遊びに行こうか考えてんでしょう？
それだったら、少し付き合つてくれないかな？』

康平は、決め付けられたのが悔しかったのか、

『どうしようかなあ』

齒むフリをした。

『悩むんだつたら別にいいよ。

困らせるつもりないし。』

亜樹が、あまりに素つ氣なく囁つので、

『あ、お…俺は大丈夫だよ。』

康平は、慌てて付け加えた。

亜樹

『有難う。じゃあ駅前のデパートに行くからね。』

亜樹は、一歳年下の従弟の誕生日プレゼントで悩んでいたみつだつた。

康平は、即座に新しいゲームソフトを提案したが、亜樹に却下された。

従弟はゲームをしないらしく、バスケをやっていたので、無難にTシャツを買う事にした。

ゲームとマンガが趣味の康平は、真剣に考えたがあまり役に立たず、結局亜樹が一人で決めて買った。

康平

『ゴメンな。全然役に立たなくて……』

『そんな事ないよ。

君も真剣に悩んでくれてたしね。』

亜樹は、本当に嬉しそうだ。

別れ際、康平が口を開く。

『夏休みも、あの図書館にいんの?』

亞樹

『まだ決めてないけど』

康平

『……もし……図書館で会つたら、べ、勉強教えてくれるかな?』

亞樹は、口元を綻ばせながら言った。

『毎日、あそこにあるかは分かんないけど、月曜から土曜日の朝から午後3時あたりには、いるかも知れないよ(笑)』

楽しい未来図？

夏休み初日の中活、今この瞬間、学校の敷地の中で活氣があるのは、ボクシング場だけである。

まあ午前中に、他の部はとっくに練習を終わらせているから、当然と言えば当然なのだが……

今日のキャストは、初の組み合わせだ。

今まで1年生だけが練習する時は、2人の先生の内、片方だけだったのだが、今日は梅田・飯島の両先生が揃っている。

1年生達は、今日の練習がキツくなるだろうと思つていたから、練習前の更衣室では、4人とも少々暗い顔つきだ。

更衣室は、練習が終わった先輩達と、これから練習を始める1年生達が、それぞれ着替えてるので、大混雑だ。

兵藤先輩が、口を開く。

『お前ら、クレエ顔してんなあ（笑）』

健太

『はい。今日は中身の濃い、有意義な練習になりそうなんで……』

兵藤先輩

『ハハハ。確かにそうかもな。』

けど、俺がお前らと同じ一年の時、この時期から部活が面白くなつてきたな。』

石山先輩

『そうそう、俺も夏休み前までは、これを辞めてやろうかって、毎日思つてたけどな（笑）』

兵藤先輩は2年生に訊ぐ。

『お前らも、そうだっけ？』

相沢先輩

『はい。うひうひ、夏休み前までは辛かつたッス。』

大崎先輩

『こいつなんか、毎日退部届けを持つてたんスよ（笑）』

こいつと言われた森谷先輩は、苦笑いしながら話す。

『ルッセーよ。でも夏休みの練習が始まつたら、退部届けは何処にあるか分からなくなつたんですけどね』

石山先輩

『そろそろ梅ツチが沸騰してくるから、お前ら早く着替えろよ（笑）』

先輩達は、1年生が着替え易いよつこ、元々壁際に位置を移してくれた。

『

ボクシング部の先輩達は、みんな優しいし面白い。

その点は、1年生全員が思っていた。

先輩達の半分、否3分の1の優しさが梅田先生にあれば、もう少し民主主義的な部活になっていたであろう。

それで、選手が強くなるかは別問題だが……

康平達が、着替えを終えて練習場に入ると、民主主義の心を忘れた梅田先生が、竹刀を片手にウロウロしていた。

沸騰（怒り）の一歩手前だったようだ。

流石は石山先輩だ。梅田先生に怒られたキャリアはダテではない。

梅田先生

『お前ら、今日から新しいパンチの習得に入るから、覚悟しておけ！』

新しいパンチ

梅田先生が話を続ける。

『夏休み期間中は、ロープ（縄跳び）は無しだ。
まず、シャドー4ラウンドをやれ。』

4人は1週間程前から、練習メニューが変わっている。

変わったのはシャドー・ボクシングなのだが、最初から自由に動いていい事になっている。

足の動きやパンチ、プロッキングを組み合わせてそれぞれ動く。

あまりスピードはないが、腰を反る事と、パンチを打つ際に肩を回す事は強調して言われている。

1年生がシャドーをしている間、梅田・飯島の両先生は、先輩達の指導の後なので、一息入れる感じで談笑している。

4ラウンドのシャドーが終わつた時、再び梅田先生が口を開く。

『お前らは、まだまだ完全ではないが、6・4のバランスとパンチを打つ軸は、少し固まってきた感じだ。
そこで、今日から前の手で打つフックを教える。
片桐は右フック、他の3人は左フックだ。』

全員鏡の前に並べ。』

4人は、全員が映る大きな鏡の前に並ぶ。

梅田先生

『そこで、ストレートを打つた時のポーズを作れ。』

サウスポーの健太は左ストレート、康平達は右ストレートを伸ばす。

梅田先生

『お前ら、その体制のまま腕だけ戻せ。』

4人は上半身を捻った形になっている。

飯島先生

『大雑把だが、これがフックを打つ前の溜めだ。』

梅田先生

『そこから前の手でフックを打つんだが、まだ打つなよ！
手はそのままで、曲がっている前足の膝を、少し伸ばしてみろ。』

言われた通りに全員が膝を伸ばすと、捻った上半身が元に戻っていく。

飯島先生

『フックの溜めを作った時、もつと腰を反って、もう少し後ろ足を伸ばしてみろ。』

指摘された事を意識して、もう一度繰り返すと、4人の上半身は更に勝手に戻っていく。

梅田先生が話す。

『前の手で打つフック……面倒臭えから、今後前の手で打つフックは、単にフックと呼ぶからな。』

更に話を続ける。

『うちの学校のフックは、捻りじゃなく、前の膝を使って打つ。分かつたな。』

健太が質問する。

『先生、捻りで打つ方が、強く打てそうな気がするするんですけど……』

梅田先生は、怒る様子でもなく、説明を拒否する。

『今説明すると長くなるから、説明はしない。追々教えていくから、今は黙って従え。』

健太

『はい、分かりました。』

梅田先生

『何処を使って打つかは、理解できたようだから、次は実際打つてみるぞ。』

フック

梅田先生の話は続く。

『溜めを作った時、フックを打つ方の手は、鏡で自分を見た時、肩の内側にあるのを確認しろ。』

全員鏡を見ながら、手の位置を修正する。

梅田先生

『拳は縦のまま、前の膝を伸ばしながら、少し下から上へ斜め前に突き出せ』

全員、個人差はあるが言われたようにする。

更に梅田先生の話は続く。

『打つた後だが、これが結構重要だ。
パンチを打つた方の肩で、自分の顎を隠せ。
顔は顎を引いて真っ直ぐ前を向く。
パンチを打たない方の腕は体から離さずしつかりガードする。』

4人は、鏡を見ながら形を作っていく。

梅田先生

『大まかな打ち方はこんな感じだ。打たせながら細かい所を教えるから、フックだけのシャドー5ラウンドやれ。』

ブザーがなり、シャドーが始まる。

飯島先生

『パンチのスピードは、意識するな。この時間は、とにかく形を意識しろ。』

梅田先生

『ゆっくりでいいから、前足の太ももで、持ち上げるような感覚で打て。』

『有馬、拳は縦だぞ。そして、下から上に突き上げるよう打て。』

『高田、打つ時のガードをもつとしほれ。溜めを作った時のバランスは6・4ではなく、前7後ろ3だ。』

『白鳥、お前に左足を曲げるよう言つてたのは、このパンチの為だ。もつと意識しろ。』

『片桐、溜めを作った時、前足の向きはもつと左側だぞ。お前のずっとクセだった所だ。この機会に直せ』

2人の先生は、1年生のフォームを細かくチェックしていく。

5ラウンドが過ぎ、サンドバッグ打ちかと思つていた1年生達だつ

たが、練習は「」で、一時中断した。

梅田先生

『さつき片桐が、質問したが、今その説明をする。

体の捻りで打つのが悪いとは言わないが、捻りで打つ場合、どうしても足が踏ん張ってしまう。

相手が動くと打ちにくい。その点、今教えた打ち方はすぐに打ち易い。

分かったか？』

健太も納得したようで、

『分かりました。』

大きな声で答える。

飯島先生

『他に質問したい奴は、今の内に、ドンドン吐き出せよ……』

康平

『フックを打つ時、ガードをしぼると凄く窮屈なんですが……』

この質問に飯島先生が答える。

『結論から言つて、窮屈でも我慢しろ。
理由はこうだ。

オーソドックス同士の場合に、左フックは相討ちになり易い。
口で言つてもイメージが湧かないと思うから、チョット実演する。

高田、じつひに来い。』

康平が前に出る。

飯島先生

『お前、右ストレートをゆっくり打つてみろ。』

康平が言われた通りに、右ストレートを打つ。

すると飯島先生は、康平の右側に、頭をずらしてよけた。

飯島先生

『お前、そこで左フックをゆっくり打て。』

康平が左フックを打つと、右ストレートをよけた飯島先生が、同時に左フックを打ってきた。

打ちながら康平は理解したようだ。

飯島先生

『これは一つの例だが、他にも相討ちのケースはあるから、打ちにくくとも、相手のパンチをもらわない為だ。我慢してガードをしぶれ。』

有馬と白鳥も質問したが、先生達は、熱心に答えていた。

梅田先生

『次は、サンドバッグ打ちだ。ミットもあるから準備しろー。』

強く打て！

サンドバッグを打つ前、梅田先生が話し出す。

『最初のラウンドは、触る感じでいいから、前の膝を使って打つ意識を持て。』

1年生達は、フォームをチェックしながら軽く打つ。

次のラウンド開始前、梅田先生が再び口を開く。

『このラウンドからは、思い切り打つんだ。
但し、2つの点に注意しろ。
顎を引いて、顔は真っ直ぐだ。
そして、ガードはしほれ』

ラウンド開始のブザーがなり、康平達はサンドバッグにフックを叩き込む。

梅田先生が怒鳴る。

『お前ら、力んでもいいから強く打て。』

飯島先生は、挑発する。

『オメエラのパンチはそんなもんかあ！』

このラウンドから、2人の先生は、強く打たせる為に色々言つてくれる。

時には、困った一言も……

梅田先生

『バッグを俺の顔だと思って、打つんだよ。』

これには、1年生達もどう反応していいか分からなくなつたが、申し訳無い振りをして全力で打っていた。

強く打ち始めてから2ラウンドが終わつた所で、康平と健太はリンクに呼ばれた。

サンドバッグではフックを振り切れないで、打ち終わりのフォームを確認するようだ。

ガードが甘かつたり、顔の向きが悪かつたりすると、すかさずミットで攻撃される。

おまけに予告なしで空振りをせる時までつた。

サンドバッグとミット打ちが終わつたが、その後ストレートだけの形式練習を4ラウンドをした。

梅田先生の話では、フックだけのバランスに偏らないようにする為だそうだ。

こつして、練習が進んでいつたが、筋トレの時に新たなメニューが追加された。
首の補強である。

一年生達は、まだ慣れないでの、簡単な補強から始まった。

仰向けに寝た姿勢で、頭を起こしながら動かすという簡単なものだつたが、繰り返してゐるうちに、結構辛くなつた。

今田の全ての練習が終わつた後、再び白鳥が質問する。

『先生、うちの学校のフックは、他の学校のフックと違つて下から上に突き上げる軌道なんですが、それは何故ですか?』

最近の白鳥は、本当に積極的だ。

他の奴らが言ってたように、白鳥がもうすぐ辞めるなんて、あり得ない話だ。

梅田先生

『今日教えたフックは、体のどいを使って打つのか言ってみる。』

白鳥

『前足の太ももです。』

梅田先生

『その通りだが、太ももでパンチを持ち上げた時の、体全体のパワーはどう働いている』

白鳥

『下から上に……。』

梅田先生

『分かったようだな。アッパー気味に打つパンチの軌道は、体全体が生み出す力を効率よく利用する為だ』

飯島先生

『他のスポーツはどうだか知らないが、ボクシングの基本は、あつて無いようなものもあるからな（笑）』

梅田先生

『下から上に突き上げるフックの打ち方は、他にもメリットがある』

有馬

『それは何ですか？』

梅田先生は、口を歪め、悪人のように笑いながら、

『いや、今回は説明するのをやめておく。

勿体ぶつた方が、お前らの上達が早そうだからな。』

言い出しあきながら、説明を拒否した。

最後に、梅田先生が再び口を開く。

『前の手のフックで、倒す確率はかなり高い。

飯島先生と俺も、フックは倒すパンチとして教えるつもりだ。

今日はもう終わりだ。トットと帰れ！』

1年生達は、今日の少ない余暇時間を惜しむかのように、急いで更衣室に向かっていった。

小さな悪魔達

夏休み2日目、康平は早朝4時に目を覚ます。

暑さで勝手に起きたのではない。

前の日にセットした目覚ましで、意図的に起きたのだ。

これには、海より深く、九×九より簡単な（？）理由があった。

これは、敢えて後で教える事にする。

ジョギングを始めて1ヶ月たったが、康平は奇跡的に、土曜日意外の晴れの日は、毎日走っていた。

これは、強くなりたい気持ちだけで走っているのではない事を断言しておこう。

ジョギングを始めて1週間を過ぎたあたりから、擦れ違う人達から挨拶されるようになつたのだ。

新聞配達のアンちゃん。

メタボな身体を駆使してジョギングする中年オジサンの小池さん。

毎日散歩する、高校教師を定年退職したオジイサンの山田（元）先生。

この3人は、走る度に毎日逢うので自然に挨拶するようになつてい

た。

『お、今日も走つんな!』

〔アンチヤン〕

『君もよく続けてるなあ』

〔小池さん〕

『若いんだから、後悔しなこよつに頑張れよ。』

〔山田(元)先生〕

身体の成長と共に、照れ臭とも増す康平の年頃だが、同級生がいな
い場合は、時として素直になれる。

康平は大きな声で、挨拶をする。

『おはよひげやります』

それが毎日続くと、康平も走るのを、辞めにくくなっていた。

なぜ康平は、朝4時から走るようになったのか?

話は前日に遡る。

本題に戻そう。

いつものように、康平はジョギングの為に、朝の5時に起きた。

5時に起きて、準備があるので走り始めるのは、5時20分頃だ。

最近は、5キロを走るのが定番になっているが、ゆっくりペースなので、家に戻るのが6時頃になる。

家の近くの公園を横切った時、康平に挨拶する奴がいた。

『康平君おはようー。』

近所の小学生達だ。

夏休み恒例のラジオ体操に出ているらしい。

6時半からのハズだが、元気が有り余っているらしく、30分前から遊んでいるようだ。

そそくかと、通り過ぎた康平だったが、後ろから声が聞こえてくる。

『あの人、走るのオッセ』

『シューンの方が絶対ハニーよなー。』

『康平君で、ボクシングやつてるんだってー。』

『つづの母ちやん、もうすぐ辞めるだろつて言つたわ。』

この時代でも、陰口が下手な小学生はいる。

言つてゐる事は、全て康平に聞こえていた。

子供のホンネは、心に堪えるものだ。

康平は、一度とこんな想いを味わいたくないので、時間をズラして走る事にした。

ラジオ体操が終わつてから走るのは、どう考へても困難だ。
奴等がいつ帰るか保証がない。

そこで、朝4時からのジョギングをする羽田になつたのだ。

小さな悪魔達によつて、康平は、より規則正しい夏休みをおくることになる。

心配する亜樹

夏休みも3日目になるが、康平は今、高校の近くの図書館に向かっていた。

康平の気持ちは、かなり重い。

何故なら、昨日図書館で亜樹と待ち合わせていたのを、康平がすっぽかしたからだ。

理由は、寝坊である。

昨日は、ある事情で朝4時に起きてジョギングをした。

ある事情の説明は、前述したので、ここでは説明しない。
幸い、家の近くの公園を、誰にもあわずに横切る事ができたのだが、
安堵のせいか、昼1~2時まで眠ってしまった。

亜樹との待ち合わせは10時、それも、約束したのは康平だ。

慌てて、クラスの連絡網を見ながら亜樹の家に電話したが、誰も出なかつた。

せめて誠意だけは見せようと、13時に待ち合わせの図書館に着いたが、亜樹らしい姿はどこにもいない。

夜に電話しようとしたが、妹と母親に独占されていたので、仕方なく待つているうちに、康平は眠ってしまったのだ。

康平は、沈んだ気持ちで図書館に着いたが、不思議と亜樹は、怒った様子でもなく入口近くのロビーにいた。

亜樹

『おまよつー昨日は寝坊でもしたのかな?』

康平

『…ホント、ゴメン…』

亜樹

『まあ、いいよ。

家に電話来てたみたいだし、図書館にも廻過ぎては来て私を探した
ようだしね』

康平

『え、何で知つてんの?』

亜樹

『お姉様は、全てお見通しなの。』

康平

『……』

亜樹

『……ふつ（笑）、嘘よ。

こここの図書館のオバサンが話してくれたの。
あのオバサンを甘く見ない方がいいよ。

一度見た顔は絶対忘れないし、君が昨日私を探した後に、歴史のマ
ンガばかり見てた事まで教えてくれたんだからね（笑）』

康平

『げつ……マジかよー。』

亜樹

『謝罪会見は、これで終わりね。

今日から夏休みの宿題、1週間で片付けるからね。』

すっぽかしを許してもらつたばかりの康平に、反論する権利はなく、腹を括つて勉強机に歩いていった。

宿題を始めてから30分余り、康平は眠りの世界へ足を突っ込んでいた。

亜樹が優しく足を引っ張つてあげる。

『まだ寝るのは早いよ』

更に30分後、今度は字を書きながら眠つていた。
書いている字は、得体が知れない文字になつていて。

亜樹

『ちよっとロビーで休憩しない? パーティーおひるからや。』

康平

『ん? ……あ……悪いな。』

ロビーに着いた亜樹は、缶コーヒーを康平に渡すと、心配な顔をして話す。

『康平、何処か具合でも悪いの?』

康平

『いや、そんな事はないよ。』

亜樹

『さうかな? 期末テストの少し前から疲れていいようななんだけど…』

…

康平

『気のせいじゃないかな』

亜樹

『それはないわね!』

自分で言つのも何だけど、私、結構勘がいいのよ。』

康平

『……』

亜樹は、本氣で心配してくれている。

彼女自身が言つてるみたいに、亜樹は勘が鋭い。

下手なゴマカシが通じない事は、康平がよく知っている。

本当の事を言おうか迷っていた。
ショギング

亜樹の携帯電話

康平

『あの……わあ』

亜樹

『ん?』

康平

『まだ誰にも言っていないんだけどな。』

亜樹には期末テストで世話になつたし、本当の事を言つよ。』

康平は、ジョギングに至る経緯を亜樹に全部話した。

亜樹

『なるほどね。健太君達も走つてゐるのかな?』

康平

『多分…走つてゐると思つ』

亜樹

『多分つて、友達同士の会話が少ないじゃないの(笑)』

康平は即座に否定する。

『いや、それはないよ。』

ただ、走る事については、皆、何も話さないかもな

亜樹

『梅ツチが誰にも言つたから?』

康平

『ンー……うまく言えねえけど、その後のセリフが気になつてると思ひ……』

亞樹

『何て言つてたの?』

康平

『自分やつた事を話す奴で強かつたのはいないつて事だつたな。』

亞樹

『あたしに言つちゃつて大丈夫?』

亞樹

『話を聞かなかつた事にしてあげるよ(笑)』

康平

『いいよ(苦笑)。梅ツチも1人位ならいいつて言つてたし……』

亞樹

『あたしも梅ツチの考え方は賛成だな!
自慢したり、二股かける男つて虫酸が走るもんね!』

康平

『よく分かるよ(笑)』

亞樹

『それどいつも意味(笑)』

『話は変わるけど、今日も康平は朝5時に起きたの?』

康平

『……いや……4時だよ。』

亞樹

『夏休みなのに、何でそんなに早く起きてんの？』

康平は、朝のラジオ体操に来る小学生達の事を話す。

亞樹は、少し吹き出した後心配するフリをした。

『大丈夫？

小学生より弱いのに、ボクシングなんてやつていけるの（笑）』

康平

『余計なお世話だよ！

町内会のガキって、父兄に筒抜けだから怖えーんだよ』

亞樹

『あはは！それは言えてるかも。

でも、そんな生活だつたら、また君にすっぽかされそうだしなあ……』

…』

亞樹は少し考えていたが、再び口を開く。

『私、最近携帯持ち始めたのよね。

来れなくなつた時、ここに連絡頂戴。

綾香にもまだ教えてないんだから、光栄に思いなさい（笑）』

亜樹はメモ帳に携帯電話の番号を書くと、康平に渡した。

康平

『え、いいのかよ?』

亜樹

『すっぽかされるより、マジだと想つかば。』

康平

『いや……だから反省してるって……』

ロビーに小肥りのオバサンが、パタパタ歩いて来る。

オバサン

『亜樹ちゃん! そろそろ戻んないと、空いてる席を探している人が多くなってきたよ。』

亜樹

『コツメーン! すぐ戻るからね。』

オバサンは康平を見て、

『頼り無さそうだけど、性格は良さそうだね(笑)』

亜樹ちゃんは、男を寄せ付けないオーラがあつて心配してたんだけどね……』

意味深な事をいつ。

亜樹

『オバサン何言つてんのー康平、せつせつと戻るわよ』

オバサン

『亜樹ちゃんは、誤解され易いけど、いいコだよ！
あと、図書館でマンガばかり見ちゃダメだよ（笑）』

康平も、一度頭を下げてから、急いで勉強机に歩いていった。

反省する梅田先生

図書館での勉強を終えた康平は、少し休んでから部活に向かう。

図書館から学校まで歩いている間、勉強と部活だけの自分の夏休みを振り返ると、一瞬悲しくなったがすぐに取り消した。

去年までの、グータラな夏休みを懐かしむ気持ちが無いでもないが、やはり女の子の存在は大きい。

しかも、亞樹はカッコイイ系の美人である。

第三者がいる時は、毒舌がマックスになるが、2人の時は結構優しい。

康平を弟扱いしているようにも感じるが、康平も美人に弱い典型的な男だったので、今は問題ないようだ。

ボクシング場に着いて、梅田先生の顔を見た途端、康平の浮かれた気持ちちは、すぐに現実へ引き戻された。

その時康平は、あの恐い顔を、一種の才能のように感じていた。

今日も、左フックを中心に練習するのだつと思つていたが、梅田先生から意外な言葉が発せられた。

『今日は、前の手のアッパーとボディーブローを教えるぞ！』

全員鏡の前に並べ。』

アップバーとは、下から突き上げるパンチで、ボディーブローは、相手の腹部を狙うパンチだ。

並んだ1年生達に、梅田先生が言つ。

『フックの溜めを作つてみる。』

2日間重点的にフックを練習したせいか、4人はスムーズに形を作る。

梅田先生

『ボディーブローとアップバーも、前の膝を使うのは、フックとほぼ同じだ。まずボディーブローだが、パンチを打つ方の肘を前に突き出すように打つ。

その時は、パンチを打つの方の腰骨を、少し前にスライドさせる。』

康平達は、言葉だけでは出来るハズもなく、ボディーブローの素振りを5ラウンド程やって、何とかコツだけは掴んだ。

梅田先生

『次にアップバーだが、ナックルを返しながら、パンチを打つ方の肘を、ヘソの辺りに横滑りさせるように打つてみる。』

ナックルを返すとは、拳を捻って、手の甲を相手に向ける事のよつだ。

全員、ボディーブローの時より、覚え易かつたよつで、ミラウンドの素振りで終わつた。

飯島先生

『これからサンドバッグ打ちだが、アッパーは打つなよ。手首を痛めるからな。』

梅田先生

『ボディーブローは強く打てよ。

意識するだけでいいが、顔面を狙うフックとボディーブローは同じ体勢から打て!』

『意識するだけでいい』

と、自分から言つておきながら、ミラウンドを過ぎた辺りから、同じ体勢から打たないと罵声が飛んでくる。

氣の短い人から教わる人間は、本当に氣の毒である。

梅田先生

『同じ姿勢から打てと言つただろ? (怒)』

おまけに、言つてゐる意味まで変わつてしまつていった。

理不尽大王に反抗できる1年生は、誰もいるハズがない。
同じ体勢から打つのは意識どころではなく、いつしか死守すべき命令になつていた。

練習が終わつた後、梅田先生も少し反省したようだつた。

『まあ……その……なんだ、俺も少し（？）気が短い所もあるから、今
田のところは許せ。
……お前ら、怒られ易い顔をしているから、ボクシングは強くなるぞ。』

最後のフォローは、何だか解らなかつたが、一応謝罪して職員室に向かつて行つた。

飯島先生が1年生達に語りかける。

『梅田先生は、早く同じ体勢から打たせたいんだよ。
同じ体勢から3種類のパンチが打てれば、相手にとつては脅威だからな。』

2人の見学者

8月に入り、石山先輩と兵藤先輩は、インターハイ全国大会に向けて、調整に入っているようだ。

練習も早く切り上げているようで、更衣室でも1年生達と逢う事はなかつた。

康平と健太には、期待している事があった。

2人の先輩の試合には、梅田・飯島の両先生がついてゆくので、部活が休みになるかも知れないのだ。

今日の練習には、なぜか見学者が2人いた。

1人は、色が白く鋭い目付きの男でガツシリした体型である。

もう1人は、かなり色が黒く目が大きいのが印象的だった。

梅田先生が、2人を紹介する。

『今日、見学に来ている2人は、お前らの先輩だ。
色の白い方が山本賢治。
黒い方が内海俊也だ。』

この2人は、今も大学でボクシングをやっていて、大学のリーグ戦にも出でているベテランだ。』

色の白い山本が、先に先生へ口を開く。

『色々忙しくて、石山と兵藤のスパーの相手をしてやれなくて残念ですね。』

色の黒い内海が、次に話す

『先生！

俺達を色が白い黒いで紹介しないで下さこよ（笑）』

梅田先生は、苦笑いをしながら言つた。

『お前達にお世辞を言つても、しょうがねえだろ。まあ、許せ。』

先生も、卒業生には多少甘いようだ。

2人の見学者の前で練習する1年生達は、緊張しながら練習を始める。

飯島先生

『2人とも、お前らが下手なのは知つてつから、そんなに硬くなんなよ（笑）』

4人は、少し緊張が解れたようで、練習メニューを進めていった。

練習が終わり、梅田先生が、見学していた2人に話しかける。

『まあ、こんな感じだが、来週からやれそうか?』

山本
内海

『まあ、大丈夫だとは思います。』

山本

『何とかなると思います。』

でも俺達1年の時より、上手いんじゃないツスか?』

2人の話を聞いた梅田先生は、1年生達に言つ。

『この2人は、大学のリーグ戦も終わって今は落ち着いているから、来週から練習に参加してくれる。楽しみにしどけ。』

康平達は、少し複雑な表情になつた。

飯島先生

『おいおい、お前らの練習に付き合ってくれるんだから、挨拶位しどけ(笑)』

『...お願いしておられました』

日曜日の予定

帰り道、4人の1年生は駅に向かっている。

有馬が康平と健太に聞く。

『明日は、やつと休みだけよ。お前ら何か予定あんの?』

健太
『特にねえけど……康平、お前は?』

康平
『……俺もないかな?』

有馬
『康平は、山口亜樹と図書館デート……ってか(笑)』

康平
『え?』

有馬

『お前らは、チョットとした噂だぜ。』

学校の近くの図書館だったり、誰かしらいるからな

康平
『……デートってわけじゃねえけどよ……』

有馬

『カラカラつもりねえから安心しろって(笑)』

山口は、見た目よろいの奴だつて、健太から聞いてるからな。』

有馬が話を続ける。

『学年2位から教わると、やっぱ勉強もはかどるんか?』

康平

『学年2位?』

有馬

『あれ!』

康平は、何も知らねえんだな。
あいつ、中間と期末も2番だぜ。』

健太

『康平は、噂とか流行りには、昔から鈍感だったからな。(笑)』

康平

『亞樹とは、……その……何だろ……』

有馬

『別に答えなくていいつて(笑)
山口は美人だけど、俺のタイプじゃねえしな!
それに、俺は2番よりも上の1番から教わってるからよ。テスト前
だけだけどな(笑)』

白鳥

『よ……よせよ。』

有馬

『別にいいじゃねえか。

俺は中間テストん時、赤点どらなきゃイイって、勉強しなかつたんだけど、そしたら点数がマジヤバくてな、期末ん時、白鳥から教えてもらつたんだよな。

まあ、おかげで追試は免れたってわけさ。
教える奴が、男つてのが残念だけどな（笑）』

更に有馬が話す。

『お前ら明日、予定がねえんだつたら、うちの方へ遊び来いよ。
オンボロなゲーセンがあつてさ、ゲームも古いけど、10円や30円で遊べるんだぜ。』

健太が飛びつく。

『安いな。古いのつて、最近あまり見ないからな。
康平も行くだろ？』

康平

『行くけど、白鳥は？』

白鳥

『ん…ちょっと…』

有馬

『俺がわざわざ白鳥に聞いたら、用事があるつたり。
白鳥、お前そろそろモジモジ君は卒業した方がいいぞ（笑）』

駅に付いて、4人は2組に別れていった。

家に着いた康平は、メモ用紙を取り出す。

亜樹の携帯電話の番号だ。

明日、図書館に行く約束はしていない。

連絡した方がいいのか散々迷つたが、思い切つて電話をすることにした。

直接話すのと違つて、電話だと緊張する奴がいる。

康平もその一人だった。

メモを見ながら電話をかける。

亜樹

【はいー】

康平が緊張のあまり、思わずいつもの電話のセリフを言つてしまつた。

【山口さんのお宅でしちゃうか?】

亜樹

【ふつ。もしかして康平?】

【携帯にお宅でしちゃうかは無いんじゃないの(笑)】

康平

【携帯に電話すんの慣れてねえんだよ（苦笑）
明日、用事が……いや、ボクシング部の奴らと遊びに行くからや……
図書館は行かないって、一応連絡しといた方がいいと思って……】

亞樹

【ワザワザ理由まで言わなくともいいよ（笑）
あたしも、夏休みの日曜日は勉強休む事にしてるのよね。
ちなみに明日、図書館は休みだよ（笑）】

奇妙なゲーセン！

翌日の日曜日。

電車に乗った康平と健太は、有馬との待ち合わせの駅に向かっている。

康平

『有馬の家って、確か学校の駅から7駅目だったよな。何で3駅目で待ち合わせなんだ?』

健太

『まあいいんじゃねえか！金も安くなるんだしさ。』

康平

『そうだな。』

有馬の家は、学校から下りで7駅目である。

7駅分の往復の出費を覚悟していたが、3駅分に減ったのだから、康平も深く考へる気はないようだ。

康平達は、学校から上りで3駅目だ。学校までの分は、定期券があるのでタダである。

待ち合わせの駅に着いた2人は、有馬を探そうとしたが、本人が改札口のそばにいた為、その必要はなかった。

有馬

『よひ。

これから行くのは、やつぱゲーセンで言えねえかもよ（笑）。
俺とダチだけが知ってる場所なんだから、誰にも言ひつなよ。』

康平と健太は、駅からすぐ小道に入つて有馬についていくが、右に曲がった後左へ曲がり、突き当たりを更に左に行き……………有馬がいなければ、2度と行けないような、入り組んだ道だ。

有馬

『やつと着いたぜ。』

見ると、ゲーセンらしきものは見当たらない。

有馬

『お前、りびに見てんだよ。あそこだ。』

有馬の指差した方向を見ると、小さい看板にゲームとマジックで書かれている古い木造の家があつた。

中に入つてみると、昔の機械的な音のするゲームが、10台ある。10円ゲームが3台で、後の7台は30円だ。

奥にファミコンルームと紙にマジックで書かれた部屋があつた。
2畳のタタミの部屋にファミコンがあり、傍に、「楽しんだ方は、お気持ちを入れて下さい」と、書かれたお賽銭箱があつた。

『ファミコンは、置の上でやらなきゃいかん。』

というのが、オーナーのポリシーらしかつた。

また貼り紙で、

「ランチメニュー」

と書いてあり、醤油・味噌・塩ラーメンの3種類があつて、どれも170円だ。

健太

『安いな。』

有馬

『インスタントラーメンを作つただけなんだけどな。』

ただ、今日は日曜日だから12時20分過ぎには注文するなよ（笑）』

康平が有馬に聞くと、その時間からテレビで「のど血漫」が始まるので、その時に注文すると、オーナーの機嫌が悪くなるようだ。

平田は12時45分からは注文出来ないらしい。

有馬がその時間に注文した時、テレビで見逃せないシーンだつたらしく、オーナーから台所に呼ばれて自分でラーメンを作らされたそうだ。

昼時に注文できないランチメニュー……何ともフザケタ感じだが、オーナーは年金で暮らせるので、ゲーセンは趣味でやつてる感じである。

オーナーの婆ちゃんが出て来た。

『まあ、お前にマタモな連れだねえ。』

有馬

『何いつてことだよ。俺の連れはみんなマタモだぜ（笑）』

婆ちゃん

『まあそういう事にしこしてやるが、私から見るとマタモじゃない連れも来たようだけどねえ。』

有馬の友達

婆ちゃんにつられて外を見ると、100m先からもヤンキーと分か
るような、柄の悪い連中が5人二つにに向かってくる。

康平と健太にとって、あまり関わりたくない連中だ。

有馬

『心配すんな。顔と柄は悪いが、根はいい連中だからよ（笑）』

『おいタケ！みんな聞こえてるぞ…』

『タケにしてはマトモな連れだな（笑）』

有馬は名前を猛^{タケル}というが、友達からはタケと呼ばれてるらしい。

有馬

『ツヤーよ。それ婆ちゃんにも言われたんだよ（笑）
コイツら、ボクシング部の同期だから、ヨロシクな

柄の悪い5人の中に、金髪でサングラスしてたり、タトゥーの入っ
ている奴もいるが、この2人は高校に行ってないらしい。

金髪でサングラスをかけた奴が、康平に話し掛ける。

『タケは、真面目にボクシングやつてんのか？』

康平

『あ…ああ、有馬も頑張ってるよ。』

次に、腕にタトゥーの入った奴が話す。

『ヘタレのコイツが、どこまで続くか、賭けをしてたんだが、9月まで持ちそつなんだな?』

健太

『今、やっと練習が面白くなってきたから、俺達ずっと続けると思うけど…』

タトゥーの奴

『あ…あ！タケ、お前の一人勝ちだな（苦笑）』

別の奴が、康平達に説明する。

『俺達、賭けをしてたんだよ。』

タケがいつ部活を辞めるかつてな（笑）

タケ以外は、9月まで辞める方に賭けてたんだけどな（笑）』

康平と健太

『……』

有馬

『あんまり余計な事言つくなよ。』

それに、『トイツらゲームしに来たんだからよ。』

皆、好きなテーブルについてゲームを始めた。

何故か全員、30円のゲーム台にしか座つていない。

健太

『有馬。10円ゲームも楽しめそうだけど……？』

有馬

『言つてなかつたけど、10円ゲームには地雷があるからな。』

康平

『地雷？』

金髪サングラスの奴

『やつてしまつと、逆にイフツくぜ（笑）

まあ、10円を捨てるつもりで一回位はやつていいかもな。』

好奇心旺盛な健太が、10円をゲーム機に入れる。

昔流行つたシュー泰イングで、つまらなくもないゲームだ。

3面目までクリアし、健太もエンジンがかかつたらしく、『気合』を入れ直した途端、[画面がブツツ]と消えてしまった。

不思議な顔をした康平と健太に、タトウーの奴が話し掛ける。

『それなあ、ある程度やると、電源が落ちるんだよ。
こんなゲーム機おいてるなんて、ビデオ店だろ（笑）』

婆ちゃん

『うるさい！

これでも10円以上は楽しめさせてやつてるんだからね』

有馬

『他の10円ゲームも同じだから氣をつけろよ（笑）
それに、ファミコンルームは、もっと勧められねえけどな。』

康平

『え、何で？』

有馬

『あそこには、ロープレしかねえんだよ。
ロープレって、始めたら最低2時間はやるだろ？
終わつた時、お賽銭箱に入れないといややいがあつからよ。
相場は、1時間100円だな（笑）』

婆ちゃん

『お前ら、営業妨害甚だしいね！』

午後1時近くまで、ゲームもそれなりに楽しんだが、有馬が康平達

に口を開く。

『俺からゲームに誘つてなんだが、今から俺に付き合わないか?』

康平

『どうしたんだ?』

有馬

『理由は後で話すからさ』

健太

『まあいいか。ゲームはこへれば出来るからな』

康平

『わかつた! 有馬に付き合つよ。』

金髪サングラス

『なんだお前ら帰るのか?』

もつすぐ「のび太」も終わっから、ラーメン頼めるのよ。』

有馬

『フリイな!』

今日はチヨット用事があつからよ。』

タトウ一

『そついえば、タケは最近夜10時には寝てるんだよな?』

お前らもそつなん?』

健太

『まあ、俺らも疲れて同じ位の時間に寝てるけどね』

康平

『ううう、俺もだよ。』

金髪サングラス

『そんなんもんなんか？

まあ俺達、部活つてもんに程遠い人種だからよ（笑）』

タトウ一

『まあ、タケのダチは俺達のダチってわけだから、試合の時は応援行くから頑張れよ。』

他の奴らも、3人を応援してくれるようだ。

有馬の友達は、外見は凄いが、話してみると結構いい奴らだ。

そいつらと別れて、康平と健太は、有馬についてゲーセンを後にした。

働いてくる白鳥

ゲーセンを出て、有馬の後を康平達はついていく。

健太

『有馬、どんな用事のか少しでもいいから教えてくんねえか?』

有馬

『まあ、深刻な事じやねえのは確かだよ。』

行きや分かるからさ。』

言われるまま、しばらく複雑な道を歩いたが、有馬の足が止まった。
どうやら田地に着いたようだ。

有馬

『ここで昼メシ買おうぜ』

康平と健太が見ると、

「スーパーまるちゃん」

と、大きな看板のあるスーパーだった。

そこへ入っていく有馬に、そのままついてゆく2人だが、何やら惣菜コーナーから、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『今日は揚げたてのクリームコロッケですよ～！
お昼がまだだったら、今お買い得ですよ～！』

白鳥の声だ。

彼は、高いテンションで、赤い顔を更に真っ赤に染めながら、学校でも聞いた事のない大声で働いていた。

康平が小声で有馬に訊く。

『あいつ、バイトでもしてんの?』

有馬

『事情は後から話すからさ、コロッケ買いに行こうぜ(笑)』

有馬は、

『1人1個ずつな。』

と、勝手に決めつけた後、少し大きめの声で、

『店員さん、コロッケ3つ欲しいな。』

と、後ろから白鳥に話し掛ける。

振り向きながら、白鳥は、

『はい、どうもアリガ……とうございました。』

動搖しながらも、3つのコロッケを慣れた手つきで、パックに詰めていた。

有馬の注文のおかげで、280円の大きなクリームコロッケを買つ事になつた3人は、それに小さなお握りを一つ加えたアンバランスな昼食になつてしまつた。

スーパーの隣にある小さな公園のベンチに座つて、3人は、主食（？）のクリームコロッケを食べていた。

健太

『有馬、今度クリームコロッケを買つ時は、値段を見てから買おつぜ（苦笑）』

有馬は素直に謝る。

『ワリィ、ワリィ。

あんなに高いとは思わなくてさ。』

康平

『とこりで、白鳥は何であそこで働いてんの？』

有馬

『白鳥は、隣の県からこつちに来て、叔父さんちから学校に通つてるのは、知つてるよな？』

健太

『ああ。』

有馬

『あのスーパーは、その叔父さんが経営してるんだ』

有馬が大きく深呼吸した後、続けて話す。

『いいか！今からイッキに話すからな（笑）。

日曜日の白鳥は、午後2時まで、あのスーパーでタダで働いているんだ。

自分から勧んでだぜ。

いつもお世話になってる叔父さんに、少しでもお礼がしたいんだってさ。

それに……！』

有馬の視線と表情が変わったので、康平と健太はそれに釣られて後ろを振り向くと、スーパーの服を着た50代位の男がいた。

『俺が、その叔父さんだよ（笑）』

叔父さん

『俺は、手伝わなくていいって、翔（白鳥）に何度も言つたんだけどな（苦笑）

確か、君は同じボクシング部の有馬君だつけ？』

有馬

『あ、はい。前にお店でお会いしました。』

叔父さん

『そして、どっちが高田君と片桐君かな?』

康平

『――――』

健太

『何で俺達の事を知ってるですか?
あ…、俺が片桐ですけど』

叔父さん

『じゃあ、そっちが高田君だね。
翔は、俺の家でも大人しい口でな。

まあ遠慮してるともあると思うが、ボクシング部の事だけは楽しそうに話すんだよ。

それで、会った事がない君達の名前を知ってしまったわけだ(笑)』

白鳥の事情

叔父さんの話は更に続く。

『有馬君は、翔から聞いているみたいだし、片桐君と高田君も翔が信用してるみたいだから教えるが、翔は小さい頃、お父さんを亡くしているんだ。』

その上、お母さんは体が弱い。

その為、経済的に苦しくてな、3年前位までは、本当に大変そうだった。

俺は婿養子だから、あの家族に何もしてやれなかつたから、俺も辛かつたんだがな……

ただ、翔には2人の兄貴がいて、中卒だが働き始めたら、少しは楽になつたようだが。

2人の兄さんは、翔だけでも高校に行かせたいって、頑張つて働いてお金を貯めていたんだよ。』

康平と健太

『…………』

叔父さん

『それに、翔には学校の先生になりたいっていう気持ちがあつてね。それには、大学を卒業しなければならないから、翔も諦めていたんだが、翔の中學の担任……確か加納先生と言つたな。その加納先生の薦めで、永山高校に入学したんだ。』

健太

『けど、白鳥は他の県から来ましたよね。

地元の高校だと、何か不都合でもあつたんですか?』

叔父さん

『翔の地元だと進学校は、近くにもあつたが私立だつたんだ。少し離れた所にも、公立の進学校はあつたが、ここにはいつも全国レベルが出てる、強いボクシング部がある。』

康平

『ボクシング部って、何か大学と関係あるんですか?』

叔父さん

『ハハハ。君は何にも知らないんだな。

ボクシングの全国大会で、いい成績を残すと、大学推薦の道があるんだよ。

それも、いい条件でな。

説明している俺も、最近知ったんだけどね(笑)

去年の夏に、翔の兄貴2人と加納先生が、翔が高校に入ったら、ここに下宿させて下さってワザワザお願いしにきたんだ。

俺が知ったのはその時だな。』

康平

『俺はてっきり、イジメが何かだと思ってたんですよ。』

有馬

『俺も最初は思つたけど、アイツ、金がネエからカツアゲされる心配もねえしな（笑）』

叔父さん

『そつといえば、有馬君と翔が店で話してくるのを見たつたりの店員が、

「翔君が、田付きの悪い口に絡まれてる」

つて、血相変えて報告しにきた時は、俺もビックリして駆け付けたんだよ（笑）』

有馬

『その時ヒテエんだぜ。

「翔にカツアゲしても何もないから帰ってくれ

だってさ（苦笑）』

叔父さん

『「めんな！あの時は初対面だったからな（笑）

君達も頑張つていると思つが、翔も頑張つてるよ。

学校から帰つてからは、すぐに勉強するし、休みの日にはお店を手伝ってくれるしさ。』

うちの女房も、翔の事は気に入ってるみたいだしな。

それに最近は、朝5時に起きて……』

健太

『叔父さん！』

叔父さん

『ん？』

健太

『糸屑があると思ったら、俺の見間違いでした。』

叔父さん

『……！』

ああそうか。誰にも言わない事だつたんだな（笑）』

スーパーの入口から、声が聞こえる。

『あんた、レジが混んで大変だよ。
翔君も終われないじゃないか（怒）』

叔父さん

『一りやまずいな。

お、そうだ！

俺のオゴリで、お前にジュースとおにぎり一つずつだ。
さつき翔が、280円のクリーミックロッケを3つも買ったって、心
配していたようだからな（笑）』

3人

『有難うござります。』

叔父さんは、入口の奥さんらしい人に急かされ、急いでレジに向かつていった。

有馬

『俺がお前らをここに誘ったのは、白鳥の事情を知つて欲しくてさ。アイツ、モジモジ君だろ。このままだと、お前らも知らないで3年間終わりそうだったからさ（笑）迷惑だったか？』

康平

『いや、そんな事ないよ』

健太

『そつそつ、迷惑なのはクリームコロッケくれえなもんだよな（笑）』

有馬

『しつけえぞ（苦笑）』

白鳥は、自分の事が話題になるのを嫌がるから、トットとゲーセンに戻る「うぜ」

康平

『白鳥を待たなくでいいのかよ？』

有馬

『構わねえよ。明日白鳥に聞かれたら、ここのクリームコロッケが
食べたかつたつて言えばいいしさ（笑）』

健太

『どっちがしつけえんだよ、まったく！』

月曜日、2人の大学生を交えての練習が始まった。

色の白い山本（賢治）さんは、背は低いが鋭い目付きとガツシリした体型で、いかにも格闘技をしているイメージがある。

ノースリーブのTシャツから出ている、筋肉の隆起した太い腕を見ると、対戦相手を、憂鬱な気分にさせそうだ。

色が黒い内海（俊也）さんは、大きな目をしていて、格闘技よりも、サマースポーツが似合いそうな感じの人だ。

山本さんより背が高くてスリムだが、肩甲骨あたりから肩にかけて盛り上がっている筋肉は、Tシャツ越しからでもよく分かる。

シャドーボクシングからの日の練習は始まった。

2人のシャドーは、ゆっくりだがスマーズな動きで、一つ一つの動作は、何度も実戦で使ってきたような感じがする。

時折みせる普通に打つパンチは、肩や腰のキレで打つようで、楽な感じで出しているのだが、これがまた速い。

そして、その打つパンチが全くブレないので、パンチのパワーは、全て拳に集中してるようだ。

レベルが段違いに上の人間を見ると、『ぐく僅かの人を除き、大抵はブルーになるものだ。

4人の1年生達は、残念ながら大抵の人間であり、まして、今日から練習の相手をしてもらつ予定だから、より不安な気持ちでシャドーをしていた。

4人の気持ちなどはお構い無しに、無情にもラウンドは進んでいく。

梅田先生

『有馬、ヘッズギアとカップ、マッピを付けて、お前からリングに上がれ!』

山本さんは、既にリングに上がっていて、肩を動かしながら中を歩いている。

有馬は、急いで準備をしてリングに入ろうとしたが、その際にロープに2段目に足を引っ掛け、転びそうになっていた。

ビビッている有馬の心情を察して……、どうり、笑う余裕のない1年生達は黙つて見ている。

ラウンド開始のブザーが鳴つたが、お互パンチがないまま20秒が経つ。

梅田先生

『どうした有馬、ビビッてんじゃねえぞ!

パンチ出してみろ（怒）』

堪らず有馬はジャブを打った。

しかし、顎が上がり、反対の手はガードもせず下がりっぱなしだ。おまけにバランスも崩れている。

梅田先生の怒号が響く。

『テメエ、今まで何やってきたんだよ（怒）
空振りミットを思い出すんだよ（怒）』

怒号が効いたのか、有馬は、離れ過ぎて届かなかつたが、ミットで打つ時と同じようなジャブを1発打つた。

すると、梅田先生が別人のように褒めた。

『よし、有馬その感じだ。もう少し近くから、習ったパンチをもつと出せ。』

褒められると調子が出るのは、有馬だけではないと思うが、彼はこの一言をキッカケに多くのパンチを出していった。

打ったパンチは、空振りだけだったが、梅田先生はご機嫌だ。

『いいぞ！

次のラウンドは、山本が打つてくるかも知れんが、同じように打てよ』

有馬は開き直つたようで、山本さん相手に空振りを繰り返していくた。

時折、ブロックの上からだが、山本さんのパンチを打たれて固まってしまうシーンがあつたが、すぐに持ち直してパンチを打つていた。

山本さんは、かなり手加減しているようだが、結局有馬は、3ラウンド相手をしてもらつた。

次は白鳥の番だが、その前に梅田先生が話す。

『山本と内海は、アマチュアの日本ランカーだ。
お前らみたいな下手くそには、贅沢な練習相手だが、お前らは、遠慮しないでドンドン打つていけ。
但し、練習通りのパンチだぞ。』

戦意喪失？

梅田先生の話の後、すぐに白鳥がリングに入った。

相手は、有馬と同じく山本さんだ。

山本さんも小柄だが、白鳥はもつと背が低く160?位の身長である。

白鳥は、ガードは固いが踏み込みは悪く、相手に近づくまでパンチを出さないので、梅田先生の罵声を浴びていたが、時折打つ左フックは、結構強そうだ。

次は健太の番だが、相手は内海さんだ。

健太は、意外と開き直っているようで、内海さんに対し積極的にパンチを出す。

サウスボーンからの左ストレートは、特に思い切りがいい。ただ、右足が外側に開く癖はまだ直っていない為か、よくバランスを崩していた。

最後は康平だったが、相手は健太と同様に内海さんだ。

ラウンド開始早々、ブロックの上からだが、内海さんの右ストレートを浴びた。

重いところより、シビれるような衝撃がある。

「の一発で、康平はビビってしまった。

体が萎縮し、怯える目で内海さんを見る。

内海さんは手加減してくれているので、あまりパンチは出さないが、いつでもパンチを打てる体勢で構えている。

(相手が次に何を打つてくるか?)

そればかり考えている康平は、全くパンチを出さない。

『パ・ン・チ・を・だ・す・ん・だ・よ

珍しく、飯島先生からも罵声が飛ぶ。

今の康平にとって、周りの声は、遙か遠くの方から聞こえてくるような気がしていた。

内海さんが、軽い左ジャブを打つ。

当てるつもりもなく、ただ距離を測る為に打ったのだが、その時康平は、下を向いてしまった。

『ストーップ！』

梅田先生が叫ぶ。

そして、ありつたけの声で怒鳴った。

『バカヤロー！

ボクシングは、下を向いたら終わりなんだよ（怒）
今度下向いたら承知しねえぞ。』

その後再開したが、一度怯えてしまった心を立て直すのは容易ではない。

康平は、無理矢理パンチを3発程出しだが、手と足がバラバラで、
おまけに力みまくっていた。

……そして、内海さんの軽い左ジャブで、再び下を向いてしまった

……

『やめだヤメ！

高田は戦意喪失で失格負けだ。

内海、もうリングから出ていいぞ！』

梅田先生は、康平を怒るわけでもなく、諦めたような感じで内海さ

んに話している。

その後のサンダバッグ打ちで、康平以外の3人は、梅田・飯島の両先生からアドバイスを受けていた。

康平は、やりきれない思いをサンダバッグにぶつけ、インターバルの間も全力で打っていた。

この日の練習が終わり、梅田先生が全員を呼ぶ。

『石山と兵藤の試合の為、明日から俺と飯島先生は部活に来ない。だが学校から許可をもらつて、部活はやっていいことになった。俺達が帰つてくるまで、内海と山本が特別コーチだ。練習時間は、今日と同じだからな』

『高田、チョット來い』

梅田先生が、着替えようとする康平を呼び止めた。

『ボクシングはな、確かに怖いが怯えたら終わりなんだよ。リングじゃ誰も助けてくんねえからな。悔しかつたら、次は、ショーンベンちびつてもいいからパンチを打て！分かつたな？』

康平は、大きな声ではないが、腹の底から返事をした。

映画の誘い

帰り道、1年生達は一緒に駅まで歩いていた。

健太

『明日から休みだと思ってたんだけどな……』

有馬

『なんだよ、お前、本氣で期待してたんか？
俺は、内海さんと山本さんが見学に来た時から怪しいと思ってたけどな（笑）』

健太

『俺も薄々感じてたけどさ、せめて1日や2日は、休みをくれてもバチは当たらねえと思うんだけどよ。』

有馬

『ムリムリ、梅ツチは俺達に嫌がらせする為だつたら、骨身を惜しまないからよ。』

健太

『ワーッてるつてそんなこと（苦笑）
話は変わっけど、俺、風呂場の鏡の前で、自分の体をマジマジ見ちゃうんだよなあ（笑）』

康平も、落ち込んでいるのがバレないよつて、会話に参加する。

『俺もよく見るよ（笑）

肩や腕に筋肉ついてきたんだよな。』

有馬

『そりそり。それに、腹筋もハツキリ割れてきたしよ。
白鳥、オメエもゼッテエみてるよな。』

白鳥

『お、俺は……』

健太

『自分の体を見てんだからさ、恥ずかしがらぎに正直に言つていいんだぜ』

白鳥

『け、結構見てるかも……』

有馬

『ハハハ！』

白鳥の顔が真っ赤だぜ。

男に対しても、恥ずかしがると、誤解されつぞ（笑）』

康平

『実際、白鳥の体つきが一番変わったよ。』

前は、プロプロだったけど、今は少しゴシイもんな

健太

『男の同性愛者って、ゴシイのが多いから……
まあ、白鳥も氣をつけろよ（笑）』

白鳥

『そ、そんなんじゃねえよ。』

今日は妙に白鳥がいじられていた。

家に着いた康平は、早速夕飯を食べて、風呂に入った後、鏡の前で上半身裸になる。

前から見ると、腹筋が割れて……といつより、筋肉が6つにわかれて小さく盛り上がっている感じだ。

そして、肩の部分が意外と大きい。

体の向きを変えて横から見ると、体の割に、腕が太く見える。

康平は、体の向きを変えながら、何度も自分の体を見ていた。

『兄貴、頼むから、サッサと部屋に戻つてくれない。
こっちが恥ずかしいからさあ（苦笑）』

2つ年下の妹の真緒が、呆れた顔をして立っていた。

『ウルセーよ！』

康平は、風呂場の鍵を掛けていなかつた事を後悔しながら、上着を持つて、急いで2階の部屋に戻つていった。

1人になつた康平は、練習の時を思い出して、少し暗い気持ちになる。

ゲームをして、気分転換しようとしたが、やり慣れている物ばかりだったせいか、セットしただけで始めるまでには至らなかつた。

明日の午前中は、勉強する気分になれそうにないので、亜樹の携帯に電話した。

亜樹

【もしもし、あつ、康平ね！
チヨット待つて！

家の電話、今、誰も使っていないみたいだから、家に直接かけてみて。】

康平は、亜樹の家に電話を掛け直した。

亜樹

【あたしも、康平に用があつたんだ。話長くなりそうだから、家に掛け直してもらつたのよ。ゴメンね。
でも、普通の電話から携帯に掛けると、料金がかかるからね（笑）】

亜樹は、お高い外見と矛盾して、しつかりしている……といつより、妙にオバサン臭い所がある。

康平は、口には出さないが内心可笑しくなつた。

康平

【俺の用件は短いから、先でいいかな？

明日用事があるて、図書館には行けそうにねえんだよな。出来の悪い生徒がいなくて、ホツとすると思うけど（笑）】

亞樹

【そんな事ないよ。ケチつける生徒がいないと、結構寂しくなるんだよね（笑）】

康平

【かなわねえよ（苦笑）

といひで、亞樹の用件て何？】

亞樹

【そりゃ、田曜日つて、ボクシング部は休みだよね？】

康平

【そりだけど。】

亞樹

【綾香が映画のチケットを4枚、兄貴からもらつたらしくてさ、田曜日に康平と健太君を誘つてみようつて、綾香が言い出したのよね。でも、綾香つて結構内気なんだ。】

康平

【へえ～】

亞樹

【ニッブいねえ！

あたしと康平経由で、健太君を誘うのよ。】

康平

【あ、じゃあ後から健太に電話してみるよ。
それと、俺の事は訊かないのか?】

亞樹

【あ、すっかり忘れてたけど行くんでしょ?】

康平

【ま、まあな。……そういえば夏休み前に、内海と駅まで帰る時
があつてた……】

亞樹

【随分前の話ねえ……!】

ああ、綾香から聞いてるわよ。

何で今話さうとしたの?】

康平

【あ……いや……何となくだよ……】

亞樹

【ふつ!

君って、秘密を持ってないタイプなんだね(笑)
ホント詐欺には気を付けてね。】

軽い罵り合いをした後、最後に亞樹が言つた。

【康平は、少し落ち込んでるようだけど、先は長いんだから、気
にしないで頑張んなよ。】

亞樹の勘の鋭さに、改めて舌を巻く康平だった。

綾香の兄貴

亞樹との電話の後、すぐに健太に連絡をとったが、彼は2つ返事で了解した。

次の日の朝、康平はいつも通りに4時に起きる。

普段なら5、6位のジョギングなのだが、昨日の悔しさを思いで少し距離を延ばす事にした。

どうかといふと、オットリしている康平だが、法える・ペース等の罵声を浴びると、さすがに男としてのプライドを傷つけられるようだ。

今日は、7程走って朝のランニングを終えた。

今日の部活までの時間は、まだたっぷりあるので、どうしようか康平は迷う。

夏休みになつてから、部活と図書館での勉強が、主な日課になつてしまつた康平は、何もやる事が思い付かず、結局いつもの図書館へ行く事にした。

『康平、チョット待ちなさい。』

今日は、用事があつて図書館には行かないんじゃないの?』

康平

『え、何で知つてんの?』

母さん

『それは置いといて、これから図書館へ行くんだつたら、今おじぎり作つてあげるからね。』

康平の母さんが台所に走つていいく。

ボクシング部に入った頃は、あまり賛成していなかつたが、休みの日に図書館へ勉強しに行く康平を見て、最近は何気に協力的だ。

母さん

『昨日の電話は女の子でしょ?』

一緒に勉強してるようね。

何なら、家に遊びに連れて来なさいよ(笑)』

康平は、慌てて言い返す。

『や、そんなんじゃねえよ』

母さん

『家の電話、居間の傍だから結構筒抜けなのよね。』

会話を聞かれたくなかったら、次のテストの成績を、20番以上あげなさい。そうしたら、携帯買ってあげるから(笑)』

康平

『ホントだな?』

必ず買つてよね!』

母さん

『お父さんにも言つておくからね。
但し、成績が上がつたらの話よ(笑)』

康平にも、物欲はある……………というより、家の電話は居間に近いので、話が聞こえ易い。また、最近妹の真緒の電話する頻度が増している。

今康平にとって、携帯電話は流行りのゲームよりも欲しいアイテムだつた。

急に勉強意欲が湧いた康平は、急いで図書館へ向かつ。

図書館に着くと、亜樹と綾香が2人で勉強していた。

亜樹

『あれ、康平は用事があつたんじゃないの?』

康平

『あ……いや……急に用事がなくなつたんだよ……』

亜樹

『ふーん……

ま、そういう事にしてあげるか。

今日は安心して、綾香もいるし、スバルタ式じゃないから（笑）』

康平

『それは残念だな。今日は、勉強しようと燃えてきたのによ。』

綾香が、苦笑いしながら言ひ。

『あたし抜きで、2人の世界を創らないでくれる?』

康平

『そ、そんな事ないよ。』

亜樹

『そうよ、綾香の氣のせいよ。』

綾香は降参したように言ひつ

『ハイハイ！分かつたわよ（笑）

ところで、映画の件は4人とも行けるの？』

康平

『それは大丈夫さ。

健太も即座にオッケーだったよ』

『よかつた。

兄貴からもらつた映画の券が、何故か4枚もあつたのよね！

この前4人で図書館にいた時、結構楽しかったから、あのメンバーで行ければ……って思つてたんだ。』

綾香は本当に嬉しそうだ。

康平

『内海の兄さんって、どんな人?』

綾香

『康平君達と、最近会つてるよ(笑)』

康平

『げつ…一やつぱそうだったんだ。同じ名字だから、もしや……って思つたんだだよな。』

綾香

『兄貴は、ボクシングの事は分からぬけど、普段の生活は結構デタラメだよ。この映画のチケットだって、合コンでベロンベロンに酔つ払つて、何も覚えていないのにポケットに入つてるからって、私にあげるつていうんだから(笑)』

康平

『す、凄いね。』

でもボクシングは、本当の意味で凄かつたよ。』

綾香

『あ、確かにそれはあるかもね。』

試合の1ヶ月半前からは、必ず夜の10時までに寝るもんね。まるで、兄貴じゃないみたい(笑)』

亞樹

『ハイハイ！

此処はどこで何をする所かな？』

綾香

『「コメンね。亜樹さん抜きで会話しちゃつて～（笑）』

康平

『亜樹先生の「機嫌が、これ以上悪化しないように勉強する事にしますか（笑）』

亜樹

『チヨシ・トビウコの意味よ（苦笑）』

怖い2人の大学生

午後3時、康平は少し早めに部活に行く。

昨日、1人だけ戦意喪失という理由で止められた事が悔しいようだ。

3人の2年生達は、最後の柔軟体操をしていたが、いつもより、バテ気味のようだ。

着替えた後、更衣室を出ようとした時、タオルを取りに来た大崎先輩とスレ違った。

大崎先輩が小声で話す。

『内海さん達の練習はシンドイぞ。

お前らも覚悟しといた方がいいかもよ。』

康平も先輩達の様子を見て納得した。

さつきまでいた図書館は、クーラーが効いている為か、体が硬くなつているようなので、康平は入念に準備体操を始めた。

そこへ内海さん達が、話し掛ける。

『お前、高田だよな？

1人だけ止められたのが、悔しいんか？』

康平は、素直に答える。

『悔しいといつか、恥ずかしいです！』

山本さん

『最初のうちは、よくある事さ（笑）』

内海さん

『そうそう。

男は見栄を張る生き物だからな。恥ずかしい気持ちがあれば、強く
なれつからよ（笑）』

2人の大学生は、気さくに話し掛けてくる。

2時50分頃、白鳥が練習場に入ってきたが、健太と有馬はまだ来
ない。

3時5分過ぎ、よつやく2人が練習場に来た。

『練習、お願ひします』

と、大声で挨拶した2人に、内海さんが歩み寄る。

『お前ら、遅くなつた理由でもあるんか？』

有馬

『いいえ……特にありません。』

健太

『僕も…………ないです』

その瞬間、内海さんのビンタが飛んだ。

『バカヤロー！ふぬけた気持ちで練習に来るんじゃねえ（怒）』

有馬と健太

『す、すいませんでした』

内海さん

『いいか、試合の前になると、手を抜いた練習をみんな思い出してくるんだよ。

そして、後悔しながら相手が怖くなる……』

山本さん

『梅ツチが居ようが居まいが、自分の練習は関係ねえんだよ。』

内海さん

『お前ら、反省したならトットと着替えひや。』

『はいー。』

有馬と健太は、急いで更衣室に駆け込んだ。

1年生全員の準備体操が終わり、シャドーボクシングを始めようとした時に、山本さんが口を開いた。

『お前ら昨日の練習で、何をアドバイスされたか覚えてっか？
1人ずつ言つてみい。』

健太

『左ストレートを打つたらすぐに右フックを返す事です。』

内海さん

『その為に、何を意識するんだ？』

健太

『左ストレートを打つた時、右足が外向きにならないように意識します。』

山本さん

『次！』

白鳥

『もつと離れた距離からパンチを出す事です。』

今回は、2発の左ジャブを打つて距離を詰めるように教わりました。

『

有馬

山本さん

『次！』

『左ジャブをもっと出すようにアドバイスを受けました。その時、肩をもつと入れる事と、…狙わないで打て？…と教わりました』

山本さん

『お前、有馬だっけ？まだ理解しきれていないようだが、練習が終わった後に説明するよ。とにかく今は、アドバイス通りにする事を意識して、真剣にやれ。』

内海さんが、康平に近づいて来る。

『高田は何もアドバイス受けてねえよな。心配すんな。俺が梅ツチから聞いてるからよ（笑）』

こうして、いつも以上に緊張する練習が始まった。

覗き見ガード

内海さんの話は続く。

『お前は、今から覗き見ガードをしろ。』

康平

『覗き見……ですか？』

内海さんが、少し笑いながら説明する。

『あまりいい呼び方じゃねえが、結構ポピュラーな構えだ。
要は、左右のガードの間から、相手を見る感じだ。』

康平は、内海さんの話を聞いて、自分なりに構えてみる。

内海さん

『そりや、ガードを上げ過ぎだ。

両拳は、頬骨位の高さでいいんだよ（笑）

脇を締めて、両肘が一番下のアバラに軽く触れている感覚だぞ。』

康平言われる通りに修正すると、内海さんは、言葉で説明しきれない所を、自身の手で直す。

内海さん

『まあ、こんな感じだ。

この形を崩さないで、3ラウンド休まず、構えだけを続けていろ。』

康平

『は…はい！』

山本さんが、他の3人に話す。

『お前ら、他人の事を見ている余裕はないぞ。
3人とも、まず鏡をみながらのシャドーを3ラウンドだ。
フォームのチェックは、この3ラウンド中に徹底してやれ。』

『はい！』

1ラウンド目が終わり、内海さんが健太に話し掛ける。

『片桐、オメエの下の名前は健太だつたな？』

健太

『はい。』

内海さん

『健太、右足だけ内側に向いてもダメなんだよ。
右膝を、もう少し左側に入れろ。そして、その角度を変えないで左
ストレートを打つてみる。』

健太はぎこちない感じで、左ストレートを打つ。

『――――』

内海さん

『何か感じたか?』

健太

『はい!

左ストレートを打った時、体が流れないと、返しの右フックが打ち易い感じがしました。』

内海さん

『お前、飲み込みいいな。調子もよさそうだがな(笑)
後の2ラウンドで体に憶えさせろ。』

山本さんも、有馬と白鳥に意識するポイントを教えていた。

3ラウンド目も終わり、山本さんが次の練習内容を話す。

『高田以外の3人は、リングに上がつて、シャドー10ラウンドだ。いいか、鏡や俺達は一切見るなよ。
言われたポイントだけ気を付ければいいから、今まで習つた事を反復しろ。
繰り返すが、周りは一切見んなよ。』

今まで、鏡でフォームを見ながらのシャドーが多くった為か、3人とも集中しきれていないようだ。

山本さん

『お前ら、ぎこちねえなあ（笑）
パンチが当たりそうな所に、目の焦点を合わせてみる。
そしたら集中できつかもしんねえからよ（笑）』

3人は、さつきより集中しているようだ。

内海さんが、康平の頭を軽く叩く。

『お前、見物してる余裕はねえぞ（笑）』

康平

『す…すいません！』

内海さん

『オメエは康平だつたな。』

康平は、今日から覗き見スタイルに変えたばかりだから、今から俺の個人レッスンだ。
まあ、俺は優し過ぎるのが欠点だからよ、リラックスして覚えればいいさ（笑）』

康平は、顔にこじ出さなかつたが、微妙に不安な気持ちになつた。

ひたすらボクシングダンス

内海さんが康平に指示を出す。

『オメエは、鏡を見ながらシャドーだ。
さつきあの3人がやつてた事をするんだ。
とにかくフォームだけを意識して、シャドーをしき』

康平は、手足の位置を確認しながら構える。

内海さん

『構えた時は、2つの点を意識するんだ。
一つは、正面から自分を見た時、両腕が胴体と同じラインにある事。
もう一つは、下つ腹に少し力を入れている。』

内海さんが、話を続ける。

『パンチは、打ち始めの時に、自分の腕をアバラで押し出すのを意
識してから出すんだ。』

康平は、言われた通りにやつてみたが、内海さんのイメージと違つ
つうだ。

『康平……ちょっと肩の感じが違つて。
肩はなあ、

アア、面倒臭え!』

言葉に窮した内海さんは、突然手を使って、強制的に康平の肩を修正する。

肩関節を、前に入れた状態にしたかったようだ。

内海さん

『感覺を、言葉にすんのは難しいんだよ。

俺を困らせたくなかつたら、今のフォームを崩すなよ（笑）

それと、康平はパンチを打つ時、顎が上がり気味だからそれも直せ。』

』

『ハイ！』

康平は、慎重にパンチを打つ。
構えを変えてパンチを打つと、違う筋肉を使うようで、康平は力みまくっていた。

内海さん

『ハハハ！

養成ギブスでもしてるような、力みっぷりだな。フォームを変えた時は、そんなもんだ（笑）

俺あ、梅ツチと違つて優しいからよ。

リラックスは注文しねえから、とにかくフォームを意識して10ラウンド、シャドーを続けろや。』

康平
『ハ……ハイ！』

山本さんと内海さんは、4人が見える所にイスを持ってきて、座りながら見ていく。

山本さん

『健太とタケ（有馬）は、左右の動きをもつと使ってみる。打った後、すぐに動け！』

内海さんは、康平だけを見ているのが退屈なようだ、白鳥にアドバイスをする。

『翔！ オメエはパンチを打つ時、踏み込みをもつと大きくしない。』

白鳥は、自分なりに大きく踏み込む。

内海さん

『まだ踏み込みが足んねえぞ。
オーバーな位大きく踏み込め。』

山本さん

『そういう、実戦になるどいつもして体が萎縮すからよ、シャドーの足の動きは大きくしろや。
健太とタケもだぞ！』

内海さんと山本さんは、談笑しながらも、時折4人のチェックする。

山本さん

『健太、左のガードの位置は口の前に置け。』

右効きと戦う場合だつたら、ガードはその位置だ。

それと、今は左ストレートを打つたら、全部右フックまで返せ。前足の悪い癖を直してえからよ。』

内海さん

『康平、ちょっと腰の位置がおかしくなつてきただぞ。左の腹筋をもう少し前に押し付ける。』

山本さん

『ん？ 翔は手と足のタイミングがズレてつぞ。踏み込む時、ジャブが当たるタイミングで前足を着地せろ。すつと2発打てつかりよ。タケ（有馬）もズレてるみてえだから、2人とも前足の着地のタイミングを意識しろ。』

シャドー ボクシングは、仮想の相手をイメージしながら、ひたすら1人で動くトレーニングだ。

実戦経験のない1年生達は、相手のイメージなど仮想できるハズもなく、シャドー ボクシングというよりも、ボクシングダンスと言つた方がよさそうだ。

何かを打つわけでもなく、ずっと1人で動くのだから、長いラウンドを続けるには、忍耐力が必要だ。

ようやく、10ラウンド……いや、最初から数えれば13ラウンドのボクシングダンスを終えた1年生達は、次の練習の指示を仰ぐ。

山本さん

『オメエら3人は、最後いい感じだったから、他のトレーニングはしない方がよさそうだな。もう少し、この感じを体に覚えさせてえから、もう3ラウンド、シヤドーをやって終わりだ。』

内海さんも、軽い口調で康平に指示を出す。

『康平、オメエも3人に付き合つて、もう3ラウンド鏡の前でやつて終わるぞ』

こつして1年生達は、ずっとボクシングダンスだった練習を、更にボクシングダンスで締めくくる事になった。

ファミレスで講義

「この日の練習が終わって着替えた1年生達に、内海さんが話し掛け
る。

『オメハラ、質問したい奴はいるか?』

康平以外の3人は、すぐにでも質問しちゃうな感じだ。

『おこおこ、こつや長くなつそつだぜ』

山本さんが苦笑いする。

内海さん

『このクソ暑いのに、ここにいるのもイヤだしな。

.....

しゃあねえ、駅前のファミレスに行くぞー。』

山本さん

『心配すんなつて。金は俺達が出しからよ。ただ、少しほ遠慮しろ
よ(笑)』

駅前のファミレスに入ったが、エアコンがかなり効いている為か、
少し肌寒い程だ。

1番奥の席に座つて、それぞれ注文をする。

内海さん

『オメハラ、今は練習中じゃねえんだからよ、もつとくつろげや。』

有馬

『あの質問いいですか?』

山本さん

『おひ、何でも聞いてみる。』

有馬

『左ジャブの事ですが、狙わないで打つ意味を、あまりよく分かってないんスけど……』

山本さん

『じゃあ、逆にオメハラに質問するが、ボクシングのパンチの中で一番弱いのは何だ?』

健太

『ジャブだと思います。』

内海さん

『そりだ。ジャブは弱いからカウンターを狙われ易いんだよ。』

康平

『カウンター…ですか?』

山本さん

『カウンターってのは、簡単に言えば、相手のパンチに合わせて打

つパンチの事だ』

内海さん

『カウンターは、当たればそれで試合が終わってしまう位のダメージがある。

だが、失敗したら逆に相手のパンチをもらってしまうリスクもあるんだ。』

山本さん

『ジャブに合わせてのカウンターだったら、失敗しても、もう少しのジャブだからリスクは少ないって訳だ。』

健太

『あのう、だつたらジャブは打たない方がいいって気がするんですけど……』

内海さん

『ハハハ！

そんな単純に考えんなよ。

ジャブは、試合を作っていく上で重要なパンチだ。距離を図つたり、相手の体勢を崩したりするのに、結構使えつぞ。それにジャブが当たった後に、強いパンチを追撃すれば、カウンターに負けない位のダメージを『えられるからな。』

山本さん

『ところで、本題に戻すがよ、ジャブを狙わねえで打つってのは、そのカウンターをもらわねえ為に打つんだよ。』

有馬

『でも、狙わないで打つパンチって当たるんですか?』

山本さん

『お、メシがきたから食いながら話すだよ。タケ!俺のワインナーを箸でとつてみろ。』

『え!いいんスか?』

有馬は、箸でワインナーを一つ摘んで口にする。

山本さん

『今、ワインナーを摘むとき、箸を持って狙っていたか?』

有馬

『いや、何となく取りましたけど.....』

山本さん

『そりだろ!』

パンチだって、練習していれば、何となく打つても当たるみつに打てるんだよ』

内海さんが笑いながら話に割り込む。

『俺にも喋らせひよ(笑)

「狙わないで打て!」

てこう表現に語弊があつたかもな。

俺達が言いたいのは、当てようと思わねえで、打てって事だ。
要するに、カウンターに氣をつけてジャブを打てって言いたいんだ
よ。』

山本さん

『やうやく、当てる事に集中すると、ダイフェンスが疎かになるか
らなー!』

内海さん

『他の奴にも、意識させたいがな。

ただ、タケは体重が軽いのに、身長は一七〇位なんだろ?』

有馬

『はい、体重50キロで、身長は一七一センチですか』

山本さん

『オメエは、その階級にしては身長タケHからよ、特にジャブを武器にさせてえんだよ。』

有馬

『はい、頑張ります。』

内海さん

『おっと、メシが冷めちまつからよ、Tシャツと食つちまつひ。』
質問はその後だ。』

ファミレスでの講義はまだ続きやつである。

正直者が馬鹿を見ない世界

食事が終わった6人は、一息ついた。

内海さん

『オメエら、帰りは大丈夫か？

電話したい奴がいれば、俺の携帯貸すからよ。』

白鳥

『ス、スイマセン。では少しお借りします。』

内海さん

『……ああ、いいぜ』

白鳥は、丁寧にオジギすると、電話をする為に席を外した。

山本さん

『まだ6時半だぜ……

あいつ、過保護な家の坊っちゃんか？』

有馬

『いや、そんな事はないッスけど……』

内海さん

『何か事情がありそうだな……

まあいい、他に質問したい奴はあるか？』

健太

『今日の練習で、左のガードを口の前に置くよつて言わされましたけど、何か理由があるんですか？』

それと、当たらなくとも左ストレートの後は右フックを返すよつて言われました。それも一緒に教えて頂きたいです。』

内海さんが、少し悩んだ後質問に応える。

『これは、実演した方がよれやつだから、明日練習の時に教えるからよ。』

『いや、実演する勇気は俺にもねーからな（笑）』

白鳥が戻ってきて、内海さんに携帯電話を返す。

内海さん

『翔、オメエは訊きてえ事はネエのかよ？』

白鳥

『あの……相手に近づく時に、ジャ、ジャブを2発以上打つよつて言われたんですけど、つ……理由があれば教えて頂きたいです。』

内海さん

『ふつ（笑）

そんな緊張すんなよ。』

山本さん

『さつき、ジャブについて話したよな？』

白鳥

『はい。ジャブはカウンターを狙われ易いって聞きました。』

山本さん

『たがな、2発続けて打つと、カウンターはもういくいんだよ。あくまで、確率的な話だがな。オメエは、背が低いだろ？だから遠めの距離から、ジャブを2発以上打つて、相手との距離を詰めたいんだよ。』

白鳥

『わかりました。あ……あと、うちの学校ではパリーイングを教えないんですけど、何か理由があるんでしょうか？』

内海さん

『おいおい、緊張している割に、遠慮がない奴だなあ（笑）パリー（イング）はどんな防御か知ってるのか？』

白鳥

『本屋で立ち読みして、相手のパンチを手で払う防御だつて知りました。』

内海さん

『まあ、大まかに言えればそんなどころだ。主に相手のストレーント系に対する防御だがな。ちょっとパリーを多用すると危険な所がある。』

康平

『それは、どんな所ですか？』

内海さん

『レベルが上がつてくると、パンチの軌道を変えて打つ奴も出でくるんだよ。』

具体的には、打ち始めがストレートなのに、途中からフックになるのが多いけどな。』

ストレートだと思ってパリーしたら、外側からガラ空きの顎にフックが直撃するっていう寸法だ。』

山本さん

『多分梅ツチも、それを避ける為に教えてねエと思つぜ。』

内海さん

『康平は、何か質問はネエのかよ?』

康平

『…………あの……今、左フックを習つていいんですが、パンチが届かない気がするんですけど……』

山本さん

『お前ら、梅ツチから左フック…………ああ健太は右フックだったな。そのパンチの踏み込み方は習つてんのか?』

有馬

『いいえ、まだです。』

山本さん

『これも実演が必要だから明日の練習の時だな。』

康平

『わかりました。』

……それと、もう一つ2人に訊きたいのですが……』

内海さん

『何だ、遠慮しねえで言つてみろよ。』

康平

『内海さんと山本さんは、戦つている時、怖くないんですか?..』

内海さんと山本さんは、顔を見合わせる。

内海さん

『怖くねえわけねえだろ。』

相手も必死だからな。』

山本さん

『そうそう、試合の時なんかは特にそつぞ。

開場にいる奴等が、全員自分より強そうに見えるしな(笑)』

内海さん

『試合直前なんか緊張してよお、簡単なパンチでも、もうこいつを
気がするんだぜ(笑)』

健太

『あまり信じられないッスね(笑)』

山本さん

『アホ!』

『△は戦つた事のある奴しか分かんねえ心境だ。』

康平

『でも、どうやって克服するんですか?』

内海さん

『克服なんかまだ出来ねえよ(笑)』

ただ、試合までに、真剣にやつてきた練習だけが頼りだな。』

山本さん

『それも、無意識に出来るようになるまで、反復して覚えた技は、試合でも裏切らねえで出るからよ。』

内海さん

『そりゃ、俺むしの前の試合、1ラウンド目に左フックをもらって意識が飛んだんだが、気が付いたら判定勝ちだつたんだよ(笑)多分体が無意識に動いてたんだろうな。』

山本さん

『他の事はわからねえが、ボクシングは、正直者が馬鹿を見ない世界だと思うがな。』

効率のいい練習を、眞面目に頑張ってる奴が一番強いと思うぜ。』

内海さん

『そうだよ。なあ〜んにもしねえで、強い天才なんか、いてたまるかって信じねえと、やってられねえよな(笑)』

亞樹の誕生日

次の日の午前中、康平は健太からの誘いかつて、学校の近くの図書館へ向かつて歩いていた。

康平

『まさか、お前から図書館へ誘うとはな。』

健太

『俺が勉学に用覚めた……ってわけじゃねえのは判るよな?』

康平

『まあ、今週の日曜日に綾香達と映画を見に行くから、テンパらないうちに、少し馴らしておきたい…………ってとこか?』

健太は苦笑いして返す。

『まあ、俺と長い付き合いだつただけの事はあるな。
でも、昨日の帰りにお前から、綾香の兄貴があの内海さん……て聞いた時は、まさかと思つていたけどビックリしたな(笑)』

康平

『まあ、練習中はそんな事考えてる余裕はねえけどよ(笑)
それと、亞樹に連絡してねえから、綾香がいるかは分かんねえぞ。』

健太

『いなければいねえで、仕方ねえよ。どうせ、夏休みの宿題に手を付けなきやならねえんだからさ(笑)』

そうしているうちに、図書館についた。

2人は、空いている席を探す…………といつよりも、勉強している2人組の女の子を探していた。

康平

『残念だな。今日はいねえようだぞ。』

突然後ろから声がする。

『君が探している子達は、真後ろにいるんじゃないかな?』

康平達が振り向くと、亜樹と綾香が笑いをこらえて立っていた。

康平

『ヒテヒな。ビックリさせんなよ(苦笑)』

亜樹

『そんなんに、ビックリするなんて、何かヤマシイ事でもあるのかな
(笑)』

康平

『あ……あるわけねえじやん。

そうだよなあ、健太。』

『俺達2人の時は、ヤマシイ事ばっかりだけど……
今回は無いという事にしちゃますか(笑)』

健太は、わざと意味深な言い方をした。

亜樹

『まあ、いいわ。

康平は、監視役がいないと勉強しないタイプだから、今日も一緒に勉強してあげるよ。』

綾香

『あたしも、監視してもらわないと、勉強しないタイプなんだけど（笑）』

亜樹

『綾香はいいのよ。親友だからね』

健太

『じゃあ、康平は何なのさ？』

亜樹

『ん~…難しい質問ね。

要領が悪くてほつとけない人…って感じかしら（笑）』

健太

『それは言えてる（笑）

ホントぶきつちよだから』

綾香

『チヨツト2人共ヒドいんじゃない？』

康平

『いいんだよ！2人には、毒舌以上に世話をなつてつから（苦笑）』

健太は、康平をネタにするときの前でもテンパらないでいられる
ようだ。

90分程勉強したであろうか。誰が言い出したわけでもないが、4
人はロビーへ休憩に行く。

健太
『ああ、久々勉強したって感じだな』

綾香

『健太君は、宿題全然やつてなかつたの？』

健太

『同い年なんだから、呼び捨てでいいよ（笑）
今までだったら、夏休み終わり間際まで、一緒に宿題をしないでい
てくれる友達がいたんだけどね。』

康平

『悪かったな、裏切り者ですよ。
でも、いいもんだぜ。夏休み前半で、宿題がほとんど終わつてつと
な。』

亜樹

『康平！』

自分の力で宿題をやってたような、誤解を招く言動は、控えた方が
よろしくてよ（笑）』

健太

『そりそり、亞樹がいなかつたら、数学の課題はまだ白紙だつたかもな。』

康平

『お前ら、俺を攻撃する時だけ、妙に連携とれてんだよな。まあ、宿題がここまで進んだのは、亞樹さんのお蔭なんだよ』

健太

『そりいえば康平は、亞樹にお礼がしたいから……って、誕生日を知りたがつてたけど……』

康平

『え？』

綾香

『亞樹の誕生日は、9月9日よ。』

亞樹

『ちょっと綾香……』

健太

『まあ、プレゼントするかどうかは、康平の問題だしとあ、亞樹はもうつたら素直に喜べばいいんじゃねえの？あつ…、でも康平は女の子にプレゼントなんて初めてだから、あんまり期待しない方がいいと思つけど（笑）』

綾香

『健太は、プレゼントしたことあるの？』

健太

『……まあ……俺の事はまず置いといてだな……』

康平

『オメエだつてねえくせにさ、自分の事は棚に上げまくつてるよ全
く。』

亜樹

『康平は、部活と勉強漬けで貧乏人なんだから、財布と相談して。
それと、君にセンスは無いんだから、プレゼントに自信がなかつた
ら、無理して買わなくていいんだからね。』

健太が笑いながら話す。

『自分がもうう презентについてアドバイスする人つて、なかなか
かいねえよなあ。』

綾香

『そうね。それに、ケナしながら励ます人も珍しいわね（笑）』

康平

『オ……オメエら宿題進んでねえんだから、早く机に戻りつけ。』

亜樹

『そうよ、綾香は今日部活が休みだけど、君達はこれから部活なん
だから、少しペースを上げるからね！』

ボクシングは理詰め？

午後2時過ぎ、康平と健太は部活に向かう為、早めに勉強を切り上げた。

亜樹

『あれ、2人とも部活は3時からじゃないの？
すいぶん早いのね。』

康平

『まあ…遅刻すと怒られつからよ。』

綾香

『うちの兄貴かなあ…
あの人私には優しいけど、気が短いからすぐに手が出るんだよね…
大丈夫だった？』

健太

『俺はビンタを食らつたけどな（苦笑）…
あ…でも、悪いのは俺だったから気にすんなよ。』

康平

『そうそう、ワリイのは健太だぜ。
それに、練習が終わると気さくな感じだしぃ。』

綾香

『…そり…2人が納得してくるんだつたら気にしないよ（笑）
それと、日曜日は午前10時に駅で待ち合わせでもいいかな？』

康平

『ああ俺達は大丈夫だぜ』

日曜日に何を着て行こうかと、会話をしながらボクシング場に着いた2人だったが、有馬と白鳥は、まだ40分前なのに、既に着替えまで終わっていた。

2年生達は、まだ練習を続けている。

森谷先輩は、まだミット打ちの最中だ。

ミットを受けている内海さんが怒鳴る。

『テメエは先手で打たねえから、いつも凡戦なんだよ。もっとミットに反応しや』

サンドバッグを打っている相沢先輩にも、

『勘が悪いんだったら、もっと動けやー』

と山本さんの檄が飛ぶ。

大崎先輩は、何か覚えた技があるようで、1年生達には見向きもせず、インターバルの休み時間も、ずっとシャドーで反復している。

自分達以上に罵声を浴びながら練習している先輩達を見て、康平と

健太は、日曜日の事など頭から消えていった。

会話をしながら準備ができる空氣ではなかつたので、1年生達は、先輩達の練習を見ながら黙つてバンテージを巻き、柔軟体操を始める。

よつやく先輩達の練習は終わつたが、康平達は、昨日より緊張していた。

山本さん

『オメエら、気合には入つてゐるようだが、硬くなんなんよ（笑）』

内海さん

『そう、今、1年達がしなければならねえのは、フォームを固める事だからな』

山本さん

『そして、梅ツチが戻つてきたら、俺達とスパーすんだが、その時にキチンと打てるかが、当面の目標だからよ。』

内海さん

『いいか！

練習始める前に、何に気を付けて練習をするか、頭に叩き込んでけよ。

じゃあ、ブザーが鳴つたらシャドー開始だ。』

山本さん

『昨日と同じで、最初は鏡の前で3ラウンドのシャドーだ。』

康平、今日はオメエも他の奴らと一緒にだ。』

こうして、鏡の前でフォームを意識しながら3ラウンド。鏡を見ないでリングの中で4ラウンドのシャドーを行つた。

山本さん

『今日は、リングの中でのシャドーは4ラウンドで終わりだ。次は、サンドバッグ打ちを4ラウンドするが、その前に踏み込んでのフックを教えるからな。』

内海さん

『全員サンドバッグから少し離れて構えてみる。』

前の手のフックで踏み込む時はだな、タメを作りながら前足の踵から着地させるんだ。

そして、つま先を着地させながらフックを振る。

意外と簡単だから、オメエらもやってみる。』

4人共、スマーズに出来そうだ。

山本さん

『ようし。フックは力いっぱい打てよ。サンドバッグをぶつ壊しても構わね〜からな(笑)』

内海さん

『2ラウンドはフックだけ思いつきり打てよ。残りの2ラウンドは、ストレートも入れて打つんだ』

こうして練習が進んでいったが、筋トレの前に、内海さんが口を開く。

『昨日健太が質問してた左ガードの位置の事だが、他の3人もサウスポーと戦う時もあるから、みんな聞いておけ。』

健太は俺と戦うつもりで構えてみろ。』

健太は言われた通り、内海さんと対峙する。

内海さん

『健太、お前習つてねえかも知んねえけど、俺に左のフックが打てるか?』

健太

『……いいえ、怖くて打てないです。』

内海さん

『何で怖いんだ?』

健太

『……内側から……右ストレートを打たれそうな気がして……』

内海さん

『不安な顔すんなって。』

俺だつて怖くて、オメエに右フックは打てねえんだからよ(笑)
オメエら分かつたか?

相手は、怖くて利き腕のフックは打てねえんだよ。』

山本さん

『サウスポーの左パンチで打つ確率が高いのはストレートだ。
まあ、ボディーブローもあつけどな。』

内海さん

『だから、右ガードを口の前においておけば、左ストレートをもう
う確率は減るわけだ。』

山本さん

『あくまで、一般論に近いが知つて損のない知識だからな。結構ボ
クシングは理詰めだからよ。』

健太

『あの……、俺は左ガードを口の前において、右ストレートを警戒
すればいいんですね。』

内海さん

『当たり前だろ。オメエはサウスポーなんだからよ。

！

『そうか、オメエに説明する為の、実演だつたんだよな（笑）
まあ許せや。

あと、返しの右フックは明日説明すっからよ。
オメエらも、こう暑いんじや頭も働かねえだろー。』

内海さんは、返しの右フックの説明を放棄してしまったが、逆につ
者は、誰もいなかつた。

苦労した3年生達

内海さんと山本さんが指導する練習は連日続く。

というのも、石山先輩と兵藤先輩が、インターハイ全国大会で勝ち進んでいるので、梅田・飯島の両先生が部活に来れないからだ。

今日の準々決勝も2人は勝ち残ったようで、ボクシング部員達もその話題で盛り上がっている。

練習が終わった1年生達に、内海さんが話し掛ける。

『これで石山と兵藤は、3位以上が確定か……。

あいづらは、俺達が高校3年の時に入学してきたんだよ。』

健太

『2人とも……、いや清水先輩も含めて全員強くなりそうな感じだつたんですか?』

山本さん

『いや、兵藤はセンスありそうな感じだったが、清水と石山はオメエより酷かつたぜ。』

内海さん

『そうだよな。あの2人は毎日梅ツチに悲惨な程、怒鳴られてたんだよ。』

山本さん

『俺も、兵藤以外は部活を辞めてしまつて思つてたよ。』

2人が初めてスパーリングしたのを見た時は、爆笑だつたぜ（笑）』

有馬

『どんなスパーリングだつたんですか？』

内海さんが、吹き出しながら説明する。

『石山は背が低いだろ！

パンチが届かねえもんだから、何を思ったか、両手を伸ばしたまま、相手に突っ込んで行つたんだよ。それも下を向いたままな。』

山本さん

『俺も、アイツは何のスポーツをやってんだろう……って、一瞬思つたぜ（笑）』

内海さん

『梅ツチも、怒鳴るのを忘れて畳然としてたんだよな（笑）』

山本さん

『清水も傑作だつたんだぜ（笑）

ビビつて目を瞑つたままパンチを出してたんだよ。』

内海さん

『そうそう、そして相手が右側に逃げてんのに、目を瞑つたまま5発位そのままパンチを出してたんだよな（笑）』

山本さん

『それも、力が入つてガチガチだつたから、壊れたオモチャみたい

だつたぜ。』

康平

『信じられないですね。
清水先輩も、右手の骨折がなければ、県大会は優勝しそうだつたんですけどね』

山本さん

『清水にも、いい思いをさせたかつたよな。
アイツは、ミテクレはああだけどよ。
ボクシングだけは眞面目だつたんだけどな。』

内海さんは、笑いながら、

『そうそつ、清水の歩き方つて、こんな感じだつたんだよな。』

清水先輩を真似て、がに股で肩で風を切るよつた歩き方をする。
清水先輩にそつくりな歩き方だ。

1年生達は、笑うに笑えず困っていた。

山本さん

『俊也（内海さん）やめとけ、1年達困つてんぞ（笑）』

内海さん

『そうだな。オメエらは心の中で笑つとけ。』

山本さん

『あと、お前ら勘違いすんなよ。
兵藤がセンスいいって言つたけど、アイツも苦労してんだからな。
アイツは前に剣道やつててよ。右利きなんだが、足の位置が同じだ
からつて、サウスポーになつたんだよ』

有馬

『2年の相沢先輩に聞きました。』

山本さん

『だつたら話は速いな。

左手のリストは強かつたけど、左ストレートがある程度強く打てる
まで、結構かかつたんじゃねえか?』

内海さん

『俺らが国体で引退する秋までは、ペラッペラな左だつたぜ(笑)
ただ剣道やつてたせいか、足捌きは良かつたけどな』

山本さん

『この前、兵藤の練習見てたら、オッカねえ左打つてたよな。
それも、ノーモーションからよ。』

内海さん

『あの左があるから、得意の右フックがよく当たるんだろうな。』

『…………あー!』

健太は何かを思い出したようだ。

内海さん

『どうした健太?』

健太

『2日前に、返しの右フックを質問したんですけど……、今教えて頂けますか?』

内海さん

『バカヤロ!』

変な時に思い出すんじゃねえよ。』

健太

『す……すいません。』

山本さん

『たぶん俊也は、言葉で表現するのがメンドクセーんだぜ(笑) 感覚で覚えているのを言葉にするつて、結構難しいからよ。まだ、俺達は明日も来るんだから、宿題にしろよ。但し、この件を説明すんのは俊也だからな(笑)』

内海さん

『あつ……ズリ~ぞてめえ。』

そもそも言に出しつづけ賢治(山本さん)の方じやねえか?
まあいいや。明日……じゃなくて、じいじいの間に説明すつか
覚悟しとけよ(笑)』

カウンター

2日後の土曜日、昨日も勝ち残っていた石山先輩と兵藤先輩の試合結果が、練習前に教えられた。

2人とも、判定で惜しくも準優勝で終わったようだ。

内海さん

『残念な結果だが、国体もあっからな。
まあ、オメエらに言つてもしじうがネエんだけどよ。』

健太、チョット来い。』

呼ばれた健太は内海さんの前にいく。

内海さん

『健太、俺にユックリ左ストレートを打つてみろ。
オメエらも見てるよ。』

内海さんは、健太が左ストレート打つた時、後ろ足（右足）だけ半歩右側にズラす。

後ろ足が右にズレた分だけ、顔も右側にスライドし、パンチをかわした形になっている。

ズラした後ろ足を、すぐに前に蹴りながら右ストレートを打つ。

健太の左ストレートをかわして打つ、右ストレートのカウンターである。

内海さん

『これは1つの例だが、オーソドックス（右構え）対サウスポーの対戦は、こんな感じのパンチのやり取りが多いんだよ。

健太、もう1回左ストレートを打て！

その後、右フックをすぐに返してみる。

あ…右フックは寸止めだぞ（笑）』

健太は、言われたように左ストレートを打った後、すぐに右フックを返す。

すると、さっきのように左ストレートをかわして右ストレートを打とうとした内海さんに、健太の右フックが当たりそうになった。

内海さん

『これで分かつたか？

オーソドックス対サウスポーの戦いで、健太みてえにフックを返すと、これがあるんだよ。』

健太

『内海さんのカウンターも怖かったです。』

内海さん

『バカヤロ！

俺が言いてえのは、オメエの返しのフックがあつと、カウンターを狙う方はもつと怖えんだよ。

下手したら、それで倒されて終わりになるからよ。』

有馬

『返しのフックの効果は理解出来たなんですが……

今、内海さんが打ったカウンターも習いたいです。』

内海さん

『今の段階でカウンターを教えると、口クなことになんねえから駄目だな。

今のオメエらに必要なのは、先手で攻める感覚と技を覚える事なんだよ。』

健太と有馬は、少し納得しない表情だ。

山本さんも、話に加わる。

『先手で攻撃出来ないカウンターパンチャーなんて、全然怖くネエんだよ。

2年の森谷がいるだろ、アイツは2年の中じや 1番勘がいいし、パンチも見えている方だ。

アイツはカウンターを狙い過ぎるとこりがあつて、なかなか自分から攻めねえ。

全体的に待ちのボクシングなんだよな。

だから、下手な相手にもペースを合わせてしまつて、凡戦が多いんだよ。

まあ、この話は梅ツチから聞いた事なんだけどな。』

内海さん

『森谷の奴もそれを自覚してつから、今は先手で打つ技のバリエーションを増やしていくところだ。アイツが先手で攻めながらカウンターを打てるようになると、レベルが数段上がるだろうよ』

山本さん

『 そ、そ、そ、う、待つてれば攻められるし、逆に攻撃すればカウンターが飛んでくる。』

相手にしたらタマッタもんじゃねえんだよ。

ただ、レベルが上がつてくると、そういう戦いをする奴が、「ロゴ口」いるから嫌なんなけどな（苦笑）』

内海さん

『 今日、オメエは何を目標に練習してんだ。』

健太

『 次のスパーリングまで、翻つたパンチを打てるようになる事です。』

山本さん

『 だつたら、それに集中する事だな。』

今後、イヤつて程技を習つんだからよ（笑）』

応援する兄貴

内海さん

『よし、俺の説明も終わつたし、今から練習開始だ。明後日から、梅ツチ達が練習に来るから、俺達が教える練習は今日が最後だ。』

健太

『残念ですね。』

山本さん

『まあ、直接教えるのが最後なだけで、明後日迄は来るからな。今日は、シャドーとミットメインの練習だからよ。まず、最初にシャドーをフーラウンドだ。鏡の前でのフォームチェックが3ラウンドと、リングの中での4ラウンドだ。』

練習開始のブザーが鳴り、1年生達は、鏡の前でシャドーを始めた。

シャドーが終わるつて、山本さんが次の指示を出す。

『これからミットと形式練習をやるからな。狭いから、サンドバッグを全部外して脇に寄せるべ』

6人全員でサンドバッグを脇に寄せると、狭い練習場も、かなり広くなつた。

内海さん

『最初は、翔は俺がミットを受ける。タケは賢治とミットだ。』

山本さん

『康平と健太は形式練習だから、保護具とマッチはつけておけ。』

内海さん

『康平は、覗き見スタイルを崩すなよ。』

感覚的には、両方のグローブの間から、常に相手を見る感じだぞ。』

練習は再開された。

康平と健太は、形式練習に集中しているので、ミットの様子は見えないが、内海さん達の声を聞く限り、それぞれの課題を反復しているようだ。

インターバルの最中、山本さんが康平達にアドバイスする。

『ブロックした時は、前の手でフックを打ち返すイメージだぞ。すると、いいバランスでブロックできるからよ。』

次のラウンド、康平は左フックを打ち返すイメージで、ブロックをしてみた。

腰が引けずに、勝手に6・4のバランスが保たれていたようだった。

何気無い言葉の一つで、案外コツを掴んだりするものだ。

健太もハマつたらしく、フットワークを使わずにブロックだけを使

つて康平のパンチを防ぐ。

次のインターバルでは、内海さんが笑いながら話す。

『おいおい、少しはフットワークで避けろよ（笑）

まあ、今田はブラックのコツを掴んだようだから、大目に見てやるがな。』

形式練習が5ラウンド終わった時、康平は内海さん、健太は山本さんとミット打ちをする事になった。

有馬と白鳥は形式練習だ。

内海さん

『康平。さつき俺が言つた事、忘れんなよ。

常にグローブの間から相手を見る。』

康平は、覗き見ガードで初めてのミットである。

内海さんが右手を上げた。

片手を上げた時は、ジャブを打つサインなのは、梅田先生と同じである。

康平は、左ジャブをすかさず出す。

今までのように、左手を前に出す構えではなく、左肘を体に付けているスタイルである。

左腕の遊びが使えない分だけ、ジャブにスピードが乗らない感じだ。

康平は、サンドバッグ打ちや形式練習でも少し違和感を感じていたが、ミットを打った時、ハツキリと打ちにくさを実感する。

内海さん

『このガードだと、ジャブは打ちにくいだろ?』

康平

『はい。』

内海さん

『左肘を、体に付けてるからな。仕方ねえんだよ(笑)』

左ジャブは、押すパンチでもいいから、しつかり肩を回して打てよ。そして、左腕の裏側の筋肉を使う事を意識してパンチをしてみろ。』

『

康平は、もう一度ジャブを打つたが、前より重みが増したような感触が、左拳に残った。

何度も左ジャブを繰り返した後、内海さんが両手を添えて構える。

右ストレートを打つサインなので、康平はそれを打つ。左ジャブよりは、スマーズに打てるようだ。

ワンツーストレートも何度も打つた後、内海さんが康平に、指示を出す。

『次は、ワンツーを打つたら体の捻りを戻さないで、腕だけ戻せよ

.....

要は左フックを打つ準備をしている。』

内海さんの指示通り、康平は、ワンツーを打った後、右腕だけ戻して左フック打てる体勢を作る。

内海さんの左手が、横向きに上がる。

康平はそこに左フックを打つ。

アッパー気味のフックなので、突き上げると言った方が適切かも知れない。

内海さん

『次は、ワンツーからの左フックをそのまま続けて打つぞ。』

康平は、指示通りに打つたつもりだが、最後の左フックが上手く打てない。

何度も続けたが、左フックを打つのが遅く、パンチも弱い。

内海さんは首をかしげていたが、そのうちラウンド終了のブザーが鳴った。

内海さんはインターバル中考えていたが、ラウンド開始のブザーが鳴った後、康平に話し掛ける。

『康平、お前ストレート系のパンチを少し上向きに打つてみろ。』

康平は、ワンツーストレートを少し上向きに打つ。

不思議にも左フックがスマーズに打てる。

ワンツーを打った直後でも、足が安定しているので、すぐに左フックが打てる感じだ。

内海さん

『いい感じじゃねえか。

ただ左フックを打つ時に、胸を開くなよ……
いや、背中を広げる感じで打つてみる。』

ズバーン！

ボクシング場にいい音が響く。

内海さん

『まあこんな感じだろ。

左フックは、打てば打つ程強く打てっからドンドン打てよ。』

その後、左アップバー や 左ボディーブロー を交えたコンビネーションを繰り返す。

5ラウンドのミット打ちが終わった。

内海さん

『コンビネーションを打つ時、康平は左のパンチを強く打つのを意識した方がいいな。

その方が連打しても、バランスが安定しそうだからな』

今日の練習が終わり、帰ろうとした康平と健太に、内海さんが呼び止める。

『お前ら、綾香と亜樹ちゃんの4人で映画を見に行くんだってな?』

健太
『はい……知つてたんですか?』

内海さん

『まあな。綾香の奴は、結構俺に喋るからな(笑)
でも、アイツが俺に男の事を話すのは初めてだつたんだぜ。
名前を聞けば、お前らじやねえか(笑)』

康平

『すいません。』

内海さん

『ハハハ、謝る事ねえさ。
オメエらなら、女に縁がなさいだし、逆に応援してやる気になつ
てるから心配すんな。』

山本さん

『だが気を付けるよ。』

男女の関係は、ボクシングなんかより難しいぞ(笑)』

お揃いのサンダル達

日曜日の朝4時、康平は、望んでもいらない時間に目を覚ます。

夏休み期間中は、土曜日の練習も午後からなので、朝のジョギングは日曜日を休みと決めていた。

単に目覚ましのアラームの設定を、昨日から変えていなかつただけなのだが、今日は垂樹達と映画を観る約束がある為か、再び眠れそうにはなかつた。

トイレに行って、鏡に映つた自分の顔を見ると、かなりムクんでいる。

昨日の夕飯でジュースを飲み過ぎたようだ。

康平は、最近ジョギングを始めて、発見した事が一つある。ジョギングをして汗をかくと、顔のムクミがとれるという事だ。

顔のムクミを除く為だけに、7キロもの距離を走つた康平だった。最近は、朝走るのが苦痛にならなくなつた。

家に戻つてからも、待ち合わせの午前10時までは、タップリ時間があるので、気が乗らないゲームなどをしながら時間を潰していくた。

9時50分頃、待ち合わせの場所に、康平と健太は落ち着かない感じで立っている。

2人共、半ズボンにタンクトップを着ているが、色はそれぞれ違っていた。

健太は、緑色のタンクトップに迷彩色の半ズボン、康平は黒のタンクトップに白っぽい半ズボンである。

今日着る服を、半ズボンとタンクトップしか思い付かなかつた2人は、せめて色だけでも違つたものにしようと、前日の夜に軽い打ち合わせをしていたのだ。

待ち合わせの10時を過ぎても、亜樹と綾香は姿を現さない。

10分程遅れて、2人は駅に来た。

デニムのショートパンツと淡いピンクのTシャツ姿の亜樹は、スラッソ長い足のせいか大人っぽく、一見大学生のようだ。

クリーミーイエローのワンピースを着た綾香は、可愛らしさを強調した感じである。

亜樹

『ゴッメイン。色々あつて遅れちゃつたけど……』

康平

『いいよ10分位（笑）』

綾香

『私が服に迷つてて、亜樹に付き合つてもらつたんだ……「ゴメンね。』

』

健太

『10分なんか遅れたうちに入んねえからさ（笑）』

それより、け 結構似合つてんじやん。』

綾香

『あ ありがとう。』

！』

2人とも、サンダルはお揃いなんだね（笑）』

『-----』

『昨日の夜、タンクトップと半ズボンは同じ物にならないように打ち合わせしたんだけどな。』

康平が苦笑にする。

『このサンダルって、この間、俺と康平の母ちゃん達が一緒にバーゲンで買ってたんだぜ……』
の人達も、せめて違う色のヤツを買ってくれりやよかつたんだよな。』

健太が、ため息をつきながらサンダルの解説をした。

亜樹

『バーゲンって戦場だから、お母さん達も余裕がなかつたのよ（笑）』

『

康平

『バーゲンって、行つた事あんの？』

亜樹

『お母さんに付き合つて何度も行つたけど、その時はみんな女を捨ててているわね（笑）』

康平は、この前の電話でのオバサンっぽい亜樹を思い出しつつ、少し笑ってしまった。

『何がオカシイのよ。』

気付いた亜樹は、康平を問い合わせる。

康平

『いや、…しつかりしてゐなあ…つて思つてさ（笑）』

綾香

『ふつ（笑）。』

亜樹つて、こんな綺麗でカッコいいのに、たまにオバサン臭いところがあんのよね。』

健太

『完璧な美人よりも、少しオバサンっぽい方が、なんか親しみ易くていいと思うけどな（笑）』

亜樹が苦笑する。

『他の事は分からぬけど、オバサン臭いのは否定できないわね。それはそうと、映画は11時から始まるんだっけ？』

綾香

『そつそつ、14時からも観れるけど、11時から観る方が、よりお金を使わぬいで遊べそうだしね。』

結構、あたしもオバサン臭いのかもね（笑）』

見知らぬ3人の男

長身でモテルのようになにカツコいい亜樹と、ハーフっぽくて可愛い系の綾香は、街を歩いていても、かなり目立つようである。

映画館へ行く途中でも、何人か、じつちを見ている。

一緒に歩いている康平と健太は、どこか勝ち誇った気持ちになりそうになるが、当の本人達は、全く気にしてない感じだ。

映画館は、大ヒット中のアニメの上映だったので、非常に混雑している。

康平と健太も、観たかった映画だったので、他の2人と同様に、満悦だったようだ。

ファーストフードの店で、遅めの昼食をとった4人だが、綾香が口を開く。

『これから、ゲーセンに行く前に、買い物を先にしようか迷つてんだけど……』

『あたしは、ビーナスでもいいけど…………君達は？』

健太

『俺達だって、どっちでもいいよなあ。』

康平

『ああ。』

綾香

『じゃあ、買い物を先に済ませるよ。
でも、女の買い物って長いからね（笑）』

近くの百均で、買い物を始めた4人…………だったが、康平が脱落しきかけている。

今日の朝、4時に起きて走ったのが、今になつて響いてきたようだ。
会話に合わせながら、2回程墮ちそうになる。

健太は、ワリと器用に買い物に付き合っていた。

亞樹

『康平、携帯のストラップを買いたいんだけど、君も探す義務があるんだから、チヨット付き合つて！』

康平

『え？』

亞樹

『君も、私の携帯にお世話になつてゐるんだからや。』

康平

『……まあ……それはそうだけじさあ……』

亜樹

『チョット康平を借りるわね（笑）』

健太

『いいけど、康平のセンスに過剰な期待はしない方がいいぜ（笑）』

康平は、苦笑しながら健太に言い返す。

『ツセ～よ。オメエだつて俺と似たようなレベルなんだからな。』

健太は綾香の小物入れを、一緒に探している。

不思議な面持ちで、亜樹について行く康平だったが、携帯ストラップのある場所で、亜樹が話し掛ける。

『康平、今日は朝走るの休みじゃなかつたつけ？』

康平

『い…色々事情があつたんだよ。』

康平は、目覚ましのアラームの設定し忘れから、ムクんだ顔を治す為に走つた事まで、亜樹に説明した。

亜樹

『ふつ（笑）

顔のムクニを除く為に走る人って、なかなかいないよね。』

康平

『今日は、恥ずかしい程ムクんでたんだよ（苦笑）』

勘のいい亜樹には、下手なゴマカシよりも、正直に話す方がつまらいくようだ。

亜樹

『今日は、早く帰った方がいいのかな？』

『とんでもねえよ！

健太と綾香も楽しそうだし、俺も帰りたくねえしさ

康平は、即座に否定する。

亜樹

『だつたら、2人に眠そうな素振りを見せないことね』

キツい口調のわりに、口許が弛んでいる亜樹を見て、康平は少しホッとした。

『誰かと思えば、亜樹じゃねえかよ！
男連れで楽しそうだな？』

少しイカツイ感じの、3人の男が康平達に近付いてきた。

康平は初対面だが、どうやら亞樹を知っている男達のようだ。
だが、少し険しい表情になつた亞樹を見て、康平も緊張する。

大事な親友

真ん中にいる男が、亜樹に話し掛ける。

『こんなところで、会えるなんてな。
男と一緒になんて、久し振りなんじやねえ?』

亜樹

『あなたには関係ないでしょ!
まだ中学の事、根に持つてんの?』

『藤枝、オメエ中学ん時、なんかあつたのか?』

右側の男が、藤枝という真ん中の男に質問する。左側の男も、不思議そうな顔で藤枝を見ている。

どうやら、藤枝という真ん中の男以外は、亜樹も初対面らしい。

藤枝は、少し慌てて言い返す。

『…ルツセえよ…

そんな事は、どうだつていいいんだよ。

ただ、オメエが付き合つ男のレベルが下がつ……!』

藤枝は、康平のタンクトップから出ている肩と腕をみて、話すのを躊躇したようだ。

藤枝

『……なんかやつてそりゃ体だけだ、もうすぐボクシングの県で2位だった人が来るからよ。確かライト級だったな。』

県でライト級の2位といえば、清水先輩と相沢先輩しかいない。別に会つたところで、戦うわけでもないから、康平は平然としていた。

藤枝

『自信満々な顔してられるのも、今だけだからな。なんせ、県で2位だからよ、2位。』

その時、後ろから誰かが藤枝の頭を叩いた。

『2位、2位つてウルセヒんだよ（怒）こつちは、優勝できなくて未だに悔しいんだからよ』

清水先輩である。

『おつ、高田に亜樹ちゃんじゃねえか？』

康平が頭を下げる。

『ひんちばッス！』

亜樹

『浩司さん（清水先輩）、ひんちば。』

康平

『清水先輩の事、知つてんの?』

清水先輩

『知つてるも何も、家が向かいだからな(笑)
でも亜樹ちゃん、高校生になつたら一段と美人になつちゃたよなあ。』

』

亜樹

『浩司さん!』

今のオヤジ臭いよ(笑)』

清水先輩

『といひで、コイツらと何かあつたんか?』

『俺達は何もないツスよ。

……俺達は……』

藤枝以外の男2人は、口を揃えて否定する。

亜樹

『藤枝さんに、携帯ストラップを売つている所を案内してもらつた
んだ。』

康平

『そ……そうですよね藤枝さん!』

藤枝

『あ……ああ、ただ、ここにストラップつけて、あまりいいのは置いてねえんだけどな。』

清水先輩

『ホントかよ……………』

まあそういう事にしてやるか（笑）

ところで、高田と亜樹ちゃんは付き合ってんのか？』

康平

『いや…………そういうわけじゃないんですけど…………大事な親友…………です。』

綾香

『亜樹が遅いから心配したんだけど、何かあったの？』

清水先輩

『今度は片桐に綾香けやんじゃねえか？』

健太も挨拶をする。

『こんちはッス！』

綾香

『浩司さん、お久しぶりです（笑）。』

清水先輩

『清水先輩』

『もしかして、4人でツルんでたんか?』

綾香

『はい、兄貴から映画のチケットを4枚もらつたんで、私が誘つたんです(笑)』

清水先輩

『俊也さんは、今こっちに帰つて来てんの?』

綾香

『はい。梅ツチから頼まれて、ボクシング部の臨時コーチみたいな事します』

清水先輩

『じゃあ、オメエら俊也さんからコーチを教わつてんのか?』

健太

『はい。昨日まで教わつてました。』

藤枝

『清水さん!...ここつらボクシング部員ですか?』

清水先輩

『そうだけど.....!』

『コイツらの体つきを見りやあ、想像つくと思ひや。まだ鍛え方が足んねえけどな(笑)』

藤枝の左側の男が、更に質問する。

『俊也さんて、あの内海俊也さんですよね?』

清水先輩

『まあな。俊也さんは、昔、リング以外でも暴れてたから、有名なんだよな(笑)』

・綾香ちゃん、何か言いたそうだけど、どうした?』

綾香

『……………いえ、ただ兄貴の悪名は、まだ伝わってるんだって思うと、恥ずかしいです。』

清水先輩

『まあそつ言うなって。

俺もお世話になつたんだからよ。

俺らは、これからナンパしに行くからさ。

この藤枝は、性格ワリイけど、女ウケのいい顔してつからな、コイツをダシにしてナンパするつもりさ(笑)

まあ、亜樹ちゃん、綾香ちゃんクラスの高望みは出来ねえけどな(笑)』

康平と健太は、

『頑張つて下さい。』

と、神妙な顔付きで、清水先輩を送り出した。

親友だからこそ

清水先輩達と別れた康平達は、予定通りゲーセンに向かった。

亞樹と綾香、特に亞樹が浮かない顔をしている。

事情を聞ける雰囲気でもなかつたので、康平が話題を変える。

『今日の映画は、前から見たかつたんだよな。

俺達、映画館で見んのは、久し振りじやねえか?』

健太
『ああ、2年位映画館に入つてねえもんな(笑)

綾香達は、結構映画館に行くの?』

綾香

『……え……うん、兄貴がよく映画のチケットをくれるんだよね。
ほとんどアニメだけど。』

健太

『内海や……俊也さんがアニメを見んのは想像出来ないね(笑)』

康平

『亞樹も、アニメは見ないイメージなんだよな(笑)』

亞樹

『失礼ねえ(笑)

あたしだつて見るわよ。ジャンルによるけどね。

康平が、ラブストーリーを見るより変じやないよ。』

康平

『そりやねえよ（笑）

俺達だつて、たまには見るよな？』

健太

『達をつけんな達を！

ただでさえ、一緒のサンダルなんだからよ（笑）』

康平

『オメエ、いつから亜樹の派閥になつたんだ（笑）

健太が亜樹と一緒にいると、決まって俺が攻撃を受けるんだよな。』

健太

『俺は、いつだつて強い方の味方だからぞ。』

亜樹

『何か、褒められているような、いないような……ビリューな感じだわね。』

綾香

『こういう時こそ、オバサン達を見習つて、ポジティブに考えた方がいいかもよ（笑）

あ…ゲーセンに着いたし、プリクラ撮ろうよ。お気に入りのがあるんだ。』

康平と健太は、亜樹達に付き合つて、プリクラやクレーンゲームをやつていたが、帰り際は亜樹と綾香の浮かない顔も、心なしか消えているようだつた。

家に着き、玄関にいる康平に、妹の真緒が、パタパタとスリッパの音を立てて走つて来る。

『兄貴、大変だよ！

今、山口さんて女人の人から電話がきてるよ。

凄い落ち着いた感じの声だつたけど、一体どつしちやつたの？』

康平

『わあーつたから、今行くからよ…………！

アホ、今の声、マルギコエじやねえか？』

真緒は慌てて、受話器を外したままにしていた。

笑いながら謝るポーズをする妹を、手で追い払つた康平が受話器を取り

【賑やかそうな家ね（笑）……今、電話大丈夫？】

康平

【ああ、今はダイジョウブじゃないみたいだ。】

康平のお父さんが、風呂場から上半身裸で、電話のある居間へ向かつて来る。

お父さん

『康平、トットと風呂入れよ。

ガス代もバカになんねえからな。』

康平

【悪こな（苦笑）……、後で掛け直すべき……いいかな?】

亞樹

【ここけど……】

「メンね、あたしからの電話なの!」……】

康平

【いって、気にすんなよ（笑）】

急いで風呂と夕飯を済ませた康平は、亞樹の家に電話する。

康平

【遅くなつて悪いね。ついに電話なんて初めてなんじやないの?】

亞樹

【…………でも、結局康平が掛ける事になつちやつたけど……】

康平

【いよいよ、うちの電話つてメインストリートみたいな場所にあつか
ら、夜8時までは騒々しいんだよね（笑）

とにかくあったの?】

亞樹

【……綾香から聞いたと思うけど、私が中学の時にビンタしたのは

……あの藤枝つて奴なんだ。】

康平

【ああ、何となくそんな気がしてたよ（笑）
たぶん、それで綾香も浮かない顔してたんだよね。】

亜樹

【…………その時、私と付き合っていた1つ上の先輩がいたんだけど、
ビンタされた藤枝が、あることないこと噂を流し始めて、その先輩
も私を避けるようになっちゃったんだ。】

康平

【…………そりゃんだ……】

亜樹

【あ…………でも、その先輩から付き合ってくれって言われて、2回程
デートしただけで別れたんだからね。】

康平

【それは分かっただけど…………どうして急に……】

亜樹

【えーっと…………!!

大事な親友だからよ。今日、浩司さん……清水先輩に康平が言つて
たでしょ。】

康平

【あれは……咄嗟に出た言葉で、なんて答えたらいいか分かんなく
てさあ……】

亜樹

【親友だからこそ、隠し事はしないようにって、今話してんの。咄嗟に出た言葉かも知れないけど、自分の言った事に責任を持ちなさいよね。】

「ガチャヤ】

最後は、一方的に言わされて電話を切られた。

亜樹の照れ隠しのよつにも思えたが、確信はない。

山本さんの忠告通り、男女の関係は、ボクシングよりも難しく思つた康平だった。

先週の自分にリベンジ

月曜日の部活。

今日は、梅田・飯島、2人の先生がいる。

1年生達は、少し緊張しながら着替えをする。

先週に行つた、内海さん達とのスパーリングを再びするかも知れないからだ。

勿論、手加減はしてもらっているのだが……

梅田先生

『お前ら、内海達とスパー（リング）できるか？』

『はい！』

4人は、大きな声ではないが、すぐに返事をする。

梅田先生

『だつたら、今回は高田と内海からやるぞ。

シャドー4ラウンド後に始めるからな。』

開始のブザーが鳴り、康平もシャドーボクシングを始めた。

前回のスパーの時よりヒドクないが、両足がフワツとして、体全体に力が入らないような感じになる。

緊張してこる康平に、隣でシャドーしている内海さんが小声でアドバイスする。

『顎を引いて、ガードの間から相手を見りよ。』

康平は、鏡で自分自身を、ガードの間から、上田遣いで見るよつて心掛けでシャドーを再開する。

シャドー3回ウンド田、再び内海さんが康平に囁く。

『ミットでやつたパターンを反復しろ。
左は強く打てよ。』

内海さんと山本さんは、康平だけでなく、他の3人にも同様にアドバイスしているようだ。

梅田・飯島の両先生は、気付いているらしいが、何も言わずに見ていろ。

康平は、ミットで何度も打つたコンビネーションを何度も反復していた。

4ラウンドのシャドーが終わり、康平は急いでスパーの準備をする。

保護具を付けて、開始1分前にリングへ入った康平に、山本さんが

駆け寄る。

『オメエは、今から構えて、ガードの間から俊也を見てるんだ。そして、頭の中でコンビネーションを反復してる。確かに、左は強く打つんだよな。』

緊張している康平は、3つしかコンビネーションを思い出せないが、何度も反復する。

開始のブザーが鳴った。

ガードの間から見える内海さんが、大きくなる。

山本さんが怒鳴る。

『パンチは全部ハズレてもいいんだからな。』

まず、左ジャブを出してみた。

力んでいるのか、自分でも驚く程遅い感じだ。内海さんは、そのまま何の反応もない。パンチが届かないようだ。

今度は、空振りするつもりで、前に出ながら、ジャブを2発打つ。内海さんは、康平の右側に位置をズラしながら、左ジャブを打ってきた。

顔に衝撃があつたが、痛い程ではない。グローブのせいか、手加減

してくれていいのか、たぶん両方であろう。

下を向かないと腹を決めていた康平は、すぐにジャブの後ワンツーを打つ。

ツーである右ストレートを打った後、少し体が泳いでしまった康平に、思わず人からアドバイスが……

『ストレートは、もう少し上向きに打つんだろ。』

スーパー相手の内海さんである。

前回は、相手がほとんど見えなかつたが、内海さんは全く瞬きをしないような感じでこっちを見ている。

集中しているのが、康平にも伝わってきた。

山本さん

『届かなくていいから、左フックまで打てよ。』

康平は、失笑されるのを覚悟してワンツーから左フックを打った。左フックは、内海さんの遙か手前で空振りしたが、意外な声が聞こえてくる。

『いいぞ高田。その感じでドンドン打てよ。』

梅田先生の声だ。

他にもパンチを打つたが、全て虚しく空を切る。

「ラウンド終了のブザーが鳴り、山本さんの指示を受ける。

『ワンツーのワンをもつと伸ばせ。それと、踏み込んで左ボディーも打つてみる。ワンを伸ばすのと踏み込んで左ボディーだぞ。空振りしても、いいんだからな。』

2ラウンド目、康平は左を伸ばす事を意識してワンツーを打つ。ツーの右ストレートを打った後、すぐに左ジャブが打てそうになる。そのまま勢いで、左ジャブ……といつより左ストレートを追撃する。内海さんはこのパンチは、珍しく右手を使って防いだ。

山本さん

『よつし、そこで踏み込んで左ボディーだ。』

康平はテンパつたが、ワンテンポ遅れて左のボディーブローを打つ。この前習つたばかりなので、打ち出しが遅かった。

とっくに逃げたと思った内海さんの腕に、康平の左パンチが当たる。わざと康平のパンチをブロックしたようだ。左の拳に、強い衝撃が残った。ブロックした内海さんも、少し驚いた表情になる。

山本さん

『ナイズボディーだ。』

『その調子でパンチを出すんだぞ。』

その後、幾度かパンチを繰り出したが、全て空振りになる。

『リカウンド、内海さんの右ストレートや左フックをプロックの上からもらつた。

衝撃で腰碎けになるが、すぐに構え直す。

山本さん

『康平、気にすんな。

ただ、もう少し呼吸を深くするんだ。』

康平

『はい！』

山本さん

『バカヤロ、実戦の時は声を出すんじゃねえ！

審判に注意されつぞ。』

康平

『はい……あつー』

内海さんが吹き出す。

山本さん

『いいよ、これも場馴れが必要だからな（苦笑）』

呼吸を意識する康平を、距離をとつて待機してくれていた内海さんだが、見るに見かねて口を開いた。

『下っ腹で呼吸する感じだよ。』

言われた通りに呼吸すると、落ち着く感じになる。

呼吸を変えた途端、前より動けるようになり、何度もパンチを出したが、3ラウンド終了のブザーが鳴ってしまった。

ほっとしたような、物足りないような、不思議な感覚の康平だった。

康平の頭を、グローブで撫でた内海さんが話す。

『先週の試合放棄した自分には、少しリベンジ出来たようだな（笑）』

』

練習の成果

内海さんは、そのままリングに残つて健太の相手をしている。

健太は先週と同様に、開き直つて左ストレートを打つていた。

山本さんが、自分もスパーリングの用意をしながら、アドバイスする。

『健太、右フックの返しあはビリした?』

健太も、思い出したように右フックまで返す。

山本さん

『よつし、そこで位置を変えるんだよ!』

健太はバランスを崩しながらも右へ位置を変える。

山本さん

『いいぞ健太、今みてえに無理してでも動けよ。あとは、右フックの返しを忘れんなよ。』

どうやら健太も、先週より良くなつていいようだ。

続いて、山本さんと白鳥がリングに上がる。

開始のブザーが鳴り、白鳥が左のジャブを2発繰り出す。

最近、重点的に練習してきた技…………とは、はるかに違っている。

左ジャブを、2発続けて打つて一つの技なのだが、スムーズに打てないようだ。

1発目を打つてから、2発目を打つまでの時間が、明らかに間延びしている。

それも、1発打つ度に前にツンノメリそうになるので

(ツツコラシツ)

と、言つてあげたい感じだ。

内海さんも、しきりにアドバイスするが、うまくいかない。

1ラウンドが終わった時

『梅田先生、飯島先生、次のラウンド好きにさせて貰つていいいですか?』

山本さんが、2人の先生にお願いした。

梅田先生

『いいよ、いいよ。

今日は、お前らの好方にやつていいで。』

飯島先生

『この1週間は、オメエラが顧問だったからな（笑）』

両先生は、最初からそのつもりだつたようだ。

ラウンド開始のブザーが鳴る。

山本さんは構えないで白鳥に教える。

『ジャブを打つ時、後ろ足で思いつきり蹴つてみる。
翔の場合、ジャブ2発を打つ時は、肩の回転より後ろ足の蹴りだぞ。』

内海さん

『康平みたいに、少し上向きに打たせた方がいいんじゃねえか？』

山本さん

『そうだな。』

翔、このラウンド、俺は一切パンチをださねえから、ジャブ2発だけを、打つてみる。

後ろ足の蹴りと、パンチは上向きだぞ。』

白鳥は、何度か山本さんに向かつて打つているひし、つんのめる
ような感じはなくなつていった。

3ラウンド目、最初のラウンドと同様にスパークリング形式に戻る。

白鳥は、いい感じで2発のジャブを打つているようだ。全て空を切つてはいたか……

ただ、距離が近くなると、白鳥も打ち易そうで、右ストレートと左フックを思いつきり打つていた。

次は有馬の番になるが、山本さんが手を抜いてくれるのを分かつているからか、積極的にパンチを出す。

ただ、さんざん練習した肝心の左ジャブが1発も出ず、大振りのパンチで前に突っ込んでいく。

有馬よりも背の低い山本さんが、足を使って距離をとる始末だ。『おい、ジャブはどうしたんだジャブは！』

内海さんが、有馬に呼び掛ける。

有馬は、無視して……といつより、テンパっているようにも感じられる。

ラウンド開始から一分半を過ぎても、有馬が突っ込んでいく状態が続く。

『テメエ、いい加減に…………』

業を煮やした内海さんが怒鳴りついた時、逃げ回っている山本さんが、右手で遮るゼスチャーをした。

そして、有馬の大振りの右パンチをかわして左のパンチを有馬のボディーに軽く打ち込む。

有馬は、ウツ…と声をあげて右膝を床についた。

山本さん

『オメエから近づき過ぎりと、こんな感じでパンチをせりつけんだよ。』

『

煙でも吸ったかのように、少し咳き込んでいた有馬だが、ラウンド終了のブザーが鳴った時、少し落ち着いたようだ。

内海さん

『俺と賢治が見たいのは、そんなボクシングじゃねえんだよ。この一週間やつてきた練習の成果を見てえんだ。』

失敗を忘れる

ウナダレながら内海さんの話を聞いていた有馬に、山本さんが質問する。

『お前、テンカウント前に立ったよな。次のラウンドはやれるか?』

有馬
『え?』

山本さん

『「え」じゃねえよ。
やれるのか……って、俺が訊いてんだ。』

有馬

『あの……でも、さっきはテンパつてしまつて……』

内海さん

『オメエ、豊治（山本さん）の質問の答えになつてねえよ（笑）
まあやれそудだし、次のラウンドからいくぞ。』

内海さんの話は続く。

『タケ（有馬）、やつきのラウンドの事は忘れて、次のラウンドに
集中しろ。先週からオメエが練習した事は何だ?』

有馬

『肩を入れた左ジャブを、狙わないで打つ事です。』

内海さん

『分かつてゐるじゃねえか。

前のラウンドがどうとか、倒そつとか、余計な事は考えんな。とにかく、練習してきた技を、実行する事だけに集中しろ。』

2ラウンド開始のブザーが鳴る。

内海さん

『オメエのやる事はなんだ?』

有馬

『肩を入れた左ジャブを、狙わないで打つ事です。』

内海さんが、有馬の尻を軽く叩いて送り出した。

『よ～し、いってこい。』

有馬が左ジャブを出す。

ミットで打つ時と、同じような打ち方である。

内海さん

『いいぞ、タケ! やれば出来んじゃねえか。』

褒められた有馬は、次々と左ジャブを繰り出した。全て空振りではあつたが……

内海さん

『空振りでもいいんだタケ、離れた距離でずっとジャブを打てたらお前のペースなんだからな。』

一度褒められた後の有馬は、ドンドン調子が上がりしていく。

3ラウンド目になつても、有馬の動きはいい。ただ1分過ぎになると、左腕が疲れたのか、ジャブの数が減つたようだつた。

この2ラウンドの間、山本さんの左ボクティーを2度と食らいたくなかった。右パンチを打つ時以外、有馬の右腕が胴体から離れる事はなかった。

この日の練習が全て終わり、梅田先生が1年生達に説明する。

『内海と山本が、お前達の練習に付き合つのは、今日で最後だ。かなり勉強になつたと思つから、今こじで全員でお礼をしぃ。』

『有難うございました。』

4人は、心の底からお礼をし、深すぎる程頭を下げる。

内海さんと山本さんは、照れているのか、1年生達から視線をそらしていた。

飯島先生

『お前達も照れてねえで、なんか一言ずつ言つて帰れよ。』

『え、マジっすか？』

と言つながら、山本さんが前に出る。

『お前達は、今日練習の成果を出してくれたんで、大変嬉しく思つ。梅田先生と飯島先生…………そして、自分が真剣に頑張った練習を信じていけば、おのずから結果もついてくる筈だ。頑張れよー。』

『いいこののは、得意じやねえんだよな』

内海さんは、苦笑いしながら歩前に出了。

『あまり偉そうな事は言えないが、俺なりに思つていり試合の心構えを、オメハらに伝えておく。』

試合中に失敗やミスをして、すぐに忘れる。気持ちを切り替えて、とにかく、今時点での最善を尽くせ。すると奇蹟が起きる…………かも知んねえからよ。』

飯島先生

『内海が言つと説得力があるな。』

内海さん

『なんですか急に?』

飯島先生

『だつてそつだろ。お前が高校の時、よく問題を起こして梅田先生にぶん殴られていたが、失敗した事を忘れるから、何回も繰り返してたんだよな(笑)』

山本さんが1年生達に説明する。

370

内海さん

『テメエ共犯者のくせに、なに善人ぶつてんだよ。』

『

梅田先生

『とにかくお前らは、暴れた後に最善をつくさなかつたから、奇蹟は起こらないで、俺にぶん殴られた訳だ(笑)』

康平達1年生は、普通に笑つて話す梅田先生を、初めて見た為か、少し戸惑い気味だった。

ラリアット攻撃？

内海さん達とのスパーリングが終わった次の日からは、お盆の為、練習が5日間休みになった。

この5日間は、親戚廻りや町内会の行事等で、あつと/or間に終わり、再び練習を再開した。

練習を始めて、鏡の前でのシャドーボクシングを4ラウンド終えた時、梅田先生が1年生達を呼ぶ。

『今から俺が、ラリアットを食らわすから、お前達は横に動きながら避ける。まずは有馬からだ。』

ラリアットは、腕を伸ばして、上腕で相手の顔を狙うプロレス技である。

ボクシングなのになんで……

4人は、意味不明な指示に戸惑いながらも、返事をしないと怒られるので、大きく返事をする。

有馬は梅田先生とリングに入る。

梅田先生

『俺が左のラリアットをしたら、体を沈ませながら右に動け。右のラリアットは逆に動いて避ける。』

梅田先生が、ゆっくりではあるが、本当に左腕でラリアットをする。

有馬は、頭を下げながら右に動いてかわす。

梅田先生

『下を向くんだじゃねえ。膝を使って、上半身を立てたまま、体を沈めるんだよ』

飯島先生

『アマチュアボクシングは、ルールが厳しくてな、前足より前に頭があると、すぐに注意されるんだよ。』

もう一度、梅田先生が左のラリアットをする。

今度は上手く動けたようで、梅田先生は何も言わない。

次は、先生が右のラリアットを放つたが、これも上手く避けたようだ。

思ったよりも低い高さにラリアットがくるので、康平は膝を深く曲げながら大きく左へ動く。

左のラリアットは、逆の動きでかわす。

顔にラリアットがくるとこうよつ、肩を狙われているような感じだ。

早く体に憶えさせる為に、オーバーに動かさせるよつだ。

何度もかわしていた康平だったが、次のラウンドに不意打ちを食らつた。

飯島先生の右のラリアットを避けながら、左へ動いた康平だったが、避けたハズの右腕が、裏拳のよつな形で、突然康平の顔面に戻ってきたのだ。

裏拳は、バックハンドブローと言つて、ボクシングでは反則である。

軽く顔を叩かれたので痛くはなかつたが、予想外の事に康平は不思議そつな顔をした。

『アホ、ガードが下がつてんだよ。』

飯島先生が、笑わずに言つ。

頭の位置を変えると、ガードが疎かになるのは、結構犯しやすい。

口で言われるよりも、実際軽くても叩かれた方が、印象に残るし覚えが早い時がある。

康平も、それ以降はガードが下がらなくなつた。

ラリアット攻撃をかわす練習が終わり、次は、サンドバッグ打ちとミット打ちへと移行する。

ミットを受けるのは、2人の先生しかないので、余った2人はサンドバッグを叩く。

他の高校では、生徒同士でミット打ちをするところもあるが、永山高校では先生しかミットを持たないようだ。パンチを打つ筋肉と、ミットを受ける筋肉が違うといつ理由らしい。

最初は、有馬と白鳥がリングに入つてミット打ち、康平と健太がサンドバッグを打っていた。

4ラウンド後、康平達がリングに入りミット打ちを始める。

ミットでパンチを打ち始めた途端、何故か康平が飯島先生からミットで頭を叩かれた。

そして、先生は水道の蛇口で顔を洗っている。

次に、説明しながらミットを受けている梅田先生も、いきなり健太の頭をミットで叩き、水道の蛇口でウガイを始めた。

飯島先生は、康平の汗を顔全体に浴び、梅田先生は説明している最中に、健太の汗が口に入ったようだ。

康平と健太は、いつもは3着持つてきている替えのTシャツを、休みボケのせいか、忘れてしまったのだ。

夏の練習は、とにかく汗が出る。流れ出る汗の為に、康平と健太のTシャツはビショビショで、体にヘバリついていた。

梅田先生

『片桐と高田、お前らは形式練習を4ラウンドだ。』

康平と健太は、梅田先生の逆鱗に触れたようだ。

形式練習を始めた2人。

お互いのパンチは、完璧にディフェンスしていたが、後から襲い掛かってくる、ビショ濡れのTシャツから飛び散る汗は、まともに浴びていた。

明日からは、替えのTシャツを増やそうと思しながら、相手の第三のパンチ、＝汗を浴び続ける康平と健太だった。

金欠？

形式練習で散々な目にあつた康平と健太だが、練習が終わり、駅で帰りの電車から降りコンビニの前にいた。

2人は、部活が終わる度に、駅前のコンビニでジュースを買って飲み、古本屋で立ち読みをするのが日課だった。

部活が終わった直後は、ワザと少ししか水を飲まず、電車の中でも、喉か乾くのをグッと我慢する。

そして、ここにコンビニで安くて大きいパックのジュースを買って、一気に飲み干す。

冷たいジュースが体に染みわたる快感は、堪えられないものだ。

あまり遊べない夏休みをおくる康平と健太が考えた、ささやかに幸福を感じるイベント（？）だ。

ただ今日は、康平がコンビニに入らうとしない。

健太が、不思議そうな顔をして訊ねる。

『康平、どうした。ジュース買わねえのか？』

康平が、歯切れが悪い口調で答えた。

『力ネ…が、足りねえんだよ。』

健太が更に不思議そうな顔をする。

『お前、ジユース代は毎日貰つてゐんじゃなかつたっけ?』

康平

『チゲエよ、……その……誕生日プレゼントのだよ!』

健太は、2週間程前に亞樹の誕生日を、自分が勝手に聞き出した事を思い出す。

『ああ、あれね。でも亞樹は、無理しなくていいって言ってたんじやねえの?』

『そつはいつてもな……口頃、助けられてんし……第一お前が本人の前で、誕生日の事を聞くからだぞ。』

康平は、シドロモドロだったが、最後は一気に捲し立てた。

『そういう康平の、生真面目なところは、僕も好きなんだよねえ。

今から、家に来いよ。姉ちゃんもいるからさ。ちょっと相談してみようぜ。』

反省したソブリこないが、健太なりに責任を感じてゐるようだ。

健太の家は、商店街の並びにある定食屋だ。

康平は、健太と一緒に居間に上がつた。

午後6時を過ぎたばかりで、店は刈り入れ時の為か、誰もいない。

『ちょっと待つてろ。姉ちゃんを探してくからよ。

あ……冷蔵庫の麦茶、勝手に飲んでいいぞ。』

と言い残して、健太は2階へ上がつていった。

健太の中には、雑然としていて、大雑把に片付けられている。忙しいのもあって、洗濯物も、タタマないで隅に寄せている。

逆に、気を遣わないでいられるので、康平にとつては心地いい空間のようだ。

麦茶を飲んだ後、疲れが出たのか、アグラをかいたまま、丸いチヤブ台に両肘をついて眠ってしまった。

5分程したであらうか、康平は背中に柔らかい重みを感じて目が覚める。

『康平、珍しいじゃん。うちに来るなんてさ。』

康平の背中に、健太の姉さんが座つていたのだ。

彼女の名前は、真由さん^{まゆ}といい、康平の2つ歳上の高校3年生だ。

天真爛漫な人で、少しタレ田で愛嬌のある顔と、世話好きで、面倒見がいい性格から、男女を問わず友達が多い。

康平は、背中に感じる柔らかい感触が気になる。

『真由さん……頼むから降りてクンネエかな。』

『あたしは、座り心地いいんだけどな。』

と言つて、康平の背中から立ち上がつた真由さんは、マラソン選手のよつな、短パンとランニング姿だ。

康平は、グラマーな体型をしている真由さんを、直接見ることがでわざに下に視線を逸らしていく。

『姉ちゃん、探したんだぜ。』

2階に上がつた筈の健太が、台所の勝手口から入ってきた。かなり探していたようだ。

『え……あんた達、あたしが担当でだったの。

真由さんは、ワザと rajishi に言い方で、恥ずかしそうにした。

『チゲえよ、康平が誕生日に贈るプレゼントの事で、相談したかつたんだよ。』

健太が、真由さんのオフザケを遮り、本題を切り出した。

『ん……プレゼント?..』

健太の言葉に真由さんは、アグラを書きながら身をのり出した。
どうやら、彼女の世話好きな心を刺激したらしい。

康平は、照れながらも経緯を話す。
そして、金欠なことや、プレゼントは、何を買えばいいか分からない事も相談した。

『……大体話しは分かったけど、小遣い貰えるのは月ハジメじゃないの?』

康平の話を聞いて、真由さんが質問する。

康平が残念そうに言つ。

『つむは10日なんだよな。』

健太がすぐに切り返す。

『亜樹の誕生日は、9月9日だろ。だったら5日位早めに、前借りすりやいいんじゃねえの?』

『そっつかな……それと、プレゼント買いに行くときは、真由さんから選んで欲しいんだけど……いいかな?』

康平も、健太に賛同したらしく、ついでに、もう一つの悩みも相談した。

真由さんは、じばりく思案していたが、何か思い付いたようだ。

『康平……今日、コンビニでジュースを買わなかつたから、100円は貯まつたんだよな。』

アグラをかいているせいか、何故か男の口調である。

『え……まあ、そうだけど…』

既に、小遣いを前借りするつもつていた康平は、意表を突かれて曖昧な返事をした。

『今から毎日、100円ずつ貯めていけば、誕生日の少し前までは、結構いい物が買えるかもよ。』

真由さんの言葉に、健太が反論する。

『そりやねえよ姉ちゃん！

俺達、今年の夏休みは、あんま遊べなくて、あのジュースだけが生き甲斐みてえなもんなんだぜ。』

多少オーバーだが、あながち嘘ではない。

『モトはと聞えれば、健太が悪いんだから、アンタも康平に付き合つんだね。』

真由さんは、健太に対しては容赦がない。

康平は、さつき答えてもらえなかつた相談を、もう一度真由さんに

する。

『仮にお金が貯まったとして、買い物する時は、真由さんも一緒に買ってくれるんだろ。何を買えばいいか、わかんねえよ。』

『甘ったれんじゃないよ。』

急に語氣が荒くなつた真由さんに、康平と健太は茫然とする。

『苦労もしないで選んだプレゼントなんて、亜樹さんが可哀想だよ。』

アグラを組み直して、真由さんは2人を諭すが、その仕草がヤケに男らしい。

『.....』

沈黙する2人に少し同情したのか、真由さんはヒントを『えた。

『まあ、あげるとしたら、身に付けないものがいいかもよ。』

健太

『え..... 何で?』

『身に付ける物だと、プレゼントした人の前で付けていないと、気がまずいんだよね。

その点、部屋に置く物だったり、飾つておく物だったり、気に入らなければ押し入れにしまつとけばいいからさ。』

悪びれもせずに話す・真由さんを見て、

『何かズルいね。』

康平が、ぼそっと口にした。

『何言つてんのよ、迷惑なプレゼントあげるより、よっぽどマシだよ。』

……でも、その「の事好きなんだろ?」

真由さんに訊かれた康平は、顔を赤らめる。

『いや、まだ…ハッキリわかんねえけど……、でも本気でお礼はしたいと思つているよ。』

『照れてんじゃねえよ(笑)』

健太が茶々を入れるが、真由さんは笑わない。

『康平は、きっとジックリと、人を好きになるタイプなのかも知れないね。』

まあ、こじは男の見せ所だから、しっかりやんなよ』

彼女はそう言い残して、自分の部屋に戻つていつたが、知らず知らずの間に、正座になつていた康平と健太だった。

水筒作戦

次の日、練習に行く途中で健太に遇到了。

康平

『昨日の真由さん、違つたよな、なんか男らしかつたぜ。』

健太の話によると、真由さんは、古い時代劇の捕物帖をレンタルで借りて、ずっと見ていたらしい。確かに、立派な親分だった。

健太が、不思議そうな顔をする。

『そもそも、お前は何で金欠なんだ……盆休みの時、ゲーセンでも行つたのか？』

バツが悪そうに康平が答える。

『……1回行つたよ。』

健太

『1回だけか……あんまり金は使わねえよな。じゃあ、何に使つたんだ？』

康平は、恥ずかしそうに白状した。

『いや、そこで一千三百円を使つたんだよ……ただ勘違いすんな

よ。15面クリアすると、好きな月の誕生石がついた、携帯ストラップが貰えるゲームにつき込んだんだからな。』

『ああ、あのゲームね。あれは、15面クリアした人は、ほとんどいないらしいぜ。』

それに友達の話だと、あのストラップは、デパートで普通に千円位で普通に売っているらしいぞ。』

健太は珍しく、茶化したりしないで、同情している。

康平

『…………』

健太

『亞樹へのプレゼント……の為だったのか？』

康平は、力無く答える。

『…………ああ…………』

『元気出せよ。もうすぐ練習なんだからさ。

気持ちを切り換えねえと、またミットで、頭を叩かれるぜ。』

わざとらしい程、大きな声で康平を励ます健太だった。

その日の練習は、昨日と同じように、ラリアット攻撃をかわす練習がメインだった。

練習が終わり、学校の生ぬるい水道水を、タラフク飲んだ康平と健太は、帰路についた。

帰りの電車の中で、健太が口を開いた。

『康平、携帯ストラップをプレゼントしたいんだつたら、少し金を貯めれば買えるんじゃねえの?』

康平が、反省しながら答える。

『いや、携帯ストラップはやめとくよ.....ゲームで一千三百円使った後に思つたんだが、景品でプレゼントするのは、チョット...な。』

今は、何をプレゼントするかは、白紙の状態だよ。真由さんも、身に付けない物がいいて言つてたしな。』

健太

『俺も、姉ちゃんのシタタカな性格は、いつもながらスゲエと思つてんだけどさ。そういうえば康平って、ジュース代はいくら貰つてるんだ?』

康平

『いつもは100円だけど、図書館に行く時は200円だよ。図書館へ行くと、母さん機嫌がいいんだよな。』

健太が、思案する。

『……明日から、図書館へ水筒を持って行けよ。但し、康平は家の人を見つかんなよ。ジュース代貰えなくなつからさ。康平一人だと、危なつかしいから、俺も水筒持つて付き合つからよ。』

『オメエは、宿題半分も終わつてねえから、どつちみち行かなきゃなんねえんだろ？』

突っ込みを入れながら、心の中で、水筒持参を付き合つてくれる健太に、康平は感謝した。

家に着いた康平は、麦茶のパックの位置を確認しようとしたら、どこにあるか分からない。

冷蔵庫にある麦茶は、結構な量だったが、無理して全部飲んだ後、母さんに訊く。

『麦茶無くなつたけど、どこにパックがあんの？俺が作るからさ』

母さん

『え、結構あつた筈なんだけど……パックは食器棚の左上の扉を開けるとあるわよ。』

パックは、水を入れたままでも麦茶が出来るものだったので、康平も安心した。

水筒の場所は、階段の下の物置に入っているのを分かっていたので、問題はない。

夜8時過ぎ、康平は亞樹へ電話をする。

【明日、亞樹は図書館へ行くの?】

亞樹

【行くけど、康平は宿題終わったんじゃないの?】

【いや、今後の為に勉強することは大事だから、明日も図書館へ行こうと思つてさ。】

康平は、明日200円を確實に貯つ為、居間にいる母さんに聞こえるように、少し声を大きくした。

亞樹

【何か怪しいけど…………まあいいわ。明日は、綾香も来るよつだし、君が来なぐても明日はこるよ】

次の日の朝4時、康平は静かに階段の下の物置から、水筒を持ってくる。

急いで麦茶を作つとして蓋を開けた瞬間、康平は啞然とした。

ずっと使つていなかつた為か、中にカビが生えていたのだ。
急いで中の掃除をする。水筒の中のカビは簡単にとれたが、水筒の
飲み口は、少し複雑な形をしていて中々とれそうにない。

『それは、ボールの中に水と漂白剤を入れて、1時間位漬けておけば、とれるわよ。』

困っている康平に、横から母さんの声が……、康平は、更に困った顔になる。

母さん

『昨日の様子が、不自然だつたから、様子を見に来たのよ。ジューース代をあげているのに、なんで水筒を使うの?』

『あ……それは……その……』

康平は観念して、正直にプレゼントの為、ジューース代を貯める事を話した。

『これは、母さんと康平の秘密ね。父さん達に見つかつたら、ジューース代は出さないから、見付からないようにするのよ。』

母さんは、苦笑いしながら言つた。

水筒の飲み口を、水と漂白剤の入つたボールに入れて、康平は走りに行つた。

帰つた後、ボールに入つてゐる飲み口を見ると、カビは綺麗にとれ

ている。

早速、麦茶のパックを水筒に入れようとしたが、入りきらない。

仕方なく、冷蔵庫の中にある容器に入っている麦茶を水筒に移し替える。

トクトク トクトク

麦茶の入っている容器は、口が小さい為、意外と大きな音がする。

その時、新聞を片手にトイレに行こうとしている父さんに見付かってしまった。

父さん

『お前、ジュース代を貰っているのに、何で水筒なんか用意してんだ?』

康平は、絶望した表情で正直に訳を話す。

父さん

『.....』

この話は、母さんには内緒だな。母さん達に見付かったら、ジュース代は無くなるからな。』

水筒を用意して、初日から父さんと母さんにバレた康平だったが、何とかジュース代を貯める事は出来そうである。

健太の動搖、そして康平も……

康平は、水筒を持って図書館へ向かう。

健太の大きなバッグにも、水筒の形が浮き出ている。

健太は素朴な疑問が沸く。

『俺は、宿題をやつつけるけど、康平は本当に勉強すんのかよ？お前、とっくに宿題終わってんだろ。』

『…………』

康平自身も、迷ってしまった。

『大丈夫だつて！俺が何とかするからよ。』

健太が、笑いながら話す。

健太がこのセリフを言う時は、大抵アテにならない事を、康平は過去の経験で、よく知っていた。

図書館に着くと、亜樹と綾香がいたが、亜樹が疑いの眼差しで康平を見る。

『健太が、宿題をしにきたのは分かるけど、康平は本当に勉強しに来たの？

昨日の電話から何か怪しいのよね。』

まさか、200円を貰う為に、図書館へ来たとは言つわけにもいかず、少しだけ期待して健太をチラツと見る。

健太は、綾香の前だと、まだ緊張するようで、残念ながらアテにならないようだ。

今まで、康平に茶々を入れると、綾香の前でも自然体に戻れる感じなのだが、まだ今日は、口が滑らかな状態ではない。

康平が、何て言おつか迷つていると、綾香が口を出した。

『可哀想だよ。きっと健太に付き合つて、ここに来たのよね。』

『そ……そだよな、健太

』

咄嗟に、相槌をしてしまった康平だったが、心の中で健太に謝罪した。

康平に付き合つたのは、健太の方である。綾香にとっては、健太が情けない立場になってしまったのだ。

『まあ、そういう事にじとりますか。

時間が勿体ねえし、トットと始めよづぜ。』

健太は、妙に早い動作で、勉強机に向かつて歩いて歩いていった。

4人が一緒に勉強できる机を探して、健太は黙々と宿題に取り組んでいる。

健太が気になり、ノートを開いてシャーペンを持つてはいるが、30分以上たつてもノートは白紙のままだ。

『康平は、歴史のマンガで勉強した方がいいんじゃない?』

亜樹は、少し呆れ顔で言つ。

この図書館には、歴史のマンガ本を置いてある棚があり、康平は、亜樹がいない時によく立ち読みしていた。

更に30分程経つが、康平はその間トイレに行つたり、勉強する科目を変える為に、2回程、バッグから本の出し入れをするが、勉強そのものは全く行っていない。

『同じ机に、やる気のない人がいると、少し迷惑なのよね。いくら健太に付き合つてゐつても、ヒドいんじゃない?』

今度の亜樹は、少し怒つている。

『それは違うよ。』

康平は、即座に否定した。

少し声が大きかつたようで、周りの人々が一斉に康平を見る。

図書館のオバサンも、右手の中指で眼鏡を軽く持ち上げ、こっちを見ている。

康平は、四方にペコペコ頭を下げているが、康平以外の3人は、頭を低くして康平だけが目立つようになっていた。

『何やつてんのよ、もつ』

亜樹が声を殺して、康平を叱る。

『…………ゴメン…………』

康平は謝った後、健太の名誉を回復する為に、200円を貰つたのに図書館へ来た事だけでも、話すつもりになつていた。
勿論プレゼントの事は、内緒にするつもりだったが……

『ふ……怒られてやんの』

健太が、笑いながら康平をからかった。

『康平は、笑われてんのにナンカ嬉しそうね。』

綾香もクスッと笑う。

健太が口を開いて、ホッとした康平は、顔に出でてしまったようだ。

健太

『ちょっと休憩しようぜ』

『そうね。今日、健太は宿題頑張つてたから、休憩を希望する権利
があるわね……康平にはないけど……』

亞樹も同意した。

康平と健太は水筒を持ち、亞樹と綾香は小さなペットボトルを持つてロビーへ向かつた。

綾香

『2人共どうしたの？水筒なんか持つちゃつて……』

『あ……その……実はや……』

康平は、さつきのよつこ、200円の事をバラすつもりでいたので、そのまま白状しようとした。

『俺達盆休みの時に、無駄金遣つたんだよな。』

『ん？…………ああ…………』

健太の横槍に、康平は思わず頷く。

健太

『話は変わっけど、図書館に誘つたのは、俺じゃなくて康平の方なんだぜ！

亜樹達と、勉強するのが楽しいんだってさ。』

『――――――』

康平は、言つたようすで記憶が無い健太の言葉にて、動搖した。

『そりなんだ。今日の康平を見ると、全くもつて信用出来ないんだけどね。』

亜樹は、人が悪いような笑いで話す。

健太は、平然としている。

『でも、コイツがこの時期に宿題終わるって、ありえねえ事だしさ。それに、俺と康平が家で勉強すると、30分が限度だしね。あの何時間かは気分転換……ていうか、現実逃避しまくりなんだよな。』

康平も、ここでの勉強は楽しかったんだろう?』

『…………勉強自体は、まだ好きになれねえけど…………ここは楽しかった…………と思つかも…………』

康平が、自信なさげに言った。

綾香が笑う。

『亞樹といるのが、そんなに楽しかったんだ。』

『…………康平、数学の教科書持つてる?

君が本当に勉強が好きで、ここに来れるようになるまで、今から苦手な数学をミツチリやるわよ。明日からもよ…………分かったわね』

亞樹は、持ってきたペットボトルをほとんど飲まずに机に戻つて行つた。

その日、亞樹に散々じごかれた康平は、いつもより勉強が辛く感じてしまっていた。

図書館での勉強が終わり、部活へ向かう途中に健太が口を開く。

『…………最初は悪かつたな。綾香に、お前が俺に付きたくて図書館へ来ているって言われて、動搖しちまったんだよな。
自分から、同じ事を言つつもりだったのによ。』

康平

『いいよ、俺も咄嗟に相槌打つちまつたしや。でも、最初はテンパつていて、途中からいつもの健太に戻つたけど、何か吹つ切れたのか？』

健太

『お前が、亜樹に怒られた時から調子が戻つたんだよ。やっぱ康平というイジラレキャラがいねえと駄目だな。』

それはそりとお前、200円の事を白状しそうだつたな。』

『え、何で分かつたんだよ？』

驚く康平に、健太が笑つて話す。

『康平つて、ホントに分かり易いんだよな。でも、ジューク代200円の事は話さなくてよかつたよ。セコいお金で買ったプレゼントは、貰つた亜樹も複雑な気持ちにな

右ストレートボディー打ち

夏休みも残り10日となつたが、図書館での苦手な数学の勉強、学校ではボクシング部の練習と、ハードな毎日が続く康平である。

彼は、いつそ、学校が始まつてくれれば…………と思ったが、鬼のような言葉と裏腹に、髪を掻き上げながら熱心に教えてくれる亜樹の横顔を見て、ドキリとする康平だった。

この時の自分の顔が、どの位だらしなくなっているか、想像すると恥ずかしい気持ちになっていた。

ソフト面（頭脳）のトレーニングが終わり、午後3時からは、ハード面（体）のトレーニングに移る。

『練習お願いします！』

と、大声を出して練習場に入る康平に、鬼のような言葉そのままに、鬼のような顔の梅田先生が椅子に座っている。

今日は、いつもより涼しいからか、少し機嫌がいいようだ。

梅田先生が冗談のような感じで、康平に話し掛けた。

『高田、今日は涼しいから、その分練習は厳しい方がいいだろ?』

この人が、悪い方の冗談を言つ時は、大抵事実になつてしまつ。

現に練習を終えた3人の2年生達は、精魂尽き果てたような感じで、柔軟体操をしている。

『あ……いや……今日もお願ひしますー。』

康平は、言葉を濁し、顔を見られないように、深々と頭を下げて更衣室に小走りで駆け込んだ。

この時の自分の顔が、どの位絶望的になつているかは、想像すらしきたくない気持ちの康平だった。

練習が始まり、いつものように、シャドウボクシングを始める。

ブロックキングや、ラリアットを避ける動きを混ぜながら、習つたパンチを繰り出す。

習つたパンチといえば、1年生達は2日前から、新しくパンチを習つていた。

右ストレートのボクサー打ちである。

このパンチは、右ストレートと撃ち方は同じだが、先生は、ラリアットを避ける時と同じような低い姿勢で打つ事を、しきりに強調していた。

尚、健太の場合は左ストレートである。

シャドウのラウンドを終わつたが、今日は、連口のよつてカラリッシュト攻撃を避けるラウンドがない。

梅田先生

『高田と片桐は、リングへ上がれ！

高田は飯島先生、片桐は俺とミット打ちをするから、急いで準備しろ。有馬と白鳥は、サンドバッグを打つていろ！』

リングに上がつた康平達は、早速ミット打ちを始める。

先生が、片手を顔の近くに上げた。
左ジャブを打つ。

両手を重ねて喉の前で構える先生に、右ストレート・

両手で構える先生に、ワンツーストレートを打つのは、今までと変わらない。

今度は先生が、左手を前に伸ばし、右の脇腹辺りに、右手で構えている。

戸惑う康平に、飯島先生が説明した。

『この構えをした時は、右ストレートボディーだ。俺の左手をくべりながら打てよ。』

右ストレートボディーを打とうとする康平は、飯島先生の左手が邪魔で、打ちにくそうである。

脚に負担を感じながらも、何とかパンチを打った康平だが、体を起こした途端、後頭部に衝撃があった。

前に出している飯島先生の左腕にブツカつたのだ。

『アホ！ 打ち終わったら、戻る時も、俺の左腕をかいぐるんだよ。』

ラウンド終了のブザーが鳴り、康平は、飯島先生に質問する。

『右のストレートボディーは、強いパンチが打ちにくいんですけど

……』

『そのパンチを打つと、顔面がガラ空きになつて、打たれ易くなる

から、我慢しや。当てる事よりも、まずは打たれねえ事なんだよ。

優秀な泥棒はなあ、盗む事よりも、まずは逃げる事を第一に考えるんだよ。』

飯島先生は、分かり易いように喻え話を使つたらしげが、康平は逆に悩んでしまつた。

(先生は、泥棒の経験があるのだらうか……)

喻え話はともかく、打ちにくい姿勢から打たなければいけない理由が分かつたので、あえて突つ込まないで返事をした。

次のラウンド、ミット打ちを再開した。

また、飯島先生が、左手を前にして構える。

打ちにくい姿勢を我慢しながら、先生の右の脇腹にあるミットヒートストレーントボディーを打ち込む。

パスッ！

シケたミットの音。

そして、飯島先生の左手にぶつからないよう逆に体を構えに戻す。

『いいぞお。ミットの音なんか気にするな！』

悲しい位に威力がないパンチなのだが、とりあえずはこれでいいようだ。

ホッとする康平に、いきなり右のラリアットが飛んできた。コックリ打つてきたので、習った通りに避けられたが、先生は右の耳辺りに左手を添えている。

『いいに左フックを打つんだよ』

先生に言われたように、左フックを放つ。

安心する間も無く、先生の左ラリアットが襲ってきた。それを右側にかわした康平だが、今度は先生が左の頬の前に右手で構えている。

『これは右ストレートだ』

いつして、ラリアットを避けるだけでなく、反撃するトレーニングが始まった。

パンチではなくラリアットだが、避けて反撃する。

続けていくうちに、まるでボクシングをしていくような感覚に浸つた康平であった。

その後、梅田先生の[冗談に嘘偽りはなく(～)、サンサンシ]かれてノビている康平達に、先生から一言。

『これからは、今日みたいな返し技も教えていくから楽しみにするんだな。』

迷える贈り物

夏休みも残り1日となつたが、康平は3日前に宿題が終わつた健太と、彼の部屋でゲームとマンガ三昧の1日を送つていた。

今日は日曜日なので、部活も休みなのである。

マンガを読みながら、健太が康平に話し掛けた。

『そりいえば康平、お前イクラお金貯まつたんだ。』

『ん？ 3千円近くは貯まつたんじやねえか。』

ゲームをしている康平は、中ボスを相手に苦戦していて、他人事のよつて答える。

『亜樹の誕生日が9月9日で、今日は8月31日で日曜日だら……！

おこ康平、ゲームやつてる場合じゃねえぞ。』

ドオオーン！

『一体どうしたんだよ。』

突然テンションが上がつた健太の声でびっくりしたのか、康平は中ボスにやられて迷惑顔だ。

『康平、今日プレゼント買わねえとヤベホんじやねえの?』

『まだ誕生日まで、10日近くあんだろ。』

『チゲホよ。次の土日でプレゼント渡さねえと、チャンスがねえんだよ。お前、学校の中でプレゼント渡す勇気あつか?』

ノンビリしている康平を健太が真剣に諭す。まるで、健太がプレゼントを渡すような感じだ。

だが、さすがに康平も気付いたらしく、慌ててゲームの電源を消す。

健太

『……康平は、部屋に飾る物を買つつもりだよな?』

康平

『ん……まあな。』

健太

『だったら、姉ちゃんの部屋に相談しに行こうぜ。』

康平

『え……でも真由さん自分で考えうつて……』

『相談するフリして、姉ちゃんの部屋に飾っている物を見とくんだよ。』

健太も、真由さんに似て相当シタタ力である。

康平

『とこりで真由さんはいるの?』

健太

『それは大丈夫だ。今日レンタルでラブストーリー物を借りてたからよ。今こり煎餅でも食いながら見てるぜ。』

『……………』
『テレビを見ている姉ちゃんは、いつも見ねえからよ、しつかり部屋を観察しとけよ。』

姉ちゃん入るぞ!』

健太が隣部屋の扉を、ノックしながら入っていく。

彼の予想通り、真由さんは煎餅をバリバリ食べながらテレビに夢中のようだ。

『ん…………あんははひ、はんは用?』

真由さんは煎餅を頬張り、テレビから視線を外さずに後ろにいる人に問いかける。

健太

『実はさ、プレゼントの相場を聞きてえんだよ。』

健太に目で会図されて、康平は部屋を見渡す。

窓の上には、「御用」と書かれた提灯が5つ並べてあり、テレビの横には人気のゲームキャラの大きなぬいぐるみが置いてある。

『ほんはほ、ひふんへはんはへははひほ。』

『そんな事言わずに、ヒントだけでも教えてっていいじゃんか。』

真由さんは、煎餅を食べ終わる前にもう1つ口に入れた為、康平には何を言つてるかサッパリわからなかつたが、健太には通じているようで不思議と会話が成り立つていた。

康平がもう一度見ると、後ろの壁際には「愛美須」と刺繡された紫の特攻服、本棚の上に戦車のプラモデルがあり、その横に「私の力作、タイガー？型」と書かれた手製の立て札まで付いている。

『今いいシーンなんだから、あたしに聞くより綾香ちゃんて女の子に聞きなよ。亞樹ちゃんの友達なんじやないの?』

「一ラと一緒に煎餅を飲み干した真由さんは、漸く日本語を口にした。

これ以上いると真由さんの機嫌が悪くなつたので、部屋から出た2人。

健太

『部屋に入るのは久しぶりだつたから忘れてたけど、姉ちゃんの趣味の範囲は、昔から滅茶苦茶広かつたんだよな。……ワリイな、ありや参考になんねえわ。』

康平

『そんな事より、真由さんが言つたように綾香に電話してみんのもいいかもな。』

健太……ワリイけど電話してくんね。』

『……俺……綾香に電話した事ねえんだよな。』

尻込みする健太に、康平は無理強いしない。

『そうだな、お前綾香に電話すつとテンパリそうだからな……俺が片桐つて事で電話してやるよ。親が出てきたら、明日の連絡つて事で誤魔化すからよ。』

健太からクラスの連絡網を借りた康平は、綾香の家に電話をした。

トゥルルルル　ガチャ！

【ウイース、内海ですけど。】

野太い声に驚くとした康平は、過剰なまでに丁寧な言葉で話す。

【モシモシ、片桐と申しますが、綾香さんは御在宅でいらっしゃいますでしょうか？】

【片桐……ああ健太か。お前、やけに御丁寧な言葉遣いだなあ、おい。】

声の主は、内海俊也さんである。

【じ、失礼しました。僕は康平です。お久しぶりです。】

電話越しにペロペロ頭を下げながら、康平は慌てて訂正する。

【片桐……康平？……今俺ア寝起きだからよ。ちょっと待つてる。

オーラ綾香あ、お前のお気に入りの……から……】

内海さんは、受話器を外したまま綾香を行つたようだ。

健太

『康平どうした？ 口をアングリ開けてさあ。』

『い……いや、何でもねえよ。』

呆然としていた康平は我に返る。

綾香

【あつれえー、冗貴つたら受話器外したままじやんか。
……モシモシ康平、何であたしの電話番号知ってるの？】

康平は、たどたどしい口調で事情を説明した。

綾香

【……そつ……亜樹の好きな物は、……口で説明するより一緒に買
いに行く方がよさそうね。
今午後3時だから、6時に買いに行かない？ 私がそっちに行つても
いいけど。】

康平

【それは、綾香に悪いからこっちから行くよ。
でも買い物に付き合ってくれるのは、ホント助かるよ。アリガトな。

綾香

【あ……チケット待つて、いつの兄貴は変な事言つてなかつた?】

康平

【……いや、何も言つてなかつたぜ。じゃあ、俺と健太で6時に駅前へ行くからや、いいかな?】

綾香

【え……、ウン私もその時間に行くからね。】

電話を終えた康平に、健太が済まなそうに謝った。

『ワリィ、6時から店の手伝いなんだよな。母ちやんが町内会の会合に出るからしてさあ、出前しなきゃなんねえんだよ。』

康平

『いいよ。お前も行くつて綾香に言つちやつたけど、後で事情をを言つとくからや。』

もともと俺の問題だからな。今日は助かつたよ。』

6時、ジャージの姿で待ち合わせの場所についた康平だったが、綾香は可愛い服を着て待っていた。

康平

『ホント助かるよ。明日から学校なのにワリイな。
それと、健太は今から家の手伝いで来れないってさ。あいつも残念
がつてたよ。』

綾香

『そう……、それじゃあ仕方ないわね。』

それと、兄貴は本当に変な事言つてなかつた?私を呼ぶ時なんだけ
ど……』

康平

『あ……ああ、何言つてるか分かんなかつたしね。』

綾香

『まあいいわ。明日から学校だし、早く店に行こー。』

『デパートのエレベーターに2人きりで乗つている最中、綾香が口を開いた。

『誕生日プレゼントを、部屋へ飾る物にするのは正解かも。亜樹つ
て猫が好きだから、猫のデザインが入つた物がいいわね。』

康平

『有難う、そりするよ。話は変わつけど、綾香の誕生日つていつ?』

綾香

『12月25日だよ。』

『えつ、俺と同じ日じやん。』

驚く康平を見て、綾香がクスクス笑う。

『だから康平だと話し易かつたのかもね。』

あ……勘違いしないで、変な意味じやないから。』

エレベーターの扉が開き、2人は雑貨売り場へ歩いて行つた。

雑貨売り場では、2人……特に綾香が楽しそうに探している。時には脱線することも

『これなんかは、康平にピッタリなんだよね。』

綾香が笑いながら手にしたものは、グローブを付けて泣いている可愛いキャラクターの小さな人形だった。

『否定はしないけど、この人形をデザインした人はチョット酷いよね。』

苦笑いしながら答える康平に、綾香は更に笑顔になる。

『アハハ、それは言てるかも。あ、いけない。西樹の誕生日プレゼントを選らばなきやね。』

1時間程して、2匹の仔猫がじゅれあつて置時計を見付け、2人はそれをプレゼントに決めた。

康平

『今日は本当にアリガトな。綾香がいなければ、マジでプレゼント買えなかつたよ。』

『いいよ別に、私だつて楽しかったしね。
でもよかつたね。好きなコのプレゼントが買えて。』

綾香の言葉に、康平は顔を赤くしながら慌てた。

『い、いや好きとかはハッキリ分かんねえけど、図書館でのお礼はしたいんだよ。』

『康平つて女の子に対するは、からつきしだね。』

それに私だつたからいいけど、他の女の子と買い物に行く時は、ジヤージ以外の方がいいわよ。』

綾香に言われて一瞬下を向いた康平は、小さくなつて謝る。

『『……ごめん……』

『ふつ、私に言いくるめられる男の人つて、康平が初めてだよ。亞樹に言わせれば、光栄に思いなさい……ってトコかしらね。』

笑いながら話す綾香を見て、康平もホッとする。

最後に綾香が一言。

『私は本気で、康平と亞樹の事を応援してるんだから、……頑張つてね。』

迷惑な祝福

次の日、学校は長い全校集会から始まる。みんなダルそうに整列しながら校長の話を聞いていたが、その後に、インターハイ準優勝の石山先輩と兵藤先輩が表彰された。

康平は、自分が表彰されたわけでもないのだが、どこか誇らしい気持ちになつて拍手をしていた。

『おい康平、昨日見たぜ。』

拍手をしている康平に、後ろからコッソリ声を掛けてくる男がいる。川田というクラスメートで、あまり康平と親しくはないが、クラスの中では賑やかなタイプの男だ。

『お前、昨日駅前のデパートで内海と一緒にいたよな。俺も偶然いたんだけどよ。いい感じだつたじやねえか。羨ましいぜ全く。』

『あ……いや、それは……』

川田はカラカラ様子でもなく、素直に祝福しているようなので、康平は逆に返答に困つてしまつていた。

チラッと畠樹を見たが、ずっと後ろに立つていたので少し安心する。

全校集会とHRが終わり、ボクシング部も休みだったので、康平は

帰り支度をしていた。

その時、川田が康平の席に歩いて来て口を開いた。

『康平、さつき内海を見たんだがハーフっぽくて、スッゲエ可愛いよな。あんな口とデータしてたなんて、ホント羨ましいよ。』

『いや、そんなんじゃねえんだよ。』

康平は、声を殺して否定する。そして、前の席にいる亜樹に視線を向けた。

亜樹はこっちを向かず、帰り支度をしている。

『照れんなよつ！内海だつて楽しそうに買い物してたし、いい雰囲気だつたぜ。』

川田は氣を遣つて、クラス奴等に聞こえないように話すが、一番聞かれたくない前の席の人間が聞くには、充分過ぎるボリュームだ。

『同じイケメンじゃない男として、応援してつかな。頑張れよ。』

川田は、一言付け加えて帰つていった。

康平は、何も悪い事はしていないのに、後ろめたさを感じながら帰

り支度をする。

亞樹

『康平……今日は部活が休みだよね。時間ある?』

康平

『あ、今日は何も予定がないからな。』

『だつたら図書館へ来て。

……誤解されると悪いし、私が先に行くから後から来なよ。』

亞樹は、そう言つて教室から出でていった。

康平が図書館へ行くと、亞樹と綾香の兄である内海俊也さんが、口

ビーについて何やら談笑しているようだ。

俊也さんは康平に気付いたらしく、右手で手招きをしている。

康平がペコペコ頭を下げながら、2人に近付いていく。

俊也さん

『なんだあ、オメエも学校終わつたばかりなのに図書館かよ。亞樹ちゃんといい、お前ら勉強好きなんだな。』

康平

『いや、今日は勉強じゃなくて、……』

俊也さん

『勉強じゃねえ……あるつてえと、亜樹ひやんと待ち合はせか?』

康平

『いや……その……なんてゆうか……』

亜樹がすかさずフォローする。

『康平は、よくじこに歴史のマンガを見に来ることですよ。』

今日もそりなんだよっ?』

康平

『そ、そりなんだですよ。』

俊也さん

『ひの綾香もひだりだね、よく図書館なんかこじょつかう通ふるよな。』

『ナヒコは俊也さんじゃ、なんで図書館なんかこいるんですか?』

『講義のレポートを提出しなきゃなんねんだよ。今回出さないと
マジヤバくな。』

笑いながら突っ込みを入れた亜樹に対して、俊也さんは真顔で答える。

康平

『レポートは、進んでいるんですか?』

『進んでるわけねえだろ。』

図書館はなあ、雑談する所で勉強する場所じゃねえんだよー。』

俊也さんの声が大きかったので、2人は肩をすぼめた。

俊也さん

『やっぱ帰るわ。大学でレポートを書いた方が良さそうだしな。
それと康平に聞きたいんだが、昨日オメエが電話をよこした時、俺
なんか変な事言つたか?』

康平

『……いえ、何も言つてないと思ひます。』

『そりだよな。なぜかあの後、綾香の機嫌が悪くなつたんだよ。
一旦出掛けて帰つたら『機嫌だつたけどな。』

話は変わるが明日大学に戻るから、お前らとも暫く会えないからな。
ボクシング部の奴等にも、宜しく言つといってくれ。』

俊也さんは、一言残して帰つていった。

しばらく沈黙していた亞樹が口を開いた。

『……綾香は、すうじく優しいのよ。友達の為に、いつも自分を犠牲にしてしまうのよね。
もし、綾香が康平と……』

その時、綾香が2人の元へ走ってきた。

『やつぱりここにいたんだ。』

『綾香どうしたの？ 慌てちゃつて。』

亞樹

『クラスで昨日の買い物を見た人がいて、チョット冷やかされたの
よね。』

綾香

『康平は大丈夫だった？』

康平

『冷やかしはないけど、妙に祝福されたよ。』

亜樹

『2人とも、昨日は楽しかったそつじやない?』

綾香

『やつぱり、亜樹も誤解してんのかなあ。……………』

康平、亜樹にバラしきやつけどいいかな?』

康平

『いいよバラしちゃって。綾香も迷惑だつたろ?』

綾香

『迷惑なんかじやないけど言つちやつよ。』

昨日康平に頼まれて、2人で亜樹の誕生日プレゼントを買に行つたんだ。本当は健太も来る予定だつたんだけど、用事で来れなくなつたんだよね。』

『無理しなくていいって言つたのに……でも有難う。』

恥ずかしそうにお礼をした亜樹だが、嬉しそうな表情である。

康平

『いや、どうしても図書館のお礼がしたくてさ。』

『ホントにそれだけなの?
照れ隠しは損しちゃうよー。』

突っ込みを入れる綾香に亜樹が笑う。

『綾香に突っ込まれる男の子って、康平が初めてなんじゃない?』

綾香

『昨日、似たような事を私に言われてんだよね。
それはいいけど、2人とも今日から図書館で勉強?』

亜樹

『え、勉強じゃないけど偶然よねえ。 そうでしょ 康平!』

康平

『あ……ああ そうだけど。
プレゼントの話になってしまったから言ひナビ、今週の土曜日は此
処に来れるかな?
学校でプレゼントを渡すのは大変なんだよ。』

亜樹

『その日は、図書館休みだよ。 確か土曜日もだつたわね。』

康平

『マジで？』

亞樹

『だったら康平ンチの近くの図書館でもいいよ。休みかどうか調べてみてよ。』

綾香笑って突っ込む。

『あくまで図書館なのね。私も、行つていい？』

亞樹

『当然でしょ！』

康平君の苦手な数学は、まだ克服出来ていらないんだからビシビシ一かなくつちゃね。

それと、綾香が来るのは大歓迎だよ。』

家に帰る途中、康平は自宅近くの図書館に行つた。
どうやら田曜日は、やつてこようとしている。

早速亞樹の携帯に電話する。

【「うちの図書館は、田曜日もやつているから大丈夫だよ。】

亜樹

【じゃあ、綾香と一〇時に下田駅に行へばどういかな?】

康平

【いっちは構わないけど、ワロイな。
といひで、今日の話つて何だったのか?】

亜樹

【……もう済んだからいいわ。

話は変わるけど、綾香が口羅田はジャージでもこいつて言ってたよ。

】

焦らずに覚えろ！

次の日、夕方から部活が始まるが、夏休みと違い、1年生は先輩達と一緒に練習である。

この日から、ずっと練習を休んでいた3年の石山先輩と兵藤先輩が練習に加わった。2人は既に大学推薦の話がきていて、今から10月の国体に向けて練習を再開する。

ただ、それに3人の2年生と4人の1年生を加えると、どうしても練習場が狭くなってしまう。

『1年生全員、スパーの道具を持つて第一体育館に来い。』

梅田先生は康平達に指示した後、自身もミットとストップウォッチを持って第一体育館へ向かった。

1年生達も、保護具とグローブを持ちながら先生の後を追う。

全員が第一体育館へ着いて準備が終わつた時、梅田先生が口を開いた。

『今日から形式練習に返し技を加えるが、最初はワンツーストレートをブロックした後に、前の手でフックを返せ。

但し、フックは振り切らないで寸止めしり。1ラウンド終わったら相手を替えていけ。はじめ！』

最初のラウンドは康平が健太と、有馬は白鳥とコンビを組んで形式練習を始めた。

夏休みの期間、フックを打つつもりでブロックするように、山本さんからアドバイスを受けていたからかも知れないが、意外にも4人の動きはスマーズである。

1ラウンドが終わって梅田先生がアドバイスをする。

『お前らしい感じだが、反撃のタイミングが遅い。
ブロックする時は、相手のパンチに自分からブツカリにいくような
感覚でフックの溜めを作つてみろ。
それと高田と片桐は、体重の軽い者と練習する時、パンチを少し軽
めに打て。』

次のラウンド康平は白鳥と、健太は有馬と組んで形式練習を始めた。

すぐに左フックを打ち返そうとした康平だったが、ブロックした瞬間、顔に衝撃があった。

白鳥のパンチを顔から離してブロックした為、自分のグローブを顔にぶつけたのだ。

『高田、素早く左フックを返すのはさつと後でいいから、今は溜めを作りながら丁寧にブロックしろ。』

先生が、珍しく怒らないでアドバイスをする。

その後康平は、今まで習ったように拳を額に付けて手首を少し曲げるブロックキングをしたので、顔に衝撃を受ける事はなくなった。

「ウソニア終アの合図をした梅田先生は、全員に言い聞かせる。

『今年のような返し技は、来年の春位までに実戦で使えばいいから、焦る必要はねえんだぞ。』

ワンツー

この日の形式練習はまだ続く。

次のラウンド、康平は有馬とコンビを組む。

有馬のパンチは、強くないが非常に速い。彼は身長こそ170?を超えているが、体重は50?程度だ。

白鳥も同じ位の体重だが、有馬よりパンチが遅い。ただ彼のパンチは、体の芯に響くような重みがある。

有馬が、左ジャブから右ストレートを続けて打つワンツーも、
パーン!

と一気にぐる感じだ。

『ちよっとお前ら、練習を中断しろ。』

しばらく見ていた梅田先生が4人を集めた。

梅田先生

『有馬、高田にワンツーを打つてみろ。』

パパーン！

有馬の速いワンツーが、康平のガードに当たる。

梅田先生

『有馬、今度は空振りで打つてみる。』

有馬は不思議な面持ちでワンツーを打った。

梅田先生

『お前ら、有馬のワンツーを見てどう思ひ？』

健太

『速いと思ひますけど……』

梅田先生

『他に思ひとこりは無いか？』

有馬以外の3人は、お互いを見ながら沈黙する。

『高田、グローブを貸せ！』

梅田先生は、サングラスを外しながらグローブをはめて有馬の前に立つた。

『有馬、俺にワンツーを打つてみるー。』

有馬は、戸惑いながらも速いワンツーを打つ。だが、ワンからツーを打とうとした有馬に、梅田先生の右が軽く当たつた。

軽く当たったのでダメージこそ無かったが、有馬は驚いた表情である。

『お前のワンツーには、欠点があるんだよ。』

有馬

『えっ、それはどこですか?』

梅田先生

『いいか? これは有馬だけの欠点ではないから、全員よく聞け。ワンツーのワンが伸びてねえんだよ。』

1年生達は、ピンとしない感じで黙っている。

梅田先生は、頭を搔きながらじばりへ考へていたが、再び有馬を前に立たせた。

『もう一度俺にワンツーを打つてみる。但し、今度はユックリだぞ。』

有馬がワンからツーを打とうとした時、先生が彼の動きを止めさせる。

『一ノ瀬が有馬だけじゃなく、お前ら全員の悪いところだ。』

先生は、有馬の伸びていない左腕を差して説明を始めた。

『伸びていない左ジャブから打つ右ストレートは、非常に危険だ！』

実際に、先生からパンチを当てられた有馬は納得し始めたようだが、他の3人はまだ分かっていない様子である。

先生は更に続ける。

『有馬、そのままの姿勢でいる。いいか？ 相手がこの瞬間にパンチを出したら、遮るもののが何もないんだよ。』

先生は、説明しながら有馬にパンチを当てるフリを繰り返す。

『左ジャブの後、右ストレートを打とうとして体重を前に乗せた時に、このパンチを喰らつたらダメージは最悪だ。……これで試合が終わるケースが多い!』

ゾッとしている1年生達の様子を見た後、有馬に左を伸ばさせる。

『有馬、もう少し顎を引け……！

この状態だったら、有馬の左腕が邪魔で、相手はパンチを打ちにくくなるから、被弾する確率はグッと減つてくる。』

白鳥が質問をする。

『テンプル（コメカミ）は無防備ですけど、大丈夫なんでしょうか？』

テンプルも、顔の急所の一つである。

梅田先生

『あまり根性論は言いたくないが、顔だけで言えば顎と耳の後ろ以外は、気合いで何とかなる。』

萎縮している1年生達を見た梅田先生は、珍しく困った表情で頭を搔いていた。

魔法のワンツー

『この技は、もう少し後に教えたかったんだがな。』

梅田先生は、ボヤキながら1年生達に話し掛ける。

『これからお前らに、新しいワンツーを教える。形式練習のように、ペアを組んで向き合って構える。』

先生からグローブを返してもらった康平は、再び有馬と向かい合つ。

梅田先生
『どちらでもいいが、ジャブを伸ばした状態で止めていろ。』

健太・白鳥のペアは健太の方が、康平達は有馬が先にジャブを伸ばす。

先生は、健太と有馬の立ち位置と、ジャブを伸ばす場所を直していった。

『これからワンツーを打つ時、ワンはここに打て！』

有馬は、康平の右側に位置を変えている。そして、左の拳は康平の

頭上に延びていた。

頭上というよりも、康平から見てやや左上と言つた方が正しいかも知れない。

ただ、康平には全く当たらない場所である。

ただ、有馬の左前腕が康平の目の前にあって、視界を遮つてゐる。

梅田先生
『有馬は少し体を左側に傾ける！そして、左の背中を相手に見せる
ようにするんだ。片桐は逆の方だぞ。』

有馬が先生のアドバイス通りにフォームを直した時、康平は有馬の右パンチに恐怖を感じた。

有馬の右グローブが、康平からは全く見えないのだ。

今度は、康平と白鳥が先生のアドバイスを受けてポーズを作るが、有馬と健太も驚いているようだ。

梅田先生

『今日は、ミットで返し技を増やそうと思つていたが、予定を変更する。

今のフォームを意識して、形式練習で相手に打つてみる。

今からラウンド再開だ、始め!』

有馬がパンチを打ち、康平がそれをブロックする。

今までのようにして、パーンとくる早いワンツーと違い、パッパーンと少し遅い感じなのだが、右ストレートの威力が全く違っていた。

パンチが重くなり、衝撃も倍増している。

今度は康平が有馬に打つ。

左ジャブを相手に当てないので少し違和感を感じたが、左を伸ばした後の右ストレートが思い切り打ち易くなっている。

軽めに右ストレートを打ったつもりだったが、それが有馬の左ガードに当たった時、有馬が少しバランスを崩していた。

白鳥も同様に、健太の打った左ストレートでバランスを崩す。

梅田先生

『バカヤロー！ 高田と片桐は軽く打てと言つただろうが。白鳥と有馬は、お前らより10キロ軽いんだぞ！』

『いや、軽く打つつもりなんですが……このワンツーは魔法のようです。強く打てるし、目隠しにもなるんですね。』

健太が怒られながらも素直な感想を言った時、先生は右手にミットをハメている。

他の3人は、先生が何か新しい事をするかも知れないという期待をしていた。

スパン!

『バカヤロー！ ラウンド中は喋るんじゃないねえ！』

梅田先生は、ビリやラ健太の頭を叩く為にミットをハメたようである。

ただ、先生は一旦練習を中断して全員に説明を始める。

『このワンツーにはタネがあるから、魔法ではなくてマジックと言つた方がいいな。

俺と飯島先生が田隠しワンツーと呼んでいる技だ。

有馬、お前、田隠しワンツーのワンを伸ばしたまま、ヤニド動きを止めている。』

有馬が言われたようにポーズを作る。

『もう少し体を左側に傾けろ。』

覚えたてで、まだ馴れない有馬は先生に修正された。

梅田先生

『「Jのポーズだと、右側に大きく肩が回って、右パンチの溜めが出来ている状態だ。しかも、自然と後ろ足に重心が残っているから、体重の乗った右ストレートが打ち易い。分かったか?』

1年生達は、明るい表情で返事をした。

その日1年生達は、田隠しワンツーをメインに形式練習を繰り返し、練習を進めていった。

練習後、有馬が先生に質問する。

『「Jのワンツーを覚えたら、県でも勝ち抜けるんですか?』

梅田先生

『「そんな甘いもんじゃねえんだよ! ただワンツーが強力になつただけだ。」

お前らに言つておぐが、ボクシングで、これを出せば絶対に勝てる技なんてないんだからな!』

有馬、一度田隠しワンツーを俺にゆっくり打つてみろ。』

有馬がゆっくりそれを打つた時、梅田先生は有馬の右下に屈んでいた。そして、無防備な右脇腹に左ボディーを打つフリをした。

梅田先生

『お前らに教えたいのは、今のような返し技だ。まだ覚えなければいけない技があるから、明日からは覚悟しておけ。』

有馬の誘い

駅までの帰り道、有馬が独り言のよつと語く。

『俺、ボクシング部に入つて良かつたよ。』

健太

『いきなり何だよ、最近の有馬は俺の次に怒られてんのによ。』

康平も笑いながら話す。

『そうそう、最近白鳥が怒られなくなつてきたからな。怒られランキングは現在2位だぜ多分。』

『……怒られんのも、嬉しいんだよな……』

ボソっと言った有馬に、3人とも驚いた表情になる。

『あ……勘違いすんな。変な趣味じゃねえからよ。』

有馬は、弁解するよつと話続ける。

『俺だつて怒られるのより、褒められる方がいいに決まつてんじやん。』

中学ん時は、先公達があまり相手にしてくれなかつたんだよ。』

康平

『シカトでもされてたりとか?』

有馬

『いや、そこまで露骨じゃねえけど、何かヨソヨソしい感じだつたんだよな。』

俺とダチのガラが悪いのもあつたかも知れねえけどさ。』

健太

『ダチって、ゲーセンで会つた5人だろ? 確かに怖え感じはしたけど、話すと面白かつたぜ。』

『だろ! 僕もそつだけど、アイツらだつてカッコだけでワリイ奴じやねえんだよ。』

有馬は友達を良く言われて嬉しいのか、顔が少しニヤけていた。

『ふつづく……自分の事を悪い奴じやねえって言つかな?』

康平と健太は、声の主に視線を向けてビックリしている。

白鳥である。彼は、笑いながら有馬にツッコミを入れていた。

『ウツセエよ。言葉のアヤつてやつなんだよ。』

有馬は驚いた様子もなく、顔を赤くしながら言い返す。

康平

『俺、白鳥がツッコミ入れんの初めて見たよ。』

有馬が真顔で答える。

『いや、週に1度位はあるんだよ。他人の話を聞いてないようであたまあとにツッコんでくるからタチがワリイんだよ。』

健太

『残念だなあ。じゃあ今週は白鳥のツッコミがもう聞けないじやん……来週の分もここでツッコむじゃえよ。』

『い、いや……そんな事言われても……』

白鳥は、注目されるのが苦手なのか、いつものようにモジモジし始めた。

康平

『有馬と白鳥って、最初あんまり仲は良くなさそうだったよな！』

4月頃だと電車も離れて座つてたしや。『

『「しょうがねえだろ。一方は学年トップの眞面目君だし、もう一方は……』

健太はもう一方を見て、話を躊躇してしまった。

『もう一方が何だつてえー?』

有馬は一瞬健太を睨んでいたが、すぐに表情を戻して話出した。

『怒つてねえから心配すんなよ。俺も、気を遣われない方が嬉しいしさ。

『正直田嶋は、この辺の人に何よりも多くて思って、『お前がハ
だけども……ただ、『イシは散々ヒヒトで叩かれてんの』弱音を吐
かねえから、少しほら見てやるつけて思つたんだよ。』

康平

『俺もやつ思ひよ。丘鳥の愚痴つて聞いた事ねえもんな』

健太

『あんまり白鳥を褒めてイジメんなよ！ ちやつたじやねえか？』 照れてあんなに赤くなつ

白鳥は黙つているが、どことなく嬉しそうである。

有馬

『白鳥！ 黙つてねえで、俺以外にもツツコミ入れてやれよ。
……といひで今週の日曜は、お前り予定あつか？』

康平と健太は顔を見合わせ、康平が口を開く。

『フリイ！ 僕達、日曜日は用事があつて行けねえんだよ。』

有馬

『そつかあ……残念だなあ。ちょっとした収入があつて、あのゲーセンでオゴるうと思つていたんだけどな。』

健太

『オゴりと聞いて、見過じす訳にはいかねえんだが、なんで羽振り

がいいんだ？』

有馬

『前にゲーセン行つた時、覚えてつか？ アイシラと賭けをしていた話。』

康平

『9月まで部活が続いたらつてやつだろ。あれ本氣でやつてたんか
よ？』

『 まあな、奴らは皆、俺が辞めるのに賭けていたからな。
どひひみち、アイツらにも俺がオゴるんだけとよ。』

有馬は、満面の笑みを浮かべて答えた。

健太が控え目に質問する。

『 その次の週つてわけにはいかねえよな?』

有馬
『 それは無理だな。アイツらも、バイトとか都合つけてきてつから
よ。』

康平
……じゃあ、来るのは白鳥だけだな。』

康平
『 えつ、マジで白鳥も行くのかよ。』

白鳥

『 え……まあ

有馬

『 俺が白鳥に……いや、スーパーの奥さんの方に頼んだんだよ。あ
そこは奥さんがボスだからさ。そしたら喜んでくれてたぜ。』

駅についた時、別れ際に有馬が、再び独り言のよつた口調で話しだした。

『今日はよう、欠点を指摘されて嬉しかったんだよ。
ちゃんと、俺の事を見てくれてるって思つてさ。
まあ、俺だけの欠点じゃなかつたんだけどな。』

日曜日の話になっけど、もし急に行けるようになつたら、いつでも
来いよ。アイツらも、お前らの事は気に入つてゐみたいだからな。』

プレゼント騒動！

連日、第一体育館での出張練習は続いている。

木曜日になると、習った返し技の種類も増え、1年生達の形式練習にも更に熱が入つていった。

康平も、いつになく充実した感じで練習をしていたが、好事魔多し……金曜日に風邪を引いてしまった。

前日の夜が肌寒かったからであろうか、熱こそ出でていながら、咳は止まらないので、マスクをして登校する。

校門を通った時、そこに梅田先生が立っていた。

永山高校では、遅刻した生徒を叱る為に、必ず恐い先生が1人校門に立っているのだが、今日は梅田先生の番らしい。

康平が、挨拶をして通り過ぎようとしたところ、先生に呼び止められた。

『高田、お前風邪か？』

康平
『あ……はい』

梅田先生

『だつたら、今田と明田は練習を休めー。』

『え、でも軽くだつたら練習出来るので、心配いらんですよ。』

ここ数日間、いつになく早いペースで返し技を磨きているので、康平は練習を休みたくないようだ。

他の3人に、遅れをとりたくない気持ちがあつたかも知れない。

『お前の心配なんかじゃねえんだよ！ 他の選手に風邪が移るか心配なんだ。』

康平は、まるで遅刻した生徒のよう下を向いている。

梅田先生は話を続ける。

『お前、選手としてやる気があるんだつたら、せめて朝晩のウガイ位しつけ！

試合前に風邪を引いたら、シャレにならんからな。』

朝から怒られた康平は、咳込みながら教室へ歩いていった。

『康平ビリしたの、風邪？』

教室に入った康平は、早速重紀に訊かれた。

康平

『心配ねえよ、日曜日までには治すからねー。』

亞樹

『康平の心配はしていないんだけど、私や綾香に移さないでよねー。それと風邪予防に、朝晩のウガイは大切だよ。もし受験生だつたら、試験の直前に風邪を引くとシャレにならないからね。』

続けて2度も同じ話を聞かされた康平は、少し咳が激しくなったようである。

といひで始業式の日には、迷惑な祝福をしてくれた川田だが、幸い彼は、他人の幸福をずっと祝ってくれる程の善人ではなかつたので、康平に絡んでくる様子もなく、ある意味平和な1日になつた。

次の日の土曜日は、どこにも行かず横になつていたおかげで、日曜日の朝には、康平の風邪も完全に治つたようである。

康平と健太は、亞樹達と待ち合わせて[近]い駅（下田駅）に立っていた。

健太は、待つてゐるのが退屈なようで、康平に話し掛ける。

『昨日さあ～、姉ちゃんに言われて亜樹のプレゼントを買ひに行つたんだよ。』

康平

『え、健太は買つ必要ねえんじゃねえの？』

『そう思つだら……だが姉ちゃんに言わせつと違つんだよなあ。』

健太は、少し誇らしげである。そして話を続ける。

『考へてもみるよ。今日4人集まつて、その内2人が亜樹にプレゼントを渡すんだぜ。そつそつと、何も渡さない俺が薄情じやねえか？』

康平も納得した。

健太

『だから、昨日姉ちゃんにプレゼントを選んで貰つたんだよ。ホントは康平と行くつもりだつたけど、お前休みだつたし。でも、こういう時の姉ちゃんの勘で凄まじいんだよな。これで綾香への印象もアップするわけだ。2300円は痛えけど、仕方ねえよな。』

『ん……2300円……それって置き時計か？』

康平は嫌な予感がして、健太に質問した。

『ああ、猫がジャレあつている可愛い置き時計だぜ。』

健太は何食わぬ顔をして答える。

康平

『時計はアナログだろ?』

さすがに健太も気付いたようで、ダメ押しの確認をする。

『それで、全体がグレーで白い仔猫が2匹つてわけだ.....姉ちゃんの勘もここまでくつと、弟の俺でもオッカネエゼ全くー!』

同じプレゼントを貰ってしまった2人は、苦笑いした後無言になつた。

亞樹達の乗った電車が来るまで、あと5分といつとこりで健太が口を開いた。

『俺さあ、急に有馬達とゲームしたくなつたんだよなあ.....』

康平

『いきなり何言い出すんだよ! お前だって、高い金だしてプレゼ

ント買つたんじゃねえか?』

『お前と綾香は、亜樹の為に買つたんだろ! 僕は、綾香の氣を引く為に買つたんだから、亜樹に渡すわけにはいかねえんだよ。あ……それと、今日はマジでゲームしたくなつたんだぜ。』

健太は、話し終わると同時に改札を抜け、来たばかりの上り電車に乗つてしまつた。

その2分後、亜樹と綾香が乗つた下り電車が駅に停まつた。

電車から降りて改札を抜けてきた2人だが、辺りを見回しながら綾香が言つた。

『あれ、康平だけなの? 健太もいるんじゃなかつたっけ。』

『…………健太は…………う、うちの仕事が忙しくて、今田来れねえってさ。アイツも楽しみにしてたみてえだけどな。』

康平は、苦し紛れに嘘をつくる。

亜樹

『…………やつ…………とりあえず図書館に行こうよ。』

3人が、図書館で空いている席を探している時、康平達を見る2人組がいた。

坂田裕也と鳴海那奈だった。那奈は、小さく手を振っている。

幸い彼らの座っているテーブルは、6人用の大きなものだったので、3人は、そこに向かって歩いて歩いていった。

裕也

『康平、久し振りだよな。

図書館行く度に、お前と健太がいるか楽しみにしてんだけどよ、4ヶ月ぶりじゃねえか?』

那奈が裕也の袖を引っ張る。

『その前に自己紹介、じゃない?

私は鳴海那奈。名字から発音すると言いくらいでしょ! 那奈でいいからね。

隣は、一応彼氏の坂田裕也。私達、康平とは同じ中学だったんだ。康平、そちらの綺麗な2人を紹介してよ! あんたのドモリ口調を、久し振りに聞きたくなつたからさ。

あ……康平は口下手だから、間違つていたら訂正して下さいね!』

康平

『ウ、ウルセヒよ。俺の右にいる背の高い人が山口亞樹さんで、その向こう側にいる色の白い人が内海綾香さんだ。
2人とも、俺と健太の友達……でいいんだよね。
ド、ドモツてはいねえからな。』

裕也

『おいおい、女の子を背が高いとか、色が白いとかで表現しちゃ失礼だろ！ 少し訂正しろよ。』

『いいえ～！ 訂正するのは友達って部分だけかしら。たった今、友達辞めようと思ったから……』

『冗談はその位にして、私の事は亞樹って呼んでね。』

『私、康平の口下手なところは割と嫌いじゃないんだけど……
私も、綾香って呼んでいいからね。』

那奈

『それはそうと、健太はどうしたのよ？
いつも一緒に珍しいわね。』

康平

『け、健太は今日都合が悪くなつて来れなくなつたんだよ。』

那奈

『そつ……それにしても、あんた達に、こんな美人な友達ができるなんて、私にとっては凄くショッキングな事件だわ。』

裕也

『いや、そんな事はねえよ。康平と健太の良さは、誰かきっと分かってくれると思ってたぜ。那奈はまだ、2人の事を分かつてないんだよ。』

亞樹

『あのひ……私、康平達のいいといひせ、那奈さんよりも分かつていないと思つんですけど……』

裕也

『そつか！　コイツらとの付き合いでつたら、俺や那奈の方が長いからね。

でも保証するよ。2人は、最高にいい奴だからさ。

話は変わるけど、那奈はヒドイよなあ。彼氏を紹介すんのに「一応」なんて付けないぜ。』

那奈が肩をすくめて話す。

『今その話？…………もては根に持つてんのねえ。

裕也は「」覧の通りイケメンなんだけど、真っ直ぐ過ぎて融通効かない所があるのよ。

皆さん疲れないうにねー

とにかくで康平はともかく、亞樹さんと綾香さんは、何でここに来た

のかしりつ。』

康平

『……俺が勉強を教わる為に、来てくれたんだよ。』

『何か変な日本語だな。』

裕也は、怪訝な顔をした。

亜樹

『康平は、余計な事を言わない方がいいわ！　私達の語学力も疑われそうだからね。』

綾香

『不器用なんだから、正直に話した方がいいんじゃない？』

『よかつたわね康平！　今日は3人の美女からツツコまれて。綾香さんと亜樹さんは、何だか気が合いつづだわ。』

那奈は冗談のように話すが、彼女もかなりの美女である。
綾香程ではないが色は白く、和風美人といった感じだ。

今は、裕也のいるボクシング部のマネージャーが大変なのか、長かつた髪をバサリ切ったようだが、不思議とボーイッシュなイメージはない。

その那奈が、再び口を開く。

『……それで、綾香さんが「正直に」って言ったけど、本当のところはさじつかないよ。』

康平は、亜樹と綾香を一瞬見た後に口を開いた。

『……実は、亜樹の誕生日プレゼントを渡したくて、ここに来て貰つたんだ。いつも行つてゐる図書館が、休みの日もあつたんだよな。なんだかんだで、世話になつてゐからよ。』

裕也

『プレゼントは分かるけど、何でここなんだよ？』

康平は、不意を突かれたような顔をしながら答える。

『あ……だから、いつも行つてゐる図書館が……』

『イヤセうじやなくて、俺が言いたいのは、何で学校で渡さねえのかつて訊いてんのー。』

裕也は、康平の説明を遮りながら、もう一度質問をした。

康平

『……それは……学校だと、何て言つか……』

『はい、ストップ！』

今度は、那奈が康平の話を遮断する。

『康平は、裕也の3倍シャイなんだから、少しは理解してあげよう。』

ところで、あんたが女の子にプレゼントなんて、凄い進歩だよね！
私は今、チヨット感動してるんだよ。』

裕也

『俺は、康平がシャイなのを知つててハッパかけてんの！ ところでお前、亜樹さんと付き合つてんのか？』

『いや、そういうんじゃなくて、夏休みに勉強を教えて貰つたお礼だよ。』

少し赤い顔の康平に、那奈が質問をする。

『ま、そつ言つ事にしてあげてもいいんだけど、勉強教えて貰つたのは康平だけなの？』

綾香が笑つて話す。

『健太も、夏休みの後半から来たのよね！ それまで宿題を全然やつてなくて、大変そうだったけど。』

那奈

『健太は相変わらず進歩がないな。
でも、お礼のプレゼントだったら、健太もする筈だよね。中学の時は、もっとと義理堅い感じだったのよ。
高校生になつて、薄情になつたのかな?』

『健太は、そんな奴じやねえよ!』

珍しく康平が強い口調だったので、4人が注目する。

『ゴメン……別に怒つたわけじやないからさ。』

小さくなつて謝る康平を見て、亜樹が口を開いた。

『確かに、健太は家の仕事で来れなかつたのよね。』

那奈

『健太んちつて、定食屋なんだ。お昼になつたら皆で行こつか?』

裕也

『フツウ、高校生だけで定食屋は行かねえんじやねえの?』

『分かつてないなあ。健太んちのお店は、隠れた逸品があるのよ。フルーツアンミツが結構な量で、しかも200円! 美味しいから、

行ってみよつよ。』

那奈の誘いに、亜樹と綾香は乗り気のよつだ。

健太は今頃、有馬達のいるゲーセンに向かっている途中である。定食屋に行けば、咄嗟についた嘘がバレるので、康平は憂鬱な気持ちになってしまった。

勉強を始めて2時間半位経つたであろうか？

『お腹空いたね！』

那奈が午後1時を指している時計を見ながら、ポツリと言った。

『健太んちで、フルーツアソシシ食べよつぜー。久々に健太にも会いたいからな。』

さすがに裕也も空腹だったのか、誰かが言い出すのを待っていたようである。

亜樹と綾香も、勉強道具をしまい始めている。

康平は、嘘の言い訳をどうしようか迷ってしまった。

『あ、いたいた！ もういないかと思つて諦めていたんだけどね。』

1人の女性が、5の方へ歩いて来た。

真由さんである。

『康平、健太のバカが、約束スッポカシちゃつてゴメンね。アラアラ、裕也に那奈ちゃんまで一緒になの？』

那奈

『真由さん、お久しぶりです！』

裕也も那奈と一緒に頭を下げた。

真由さんは、亜樹と綾香を見て笑顔でオジギをする。

『はじめまして！ 私、健太の姉で真由つて言います。こんな綺麗な「達と友達なんて、スンゴイ奇蹟だね。

康平、紹介してよ。

あ、駄目だわ……健太もそうだけど、康平に紹介させると、口クな事にならないから私が当ててみせるよ。』

康平を除く4人は、顔を見合させて笑った。

『えーと……背の高いコが亜樹さんで、色の白いコが綾香さんでしょ？　あ……2人の名前は、健太達から聞いているんだから、不思議に思わないでね！』

5人とも沈黙している。

真由さん

『ん、どうしたの？　さては、ビンゴだったから驚いてんのかな。』

康平

『ビンゴだけど、多分違うと思つぜ……ところで今、フルーツアンニッ食べに行くんだけど……』

真由さん

『ワオ、うちに来てくれるんだー健太もいるからコツクリしていきなよ。』

康平

『…………』

裕也

『康平、なに不思議そうな顔してんだよ。健太は店の手伝いなんだ
るへ。』

『あ……あ、そうだけど……と、とりあえず行こうぜ。俺も、あ
そこのアンミツ好きだからさ。』

康平は、言葉を濁しながら図書館の入り口へ歩いていった。

健太の家である定食屋「片やん」に着いた5人は、一緒に座れる場
所を探す。

時計は1時20分を回っていた為か、客もマバラになっていたので、
5分程待つて無事に座ることができた。

早速、フルーツアンミツ5人分を頼んだ時、健太のお母さんが康平
に話し掛ける。

『健太なら、もうすぐ出前から帰ってくるからね！ 今日はユック
リしていくんだよ。』

『いらっしゃい！ おっ、那奈と裕也もいるんじやん。』

フルーツアンミツを食べている5人に、出前から帰った健太が声を
かけてきた。

『……康平、チョット来いよ。』

その後、小声で康平に言つた健太だったが、康平自身も彼に訊きた
い事があつたので、黙つてついていく。

4人から見えない居間に入つた時、健太が口を開いた。

『お前、俺がゲーセンに向かつた事は、アイツらに言つてねえよな
あ?』

康平

『まだ言つてねえけど……なんで健太がここにいんのさ?』

『あのゲーセンさあ、駅からかなり入り組んでいて、結局行けなか
つたんだよ。』

ホントにゲーセンの事は言つてねえんだな?』

再び念を押す健太に、康平は半ば呆れ顔で答える。

『何度も言わせんなよ。お前は、店の手伝いで来れないって話にな
つちまつてるんだよ。』

『よお～し康平、今からプレゼントを渡すぞー!』

健太の一言に、康平は意外な顔をした。

康平

『お前、俺と同じプレゼントなんだろ？　いいのかよ。』

健太

『ゲームに行けなくて家に帰つたらさあ、姉ちゃんが事情を聞いて、プレゼントを取り替えに行ってくれたんだよ。俺は見てねえけど猫の貯金箱みてえだぜ。』

……心配すんなよ、康平君のよつ安い物うらじこからう。』

康平

『誰が心配するかよ！　ヒルク、プレゼントはあるのに何で店の手伝いしてんだ？』

健太

『姉ちゃんの替わりにアルバイトなんだよ。今日の埋め合わせで、俺が働いた分は、みい〜んな姉ちゃんの財布に入っちゃうんだよなあ……』

それはそうと、康平がゲームの事を話さなくてホント良かったよ。それを言つたら、話がややこしくなつてたからな。

おっと、早くプレゼントを渡しに行こうぜー。』

4人の所へ戻つた康平と健太は、周りの客が減つたのを見て、亜樹にプレゼントを渡した。

綾香も、待つてましたとばかりに、バッグからプレゼントを取り出す。

『チョット早いけど、誕生日おめでとう！』

『有難う！ 大事にするね。』

亞樹は素直に喜んでいた。

4人の様子を見ていた那奈が、席を立ちながらポツリと言った。

『康平と健太が、高校でも楽しくやってそうで安心したよ。私達、今から図書館に戻るからさ。』

裕也も那奈に会わせて立ち上がりながら、健太と康平に尋ねる。

『お前ら、いま体重何キロあんの？』

康平が62キロ、健太が61キロとそれぞれ答えたのを聞いて、裕也は残念な顔をしながら話す。

『やっぱ俺と、あんま変わんねえんだな……新人戦はライトウェルター級（64kg以下）で出っからさ。今回、先輩の為に絶対優勝するつもりだからな！』

不思議と最後の言葉には、力が込もっていた。

この日の夜、康平の家に亜樹から電話がきた。

亜樹

【プレゼンター、アリガトね！ この時計、前から欲しかったんだ。】

康平

【いいよ……亜樹には世話になつたからや。】

亜樹

【やつ言えば試合するかもしれない友達って、裕也君だったの？】

康平

【ああ、アイツはいい奴だし、試合なんてしたくなねえんだよな。】

亜樹

【彼はカツ「イイいいから、女の子にモテるんだろうね。】

【何が言いたいんだよ、何が？】

亜樹は、康平のシッコリ構わず話を続ける。

【でも、同性からは妬まれるタイプかもね。】

私が康平をイジるようになった理由を、教えてあげようか?】

康平は不意を突かれて、曖昧に返事をした。

亜樹

【入学したての頃さあ、康平と同じ中学だった男友達が、君の席に集まつたのを憶えてる?】

康平

【ワリィ、あの頃つてアイツらよく俺の席に来てたから、どの時のことか憶えてねえんだよ。】

亜樹

【私はハツキリ憶えてるんだけど、その時、裕也君の悪口で盛り上がりっていたのよね。】

本人が別の高校なのもあって、言いたい放題だつたみたい。】

康平

【.....】

亜樹

【でも君は、ひたすら裕也君をカバっていたんだ。】

康平

【向となく思い出したけど、何で今話す気になつたんだよ?】

亜樹

【今日康平が、健太をカバつてたのを見たからかな?】

康平

【あの時は、亜樹の一言で助かったよ。
ところで、俺をイジる……じゃなくて、俺にチョッカイかける理由
つて何なんだよ?】

亜樹

【やつぱり教えてあげない!
……つてゆうか、私もあまりよく分かっていないみたい。】

康平

【ヒツヂエなあー! 理由も無しに俺をイジつてたんかよ。】

亜樹

【アハハ、康平はツツ「ミミズク」満載なんだから、私よりも君に原因があるのよきっとー。

重ねて言つけど、今日はアリガトね。】

笑いに耐えろ! -

月曜日の夕方、2日間風邪で休んでいた康平も、練習を再開した。

この日も第一体育館での練習になつた。

連日のように形式練習になると思い、健太達と同じく保護具を付けようとした康平に、梅田先生が一言!

『高田、お前は俺とミット打ちをするから、グローブだけ用意して第一体育館に来い。』

第一体育館に着いた4人は、ここで梅田先生の説明を受けた。

『さつきも言つたが、高田は俺とミット打ちだ!

残りの3人は形式練習だが、2ラウンド毎にメンバーチェンジだ。あぶれた者は、シャドーをしながらタイムキーパーをする。分かつたな。』

4人は大きな声で返事をしたが、先生はミットをハメながら一言付け加えた。

『形式練習は返し技メインだが、今は種類が多くなっている。

技を返す者は、相手に何を打つてもらつて何を返すか、一度言つてから始める。』

形式練習は、有馬と白鳥が最初にコンビを組み、健太はグローブを外してストップウォッチを持つ。

『始め!』

彼の声でラウンドが始まった。

梅田先生

『まず、先週教えた返し技の復習から始めるが、このラウンドはリターンジャブと、ブロックキングストレーントだ。いくぞー。』

先生が、ミットで左ジャブを康平に打つてきた。

康平は、右のグローブでブロックし、空いている左手でジャブを放つ。

先生が顔の前に構えている右のミットへ、それが命中した。

リターンジャブと教えられた技である。

今度は先生が打った右ストレートを、小さく右に捻りながら左腕でブロックする。

左グローブを左耳の上に持つていき、肘をグッと前に出す。顔は左前腕で防御するような形になっている。

左腕に衝撃を感じた康平は、すぐに右ストレートを放つ。

スパーーン！

先生が、顔の前に構えていた左のミットから快音が響く。

プロッキングストレーントと教えられた技である。

先生が言つには正式な名前ではなく、技を表現する為に、便宜上自分で勝手につけた名前という事だつた。

リターンジャブとプロッキングストレーント。この2つの返し技を、交互に3回づつ繰り返した後、先生が口を開いた。

『今からは、不規則になるから覚悟しどけ！』

その途端、先生が右手で構えている。

返し技をしようと待ち構えていた康平は、意表を突かれて動きが止まつた。

スパーーン！

快音が体育館中に響き渡るのだが、今回は康平の頭からだつた。

『今まで何やつてきたんだ？　俺がこの構えをした時は、ジャブを打つんだよジャブを！』

『ス……スマセン』

久々にミットで頭を叩かれた康平は、思わず謝ってしまった。

『ラウンド中は、声を出すんじゃないねえ！』

梅田先生は、もう一度康平の頭を叩く。

スペーン！

この日は珍しく、女子バスケの方でも顧問の先生から叱責を受けている。

『やこの2人！ 笑つてないで練習に集中しなさい。』

2人が怒られた原因を作ったのが、十中八九自分だと思つた康平は、羞恥心がマックスになつた。

梅田先生は、動搖している康平を知つてか知らずか、構わずミットでポーズを作る。

.....?

見た事がない構えに、康平は躊躇してしまった。

先生は、右手を顔の前に置き、左手を頭の左上に置いているのだ。

困惑している康平だったが、さすがに先生も怒らないで説明をした。

『言つてなかつたが、この構えを見たら田隠しワンツーを打て！
あー、それと今までのよつに口の前で両手で構えたら、ワンツージ
やなくて右、左、右のストレートだ。』

説明を受けた康平は、すぐに田隠しワンツーを打つ。

打ち終わつた後、間髪入れずに先生の右ストレートが康平を襲つた。

康平は、プロッキングストレートで打ち返す。

上手く打ち返せたので、ホッとした康平だったが、目の前で、構え
ている先生がいた。

左手を伸ばすように前へ置き、右手の位置は、口の前になつてゐる。

風邪を引く前から、この構えを教えて貰つていた康平だったので、

踏み込みながらの左ジャブを2発打つ。

その後に、先生の左ジャブが康平の顔面に向かってくる。

慌てた康平はリターンジャブではなく、左腕でブロックをして右ストレートを打つてしまった。

つまり、ブロックキングストレーントを打つてしまったのだ。

幸い先生は、左ジャブを受ける為に口の前へ右のミットを置いていたので、康平のパンチはそれに当たった。

『バッカヤロー！ 右と左も分からんのか？』

先生の罵声を浴びた康平は、またミットで叩かれると思い、肩をいからせて目を瞑つた。

ところが、なかなか頭に衝撃がこない。

康平がそおーっと目を開けた時、梅田先生は右のミットを振り上げていた。

『アホ、ラウンド中に目を開るんじゃないねえ！』

スパーーン！

『ラウンド終了!』

康平が叩かれると同時に健太の声があり、1ラウンド目が終わった。

『ミンナー! 笑わないで集中するのよお!』

バスケ部顧問、田嶋先生の声がした。

天然と噂される彼女だが、本人は至つて眞面目に叫んでいるようである。

梅田先生は苦笑いをした後、康平にアドバイスをする。

『お前は習い始めだから、仕方の無い事だが、笑われたくなかつたら早く覚えるんだな。』

次のラウンドも同じ事をやるから、今からイメージしておけ!』

康平と梅田先生は、次のラウンドも同じパターンでミット打ちをしていたが、最初のラウンドよりは、少しまトモにパンチを返せたようである。

頭を叩かれる回数も1回だけで終わつたが、その直後に、

『集中よ集中!』

と叫ぶ田嶋先生の声が、第一体育館に響いていた。

ダッキング

次のラウンドから、形式練習をしていた2人の内、白鳥が抜けて健太が入った。

康平は変わらず、梅田先生とミット打ちである。

先生が、ラウンド前に説明を始めた。

『高田には、今からダッキングを教える。簡単に言えば、屈んで避ける防御だ。

俺が右パンチを打つたら、左側へ屈め!』

先生が右パンチをユックリ打つ。

康平は、避けるつもりで大きく左へ屈んだ。

梅田先生

『それは避けすぎだ! 僕の言い方が悪かったかも知れんが、頭はもう少し小さくズラせ。』

梅田先生の話は更に続く。

『右パンチをダッキングする時は、これから話す2つの点を意識しろ。』

一つは、左ボディーを打てる体勢にする事だ。もう一つは、避けるよりも右手でプロックするつもりで屈め！ そして右ガードの位置はここだ。』

梅田先生は、康平の右グローブを彼のテンプル（コメカミ）の位置にズラした。

梅田先生

『避けるよりも、ガードしながら無理矢理左ボディーを打つイメージだ。もう一回パンチを打つからやってみる！』

先生がユックリ打った右ストレートを、プロックしながらダッキングした康平だったが、先生の右脇の下には左ミットがある。

梅田先生

『ここに左ボディーを打つんだよ！』

指示通り、そのパンチを打った康平に、先生から新たなアドバイスが……

『今のお前は左ボディーを打つ時に、強さより速さを意識しろ。音にするなら、タッターンではなくてタターンだぞ。』

理由を知りたい康平だが、ラウンジ中に話すとまたミットで叩かれ
そのので、質問するのを躊躇していた。

梅田先生は、康平の表情を見て気付いたようだ。

『なぜ速く打つか訊きたいようだな。』

康平が、好奇心旺盛な顔をしながら返事をした時、逆に先生が質問
をしてきた。

『高田、お前は右ストレートを打つ時、呼吸はどうしている?』

『……呼吸……ですか?』

予想外の事を訊かれた康平は、困惑した。

梅田先生

『分からぬようだつたら、今素振りをしてみろ!』

康平が右ストレートを打つた時、息を吐きながら打つ自分を初めて
自覚する。

そして、その事を先生に伝えた。

梅田先生

『ほどごの奴は、お前と回じよつて息を吐きながらパンチを打つんだよ。』

特に、倒さうと思つて強振した場合は、息を吐きあつてゐる時が多い。

『』

興味深く聞いてゐる康平に、先生は更に話を続ける。

『俺が速く打つよう言つてる理由は、相手が息を吐ききつた時や、その直後の息を吸い始めた時にボディーを打たせたいんだよー。このタイミングは、腹に力が入らないから効果は倍増する。』

康平

『質問なんですか？、強く打たなくて相手に効くんですか？』

梅田先生

『最終的には、ある程度強く打たなければならんが、今のお前の段階は、まず速く打ち返すリズムを覚える事だ』

康平

『それは、右ヘダッキングした時も同じなんでしょうか？』

『右ヘダッキングしろなんて、一言も言ひてねえだろうがー。』

パコ！

先生は、康平の頭をミットで軽く叩いた。

『右へのダッキングはなあ、

高田、ちょっとシャドウをしていろ。』

康平に言い残した梅田先生は、しばらく健太と有馬の形式練習を見ていたが、突然2人に近付いて行つた。

『お前ら2人は、その技をあまりしなくていいんだ！ もっと他の返し技を練習しろ！』

梅田先生に言われた2人は、康平が習つたばかりの技、ダッキングしながらのボディー打ちを反復しているようだつた。

健太

『えつ、どうしてですか？』

梅田先生

『理由は後で説明するから、今は言われた通りに他の返し技を練習しろ！』

2人は少し納得しない表情だったが、ミットで叩かれて笑われるの

は、さすがに避けたいらしく、素直に別の返し技を練習し始める。

再びミット打ちを再開した康平だが、右へのダッキングの事は不明なままラウンドが進んでいった。

この日の練習が終わり、梅田先生は1年生全員に話し始めた。

『飯島先生と話しあつたんだが、これから1ヶ月間、お前ら1年は水曜日が練習の休みになる。そして土曜と日曜は、午後1時から練習を開始する。』

少し驚いている4人の表情に気付いたのか、先生は理由を付け加える。

『2年は、11月の始めに新人戦があるんだが、お前ら4人は10月からスパーリングの相手をする。』

休みと時間をズラす理由は、お前らがスパーリング出来るように、集中して教える為だ。分かったか?』

『はい!』

約1ヶ月後ではあるが、いよいよスパーリング（実戦練習）が始まる事を教えられた1年生は、少し緊張しながら返事をした。

凡人の練習方法

梅田先生の話は、ここで終わらない。

『今日有馬と片桐には、ダッキングしながらのボディー打ちを止めさせたが、それぞれ理由が違うから個別に説明する。まずは有馬からだが、お前は体重の割に身長が高いだろ?』

『はい!』

身長が171センチで、体重が50キロの有馬は即答した。

梅田先生

『ダッキングは、相手より低い体勢になつて避けるティフェンスだ! フライ級にしては背が高いお前が、相手より低い姿勢になるのは、お前にとつて負担のかかる防御なんだよ。』

有馬

『先生に質問なんですが、フライ級でも俺より背が高い奴がいるんじやないですか? だつたら……』

『有馬の言いたい事は分かるが、まずは他の者へ説明が終わってからだ。4人とも、グローブを付けて来い!』

有馬の言い分を遮った梅田先生は、1年生に命令した後、自身もミットを両手にハメた。

そして、康平を呼んで前に出させてから口を開く。

『まず、俺に対しても構えてみるーそして、体の向き……否、足の位置を変えないで、俺の左右のミットへ右ストレートを交互に打つんだ！』

不可解な指示を受けた康平だったが、指示通り先生に対して構える。すると、先生は左右のミットを肩幅以上に拡げて構えていた。

梅田先生

『足の位置を変えないで、まずは俺の左のミットへ右ストレートを打て！ その次は右のミットだ。』

康平は、先生の左ミットに掛けて右ストレートを放った。

梅田先生の左ミットは康平の右側にあり、あまり体の捻りを使えないでの、スッポ抜けたような感じでパンチが当たった。

スパン！

逆に康平の左側にある先生の右ミットへは、充分な捻りと共に体重の乗った右ストレートが当たる。

バーン！

大きな音が響くと同時に、康平の右拳へ強い感触が残った。

梅田先生の両手に、3発ずつ右ストレートを打った康平は、健太と交替する。

健太は、サウスポーなので左ストレートを打っていた。

他の2人も、康平と同じようにパンチを打った後、梅田先生が全員に質問した。

『お前ら俺の左右のミットで、どちらが強く打ち易かつたか言ってみろ？』

健太は左のミットと言い、他の3人は右のミットと答えた。

梅田先生は、4人の答えを予想していたようで、その事に対しても何も言わない。

『片桐以外の者が打ち易いと言った場所は、相手が右ヘダッキングした時の頭の位置だ！ 逆に、ここへ頭があると、相手の強いパンチを喰らい易い。

今の段階で、右へのダッキングは、やらせないつもりだから覚えておけ！』

健太は今の話を聞いて、すかさず質問……といつより、少し反発するような口調で先生に訊く。

『俺……僕以外の2人、康平と白鳥には、左へのダッキングしてのボディー打ちを、反復させてますよね！ オーソドックス（右構え）が左へダッキングしたら、サウスポーの体重が乗った左ストレートを喰らい易いんじゃないんですか？』

梅田先生

『俺は今の段階で……と、最初に言つた筈だぞ。』

健太

『だつたら、これからどうしていくか教えて下さい！ 頑張りますから。』

『俺も努力しますんで、色々教えて下さい！』

健太の話に、有馬も加わる。

『努力や頑張るなんて言葉は、簡単に使つんじやねえぞ！』

梅田先生の語気が、少し強くなつた。

『俺達凡人はなあ、簡単な1つの技でも、馬鹿みたいに反復練習す

るのが当たり前なんだよ！ それでも試合に、その技が出るかどうかも分からん！』

4人の暗い表情を見た梅田先生は、苦虫を咬んだような顔で話題を変えた。

『お前らが次の段階にいきたいんだつたら、まずはラリアットを避ける動作をスムーズにしろ！ 但し有馬だけは、次の段階になつても、当分ダッキングはしねえから覚えておけ！』

有馬

『え、どうしてですか？』

梅田先生

『お前は、別に覚えなればならない技があるからな。』

健太

『有馬だけ、ズルいッスね！』

パコ！

健太の頭を、ミットで軽く叩いた先生は、時計を見ながら言った。

『お前ら全員に、個別の技があるんだよ！ 今日は遅いからアシト
と帰れ。』

球技大会の誘い

翌日の昼休み、トイレから教室へ戻ろうとした康平に、1人の女の子が話し掛けてきた。

『康平、チョットいいかな?』

彼女は門田麗奈かどたれなといい、康平と同じ中学の出身でバスケ部員だ。ちなみにクラスメートでもある。

麗奈

『昨日は、笑わせてくれてアリガトね! あの時、田嶋先生に怒られた2人って、私と綾香なんだ。』

康平

『嫌な事を思い出させんなよ。』

麗奈

『アハハ! あの後ね、うちの先生も反省してたみたいだったよ。高田君に悪い事しちやつたってさ。』

康平

『気付くのオセエーンだよ! あの先生、結構天然入つてるよな。』

麗奈

『まあね。本人に自覚が無いから、純天然って感じなんだよね。
ところで、康平に訊きたい事があんだけどさあ？』

康平

『麗奈に教える事なんて、俺にはネエぞ。』

『大丈夫！ 康平に教わるなんて愚かな事はしないから。
訊きたかったのは、今月末にある球技大会の事なのよ。あんたは、
何に出るつもり？』

中学時代から口が悪かつた麗奈に、康平は苦笑しながら答えた。

『ああ、バレーとバスケとソフトボールだけ？ 全部男女混合つ
てヤツだろ。
どれも得意じゃねえから、適当に選ぶつもりさー。』

麗奈

『だつたらさあ、バスケにしてくんないかなあ……あつ、心配しな
くてもいいよ！ 康平はボールに触らないで、適当に動いてればい
いからや。』

『ここまで期待されると、急にバスケ以外をやりたくないつてくる
んだよねえ。』

わざとらじりにシカメツ面をして答えた康平に、麗奈は少し慌てていた。

『メンゴメンゴー。あんたはバスケに必要なよ。
そして、一つ頼みがあんだよねえ。』

『なんだよ気持ち悪いなあ……』

上田遣いで猫なで声の麗奈に、康平は少し警戒する。

麗奈

『綾香から聞いたんだけどわあ、山口さんて元バスケ部なんじょ！ それも、かなり上手いって話なんだよね。
康平から、バスケ出るように頼んで貰えないかなあ。』

『そんなの自分で頼めばいいじゃんか！ 図々しい性格は、麗奈の
いいところだつて思つてんだよね、ボクアさあ……』

康平は、さつきのお返しとばかりに反撃したが、平然とした顔で麗奈は切り返す。

『ほひ……私つて少し口が悪いじゃんー 山口さんと氣が強そりだ
しい、チョット苦手なのよ……』

彼女は、何故かイケメンでもない康平と仲いいでしょ。お願ひー！』

困っている康平だったが、そこへ健太が通り掛かった。

『康平が困った顔してるって事は、麗奈の毒舌が炸裂してんだな。今日は康平に助太刀してやつからさあ。で、何言われたんだ?』

ニヤニヤしながら話す健太に、麗奈は言い返す。

『失礼ねえ、今は康平に相談中なの! ところで、そっちも綾香達から球技大会の勧誘は来なかつた?』

健太

『ああ、俺も綾香に誘われてバスケをする事になつたんだよ。でも康平がバスケに出たつて、役には立たねえかもよ。それと、他のクラスでも女バスのメンバーが勧誘してるらしいじやん。』

『実はさあ……』

麗奈は事情を説明し始めた。

『最近、駅前にケーキバイキングが出来たんだよねえ。昨日部活が終わつた後、来月になつたら、皆で行こうって話になつちゃつてさ

あ。
』

意表を突かれた表情の康平と健太だが、麗奈はお構い無しに話を続ける。

『そんでさあ、球技大会つて月末にあるじゃん！ 男バスはバスケットに参加出来ないけど、女バスは参加できるのよ。』

健太

『麗奈さん！ オッシャる事が分かんねえんツスけど……』

麗奈

『結論から話すのって、難しいのよ！ 健太さんも、将来彼女が欲しいんだつたら、聞き上手になんなさい。』

今、1年は6組あるでしょ！ 優勝したクラスの口は、皆のオゴリでケーキを食べれる約束をしちゃったんだよね。』

健太

『それでバスケ部が熱心に勧誘してるって訳だ。』

でも、誘われた俺達にも見返りつてモンが欲しいよなあ。』

麗奈

『何よ見返りつて？』

健太

『優勝したメンバー全員、オゴつて貰う事にするんだよー。』

麗奈

『馬鹿言わないでよ！ ケーキバイキングは、幾らすると思つてんの？ 1人1200円なのよ。』

健太

『話は最後まで聞けつてえ。バスケに出る全員が、賭けに参加すりや～いいのさ。』

確かに1クラス10人参加するんだから、1年全員で60人だろ！
1人200円ずつ出して参加すれば1万2000円は集まるし、優勝したクラスのメンバーは、タダでバイキングに行ける訳さ！ みんな出すのが200円だったら、ノッてくると思うぜ。』

麗奈は素直に感心していた。

『凄いなあ～。中学ん時から健太って、どうでもいい事には頭が働くんだよね。』

健太

『ウツセ～よ！ それはそうと、さつきも言つたけど、康平を誘つても期待は出来ないぜ。』

麗奈

『康平には期待してないの！ 山口さんを誘いたいのよ。なぜか康

平と仲いいでしょー。』

健太
『ん、どうした康平？ セツキから黙つてつけど……』

康平
『亞樹は、自然に参加すると思つんだけどな。バスケは今も好きみ
たいだしさ。
……』

それはともかく、お前ら口が悪過ぎー。』

麗奈は、意に介さず話を続けた。

『そう、明日のホームルームで球技大会の種目分けがあるけど、大
丈夫なのね？ だったら康平を誘う必要はないって事かな。』

健太

『いや、康平は誘った方がいいと思うぜ。』

康平

『健太は、俺が球技を苦手な事知つてつから、からかつてるんだぜ。
麗奈、相手にすんなよ。』

健太

『いや、そういう訳じゃねえんだよ。ただ康平と一緒に出れば、亞樹も……』

『ん、私がどうしたの？』

亞樹は売店から教室へ戻る途中のようで、新しいノートを左脇に抱えていた。

健太

『麗奈……あ、いや門田が球技大会に康平を誘っているところなんだよ。勿論、種目はバスケだぜ！』

亞樹

『綾香から聞いてるけど、門田さん、ケーキバイキングが懸かってるんでしょ？ ところで、康平はバスケ上手いの？』

康平は恥ずかしそうに答える。

『いや、苦手だよ。』

『その表現は控え目だよ康平！』

麗奈は、笑いながら話を続けた。

『康平とは、中学でクラスが一緒だつたんだけど、そん時も球技大会はバスケで出たんだよね！ 康平がバスを出せば半分は相手に渡すし、ショートを打てばボードを越えて場外ホームランだしね？』

健太

『俺は相手チームだつたけど、よく憶えてるぜ！ 康平にボールが渡つた時は、結構期待してたよ……何をやらかしてくれるんだろうってな。』

『お前らは、さくでもない事をよく憶えてるよ全く。』

もし亜樹がバスケに出るんなら、俺は出なくていいだろ？ 他の種田で適当にやつてっからさ。』

康平は、苦笑いしながら話す。

『康平は、バスケに嫌な思い出があるんだね？』

『い、いや、そんな事ないよ。球技っていうか、バスケは特に苦手なんだ……でも楽しいことは楽しいんだけどね……』

寂しそうな亜樹の表情を見た康平は、慌てながら言った。

亜樹は少し考えていたようだが、再び口を開いた。

『門田さん、私はバスケに出ようと思つけど……康平も誘つていい
?』

麗奈

『山口さんが入ってくれるのは大歓迎だよ! 康平は元々誘つてた
わけだし……』

『麗奈が微妙な顔になつてゐるぜ。さては、味方に害が出ない方法を
考えてんだろ……勿論、康平に関してだけどな。』

『俺は、最低限の時間だけ試合に出ればいいよ。味方のヒンシュク
は、買いたくねえからさ。』

茶化すような健太だったが、康平も言い返す気持ちは無いようだ。

亞樹

『……そろそろ昼休みも終わるし、教室戻ろつか?』

麗奈

『そうね! バスケ出来そうな人を、あと7人集めなくっちゃ!
ケーキが懸かってるからね。』

『なあ麗奈、1人200円の件は、他のバスケ部のメンバーにも訊

いておいでくれよ！ 案外盛り上がる気がすんだよ……ヤベー！』

健太はトイレに行く前だつたらしく、慌てて走っていった。

勇ましく逃げろ！

放課後、亜樹が康平に話しがけた。

『今週の日曜日は、康平も練習が休みなんですよ？』

康平

『いや、日曜日は午後イチで練習だぜ。明日だつたら休みだよ。』

亜樹

『だつたら明日、市民体育館に行かない？ 少しはバスケを教えられるからさ……でも折角の休みなんだし、無理にとは言わないよ。』

『

康平

『いっしきからお願ひするよ。体育でも、バスケをする日があるからさ。』

2人が視線を変えると、麗奈が熱心にクラスメイトを勧誘していた。

康平が部活に行くと、飯嶋先生が1年生全員に話しがけてきた。

『今日は、俺も第一体育館へ行くからな！』

(先輩達の練習は?)

4人の表情に気付いたのか、先生は話を付け加える。

『あいつらは、昨日スパーリングだつたからな。今日は、マスボクシングとサンドバッグがメインの練習だから、俺がいなくても大丈夫なんだよ。』

マスボクシングは、スパーリングに近い実戦練習の事だが、寸止めで行うのでダメージの心配はない。

先輩達がマスボクシングをする様子を、度々見ていた1年生達だが、素朴な疑問が湧いていた。

(なぜ、自分達はしないのだろう?)

『先生、マスボクシングは実戦に近い練習なんですが、1年生はまだやらないんですか? 少しは実戦の感覚を身に付ける事ができると思うんですけど……』

健太が堪らず質問をした。

こういう時に、先頭きつて質問するのは健太である。そのタイミングが悪くてミットで叩かれる時もあるが、他の3人の気持ちを代弁している時が多いので、康平達はかなり助かっていた。

『話せば長くなるから結論だけ言つが、うちはスパーリングに慣れてきてからやらせるつもりだ。

それより女バスの前では、俺からミリットで頭を叩かれんなよ…… 今日、同じ体育の田嶋先生から苦情を言われたんだよ。あまり、うちの部員達を笑わせないでくれってな!』

『先生! だつたら頭を叩かなければいいんじゃないんですか? 簡単な事ですよ!』

飯島先生の話に、反応したのは有馬だ。

『それは難しい問題だな。なんたつてお前らは叩き易い顔をしているからなあ。

……無駄に喋つてる時間はねえから、急いで着替えろよ。』

先生は、笑いながら康平達を急かしていた。

飯島先生は梅田先生と対称的な性格で、練習中も冗談が多くテンションは非常に高い。

2人の先生から指導を受ける事は、それだけ練習がハードになる事を意味するのだが、ソフトな性格の飯島先生が練習に加わるので、1年生達は、昨日よりリラックスした気持ちで練習の準備を始めていた。

第一体育館に集まつた1年生達だが、飯島先生がタイマーを持つて

きていた。

『知り合いのボクシングジムの会長から貰つたんだよー。これで全員練習に集中できるぞ』

各々が準備できた事を確認した梅田先生は、床に置かれたタイマーのボタンを押しながら言った。

『まずは、シャドウ6ラウンドから始めるぞー。』

ブザーの音と同時にシャドウボクシングを始めた4人だが、2人の先生は折り畳み式の椅子に座り、1年生の様子を見ながら時折話し合っていた。

6ラウンドのシャドウが終わり、康平と白鳥は飯島先生に呼ばれる。

『今日から暫くの間、白鳥と高田は俺が見るからな。まずはグローブを付ける!』

『今日は、2ラウンド交替でミット打ちとシャドウをするんだが、まずはミット打ちのルールを教えるぞー。高田、構えてろよ。』

指示通りに構えた康平だったが、ミットをハメた先生は、突然康平に左右の速い連打をしてきた。

（ラッショウ）

先生が軽く打つてるので痛くはなかつたが、面を喰らつた康平は、ブロックをしながら固まつてしまつた。

『ハハハ、その状態だとスタンディングダウンと言つて、立つたままカウントを取られるぞ！ こついう時はなあ、右後方へ一目散に逃げるんだよ。反復横飛びで、右側だけにずっと行く感じだ。うちの高校ではカニ歩きと言つてているがな。』

飯島先生は、話しながら見本を見せる。

『そして、充分な距離がとれたら構え直せ！ 途中で反撃しようなんて考えるなよ。とにかく離れて体勢を整えるんだ！』

『次は白鳥だ、いくぞ！』

白鳥は、オボツカナイ足取りで右後方に逃げた。

『不恰好だつていいんだぞ！ 目的は不利な状態から逃げる事なんだからな。』

……
ただ、もう少し小刻みな感じでカニ歩きをしろ！ それから横に逃げる場合は、ガードの幅を広げるんだ。』

飯島先生の言葉に、康平が質問をする。

『先生、理由を教えて貰えませんか?』

『小刻みな足運びは、足が揃わないようにする為だ! 両足が「気を付け」の姿勢みたいに揃つてると、軽いパンチでも倒されるからな。ガードを広げるのは、フックを防ぐ為なんだよ! 横に動いた時にオツカネエのは、横殴りのフックだからな。分かつたか?』

いや、これは分からなくても言われたようにしろ!』

2人にカニ歩きを数回繰り返させた後、更に飯島先生の話は続く。

『いいか、俺がさつきみたいにラッショしてきた時は、カニ歩きで逃げるんだぞ! まずは高田からミット打ちだ。』

次のラウンドからミット打ちが始まった。

連田と殆ど変わらないミット打ちだが、康平が打ち終わつた直後を狙つて、先生がラッシュを仕掛けてきた。
ただ、他の返し技を打たせる為のパンチとは明らかに違い、パタパタと上から頭を叩くような感じで打つていた。

『ホラホラどうした? 早く逃げないと試合を止められるぞお~。』

打たれまま固まつてしまふ康平に、先生はお構い無しにパタパタ叩いていく。

よつやくカーブをした康平だったが、先生は歩いて追つかけている。

『勢いよく逃げないと、ドンドン打たれるぞお～。』

康平が速いカーブを意識し、2メートル半程離れて構え直したところ、先生の追っかけも終わっていた。

『この位離れるまで、急いで逃げるよ。』

相手は今、ラッシュで疲れてんだからホラ反撃だぞ！』

飯島先生は、話しながらもミシューで構えていた。

先生は優しい口調でミシューを受けるのだが、彼がラッシュをした時だけは、声のトーンが高くなる。

『打たれたくなかつたら、トットと逃げるんだよー。』

康平との2ラウンドのミシート打ちが終わり、白鳥の番になった。時折先生のラッシュが彼を襲う。

康平と同様に固まってしまった白鳥へ、先生は声を張り上げた。

『やこは勇ましく逃げるんだよー。』

変な日本語になつてゐるが、先生はノリで話してゐる為か、全く気にしていない様子だ。

一方の白鳥も、先生の言いたい事は分かつてゐるようで、速いカニ歩きで距離をとつた。

こうして康平と田嶋は、二ラウンジずつミシト打ちを繰り返していくが、先生は、さつきの言い方が気に入つたらしく、ラッシュする度に大声を出していた。

『逃げる時は勇ましくだぞー。』

個人レッスン

翌日の1時限目、ロングホームルームで球技大会の種目分けがあつた。

その前に担任が説明をした。

『3種目とも男女混合なんだから、男どもにはハンデ付きだ。バスケはリバウンド禁止、バレーはバイク禁止、ソフトは利き手と逆でやる。』

不満そうな男子生徒達に気が付いたのか、担任は話を付け加える。

『お前ら、女子と一緒に出来るだけでも有り得ないんだから、そんな顔をすんな！ この時間でメンバーを決めるから、俺の配った用紙に名前と出る種目を書いておけよ。書いた者から俺の所に持つて来い。』

担任の机に、クラス40人分の用紙が集まっていく。

担任は貰つた用紙を見ながら、バレー・バスケ・ソフトと書いてある黒板に、「正」の字を書いていった。

担任が「正」の字を書く時、白と赤のチョークを使い分けていた。

全員が用紙を出した後、40本分の線を引いた担任は、驚いた表情

になつてゐる。

『なんだよ！ もう直す必要ないじゃないか。』

黒板にあるバスケの所には、「正」が2つ完成し、白と赤の線が5本ずつ入つていた。

バレーは白と赤が6本ずつ、ソフトボールには9本ずつ入つてゐる。

『言い忘れたが、バスケの定員は10人、バレーは12人、ソフトは18人だ。

どれも男女半々にしなければならないんだが、いつもアッサリ決まるとはなあ……』

担任は、困つた顔をしながら全員に言つた。

『今日のホームルームは、球技大会の種目分けでテコズル予定だつたから、何にも考えてなかつたんだよ。』

お前ら、種目別に集まつて適当に雑談してろー。』

『バスケはこつちだよー！』

麗奈の声で、バスケに出る全員が、彼女の席に集まつた。

麗奈が担任へ聞こえないように、声を低くして康平に話し掛ける。

『昨日健太が言つてた1人200円の話をさあ、女バス全員に話したら皆ノリ気みたい。』

『ん、なになに、一体何の話?』

麗奈は、康平を除いた8人のメンバーに、ケーキバイキングの事を説明した。

『何か面白そうだね。』

亜樹も含めた6人のメンバーは、好奇心旺盛な顔をしていた。

『200円は出すけどさあ……俺らバスケ上手くないけど、参加していいのかなあ?』

『そうそう、あそこのケーキバイキングは行きたいんだけど、皆の足を引っ張つてヒンシュク買いたくないしい……私達2人はズーッと控えでいいよ。』

小柄で仲の良さそうな男女2人が、全員の顔を見ながら麗奈に話した。

『球技大会なんて遊びなんだから、上手くなくなつて大丈夫よ!……でもお、練習したいんだつたら協力するわよ。土日の午後から

だつたら私は大丈夫だけど……
あ、強制じゃないから……ネ!』

笑顔で話しながらも、目が笑っていない麗奈の表情を見た2人は、
土曜日を練習日にした。

『康平も当然練習するんだしょ?』

『フリイなあ、土日の午後からは部活なんだよお。』

『何ノンキな事言つてんの! 康平は他人の3倍練習しなきゃいけ
ないんだから、何とか都合つけなさいよ。皆の200円を無駄にし
たいの?』

麗奈と康平のやり取りを聞いた他のメンバーは、土日の練習に出た
いと言い出した。

土曜日の練習だけ出る予定だった男女2人も、土日に参加すると言
い直す。

『そう、皆悪いわねえ。ホント強制じゃないんだから。

康平は、部活サボッたら梅ツチに殺されそうだしね! まあ仕方無
いか。

とにかくであ……』

麗奈は、殆どのメンバーが自主的(?)に練習する事へ気を良くし
たのか、バスケと関係無い話を始めていた。

放課後、亜樹に誘われていた康平は市民体育館にいた。

亜樹は、10分程遅れて来た。走ってきたようで、息が弾んでいる。
『ゴメンね、待たせちゃって！ 練習着を取りに、一度家に帰った
んだ。』

『学校に持つてくっちゃいいんじゃねえの？』

『イヤよー、バッシュとかカサ張るし、学校では目立たたくないか
らね……チョット待つてー！』

亜樹は、急いで更衣室に入つていった。

白地で両脇に2本の赤いラインが入つているノースリーブのTシャ
ツにバスケットパンツ、そして白いバッシュの姿で亜樹は更衣室か
ら出てきた。

『あまりジロジロ見ないでよー！ 中2の時に着ていた練習着で、着
れるかどうか心配だつたんだから。』

『い、いや、カッコイイと思つても……』

『あ、かわいいわと始めるわよー！ まずは準備運動ね。』

2人が準備運動を終えた時、亜樹が口を開いた。

『ウォーミングアップついでにバスとドリブルの練習をするわよ。
……私のマネをすればいいからね。』

亜樹は倉庫から持ってきたボールを、その場でドリブルしてから康平にチエストパス（胸から出すパス）を出す。

康平は、受け取ったボールを亜樹のマネをして彼女にバスをした。

何度も繰り返したが、亜樹は首を傾げている。

『バスに勢いがないのよねえ。

それとドリブルの時は、ボールを見ないで前を見てるといいんだけど……』

『そんなの無理だよお。』

堪らず言い返した康平だったが、亜樹も責めるつもりはないようでも、むしろ康平以上に悩んでいる様子である。

『そうね……ドリブルは、根気強く練習しないと身に付かないから、球技大会までは厳しいかもね。』

でも、バスは出来そうだからやってみよつよー 片足で踏み込みながら、体全体でボールを押し出すイメージでバスしてみて!』

何度バスを出しても上手くいかない康平だが、

『何て言つのかな……体の重心移動に遅れて腕を伸ばすって感じ
なのかな……それと腕の力は抜いた方がいいわね！ 試しにやって
みてよ。』

という亜樹のアドバイスに従つて、何度も康平のバスを出した時、康平の両腕にボールを押し出す感触が残つた。

放たれたボールは、今までよりも勢いよく亜樹の胸元へ吸い込まれ
ていく。

『いいじゃん康平！ 忘れないよつて、ドンドン繰り返すよー。』

パシッ！

『ナイスパス！』

パシッ！

『いいよ康平！』

康平がバスを出す度、数人しかいない体育館に亜樹の声が響く。

普段の大人っぽい亜樹と違つて、体育会系のノリになつていてる彼女を見た康平は、新鮮な気持ちでバスを繰り出していた。

チェストパスの他にバウンドパスも練習した後、亞樹が康平に尋ねる。

『康平、まだ時間ある?』

『……ああ大丈夫だよ。』

『じゃあ、ショートも練習しちゃおつよー。』

『えつ、俺ドヘタなんだけど?』

康平は、両手を前に出して遮るように仕草をした。

『フォームなんて気にしなくていいから、1回打ってみてよー。』

『……笑うなよ。』

ボソッと言った康平は、フリースローの位置に立った。

右の鎖骨の辺りでボールを持ち、両手で押し出すようにショートをする。

ボールは直接リングに当たり、右側へ大きく弾いた。

『血口流で打つてんだから、入らないのは当然なんだよー。』

康平は、言い訳をしながらボールを拾いにいく。

『コメン康平、もう1回ショートお願ひ！』

亜樹は笑いもせず、康平に言つた。

次に打ったショートは、ボードからリングに当たって、亜樹のいる左側へボールが転がつていく。

亜樹は、ボールを拾わないで頬に手を当てるで考えている。

『門田さんの話を聞くと、康平はもつとヒジヒジしてたのよね…』

…』

『いぐら俺だつて、誰も邪魔しなけりやボードを越えたりしねえよ。

『そつ……だつたら康平は、試合でも笑われないで済みそつよ。』

』

『え…… そつなの?』

亜樹は、足元にあるボールを拾つて左脇に抱えた。

『多分だからね! でも、結構練習が必要かも……』

その時社会人らしい人達が、バドミントンの道具を持つて、体育館に10人程入ってきた。

『6時半も過ぎたし…… もう帰ろつか?』

『そりだなあ、実はもっと練習してみたいけど…… 恥ずかしいしなあ。』

2人は各自更衣室に向かつていった。

外に出た2人だったが、康平はハツと思ひ出すように口を開く。

『今日は9月9日だよね! た、誕生日おめでとう。』

『ア、アリガト…… そつ言えば康平の誕生日って綾香と同じ日だつたわね。』

『俺のなんか気にすんなよ。勉強教えて貰つたお礼……いや、いや、親友として渡したかつただけだからさ。』

慌てて言ひ直した康平に、亜樹はクスッと笑つ。

『親友だつたら、尚更お返しなくちゃね！』といひで、健太の誕生日つて何日？』

『1月1日だよ！ アイツはチョット可哀想なんだ。その日は、皆忙しいしなあ。』

『せつ……あ、いけない！ 7時で家に帰らないと、両親が誕生日の用意をしてるのよ。』

亜樹は急いで帰らうとしたが、一度康平の方へ振り返った。

『康平は、来週の水曜日も部活休みなんじょ？ また練習出来るかな？』

『頼むよー。でもバスケットで、ちゃんと教えて貰うと楽しいもんだな。』

『まあね。……それと、この練習は皆には内緒だよー。理由は今度話すからさ。じゃあね。』

少し口許が綻んだ亜樹は、時計をチラッと見ながら早足で歩いていった。

謝りながら前に進め！

康平と白鳥は、一週間の内四日間は飯島先生の指導を受けている。

曜日にすると、火・木・土・日の四日になる。

二・三年生は、月・水・金の三日間がスパーリングの日だ。

水曜日は康平達一年生が休みの日なので、梅田・飯島の両先生が指導に入るが、月・金曜日は梅田先生が第一体育館で一年生の指導に当たり、飯島先生が二・三年生のスパーリングについていた。

康平と白鳥が、飯島先生からカニ歩きを教わって一週間後の火曜日、飯島先生は第一体育館に来ている。

「カニ歩きは、ピンチから逃げたい場合に使うんだが、何か打ち返してから逃げる！」

出来れば姿勢を低くして、顔より下を打つ方がいいな

「顔じゃ駄目なんですか？」

康平が疑問をぶつけた。

「顔があ……顔を狙うのはやめた方がいいな。相手の連打に呑み込まれる危険があるんだよ！」

「呑み込まれるって、どうなるんですか？」

白鳥も質問に加わる。

「まあ……その……なんだ、お前らが反撃しようとした時に、相手の連打が先に当たつてしまふケースだな。……相手が連打してる時に顔面を狙うと、自分も高い姿勢になってるから被弾し易いんだよ」

苦労しながら説明する先生へ、康平がお構いなしに質問をする。

「顔より下……つて事は、ボディー打ちでいいんですね？」

「ボディーを打てればそれに越した事はないんだが……ピンチの時は、お前らもパークついているからなあ……ブロックの上でもいいから、とにかく打つて逃げるんだよー！」

「ブロックの上……でもいいんですか？」

白鳥が戸惑いながら訊く。

「逆に質問するが、お前らブロックする時は、どんな感じになる？特に下半身だがな」

先生に問い合わせられた二人は、顔を見合せながらブロッキングのポーズをした。

「……踏ん張るような感じ……です」

自信無さげに白鳥が答える。

「正解だ！ パンチをブロックする時は、踏ん張る場合が多い。すると相手は、一瞬だがお前達を追っかける事が出来なくなる。その隙に一目散に逃げるんだよ」

「もし、間違つてボディーに当たつた時はどうするんですか？」

康平の質問に、飯島先生は吹き出しちゃった。

発言した本人も、失敗したような顔をしている。

「アホ、それだったら追撃だろつ！ ……いやチョット待て……そのまま逃げておけ。

まず一番大事なのは、打たれない事だからな」

康平と白鳥の質問責めに、さすがに飯島先生も辟易したのか、時計を見て一人に言った。

「お前らは今日、新しい練習をするんだから、そろそろ準備運動を始めろよ… そして、シャドウをする前に俺の所へ来い」

新しい練習が気になる康平と白鳥は、急いで準備運動を終わらせて先生の所へ行つた。

すると、先生が少し険しい表情になつてゐる。

「お前ら準備運動は、ちゃんとやつたのか？」

「いえ……かなり急いでやりました」

二人は、下を向きながら小声で答えた。

「だったら、もう一度やり直してこい！　スポーツ選手は、怪我や故障に人一倍気を遣わないと駄目なんだよ」

「ス、スマセンでした」

康平と白鳥は頭を下げた後、入念に準備運動を再開する。

「オイオイ、俺に謝んなくていいから、自分の体に謝つておけよ」

飯島先生から険しい表情が消え、いつものように軽口を叩いた。

「準備運動は終わったようだな。お前ら一人は謙虚な方だが、謝り方はまだまだ未熟だなあ……」

「これからは、謝罪の仕方を磨いていかないとな

改めて準備運動を終えた康平達だが、飯島先生の意味不明な発言で戸惑い気味の表情を見せる。

「今迄は逃げる練習をしてきたが、今日から前に出る練習を始めるぞ！ 白鳥、俺を相手にして前に出てみろ！」

白鳥が先生の前に出て構えると、左足を前に出した後に右足を引き付けた。

梅田先生から習つた通りの足運びである。

健太以外の一年生はオーソドックス（右構え）で、左足が前で右足が後ろ足になっている。

「おひ、ダテに練習はしないようだな。だが、これからはオマケを付けるぞ！ お前らは最近、梅田先生からダッキング（屈むような防御）を習つてたよな？」

「はい」

「左足を前に出した時に、小さくダッキングをするんだ。そして、右足を引き付けながら頭を戻す！ お前ら少しやってみる」

康平と白鳥は、それぞれ言われたように前進していく。

「ん？ そんなに大きくダッキングしなくていいぞ。疲れるからな。
頭一つ分左右にダッキングすればいいんだ！」

白鳥がここで質問をする。

「先生、右ヘダッキングしてもいいんですか？ まだ歸つていないと
んですけど……」

「ああそうだつたな。その点は梅田先生と話しあつてゐるから大丈
夫だ！ 特にお前らは、タイプ的にダッキングをする機会が多いん
だよ。」

「……
ま、待て、今のは聞かなかつた事にしろ！ お前らのタイプを説明
してたら練習にならないからな。そのまま前進を続けてろよ」

二人が、今にも聞きたいような顔をしていたので、先生は慌てて
遮つた。

一ラウンド前進する練習をしていたが、インターバルの時に飯島
先生がアドバイスをした。

「逃げる時は勇ましくなんだが、前に出る時は今みたいに頭を位置
を変えるんだ。打たれる確率が高いからな」

そして、先生は少し得意げに付け加えた。

「まあペコペコ謝りながら前に進む感じだ

康平と白鳥は笑いもせずに、眞面目に聞いている。

「何だよ！ この場面は笑つて欲しかったんだがな。

それにしても、お前らの膝は硬いんだよなあ。……次のラウンド、俺は用事があるから、お前らは有馬達の練習でも見てろ！ なんなら気付かれないうちに、女バスを見ててもいいぞ」

ブザーが鳴り、次のラウンドが始まった。

「バカヤロー！ そこはワンツーじゃなくて右、左、右だ！」

スパーーン！

一人は、女バスを見たい気持ちを押さえて怒鳴り声の方に目をやると、有馬がミット打ちで梅田先生から頭を叩かれていた。

不思議な事に、有馬は叩かれる理由を納得しているようで、叩かれながらも集中して構えている。

その構えも、今までどこか違っていた。

興味深く並んで見ていた康平達だが、突然白鳥の頭が低くなる。

何事かと思つていた康平も、膝の力が抜けてカクンとなつた。

驚いた一人が後ろを振り返ると、飯島先生が両膝を突き出して笑つていた。

「ハハハ！　俺の膝カツクンは見事に引っ掛けたようだな」

「せ、先生！　いきなり何をするんですか？」

康平の抗議にも構わず、先生は話し始める。

「これはお前らに教える為、ワザとやったんだよ」

意表を突かれた発言に田を丸くしていた二人に、先生は話を続けた。

「前に出ながら頭を動かす時はなあ、自分で左の膝がカクンと抜け感じにするんだよ。さあ、ラウンドの途中だが練習再開だ！」

康平と白鳥は、膝カツクンされた感覚を思い出しながら、ダッキングしていく。

今迄と違い、二人の頭の位置がクイッと勢いよく変わつた。

「よーおし、いいぞお！　この感覚を忘れないように、前進だけのシャドウを五ラウンドだ！」

全ての練習が終わり、康平は飯島先生に質問した。

「ボクシングに戦うタイプつてあるんですか？」

離れていた所で柔軟体操を終えた白鳥も、康平の質問には興味があるようで、二人のいる場所へ駆け寄つてくる。

「あちやー、やつぱり質問してきたかあ。

ボクシングの入門書には、ボクサー・タイプ・ファイター・タイプ・ボクサーファイタータイプの三種類が書かれているんだがな。大雑把に言えば、ボクサー・タイプは離れて戦うタイプで、ファイタータイプは接近して戦うタイプだ。それからボクサー・ファイタータイプが両方含めたタイプだな。

但し、あくまで入門書でのタイプ別なんだがな」

飯島先生は、少し困ったような顔で説明した。

「僕と康平は、どんなタイプなんですか？」

「今はハツキリ言えないなあ……俺からタイプの事を口にしてなんだが、これはお前らが実戦を重ねないと分からぬ部分なんだよ。ただお前らは、ダッキングを多く使いそうな気がするだけだ。

大体ボクシングなんて相対的なスポーツなんだよ。相手が接近戦を苦手だつたらこっちは接近するし、逆だつたら離れて戦うしな」

少しガツカリしたような表情の一人を見て、先生は話を付け加える。

「ただ一つ言えるのは、お前らが華麗にフットワークを使ってボクシングしそうなイメージが、俺にはどうしても沸かねえんだよ。お前らの顔を見ると、あんまり器用そ'じやねえからなあ」

「ヒドイ言い方ッスね！ 確かに僕と白鳥は、ボクサータイプになれない気がするんですけど……」

康平と白鳥は、お互いの顔を見て苦笑した。

「これから一、三年生の指導が残つていいから、お前らはもう帰つていいぞ！ ああ……チョット待て！」

一人を呼び止めた先生は、再び話を始めた。

「戦うタイプの事なんだが、多くの入門書でのタイプは三種類しかないが、ファイタータイプ一つをとっても、カウンターが上手いとか、強振してくる奴や、連打がしつこいタイプだつたり様々だからさ。

……
但しそれも、一つ一つ使える技が積み重なつてタイプ……否、スタイルが出来上がってゆくんだ！ ……それはいいとして、俺と梅田先生は、お前に手指して欲しいスタイルがある」

「それは、どんなスタイルですか？」

康平と白鳥は、口を揃えて質問する。

「それは、打たれないと打つボクシングだよー 戰い方は選手によつて違うがな」

「そんな事つて出来るんですか?」

「難しい課題や……せいぜい致命的なパンチを貰わないようにする
のが現実なんだがな……ただ、田指すのと田指さないのとは、後に
なつて大きな差が出てくると俺は思つてゐる」

先生の言葉を、一人は黙つて聞いていた。

「だからお前らは、打たれないスタイルの第一歩として、謝り方に
磨きをかける事だ! 前に出る時は頭を振る癖をつけろ……どのみ
ちお前達が嫌がついてもやらせるんだがな!」
…………

風邪を引かないように、もう着替えて帰れよ

飯島先生は、笑いながらも真面目な口調で言つた。

トモだからショート？

翌日の朝、康平が教室へ行くと、珍しく亜樹の席に数人が集まっていた。

亜樹は、プライドが高そうな容姿と入学早々にビンタを喰らわしたエピソードがあるせいか、亜樹の机には、せいぜい親友の綾香が来る程度だった。

どんな奴が集まっているかチラッと見ながら席に着いた康平だったが、向こうから話し掛けってきた。

「康平おはよ！ 今日も運氣た頬してるわねえ！」

麗奈である。他是球技大会でバスケに出るメンバーだった。

「悪かつたな！ とにかくあつたんかよ？」

「いやあ、土田に練習した時さあ、亜樹の教え方が上手くて好評だつたのよ。

ここにいるメンバーは帰宅部で、平日も教えて貰えないかつて彼女に相談しているところなんだ！」

康平は今日、部活休みなんでしょう！ あんたも亜樹にお願いしないよ。一番練習しなきゃいけないんだからさあ

「それだつたら……」

「あ～、「ゴッメイン！ 今日は用事があつて駄目なんだ！」

思わず亜樹との練習の事を話そうとした康平だったが、亜樹の声で遮られた。

「残念ねえ……亜樹にも都合があるんだし、練習は土日だけでいいんじゃない？」

麗奈は、他のメンバーをなだめるよつこじて自分の席に戻つていった。

三时限目が終わった時、亜樹は席を立ちながら、メモ用紙を康平の机にさりげなく置いた。

康平は、誰にも気付かれないよつこじてそれを読む。

『朝は危なかつたわね！ 今日は2人で練習のハズでしょ？ 罰として今日の練習はキビシクするから、覚悟しなさいネ？』

四时限目の授業が始まったのだが、康平はいきなり先生に突っ込まれる。

「高田あ、俺の授業がそんなに楽しいのか？ もうきから顔がニヤついてるやー！」

「あ……いえ、そんな事はないです」

「何も真顔で否定する事はないだろ！ 妄想してもいいが、顔には出すなよ」

赤くなつた康平は、半分以上のクラスメートに笑われていた。

学校が終わり、康平は市民体育館へ行つた。

亞樹は急いで家に練習着を取りに行つたようで、康平より先に着いていた。

「康平はスポーツ選手だつたら、ポーカーフェイスにならないとね……四時限目は、私まで恥ずかしくなつたんだから」

「う……じめん」

「まあ君なりに、私との練習を喜んでたつて事で許してあげるけどね」

「まことに喜んでいる亞樹を見た康平は、ホッとしながら男子更衣室へ入つていく。

二人は、先週のように準備運動からバス練習へと進めていった。

「バスは大分慣れてきたみたいね。次は先週の続きをやよ！」

「先週の続きつて……まさかシート？ 無理無理、俺バスケ下手

だしショートなんか入んねえしさ」

康平は後退りしながら断つたが、亜樹は強引にボールを押し付ける。

「土日に練習して麗奈と作戦を考えたんだけど、バスケを本格的にやった事がない人には沢山ショートを打つて欲しいのよー。」

亜樹と麗奈は、土日の練習の際に親しくなったようで、お互いやの名前を呼び捨てしていた。

「下手な奴にショート打たしちゃ駄目なんじゃねえの？」

「……経験者じゃない人にショートを打たせるのは、ちゃんとした理由があるのよ。先週のホームルームで、担任が言った男子のルールって憶えてる？」

「ん~……確かにバウンド禁止だつけ?」

「そうそう、リバウンドって敵味方に関係なく、ショートしたコボレ球をジャンプしてとるプレイなんだけど、私と麗奈は女子だと背が高い方でしょ?」

「え、まあ……そうだね」

亜樹は172センチの康平と同じ位の身長だが、麗奈も似たような長身である。

「だから私と麗奈は、ショートも狙うけどバウンドを拾つて得点

「じゃあ、俺達が打ったショートのコボレ球を得点にしてつって作戦かあ！」

「じゃあ、俺達が打ったショートのコボレ球を得点にしてつって作戦かあ！」

「そうね。出来ればショートを狙う役目の人には、スリー・ポイントのラインから打つて欲しいのよ」

「尚更入んねえと思うけど……でも何で？」

「……練習終わってから説明していい？　また沢山の人達が来たら、練習しづらくなるでしょう。まあ、そこは半田のラインからショートを打つてみてー！」

スリー・ポイントのラインに立った康平は、先週と同じく、右の鎖骨辺りから両手で押し出すようにショートを打つ。

放たれたボールは、ネットにカスつて壁の方へ転がつていった。

（俺が打つても、ほとんど入んないんだけどな……）

口に出すと亜樹に怒られそuddtたので、康平は心の中でボヤいた。

「惜しいわね！　じゃあ今度はバスを貰つたらすぐに打つてみて。……次はリングじゃなくて、バックボードの小さい四角の枠を狙つてみてよ」

ボールを拾いにいった亜樹からバスを貰った康平は、すぐにショートを打つた。

今度も入りはしなかつたが、ボールはボードからリングに当たり、ゴールの中を転々としている。

「いい感じだよ！ あれだつたら私と麗奈がリバウンドを取りにいけるからね。」

「でも少し気になる事があつて、今から試してみるけどいいかな？」

「別にいいけど……」

康平は戸惑いながら返事をした。

「私が康平にバスを出したら、相手チームに変身してティフェンスするからね。じゃあ、今からいくよ！」

バスを受け取った康平がショートをしようとした時、近付いてくる亜樹が視界に入り、慌ててショートを打った。

ボールはボードを越えてしまっていた。

「…………もう一回いくよー。」

亜樹は、笑いもしないでボールを拾いにいき、再び康平にバスを出す。

彼は、さつあと回じく慌ててショート打ち、今度はリングの遙か手前にボールが落ちてしまっていた。

「今ので、康平の欠点が分かつたような気がするんだ……まあ誰にでもあるんだけどね！」

「……やっぱり相手がいると慌ててしまうんだよなあ」

「康平に自覚があるんだつたら、話し易いわね。
いきなり慌てないようにして打てと言つても難しいと思つから、ショートの打ち方を君に教えようと思つんだ。

私もこのショートは得意じゃなくて、君に上手く教えられるか分からぬいけどやつてみる？」

「ああ、是非お願ひしたいよ。今のショートのフォームもカッコ悪いだろうしな。

でも、亜樹にも苦手な事つてあつたんだ」

「得意じゃないって言つたの！ それより、フォームを教えるからね！ 康平つて右利きだよね、ボールは右手で持つて左手は横に添える感じでえ……」

笑つて突つ込んだ康平に軽く言い返した亜樹だったが、自ら見本を見せながら教え始めた。

「いきなりロングショートは厳しいから、手前からしょつか！ ショートは右手ですからね」

フリースローの場所に立つてショートをした康平だったが、ボールがリングにも届かず手前で落下してしまった。

「最初から上手くいくわけないんだけど……何か違うのよねえ……そりそり、右腕の位置は口口なのよ！」

亜樹は説明しながら、康平のボールを持った右腕を直接修正する。「リングに向かつて、右膝と右腕が同じラインにあるよ! つな感じね。」

チョット康平、何赤くなつてんの？ シュ、ショートは腕じゃなくて、ひ、膝……特に右膝で打つ感覺だからね

康平と同じ位に亜樹の顔が赤くなつていた。

「み、右膝で打つんだね？」

赤い顔をしたまま康平が次のショートを打つた時、ボールはボーダからリングに当たつて彼のもとに戻ってきた。

「いい感じじゃん、その調子でドンドン打つてみようよー。」

その後、何度もショートを繰り出した康平だったが、六時半になつた時、先週と同じように社会人のグループが十人程体育館に入ってきた。

「今日は終わりにしようか。……着替えたならジュースでも飲まない？」

「そうだな、あんまり動いてないけど、シユートの時は集中するから喉が渴いたよ」

着替えが終わった一人は、入り口の椅子に座つてジュースを飲んでいた。

「先週も言つたけど、一人だけの練習は内緒だからね!」

「別に言つてもいいんじゃねえの? 僕も試合で失敗してもいいよう、麗奈へ練習したつていう誠意を見せたいからさあ」

「元々いじられキャラの康平は何とも思つてないよつだけど、私だったら耐えられないよ。」

お節介かも知れないけど、康平が秘かに上手くなつて皆の驚いた顔が見たいなあ~って思つたんだけどね」「……」

「別に、いじられキャラのつもりはないんだけどな……まあ俺に教えているのがバレたら、他の奴等にも教えなきゃなんねえだろうし」

「……」

「そういう事にしておひつかな……ところで来週も練習大丈夫?」

「ああ、いいよ。翻つてみると、面白いんだねバスケって

「先週と同じような事言つてるわね。素直に喜んでいるみたいだからいいんだけど……」

じゅあ、また明日ね。」

ケンケンと空氣椅子

一日後の金曜日、一年生達が練習する第一体育館には、梅田・飯島の二人の先生がいた。

「今度から一・三年生は土曜日にスパーリングだから、今日から金曜日もお前らに教えるぞ」 あいつらは今日、自由練習をやつてゐるよ」

「自由練習って何ですか?」

説明した飯島先生へ、早速白鳥が質問をした。

「自由練習って、お前ら知らなかつたつけ? 最近始めた事なんだが、まあその名の通り、自由に練習することさ。覚えた技のシャドウだけでもいいし、休みなしにサンドバッグを打つてもいいし、とにかく好き勝手に練習していい日なんだ。自由練習は、一週間に一日だけだがな」

「石山先輩と兵藤先輩は、国体前ですよね。大丈夫なんですか?」

今度は康平が疑問をぶつける。

「梅田先生の考えた事なんだが、試合前だからこそ俺はいいと思っている。試合前は思考が狭くなり易いからな。案外遊び感覚でやつた方が、身に付けられる技があるかも知れないんだよ。

ただ、これが正しいかどうか、俺にも分からねえぞ

「僕達に、そういう日本は無いですよね」

康平の質問に、飯島先生は即答した。

「当たり前だろー。お前らは、まだ習つた技の種類が少ないんだからな。……まあ一年になつたらあると思うがな。早く自由練習出来るように、さつさと練習始めるぞ！」

飯島先生に急かされた康平と白鳥は、準備運動からシャドウボクシングへと練習を進めていく。

「頭の振り方はまだ慣れないようだが、まずは高田からミット打ちだ！」

ラウンド開始のブザーがなり、康平のミット打ちが始まった。

ミットを構える飯島先生を見た康平は、少し違和感を覚える。普段のミット打ちも、踏み込みを良くする為に遠めから構えていたのだが、今回は更に遠くで先生が構えていた。

「どうした？　この構えをしたらジャブを一発打つんだろ」

飯島先生は左ミットを前に出し、右ミットは口の前に構えている。ただ、康平から見たら手前にあるはずの左ミットも、彼の頭から一メートル半近く離れていた。

「届かなくてもいいから、右足で思い切り蹴つて打つてみろー。」

先生に言われて無理矢理踏み込んだ康平だったが、パンチは届かず、左ミットに当つようとするあまり、上半身が前ノメリになってしまった。

ペチ！

空振りした康平の左頬へ、先生が右のミットで触つていた。

「オイオイ、そんな前ノメリになつたら、ジャブを空振りした時力ウンターを喰らうぞ！ さつきも言つたが、踏み込む時は右足で思い切り蹴るんだ！ 届かなくてもフォームは崩すんじゃないぞ」

その後康平は、ひたすら右足を蹴つてジャブ一発を繰り返したが、結局一度もミットに届く事なく一ラウンドを終えた。

続く白鳥も、先生のミットに向けてジャブ一発を何度も放つたが、一度もミットから快音が出る事はなかつた。ただ彼の場合は、夏休みに大学生の山本さんと練習していたので、フォーム自体は綺麗に打つていた。

田島のミット打ちが終わつた後、飯島先生が口を開く。

「踏み込みというのは大事なポイントなんだが、一朝一夕で身に付くものじゃないからなあ。

今日からミット打ちで最初の一ラウンドは、わざと遠くから打たせるからな！

……

とにかく話は変わらんだが、右ストレートに対しての返し技は何を

習つてんだ?「

「ブロックキングストレートと、左ヘッディングしての左ボディー打ちです」

先生の質問に、一瞬康平を見て白鳥が答えた。康平も頷く。

「そうか……今日は、俺が右ストレートを打つたら左ボディーを打つんだぞ! また高田からミット打ちだ」

開始のブザーが鳴り、ミット打ちが始まった。

パンパーン!

先生の構えに反応して一発の左ジャブを打つたが、このカウンドの先生は近くで構えていたので、一発ともミットに当たる。

ただ二発目のジャブが右のミットへ当たった時、飯島先生は一瞬眉をしかめたが、すぐに普段の顔に戻っていた。康平も気付いたようだが、先生がすぐに両手を重ねての構えていたので、質問する間もなく右ストレートを放つ。

間髪入れずに先生が、左ミットを横向きにして構えている。これは、左フックを打たせるポーズなのだが、右ストレートを打つた後、最初の構えに戻してしまった康平は、一度溜めを作り直してから左フックを打つた。

「……まだ言つてなかつたと思うが、右パンチを打つた後は、体は右に捻つたままで腕だけ戻すようにしておけよ! 右パンチを打つ

た時は、左パンチの溜めを作るチャンスなんだからな。……ほら、もう一回右ストレートからいくぞ！」

両手を重ねて構えた先生に右ストレートを放ち、すぐに左フックを打とうとした康平だったが、先生はまだ左ミットで構えていない状態だった。

打ち始めの動作に入った康平は、バランスを崩してしまった。

「オイオイ、ちゃんと見てから打てよー。ボクシングは相手があるスポーツだからな。

…………
もつー回いくぞー。」

先生のミットへ右ストレートを打った康平は、左フックの溜めを作ったまま、左ミットが上がるのを待っていた。勿論そこに左フックを打つ為である。

…………

ところが五秒経つても、先生の左ミットは上がっていない。

「まだまだあー、我慢しろよー。」

先生は、今にも左ミットを上げそうな素振りで、康平のフォームをじっくり見ていた。

十数秒経つて左ミットが上がり、康平は左フックを打つたが快

音は出ず、空を切り、右へ泳いだよつとバランスを崩していた。

「わざと空振りさせたんだが、まだ下半身が安定しないなあ……、今を繰り返すぞ！」

結局康平は、右ストレートから左フックのパターンをずっと繰り返しので、一度も返し技をする事なく一ラウンドを終えてしまっていた。

次は白鳥のミット打ちになつたが、彼はシャドウボクシングをしながら康平のミット打ちを観察していたようで、右ストレートを打つた後、左フックの溜めを作つて待ち構えていた。

左ミットが上がつた時に白鳥は左フックを打つたが、先生は左ミットをヒュイと下げて空振りさせる。

白鳥はお世辞にも綺麗なフォームとは言えないが、バランスを崩さずに振り抜いていた。

「おっ、いいぞ白鳥！ もう一度右ストレートを打つてみる

右ストレートを打つた白鳥が、わざのように元で左フックの溜めを作つて待つていた時、

パコッ！

白鳥の額に先生の右ミットが当たっていた。

「左フックの溜めを作った時でも、俺が右ストレートを打つたら、ダッキングして左ボディーを打つんだよ！ 白鳥もづ一度右ストレートからだ」

右ストレートを打った白鳥が、もう一度左フックの溜めを作る。

先生の右ストレートを左へダッキングして避けた彼だが、前足の曲げが少ない為か、つんのめるような形になっていた。

そして、ボディーを打った時には後ろ足の踏ん張りが効かず、自分のパンチの衝撃で左側へバランスを崩していた。

先生は、何度かダッキングからの左ボディーを白鳥に打たせたが、バランスが良くならない。そして、そのままラウンド終了のブザーが鳴った。

「確かに白鳥は、左足が伸び氣味で梅田先生によく怒鳴られたんだよなあ。」

「今日のミットは中止だ！ 高田も俺の所に来い」

康平が一人の所へ行くと、再び先生が口を開く。

「お前らは、まだ下半身が弱い。これから補強の時に、二つのメニュー

ユーを追加するやー ケンケンと空氣椅子だ

「ケンケンて何ですか？」

白鳥が質問をした。

「ケンケンパつて遊びが昔あつたんだが、パの部分を無くしてやるから、俺と梅田先生はケンケンと言つてゐるんだがな……要は片足で前に進むんだ。二人共左足を上げろー……

立つてゐる右足で、思い切り蹴つて前に進んでみろー。」

先生は、手本を見せながら説明する。康平と白鳥も、それに続いて右足で蹴つて前に進んだ。

「ケンケンは、こんな感じだが分かつたな？」

一人が返事をすると、先生は更に説明を続ける。

「じゃあ今度は空氣椅子だな。まあ知つてると思つが、空氣の椅子に座る感じで中腰になるんだー！」

先生は話しながら、両腕を前に延ばして自らポーズを作った。

「俺は用事があるから、お前らーの姿勢でいろー……女バスを見ててもいいぞ」

康平達のポーズを確認した飯島先生は、女バスの方へ歩いていつた。

球技大会の事もあって康平は女バスを見ていたが、彼女達は交替で試合形式の練習をしていた。

綾香と麗奈は「コートから出たばかりのようで、タオルで汗を拭きながらドリンクを飲んでいる。

麗奈が康平の視線に気付いたらしく、綾香の肩をトントンと指で叩き、康平の方を指差す。綾香は一瞬だが、右手を小刻みに振つていた。

身動きの取れない体勢で、ざわつ反応しようが迷つていた康平だったが、

バーン！

と、体育館中にミットの音が響く。

この空間にいた殆んどの者が、音の出た方向に視線を向ける。

そこでは、梅田先生と健太がミット打ちをしていた。

「白鳥、今の音は？」

康平は、小声で隣にいる白鳥に訊く。

「見てなかつたの？」

逆に白鳥から訊かれた康平は、女バスを見ていた事に少し罪悪感を感じていた。

「ストレートとアッパー（下から突き上げるパンチ）の中間ような左ボディーだつたよ！……有馬もそうだけど、健太のフォームが少し変わったよね」

白鳥は話を続けたが、健太のフォームが変わってきた事は、康平も気付いていた。

健太はサウスパー構えで右半身が前に出ているスタイルだが、右手の位置が以前より前に出ている。

シャドウをしているオーソドックス（右構え）の有馬は、前に出るハズの左肘を少し引き氣味にし、逆に右手を左手と同じ位前へ出していた。シャドウを見た限りだが、彼の左ジャブは以前より力強い感じである。

健太と有馬の練習を見た康平は、弛くなりかけていた空氣椅子の角度を、九十度近くに修正した。

白鳥の頭の位置も、心なしか少し下がったようだ。

二人共、空氣椅子の角度を自らキツくしたせいか、健太達の練習を見る余裕はなくなり、冷や汗に近い汗が足元に滴り落ちていた。

「ラウンド終了」のブザーが鳴った時、飯島先生が康平達の所へ戻ってきた。

「よーし、もういいぞ！ 二人共、足をほぐしながら聽けよ。今、バスケ部顧問の田嶋先生にお願いしたんだが、コートの隣でケンケンをしてもいいそうだ。

……ん、どうしたお前ら？ 浮かない顔して」

二人は顔を見合せたが康平が答える。

「……あのう、女バスの前でケンケンと空氣椅子……ですよね？」

「ははあ～ん。女子の前だと恥ずかしいってか！ ……気持ちは分かるがな。練習場だと狭くて、特にケンケンは出来ないんだよ。まあ我慢しろ」

健太達の練習を見た後だつたせいか、一人は渋々返事をした。

「ところで先生、ケンケンと空氣椅子は、どの位やるんでしょうか？」

「ん～……一日に一回だな。火・木・土でいいだろ。それで一日にやるのは、

それは今決めるんじゃなくて、その練習をしている時に自分で切り上げる」

白鳥の質問に、先生は意外な返答をした。

「自分で……ですか？」

「やつだ！　べつに限界を超えてまでやらせよつとは思つてないから勘違ひするなよ。……極端な話、ケンケンは右足で蹴る感覺を感じられれば体育館一往復でもいいし、空氣椅子は左膝の角度を固める感覺が分かれば三十秒でもいいんだからな」

康平と白鳥は、更に困惑の表情になつた。

「ノルマを決めたくないんだよ！　例えばケンケンを体育館五十往復、空氣椅子を時間で十分に決めたとすると、お前らだつたらその日の練習ははじつかぬ？」

「ベース配分をすると思います」

先生の質問に康平が答える。

「だろ！　……俺だつて、補強にそんな練習メニューがあつたらベース配分をするしな。だが練習の時は、補強の為にベース配分をして欲しくないんだよ」

まだ理解していない康平達だが、先生は話を続ける。

「お前らは、部活で何の練習をしに来てる？　白鳥言つてみり

「ボクシング……です」

「そうだよな！ 基本的に部活の時はなあ、お前らのナケナシの体力は、ボクシングを身に付ける為だけに使い切らせたいんだよ。補強の為にシャドウやミットで手抜きをしたら本末転倒だからな」

康平と白鳥は、少し納得した表情になつた。

「オット、肝心な事を忘れてた。ケンケンが終わつたら、右足で思い切り蹴りながら一発の左ジャブを打て。空氣椅子の後は、ダッキングして左ボディーの練習をしろ。どちらもシャドウでいいぞ。」

さつさとも言つたと思うが分かるな？ ケンケンは踏み込みを良くする為で、空氣椅子は、特に左膝の曲げを安定させる為の補強だ。高田が左フックを空振りした時や、白鳥がダッキングした時にバランスが崩れるのは、左膝の曲げが安定しないせいなんだよ

この日康平達は、女バスの側をケンケンで往復していたが、往復する度に彼らの顔が赤くなつていつた。

ショート練習

次の週の水曜日、康平は亜樹と一緒に市民体育館で練習に励んでいた。もちろん球技大会の為、バスケの練習である。

この日はバスをもらつた康平がすぐにショートをするところの練習をメインに行つていた。だが先週とは違つて、バスを出した亜樹が康平のショートをディフェンスする形式になつていてる。

相手がいると、どうしても慌ててしまつ康平は、とてもショートをしたとは言えない方向にボールが飛んでしまつていて。

「ディフェンダー
私を気にしないで打つて」

「ショートは入らなくともいいんだからね」

ショートを失敗する度、亜樹は根気強くアドバイスをしたが、何度も繰り返しても、ショートらしいショートを打つ事ができない康平だった。

「上手くできなくてワリイな」

「康平に経験がないから、慌ててしまつるのは仕方ないよ。

康平、今ディフェンスしないからショートしてみてよ。ゴックリでいいからね」

康平は、先週亜樹に習つたフォームを確認しながらコックリヒュートを打つ。

ボールはバックボードからリングに当たり、康平達の所へバウンドしながら戻ってきた。

「慌てなければ康平は、いいショートを打てるのにね。……だけど、今の段階でもホンの少しほんの少しあはチームに貢献出来そうなんだよね」「俺みたいな下手くそが？ ムリムリ、だつてバスケは相手がいるスポーツだろ！ ディフェンスされたら変なショートしか打てないぜ」

「ディフェンスされたら……だよね。もしノーマークだったら、康平はいいショートを打つでしょ。すると誰かが君をマークをしてくると思うの。でもそのおかげで、他のメンバーの負担が少なくなるんだから、それだけでもチームに貢献してると想つよ」

「そんなもんかなあ……でも、やつひひと話されると気が楽になるよ」

「康平を含めて、バスケが苦手だつて思つている人には、スリー・ポインツのラインからショートを打たせる作戦だつて先週言つたよね？」

「ん？ ……ああ言つてたけど、理由は聞きたかったんだよね」

「私の方こそ言こそびれちゃつて『ゴメンね』

うちのクラスでスリーポイントを打つ役目の人は、メンバー十人のうち君も入れて四人いるんだけどね」「うち君も入れて四人いるんだけどね」

「すると、俺の他に下手な奴が三人いるってわけだ」

「……その四人からスリーポイントを打つもらうんだけど、その役目の人にはマークが付くと相手チームのディフェンスがバラけるでしょう？」

「俺達」ゴールから遠い位置にいるからね

「その時は、バスケある程度出来るメンバーがゴールに切り込んでいくんだ」

「俺達に、マークが来なかつたら？」

「その時は、康平達にシュートを打つてもううよ

「そつか、そのゴボレ球を亜樹と麗奈が拾うんだね。

でも、上手くいくのかな？」

「分からぬわ。でも、上手くいくかどうか別にして、私はこの作戦が好きよ」

亜樹の言葉に、康平は不思議そうな顔をした。

亜樹は話を続ける。

「話はズレるけど球技大会でのバスケット、バスケが出来る人だけ

が試合をしてるって感じなのよねえ」

「あ、それ分かるよ。経験者とか運動神経がいい奴ばかりにボールが集まるんだよな」

「そうなのよ。だから勝つてもあまり喜んでいない人もいるんだよね」

「今の作戦だと、俺達みたいな下手なメンバーにもボールがくるからな」

「正直な話、勝ち負けはあまりこだわっていないんだ。メンバー全員が球技大会を楽しめればいいかなって思ってるんだけど、皆には内緒だよ…」

「アハハ、特に麗奈には内緒にしておくよ。一番勝負にこだわっていそつだからな」

「でもね、麗奈も、バスケに慣れないメンバーが楽しそうに練習しているのを見て、凄く喜んでたんだよね。」

康平、何笑つてんのよ」

詰問する亜樹の前で、康平は何やらニヤついていた。

「あ……いや、亜樹は優しいなあと思つてた」

「何よイキナリ」

「だつて俺達を下手つて言わないだろー。」
「で練習始めた時から一度も言つてないよな」

怒つたフリをしていたような亜樹だつたが、急に真顔になつた。

「言わなこようにしていうか、思わないようにしてるよ。球技大会と言つても、チームメイトだからね」

「団体競技つて経験無いから分からぬいけど、そういうもんなの?」

「康平は中学の時、卓球部だつたんだよね。

これは私が勝手にやつてる事だから、君は気にしなくていいからね。ミニバスの頃からだけど、メンバーを悪く思わないようにしてるんだ」

「それは、チームが勝つ為の秘訣?」

「そんな大層なものじゃないんだけど、一種の自己満に近いのかなあ……でもそうやって試合に臨むと、試合中は、チームと一緒にしているような気がするんだよね」

「何となく分かるような気はするけど……」

「別に康平が悩む必要ないよ。さつきも言つたけど、私が勝手にやつてる事だからね。」

それに康平が『下手』って言つたメンバーは、今までバスケの練習をした事がないだけで、最近結構上達してるんだよ。もちろん、君

も含めてね」

「そりなんだ。……でも俺、他の三人に悪い事言つてたんかなあ……『下手』つてさあ」

「別に本人の前で言つた訳じゃないんでしょー。でも悪いと思つたら、これから言わなければいいのよ……」

今度は、言い終わつた亜樹がクスリと笑つた。

「俺、変な事言つたか?」

「何も変な事は言つてないわ……ただ康平は、真面目なんだなって思つただけだよ」

「と、とりあえず練習の続きをしようぜ! 六時半になつたら、また人が来るんだからさあ」

「そうね! 真面目な康平君には、こっちもしつかり教えないとなあ、悪いけどそここのボール頂戴!」

照れている康平を見て、もう一度小さく笑つた亜樹だったが、ボールを貰つた瞬間から彼女も真面目な顔になつていつた。

「バスケの話に戻るけど、康平には、もう少し活躍して欲しいのよねえ……専属「一チとしてはね」

「ディフェンスが来ても、慌てなければいいんだよな」

「でも、簡単にはいかないでしょー！」

「ま、まあな」

「康平は、いいフォームでショートを打てるようになつたんだけど……」

私がディフェンスすると、フォームが崩れてんのよね」

亜樹はしばらく思案していたが、再び口を開いた。

「康平、ショートを打つ時はフォームだけを意識してね！ ボールは変な方向にいってもいいからさ」

康平にバスを出そうとした亜樹だったが、動作を止めてもう一度念を押す。

「ボールはボードに当たんなくともいいからね！ 習ったフォームで打つ事だけに集中してみて」

小さく頷いた康平へ、亜樹がバスを出す。

ボールを貰つた康平は、フォームを確認しながらショートを打つたが、ボールはボードにも届かず、亜樹のブロックに遮断されてしまっていた。

「簡単にブロックされたやつたな」

康平は、苦笑いしながらボールを拾いにいった。

「君がフォームに集中してた証拠だよ。次は、もう少し早く打つてみよっか。
バスを貰った瞬間に、膝を曲げる感じでショート体勢に入つてみて！」

もう一度バスを受け取った康平がショートを打つ。

ボールは亜樹の頭上を越えていった。だがバックボードには当たつたものの、リングには当たらずにコートへ勢いよく跳ね返る。

リバウンド出来るショートが打てなかつたので、満足出来なかつた康平だったが、亜樹は意外にも上機嫌になつていた。

「いい感じだよ！ 繰り返し練習したら何とかなりそうね。
……ボールは私が取つてくるから、康平はショートのイメージしててね！」

ショート練習は何度も繰り返されたが、ボードからリングに当たつたのは半分程度だった。

康平は自嘲気味に呟く。

「上手くはいかないもんだな」

「そんな事ないよ。上出来上出来！……またバドミントンの人達が来たみたいだから、もう終わりにしょー！」

笑顔の亜樹は、康平の肩をポーンと弾むように叩いた。

二日後の土曜日の午後、ボクシング場は康平達一年生が独占していた。

本来、一年生も土曜日の午前中に練習をするのだが、今月は集中的にコーチを受ける為、先輩達と練習時間をずらして行っていた。理由は、来月から始まるスパーリング（実戦練習）の為である。

康平と白鳥は、いつものように飯島先生のコーチを受けながら、頭を振りながら前に出る練習とダッキング（屈むよつた防御）から、の返し技をメインに練習を進めていった。

練習も終わりに近づき、補強運動（筋トレ）に差し掛かった頃、康平が飯島先生に質問した。

「先生！ ケンケンはボクシング場が狭いから、第一体育館でしなきゃいけないのは分かるんですけど、空気椅子は別にこいつちでやつてもいいんじゃないんですか？ 場所も使わないですし……」

康平に合わせて白鳥も頷いている。

先生は腕を組んで考えていたが、ニヤリとしながら口を質問に答えた。

「いや、やっぱ第一体育館でやつひー、これはお前達の為なんだよ

先生の話を聞いた一人は、不思議そうな顔をした。

「ボクシングの上達に、何か関係するとか……ですか？」

「まず無いな！」

白鳥の問いにキッパリと否定した飯島先生は、再びニヤリと笑つて話しあ出す。

「俺は教師である前に人生の先輩なんだが、お前らに俺の持論を押し付けるつもりだ」

「どんな持論なんですか？」

気が乗らない表情で康平が訊いた。

「男はなあ、女の子の前で恥ずかしい思いをする程成長できるんだよ。お前らは、俺から見るとムツツリタイプだからな。まあこれは強制だ！」

困った表情になつた康平と白鳥だったが、

「康平、先に行つてるよ」

と言つて、白鳥が一人第一体育館へ向かつていつた。もちろん、ケ

ンケンと空氣椅子をする為である。

「ん、珍しいな。いつもだと、ケンケンと空氣椅子は一人一緒に始めるだろ?」

「女バスの前だと、一人であれをやるのは恥ずかしいんですよ。今日の女バスは、午前中で練習が終わつてますからね」

先生の話に答えた康平だが、第一体育館へ行つたはずの白鳥が練習場へ戻つてきた。

「どうした白鳥! 第一体育館は誰もいないはずだろ?」

「先生! 僕もそのつもりで行つたんですけど、女子バスケではない人達がいたんで戻つてきたんです」

「白鳥、俺も今からケンケンだから一緒に行こうぜ!」

康平は、白鳥と共に第一体育館へ向かつた。

中では、康平のクラスメートがバスケの練習をしていた。球技大会でバスケに出るメンバーである。九人いるので、康平以外のメンバーが全員参加している事になる。

「おーい康平、お前も入つてこいや

クラスの男子に誘われた康平だったが、練習中だと断った。

「康平達は、またアレやるんでしょ？ 皆、一いつで練習しよー。」

康平と白鳥がケンケンを始める事を知っている麗奈は、意外にも練習場所をズラして一人に協力していた。

「ボクシングの練習なんて、俺初めて見るよ」

「何か変わった練習よね」

注目されながら、壁に添つてケンケンをしていた康平と白鳥は、恥ずかしさのあまり普段よりも一層顔が赤くなっていた。

「あつちはまだ部活なんだからさ、こつちは邪魔しないように練習しよー！」

「麗奈の言つ通りよ、シユート組は私と一緒に練習再開ねー！」

康平達を見ていた七人だが、麗奈と亜樹に諭されて練習に取り掛かっていた。

十往復程ケンケンをした一人は、右足の蹴りを意識しながら左ジヤブ一発のシャドウボクシングを繰り返す。

「もひ、コートは思う存分使えるわね！ また試合形式で始めるわよ

「麗奈は、あの二人の練習メニューを知ってるみたいね」

「まあね！ ボクシング場が狭いから、一年生達はここで練習してる時が多いのよ」

女子メンバーから訊かれた麗奈は、一人のシャドウを見ながら答えていた。

「お、ボクシングらしい練習してんじゃん！ 康平、スパーリングとかつて叫き合ひやつはヤンナイのかよ？」

男達に訊かれた康平は、苦笑いしながら手でやらないゼスチャーをした。

彼らはボクシングに興味があるらしく、康平達の練習を見ながら真似をしている。

だが、一向に左ジャブ一発のシャドウしかしない二人に見飽きたのか、バスケの練習を再開した。

康平達が空氣椅子を始める頃には、試合形式の練習になっていた。

メンバーの練習が気になつていて康平は、空氣椅子をしながら彼らの様子をじつと見ていた。

試合形式と言つても、攻撃側と防御側に別れてコートの半分だけを使つているようである。全部で九人しかないので、攻撃側は五人、防御側は四人の組み合わせだ。

「コートのセンターライン辺りから、麗奈がドリブルをしながらコツクリ進む。防御側はゾーンディフェンスで待ち構えている。

麗奈が小柄な男へ素早くバスを出した。リングから見て左側のスリーポイントのラインに立っていた彼は、即座にショートを放つ。

ボールはバックボードからリングに当たって大きく跳ね上がった。

麗奈がリバウンドを取りにいく。亞樹は防御側に回っていて、麗奈と同時にジャンプした。二人は同じ位の身長の為か、ボールを掴む余裕がないようで、麗奈が辛うじてコートの右側へボールを弾く。

そこには小柄な女子がいた。彼女はショートを打とうとしたが、目の前にディフェンダーが立っていたので、一度ショートを打つポーズをしてから、右側にいる長身の男へバウンドパスをする。

バスを貰った男は、バラけた相手のディフェンスをドリブルで切り込んでいき、リングから三メートル位離れた場所でジャンプショートをした。

ボールはボードに当たってからリングの中へ綺麗に入った。

「さつすが長瀬、運動神経は抜群だね！」

麗奈が、ショートを決めた男へハイタッチをする。

彼は長瀬和也ながせかずやといい、サッカー部員である。今年の新人戦は、フオワードとして一年からレギュラーとして試合に出る期待の新人だ。

いかにもサッカー部員らしく、日焼けした濃い目の顔は精悍な印象なのだが、物静かで落ち着いた性格の男だ。百八センチの長身なものもあつてか、女子生徒には人気があつた。

「いや、それより小谷のバスが良かつたんだよ」

長瀬は、バウンドパスをした小柄な女の子へハイタッチをする。

「中澤君だつて、いいシユートを打つてたよ」

今度は防御側の亜樹が、最初にシユートした小柄な男へハイタッチをした。

それぞれハイタッチをされた小柄な男女は、球技大会の種目分けの時に自信がない事を言つていた一人で、康平と同じく、スリー・ポイントシユートを打つ役割のようである。

他のメンバーも、攻撃側や防御側に関係なく、長瀬達へハイタッチをしていた。

「康平のクラス、何かいい雰囲気だね」

「え…… そーカなあ」

白鳥にトボけた返事をした康平だが、切ないような気持ちになつていた。顔に出ているかも知れないと思い、空氣椅子の角度をワザとキツくさせ、苦悶の表情を自ら作りあげる。

空氣椅子を終えてシャドウをしていた一人だつたが、バスケをしているメンバーも、今度は康平達を見ることなく練習に集中していた。

ボクシング部の練習が終わって、急いで第一体育館へ向かつた康平だったが、鍵が掛けられていた。どうやらバスケの練習も終わつたようである。

「どうした康平、帰るんだ？」

「……そうだな。折角の休みなんだし、急いで帰らないとな。今日は有意義に過ごさうぜ！」

無理にテンションを高くした康平だったが、健太と有馬は不思議そうな顔をしていた。

部活から帰つた康平だったが、健太達に語つた言葉とは裏腹に、有意義な時間を過ごす気力もなく家でダラダラしていた。

夕食を済ませ、居間で家族とテレビを見ていた康平だったが、妹の真緒が覗き込むような格好で話し掛ける。

「兄貴、今日は元気ないね。……まあ、いつも冴えないんだけどね

「つむせえなあ、俺だつて憂鬱な口はあるんだよ」

「おお～」「～！　あ、友達に電話しなくひめ」

勢いよく立ち上がった真緒に母さんが釘を刺す。

「真緒、あなた電話を使い過ぎなんだから少しほさえなさい。料金次第では、小遣いを減らすわよ」

康平の二つ年下の真緒は中学一年なのだが、夏休みの前頃から頻繁に電話をするようになっていた。

「え～、母さんあんまりだよ。中学生は中学生なりの人間関係があるんだからね」

真緒はふてくされたような顔をして、ペタンと座布団に座り込んだ。

その時、居間から出た所にある電話から音が鳴った。

「友達かも知れないから私が出るよ。……向こうからの電話だったら問題ないでしょ」

再び勢いよく立ち上がった真緒は、跳ねるような歩き方で居間を出ていった。

「兄貴い、山口さて女人の人からデ・ン・ワ・ 頑張ってね

「な、何を頑張るんだよ。……学校の用事だけかも知んねえだろ！」

「な、何を頑張るんだよ。……学校の用事だけかも知んねえだろ！」

あ…… テレビのボリュームは下げなくていいからな」

面倒なフリをして廊下に出た康平は、受話器のコードを最大限に伸ばし、できるだけ居間から離れた位置で受話器を耳に当てる。

【もしもし、電話代わつたけど……】

【こきなり「ermenね！ これとつて、用事は無かつたんだけど電話したんだ。……今、大丈夫？」】

【俺の方は大丈夫だよ！ …… それはそうと初めて練習見たけど、みんなバスケ上手いんだね】

【みんな練習頑張ったもんね！ 長瀬君みたいに、最初から上手いのも中にはいたけど…… 小谷さんや中澤君は、私もビックリする程上達したんだよ】

【あの小柄で仲がいい二人だろ！ 僕と同じでシユートを打つ役割みたいだけど、チームに貢献してるって感じだつたよ】

【二人はねえ、自分達のせいでキー キバイキングに行けなくなるのがイヤだからって、熱心に練習してたからね】

【でもさあ…… 練習と言つても、みんな楽しそうだったよな】

【……実はさあ、康平の事が気になつて電話したんだよね】

【え……俺の事？】

【……これは、もし私が康平と同じ立場だつたらの話なんだけど、

自分以外のメンバー全員が楽しそうに練習しているのを見ると、寂しくなっちゃうな……って思ったんだ】

【俺……やつ……見えたかな?】

【そんな事言つてないでしょ! 第一、練習中は君を見てなかつたしね。……私が勝手に思つただけだよ】

【さ、寂しくはなかつたけど、……みんな上手いなあつて感心してたよ】

【そつ……だつたらいいんだけど、今度の水曜は最後の練習だから覚悟しててね。みんなについていけるよつて、ビシビシいくからね!】

電話を終えた康平は、居間に戻りつとした。だが、亞樹の心遣いが嬉しかったのか、顔が弛んでしまっている。

洗面所の鏡を見ながら弛んだ顔を元に戻そとしたが、上手くいかず一階の自分の部屋へ行く事にした。

居間の前を通つた時、真緒が襖を小さく開けてと笑つている。

「兄貴、憂鬱な顔は出来た?」

康平は、それくわと一階へ上がつていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2446u/>

臆病者達のボクシング奮闘記

2012年1月13日16時51分発行